山岳



LXXX



エーデルワイス・マークの

好日山荘®

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

■東京銀座店　東京都中央区銀座3-5-7〒104 ☎03(561)3600・スキーショップ☎03(561)0966
■大阪店　大阪市北区曽根崎1-2-8〒530 ☎06(364)0933代 ■梅田店　大阪市北区曽根崎2-7-2〒530 ☎06(315)7985代
■セルシー店　豊中市千里中央(セルシー1階)〒565☎06(833)0123 ■大阪三越店　大阪・北区三越新館2F ☎06(203)1331代
■福岡店　福岡市博多区須崎町1-1☎092(281)3440・(291)6211

山岳

一九八五年

山岳　一九八五年　目次

《日本山岳会創立八十周年記念特集》

虎ノ門時代十五年―クラブ・ルームの誕生と罹災―……島田巽……七
御茶の水時代十五年―クラブ・ルームの再建からヒマラヤ時代の幕開けへ―……織内信彦……云
日本山岳会史覚え書……望月達夫……六
創立八十周年記念式典および晩餐会挨拶・祝電……四三

カンチェンジュンガ縦走……重廣恒夫……四
日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊（一九八四年）……大野紀和……三
マモストン・カンリ初登頂……尾形好雄……六
初めてのブータン登山……田部井淳子……七
冬期アンナプルナ南壁敗退記……八木原圀明……八
K7初登頂（一九八四年）……中村純二……九
会心のヒマラヤ　ザンスカール　ラハーモ登頂……村井誠……葵

*

三五年前の取立山の遭難をおもう……今西錦司……一〇四
対談　三高時代の思い出から……今西錦司・西堀栄三郎……一二七
『チベットおよびその付近の山々』補遺……水野勉……一四〇

*

図書紹介　四手井綱英『森林』(近田文弘)、山村正光『車窓の山旅・中央線から見える山』(宮下啓三)、杉本　誠『山の写真と写真家たち―もう一つの日本登山史』(望月達夫)、近藤　等『アルプスの名峰』(田口二郎)、Edmund and Peter Hillary『Two Generations』(島田　巽)、『エヴェレスト'82―ソ連隊の世界最高峰登攀記』(田村俊介)、『日本登山記録大成』(平井吉夫)、『日本山岳会信濃支部三十五年』(近藤信行)……一〇八

*

追悼　加藤泰安氏(桑原武夫)、矢田城太郎氏(望月達夫)、坂戸勝巳氏(水野　勉)、二木信次氏(阿部和行)、岡田喜一氏(松本徰夫・吉澤一郎)、水野政博氏(陸田峠郎)、水野祥太郎氏(中村勝郎)、植村直己氏(大塚博美)、片山全平氏(藤木高嶺・村井　葵)、山崎安治氏(関根吉郎・近藤信行)、伊藤洋平氏(藤平正夫)……一三五

*

支部だより……一四四
会務報告(一九八四年六月～一九八五年五月)……一四五

*

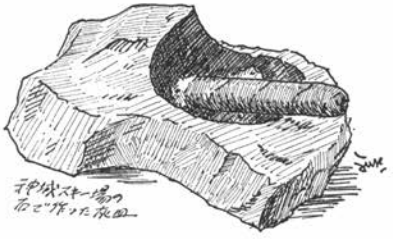
英文梗概……巻末(19)

山岳地帯における自然エネルギー利用の実用化へ向けて……鳥居　亮ほか……(31)
〈編集後記〉……巻末

口　絵

日本山岳会八十周年記念特集……一ページ～一七
海外遠征記録写真……六四～六五
追　悼……一〇～一一

表紙・本文カット　牧　潤一



虎ノ門時代十五年

——クラブ・ルームの誕生と罹災——

島田巽

八十周年を迎えたのを機に、日本山岳会の虎ノ門時代について記しておこうと思う。

ここに虎ノ門時代というのは、本会の集会室兼図書室が昭和四年十一月、当時の芝区琴平町一の不二屋ビル三階三〇七号に開設された時にはじまり、同二十年五月二十五日夜、米空軍の空襲で焼失するまでの、正味十五年間のことである。本会の歩みのなかでは、ほぼ五分の一の期間を占めるに過ぎないが、いくつかの点で新鮮なエポックを画した点で、記憶されるに値する十五年間である。

この時代の会の業績については、すでに創立五十年を迎えた際に、当時、副会長だった松方三郎さんが「回顧と展望」と題して、明確に要約した中で、「……日本山岳会の登山団体としての筋金をなしている幾つかの事業が、この時代に発足していることを想起するのである。」と述べている。(「山岳」第五十年)また、昨年刊行の「山岳」第七十九年で、田口二郎さんが、「松方さんの山岳会五十年回顧を読むと、昭和四、五年のこの時期に初めて、現在の会の運営の理念と原型ができたことがわかる。」と同感を表明している。したがって虎ノ門時代への評価は、一応定着

していると見られるので、私の回顧は、なるべく自分の眼で眺めてきたことを主として、書きとめておくことにとどめたい。

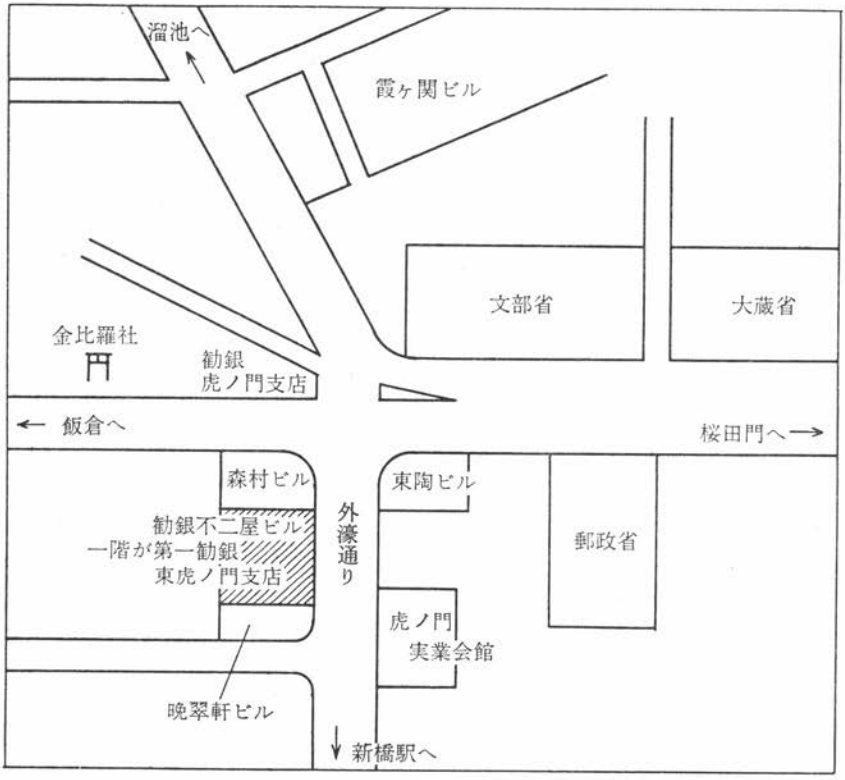
*

松方さんは　その「回顧と展望」のなかで、この時代に発足した幾つかの事業として、第一にルームの創設、第二に「山日記」の発行、そして第三に「会報」の発行を挙げている。そして制度の上でも、会が会長、副会長制を定めたのが同じ時期であって、昭和六年十二月の大会で小島さんが会長に、高野、槇両先輩が副会長に選ばれたことを重く視ている。

全く偶然のこととはいえ、会にとってエポック・メイキングなこの昭和五年の秋に、鳥山、松方、藤島三氏の紹介で入会を許された私は、まことに運がよかったといえよう。したがって、会についての私の第一印象は、まだ開設されて一年もたたないクラブ・ルーム、すなわち不二屋ビル三〇七号の集会室兼図書室のたたずまいであった。だが、それを語る前にまず不二屋ビルという容れ物のことから話しはじめるのが、順序かもしれない。

考えてみると、まことにのんびりした話だが、日本山岳会は創立いらい四半世紀もの間、本拠といえるものを保持せずに、事務所、編集所などは会の発起人はじめ大先輩たちの自宅に置かれていた。だから、大正五年いらい木暮さん方に置かれていた編集所が昭和六年に、各所を転々した事務所も昭和二年いらいの鳥山悌成家から昭和八年の一月に、それぞれ不二屋ビルへと移ったわけである。この新事務所にやっと電話の架設されたのが、八年の晩秋だったとは、時代のテンポを物語るものであろう。

ところで、その不二屋ビルというのは、どこにあったのか。略図で見られるように、現在、新橋方面から外濠通りを、霞ケ関ビルめざして行くと、虎ノ門の十字路に到る直前の左側に三菱と第一勧業の二つの銀行支店が並んでいる。このうち第一勧銀東虎ノ門支店のある建物が、今日も勧銀不二屋ビルの名を冠しており、まさに往年の不二屋ビルの所在地であったことを示している。



戦前，本会事務室・図書室のあった不二屋ビルの位置

虎ノ門には違いないが、不二屋ビルの当時の地番は芝区琴平町一であって、戦後になって港区虎ノ門一丁目三の二に落ちついた。ついでながら、この虎ノ門界隈について、小島さんが「日本山岳会事務所よりの懐古」（会報七四号）、木暮さんがその「補遺」（同七五号）に執筆されていることを付記しておこう。歴史、地誌に詳しいご両所の熱のこもった論談も、新ルームでのご機嫌が並々でなかったことを、物語っているように思われる。

現在の勧銀不二屋ビルとは異って、旧ビルはたしか四階建てで、入口は中央にあってアーチ型だったように記憶している。一階の片側には軽食・喫茶の店があり、ゆったりした中央階段の正面中二階には、中国産の筆墨などを扱う晩翠軒の店があるだけで、非常にしっとりした雰囲気がただよっていた。エレベーターは

なく、三階へ上がると三〇七号室と相対して、東京政治経済研究所が広いスペースの書庫を持っていた。

この研究所は昭和五年三月に蠟山政道、嘉治隆一、松本重治の諸氏をはじめ浦松佐美太郎、松方三郎氏等によって設立され、このビルに入ったものである。したがって本会の会室を同じフロアに開設するに到った手がかりは、松方さんあたりから出たと推測してよいのではないかと私は考える。松本重治さんが編集代表で刊行した『松方三郎』（共同通信社・昭和四十九年九月刊）に「三郎の人間像」と題する座談会が収録されており、藤島敏男さんが次のように語っている。

「結論的にいうと、松方はヨーロッパから帰ってきて、日本山岳会というものに非常に貢献しているね。彼が帰って来るまでは山岳会には、クラブのルームもライブラリーもなかった。だから彼は『これはいかん』というわけで奔走し始めた。クラブの組織とかライブラリーを充実するとか熱心に働いたね。その点、大変貢献した。それがひいては、日本の登山界に大きなプラスとなった。」

この発言は、私の推定を是認されているように思われる。ところで、この藤島さん自身一言も触れてはいないが、松方さんの有力な協力者として、虎ノ門時代を活性化した一人であることを忘れてはなるまい。

「山岳」第二十四年第一号の会報欄に、昭和四年十月　係り幹事　藤島敏男　と署名入りで、「本会図書室設置案」が掲載されている。これは日本山岳会として、はじめて会室兼図書室を持とうではないかという、最初の具体的な提言であった。執筆の日付から見て、既にかなり実現の見透しが立っていた頃と思われ、そのための図書室維持費の一部を会員から集めたいという段階まで進んでいたにちがいない。この設置案は、藤島さんらしい行きとどいた文章でつづられており、着実なスタートを予想させたが、「山岳」の次の号では、早くも集会室兼図書室の開設が告げられた。そして財政基盤を確立するために、一口年額五円の維持会員制がとられ（当時の年会費は六円）、五十九名、七十一口の支持を得たが、昭和六年に入るとともに、経常費は会の予算でまかない、新たに図書基金を募集して内容を充実することになった。この基金も一口やはり五円であった。

*

不二屋ビル

三階三〇七号の会室までたどりついた筆は、設立前後の経緯を語るのに忙しく、新ルームの内部に触れるのがおくれてしまった。この辺で肝腎のルーム内部の模様を思い出してみよう。

開設当初の一部屋から間もなく二部屋となった会室は、ドアをあけたところが集会室で、右手の隣りが図書室となっていた。入口脇の左側に事務机があって、私が入会したころは、小澤さんという三井鉱山会社を退職した中年の人がすわって管理の任にあたっていた。なかなか几帳面な人物で、初見参の訪問者には、とっつきにくい面もあったが、よくやってくれていた。私などもこのルームを回想すると、まず小澤さんの顔が浮かんでくるのである。そのあとを引継いで昭和十五年半から管理の任にあたったのが、その前年から理事となっていた塚本繁松さんである。

集会、図書と二部屋に分けてはあるが、集会室にも本箱があり、ドアを開けた途端に眼に入るのは、アルパイン・ブックスの背文字で、若僧の印象には未だに、その構図がまぶしく残っている。この部屋のテーブルは、編集用や図書閲覧にも使われたし、また理事会や役員総会などの会議用にも使われた。会の長老達が居ならぶときは、なかなかの壮観だったが、いつも中央に坐して寡黙で終始された高頭さんの和服姿が、とくに記憶に残っている。

図書室で異彩を放っていたのは、板倉勝宣、波多野正信両氏のご遺族から寄贈された記念書架と文庫であった。板倉家からは立山で逝った勝宣氏を記念して、図書室開設を機に書架を贈られたが、「それは故人の好みにそぐわしい暗褐色の頑丈なもので……棚の上辺には『故板倉勝宣の記念に』と美しい彫りがエーデル・ワイスと一所に施されてある。」（会報第四号）このオーク材にぼかし塗りの、がっしりした書架に魅せられて、若き日の織内信彦さんは同じ形式のものを造らせたという。それは新婚記念として今日なお織内家に健在とうかがった。

波多野氏は、槇さんをリーダーとしてアルバータ初登頂を果した遠征隊のメンバーで、その早逝を惜しみ、本箱には英文で記念の文字が彫られていた。現在の本会図書室に備えられている磯野家から贈られた磯野計蔵記念文庫とほぼ同型で、同じように非常に落ちついたムードを醸成していたのを覚えている。

この会室が開設された時には、壁面を飾っていた絵は茨木猪之吉画伯の水彩画だけだったが、昭和十一年に中村清太郎画伯の油彩「針ノ木の雪渓」を譲り受けたことが、会報第六〇号に報告されている。これは『スウィス日記』が小島、武田、高野、藤島、松方の五氏を編集委員として、梓書房から刊行された際、その印税を辻村家が本会に寄贈されたので、その資金で購入したものであった。

これらの絵画のほかにも、秩父宮殿下ご撮影のマッターホルン、槇さん撮影のアイガー東山稜などの写真、当時計画中の涸沢ヒュッテの模型とか、五万分の一模型の槍・穂高（吉沢一郎氏作）、剱・立山（佐伯藤之助氏作）なども飾られていた。こまごまと昔のルームの模様を書き記すのもどうかと思うが、実はさきに触れた松方さんの「回顧と展望」にある次の一節が、私の心を捉えて離さないのである。

「……当時の虎ノ門に出入していた人々は、きつとあの小さな二つの部屋について、また壁一杯に列んでいた内外の山岳図書や、飾つてあつた数々の額や写真や置物について今も楽しい想い出をもつことだろうが、そんなことをいうのは、五十前後のわれわれ年輩の間のことで、今日の若い山岳会員は、同じように今日の御茶の水の山岳会のルームに愛着を持っているに相違ない。そうあらねばならないことだし、またそうあつてほしいのだが、一つの会というものは、何かそうした目に見える核を必要とする。それがないと、会そのものの伝統が育ちもせず、続きもしない。」

「そうした目に見える核」として、日本山岳会が四半世紀を経てはじめて持ったのが、このクラブ・ルームであったのだから、そして「それがないと会そのものの伝統が育ちもせず、続きもしない」とする松方さんの識見に、私は全面的に賛成だから、あえてこまごまとした回想の冗筆をつづけたわけである。

ところで、こういう舞台装置のなかで展開された当時の会の活動について、大筋のことは別にして記しておきたいことが一つある。それは、この集会兼図書室をできる限り有効にクラブ・ライフに役立てようとする、役員たちの配慮であった。たとえば毎月、図書室の当番幹事を十人ほど決めて、木暮さんは何日、槇さんは何日と、予め会報に発

表する。会員はそれぞれ会って話をききたい人が当番の日にルームに出かけて行くといった方式が、ずいぶん長くつづけられた。はじめは午後五時開室という限られたものだったが、昭和十五年ごろから塚本理事が主事を務めるようになって火、木、土は午後一時開室と改善された。このような当番幹事制などは、いまの忙しい世の中では無理だと一蹴されるかも知れないが、クラブ・ライフを充実させるために、なお考慮に値するものではないかと、かねがね私は考えたりしている。

このような会室の開設と同時に、会報が創刊され、「山日記」も編集され、会長制も実施されるといった活発な動きが表面化したのは、決して偶発的なことではないように思う。だが、それら諸活動は戦火で消滅することなく、脈々と今日まで存続しているので、今さら回顧を試みる必要はない。それらに比して無惨な最後を遂げてしまった会室について、死児の齢いをかぞえるに似たことだが、あと少しその最後の模様を記しておきたいと思う。

昭和二十年　五月二十五日夜の米軍機による焼夷弾攻撃で、本会の会室が一物ものこさず灰燼に帰した情況については、当時の塚本繁松主事が「返らぬ事ども」と題して、詳細な戦災報告書を会報一三三号に寄せている。空襲の翌朝さっそく虎ノ門へ、当時のことだから目黒から徒歩でかけつけて見とどけた罹災の現状が、ここに鮮明に記録されているので、ぜひ読まれるようにと申したい。

在京の会員でルームの安否を気づかって、虎ノ門へ赴いた人たちは少なくなく、私もその一人であったが、塚本さんのなまなましい報告を読むと、同じ日でも私の場合は少し後だった。塚本さんは烈しい余燼のため、不二屋ビルの内部へ踏みこめなかったという。やはり同じ日、織内さんは三階の会室までたどりつけて、積んであった紙の山がチョロチョロ焔をあげ、その傍らに上高地から取りはずして来たウェストンのレリーフが、焼けてはいたが、まだ原型をとどめているのを見とどけたという。あまり冷静でなかったらしく、同じ現場を訪れた私の記憶には、ただひたすらに、ついに来たか！　と激しく落胆したことだけが残っている。その単純な落胆が、日が経つにしたがって次第に深まり、会の先輩はじめ仲間たちが、あれほど情熱をそそいで築きあげてきた蓄積が、すべて灰と化し去ったのかと

いう、口惜しさへと移って行くのであった。

このルーム焼失の少し前に、私は街頭でひょっこり塚本さんと行きあったことがある。罹災されたので履物にも不自由して素足にわらじをはいて虎ノ門へ通っていた、とさえ伝えられる塚本さんは、その時もリックサックを肩にした姿であった。立話であったが、空襲がはげしいのでルームの図書を疎開したいのだが、引受けてくれないかといわれたのを覚えている。当時あちこち当っていたようだが、たれしも疎開の必要は十分みとめながらも、現実には輸送手段が一番の難関で、塚本さんを安心させるような返事は、私にもできなかった。

当時、図書室には和書約三〇〇、洋書二五〇冊ほどは確かにあったし、その上に部報や内外の雑誌、研究報告書なども揃っていた。それらが灰と帰した上に、もう一つ大切なものまで失なってしまった。さきに触れたルームの備品も惜しまれるが、木暮さんの没後、疎開を急がれる遺族から托された大箱二つの蔵書が、たれの眼にも触れずに焼失したのである。

これについては塚本さんの戦災報告書に詳述されているので省略するが、せめてリストでも残っていたならば……と残念に思う。創立三十周年記念の図書展覧会に木暮さんが出品されたシュラーギントワイト兄弟の大著『インドおよび高地アジア踏査記』も、本会に寄贈されたまま、同じ運命をたどってしまったのかと思うと、木暮さんに心から申訳ない気持にもなった。明治四十一年に丸善が隣家の失火で全焼したとき、まだ余燼のくすぶる現場に立った内田魯庵が、消防夫の泥草鞋で踏みにじられているのが、あのシュラーギントワイト作のみごとなスケッチであることに気づいて、「昔のアレキサンドリヤの惨禍を目のあたりに見る心地する。」と記したという。（小林義正氏『続　山と書物』）まさに同じような惨禍が、わが虎ノ門のルーム内でも、あの夜演じられたかと思うと、まことに無念というほかはない。

このほか会にとっての大きな損失は、「山岳」第三十七年第二号や、会報一三三、一三四号が、それぞれ完成前に、あるいは印刷所で、あるいはルームで原稿のまま焼失してしまったことである。諸物資不足のさ中、それぞれの編集

に苦労された田辺主計さんや塚本さんの落胆のほども偲ばれるのである。

これら物質的な損害はともかく、ここで忘れてならないのは、最後まで本会の城であった会室を護ってくれた塚本主事の献身的な努力である。詳しいことは「山岳」第四十四年第二号に田辺主計さんと鈴木弘さんの追悼文があって、その人柄があたたかく描かれているので、改めて触れないが、切迫した戦争末期には、塚本さんが日本山岳会を「背負って歩いた」といっても過言ではない。塚本さん自身すでに空襲で自宅を焼かれ、焼跡に天幕を張って、そこで本会の事務をとり、事務用の資料や会員名簿はリックサックに入れて、四六時中担いで歩いていた。

不二屋ビルの周辺にあった木造住宅が、当時の荒っぽい軍命令で取りこわされたので、鉄筋コンクリートの建物は、焼夷弾にはまず大丈夫と、塚本さんも一安心したらしい。しかし、それが全焼してしまったのは、塚本さんの報告によると、近隣の居住者たちが不二屋ビルは大丈夫と、家財道具を持ちこんだところへ火が移ったということである。

このルーム焼失、敗戦の混乱とつづいた後、会員の茨木猪之吉画伯が穂高方面で行方不明となる事態が起きた。このときも塚本さんは、田辺主計、交野武一両氏とともに捜索に赴かれたが、昭和二十二年六月二十五日、腸チブスのため逝去された。まだ四十八才の壮年期であった。

日本山岳会の本拠のほうは、虎ノ門焼失後とりあえず仮事務所を、藤沢市鵠沼六三四〇の鳥山家に移された。会の「目に見える核」がようやく再建されたのは、罹災からほぼ四年後の昭和二十四年三月のことであった。小さいながらも、神田駿河台にクラブ・ハウスが、虎ノ門のときと同じように、熱心な会員諸氏の尽力によって完成、また新しいエポックの出発点となったわけである。

お茶の水時代十五年

——クラブ・ルームの再建からヒマラヤ時代の幕開けへ——

織内信彦

独立した個有のルーム

を、日本山岳会がお茶の水にもつことができたのは、戦後のほとぼりのまだ冷めきらぬ昭和二十四年三月十日のことである。虎ノ門の不二屋ビルの三階にあった図書室が、昭和二十年五月二十五日の夜、米軍機の空襲で灰燼に帰し、文字通り無一物となってしまってから約四年間、そのころ主事をしていた塚本繁松氏の焼跡が仮の連絡所となり、氏が後生大事に担いで廻ったリュックザックの中味が、会の唯一の財産であったりした。そんなあと、終戦の翌二十一年九月、大日本体育会に加入してからは、お茶の水の岸記念体育会館の中の小さな会議室のようなところを臨時に使わしてもらって、理事会や集会を辛うじて開いていたくらいだったから、個有のルームが完成したとは言え、一冊の図書があったわけでもなく、絵画や写真などもない、ガランとした、それこそ殺風景なものであった。しかし会員は、この新しいルームに希望と期待に胸をふくらませ、続々と集ってくるようになるのである。

日本山岳会では、虎ノ門時代から、会の拠りどころを事務室とか事務所と言わず、図書室と呼ぶ慣らわしがあっ



祝辞を述べられる秩父宮妃殿下

創立80周年記念式典・祝賀晩餐会

The 80th Anniversary of
the Japanese Alpine Club

1985年8月24日　東京目白・椿山荘

（撮影　羽田栄治）

挨拶に立つ今西寿雄会長

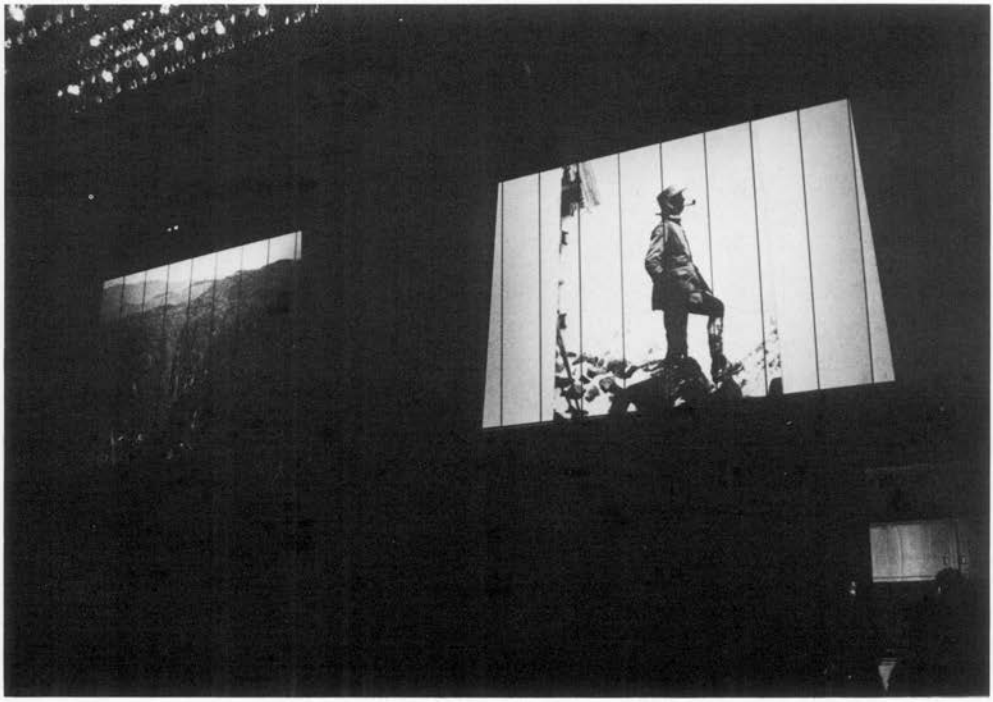




記念晩餐会の情景　祝辞を述べるのは英国大使館の Millington 氏



名誉会員，永年会員に推挙されて壇上に立つ諸氏。右から渡辺兵力，平沢亀一郎，織内信彦，望月達夫，浜野正男，谷口現吉，加治甚吾，田口二郎，伊藤紀克の諸氏
（写真提供・織内信彦）



晩餐会の掉尾を飾って好評を博したトライビジョン





日本山岳会ルームで開かれた記念展示

20年後のクラブ・ルームの夢を語るパネルや
80年の歴史を跡づける書籍や写真，登山技術
の変遷を物語るピッケルなど，興味ある品々
が展示された。



戦後の廃墟から立ち直り、マナスルへとたくましい一歩を踏み出した頃の御茶の水クラブ・ルームの内部（写真提供・関口令安）



御茶の水のクラブ・ルーム



クラブ・ルームの外観　冬の日を浴びてのどかな談笑。
左から，藤島敏男，新堀春喜，入沢文明の諸氏。

The Clubroom of Ochanomizu (1949～1964)



左から新堀，入沢，
藤島の諸氏。
（1949年/昭和24年12月，
撮影・織内信彦）



虎ノ門のクラブ・ルームにて
（1940年/昭和15年秋）
会報編集会議　左から望月達夫，青木　昇，田辺主計，吉田竹志，中村　謙，吉阪隆正(立っている)の諸氏。撮影は同じ編集委員の主事，塚本繁松氏。この写真は“会報”100号にのっている。また“山と渓谷”1983年９月号「私のアルバム」に使用した。(提供・望月達夫)

In the Clubroom of Toranomon. (1929～1945)

た。今日の麹町のルームのように、図書室、談話室、集会室、事務室というような整備されたものではないから、何と言っても図書を最大の財産とするライブラリーという言い方が、会や会員の気持をよく表わしていたのであろう。したがってお茶の水に再建されたのも、日本山岳会の図書室であったが、本文では便宜上クラブ・ルームまたは単にルームと呼んでいくことにしたい。

ところで、お茶の水のルームは十五年後の昭和三十九年七月十二日、体協の移転に伴い外苑コーポの一室に、やむを得ず間借りをしなければならないことになり、波乱と起伏に富んだお茶の水時代十五年の幕を閉じるのである。

お茶の水ルームでの最後の役員会は、昭和三十九年七月二日に開かれている。この理事会で新たに三十三人の入会が承認されているが、その氏名は省略するとし、会員番号でいうと、五七三〇番から五七六二番までとなっている。この三十三人の人達までが理屈の上からすると、お茶の水のクラブ・ルームを知っている会員だというわけになり、五七六三番以降の会員は、残念ながらこのルームを知らないことになるのだろう。近着の会報四八〇号によれば、本年六月の新入会員は九六四一番とあるから、既に退会してしまったものも含めて、三八〇〇余人の会員はこのルームのことは、いわば伝説としてしか聞いていないことになるのだ。小文を草するよう依頼された所以のものもその辺にあるのかもしれない。

お茶の水のクラブ・ルーム

閉鎖を機会に、東京支部が三水会の会合として、これを惜しむお別れパーティを催した。席上、松方三郎会長が「いま見るとあんまり大した建物じゃないけれども十数年前には堂々たるお城のような感じをもって我々は非常によろこんだ。恰度氷河の真中へつき出したモレーンの天辺（てっぺん）に山小屋が建っているような感じで、両方から氷河が流れていて下へ行くその突端に立っているような気持をもっていつも眺めたものだ。この氷河を下っていくと、下の小川町の方は家並も低く広々としている。ちょうどコンコルディア・プラッツみたいでユングフラウから下りてくるとあんな感じがある」と話している。アルプスを第二の故郷のように愛した松方さんらしい。

私は往時を偲んでみたいと、つい最近この周辺を散歩してみた。崖下をゆるいカーブで、そしていくらかダウンスロープ気味の舗装道路が小川町へ向って走っている。氷河とはこれだなと思う。そのころに較べてひどく変ったのは、岸記念体育館の跡地にできた、見違えるように立派な日立製作所の十六階建てのビルと、また向い側の日本出版販売が更に高層ビルに変っていることである。頸が痛くなるような角度で見上げながら数えてみると二十二階建てであった。私はふと思った。小川町へ流れるように走っているゆるいカーブの街路をコンコルディアへと向う氷河にたとえるなら、それをはさむようにしている二つの巨大な高層ビルは、さしあたりユングフラウかメンヒに見たてられないだろうかと。そのような夢を見させるに相応しいそこは恵まれた地形のところにあった。

*

昭和二十三年二月　の理事会で、藤島敏男氏が「近頃クラブとしての雰囲気が薄くなり残念だ」と発言、小原勝郎氏が「なんといってもクラブ・ルームのないことが最も大きな原因だと思うから、ルームを建てようじゃないか」と提案し、全員が賛成したと「山岳」第四十四年二号に図書室再建報告として記されている。どこか適当な敷地はないだろうかと論議しているうち、会議をやっている部屋の窓越しに、岬のように突き出したデルタのような空地があり古材木が積み重ねてあるのが眼にうつった。中間にテニスコートがあり、その向うにコンクリートの防火用貯水槽があったと思う。理事をやっていた入沢文明氏が体協の古くからの関係者でもあったので、早速相談に行くと、体協が移転をするようなことがある場合は無条件で立ち退くという約束で、そのかわり無償で貸与するという諒解がとれたのは、日本山岳会の信用もさることながら、役員諸君の熱心な活動によるものと言わなければならないだろう。それにしても、無償で貸すという方も、また無条件で立退きますという方も、負けず劣らず大らかなものであった。

空地に積んであった古材は、道路をはさんだ向い側の日本出版販売の建替えの解体古材で、その工事は安藤組が請負ってやっており、安藤組には小原理事の長兄で後年同社の社長になる小原勝守氏がいた関係もあり、小原氏を通じ

て古材の使用、ルームの設計、同施行の話合いが円滑に進められていたが、たまたま会員の加藤泰安氏が三友土建なる会社を興し、手始めにどうだろうということで、三友に請負ってもらうようになったいきさつがある。設計は安藤組の福田設計部長、実務的には主として村上設計技師を煩わし、素朴な山小屋風外観で、完成してみるとそれは会員の誰からも好感をもって迎えられる、いかにも山岳会のルームにうってつけの出来栄えであった。建坪は十五坪、狭いながら談話室をかねた図書室兼事務室が九坪、管理者の居室、炊事場、玄関等で六坪、図書室の東側と北側は壁面いっぱいに天井まで届く書棚がとりつけられていたが、始めのうちはお金が足りなくて硝子がはめられなかった。

管理者の居室と玄関の上部にあたる部分の屋根裏を間仕切りした約五坪は畳敷とし、地方からの来室者が寝袋で泊まれるようになっていたが、これは二年ばかりたってから専用の談話室に改造し、図書室で本を繙く会員の妨げにならないようになった。改造には東京支部の資金カンパがあったことを書きとめておきたい。

二階へ上るために木製垂直の梯子がとりつけられている。しかし、二階が談話室として使用されるようになってからは、たとえば屢々見えられた田部重治、加賀正太郎、松本善二、木村鉱吉、近藤茂吉さんら高齢の長老方には必ずしも適当ではなかったので、前庭のパーゴラの傍にタラップを取りつけ、南面の外側から老人、婦人でも容易に入り易く改造した。もっともその頃は婦人会員は少なく、たまにしか婦人の顔を見ることはなかった。

前庭へ出れば道をはさんだ斜め向いに古典的なニコライ堂のドームが望まれる。お茶の水駅から来ると、聖橋を反対側へ渡った右側には徳川時代から残る儒教の学問所、日本では珍しい楷樹が繁る湯島の聖堂があり、デルタの崖下の道には、植えて間もない公孫樹の並木が小川町へと続いていた。陽当りのよい前庭の芝生は、胡座をかいて山の放談をやるのに格好の場所であった。やがて広瀬潔会員寄付の白樺が植えられた。たしか五本ばかりだったと記憶する。広瀬氏が自ら実生で育てて三年め、一メートルほどの苗木を植えたものだが、十五年後外苑コーポへ移転するときには立派に成長し、樹高五メートルにはなっていた筈だ。実はこれと同じ白樺を私は広瀬氏から我が家の庭に植えてもらった。それが今は樹高一〇メートルを越え、樹幹の直径二〇センチにもなっているから、もしお茶の水にその

まま居続けていたとすれば、都心には珍しく、近くを通る人の眼を惹くような大木になっていたに違いない。浅間山麓六里ヶ原が原産地だと聞いている。

ニコライ堂の鐘楼からは、儀式のある日など美しい鐘の音が流れてくる。何か特別の用事でもできて、日曜日などにルームへ行けば、ミサの時等であろうか休日の静けさのなかを荘厳な鐘の音が響き、何とも言えなくよい気分のものだった。

芝生のある前庭の突端は手がかりや足場の多い石崖になっていた。いちばん高い部分で三メートル、低いところでも二メートルはある。小川町の方から歩いてやってくる会員は、正門へ廻るのを避け、石崖を直接よじ登ってしまう。山の連中だからこんなことは朝飯前だ。這い上ってひょいと頭を出すとそこが芝生のある前庭で、誰か彼か知った顔が、やあとか何とかニコニコと迎えてくれるのだ。

お茶の水時代かなりの期間、会報の編集をやった古沢肇氏がこの付近の植物のことを書きとめているので引用してみたい。

「防火貯水槽の傍の大島ザクラも毎年よく花をつける。玄関のワキには山吹の大株、矢竹の一群、八ツ手の木。椎の木はルームの屋根の上まで枝を拡げている。ルームをとりまく眺めでいいのは晩秋の夕、黄葉した立木の枝越しに落日のニコライ堂を望む風景だ。裏庭つたいに急崖を下りて昌平橋の方へ出る道もいい。ニワトコ、犬ビワ、ボダイジュ、ツバキなどが茂っている。崩れ残りの古いレンガ塀があって、マユミ、椎の木が屋根を被っている。本館の前庭の泰山木も季節には美事な花をつける」（会報二三二号）

編集後記の一節だが、これを書いた古沢氏や、またルームの常連でもあり、図書整備や外国の本の紹介に尽力された田辺主計氏など、時期は異にしているが、それぞれに思うところがあったとみえ退会してしまった。惜しい人達だったと思う。こういう人達が会を去っていくことを引留めるだけのなにかが、日本山岳会に欠けていたのだとすれば、その辺はよく考えてみなければなるまい。このほかにも、浦松佐美太郎、黒田正夫氏らが会を去って行かねばな

らなかったのも、ほんとに惜しい気がする。

*

クラブ・ルームは　こうして出来上り、みんなの協力でおいおい内容も充実していくのだが、ではどれくらいの資金がかかり、どうやってそれを調達したのか、「山岳」や「会報」からひろい出し要約してみると、さきにも述べたように昭和二十三年二月の理事会で決定し、予算としては建築費三十万円、図書購入費二十万円の目論見をたて、五月にチラシを印刷してひろく会の内外に呼びかけた。募金委員には現役の役員はもとより、長老では小島烏水、武田久吉、高野鷹蔵、槇有恒氏らの名も見えている。専任担当として藤島敏男氏が先頭に立って奔走されたのを、あとで槇さんが、「どういうわけか、藤島さんの生涯で仏心の盛んなときであったのではないかと思います」と滋味溢れる言葉をおくっている。そして、会員のほか二、三の新聞社、企業等からも応募を受けたけれども、作業が進むにつれ、建築費だけで目標とした五十万円を超えそうになってしまい、竣工直前に二度めの募金運動をやった。面白いことに折よく発行された「山日記第十四輯」の印税が二十四万円余り入って資金ショートの急場をしのぐことができた。今日の山日記の実力と比較してみて今昔の感なしとしない。

会長は武田久吉氏、また今はない理事長制がとられていて、松方三郎氏がその任に当っていた。この体制は昭和二十五年まで続いたが、二十六年から槇会長、松方理事長のコンビに変わるのである。そうして二十五年六月三日、世界の登山界をアッと言わせるような大ニュースをわれわれは手にすることになる。言うまでもなくそれは、フランス隊のアンナプルナ登頂の知らせであった。人類によって始めてきわめられた、ヒマラヤ八千メートル峰登頂成功を報ずる電波は、地球上を駆けめぐった。日本山岳会がようやくお茶の水にクラブ・ルームを設けて一年余、やれ国体登山だ、やれ技術指導だと国内登山界の主導権争いみたいなことに東奔西走している間に、戦勝国と言ってもさきの大戦では手痛い被害を受けたフランス山岳会の実に見事というほかはない大成果は、日本山岳会にとって大きなインパクトとならないわけはなかった。かくしてマナスル、ヒマルチュリ、エベレストといった日本山岳会ヒマラヤ時代の

幕明けにつながるのだが、会史が目的ではないこの小文ではその間の詳細は省略せざるを得ない。

*

昭和二十七年　四月十二日、その年の二月戦後はじめてネパール入りを果たした西堀栄三郎氏が帰京され、久しぶりにルームへやってきた。とくに予告された集会ではなかったから、折よく居合せた数名の会員が西堀さんを囲んでネパール事情に耳を傾けた。百余枚のカラースライドを二階の狭いところで見せてもらいながら約三時間を過ごしたが、マナスルやゴザインタンの遠望など、当時としては凄く珍しい写真がたくさんあって、みんなで胸をわくわくさせながら見せてもらった記憶がある。西堀さんは、「やるとするならマナスルや、日本山岳会でどうや」と言われた。山岳会は、四月十六日臨時役員総会を開くとヒマラヤ委員会の設置を決め、本格的な活動にのり出すのである。

マナスル（八一二五メートル）は、それから約四年後の昭和三十一年五月九日、今西壽雄隊員とシェルパのガルツェンによって初登頂された。隊長は槇有恒氏であった。因みに踏査隊は今西錦司、第一次隊は三田幸夫、第二次隊堀田弥一の諸氏がそれぞれ隊長の大役をつとめたが、足かけ四年を費やした大事業であった。なおその間には英国山岳会がエベレストにサウス・コルから、独墺山岳会は悲劇の山といわれたナンガパルバートの登頂に成功している。

お茶の水ヒマラヤ時代に一筆書き加えておかねばならないとすれば、昭和三十五年十月七日、日本山岳会としてではないけれども、女子のみによるパンジャブ・ヒマラヤ登山隊が、デオ・ティバ（六〇〇一）の登頂に成功したことであろう。その後女子のみによる隊が、マナスル、エベレスト、アビ・ガミンなど大きな山に男に負けない活躍をしているその嚆矢となったことは、山はそんなに高くはないけれども付記しておくに価いするものと思う。

*

マナスル登山に際し、名誉会員であった故秩父宮の勢津子妃殿下から、登頂成功を祝福された和歌五首が贈られルームを飾った。うち二首

ヒマラヤのマナスル高く日の丸はつひに立ちたり何をか云はむ
わが宮のまさばとぞ思ふけふのこのかがやく知せ聞くにつけても

右のなかにも詠みこまれている故秩父宮は日本山岳会の名誉会員になられていたが、昭和二十八年一月四日逝去された。実はこれよりはるかさき昭和三年五月、殿下は英国山岳会から名誉会員に推されている。しかし、日英が交戦国となった関係で一旦消滅したのか、昭和二十七年二月英国山岳会は更めて秩父宮を名誉会員として迎える。英国山岳会が戦前から名誉会員に推せんしているのに、日本山岳会では戦後にしかできなかったのは、やはり国情の相違によるものであろうと推察する。戦後のある年、英国山岳会に遊びに行った私が、ヴィジター名薄に記帳した際、数頁まえの来室者にエリザベス女王のサインをみつけて驚いたことがある。日本の常識では考えられないことで英国とはそういう国柄なのだと羨ましく思ったものだ。

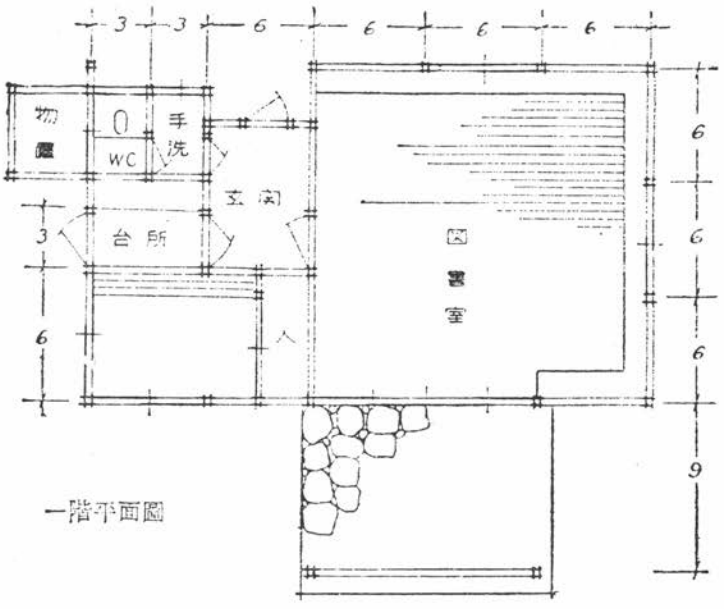
ルームを飾っているものにもう一つ落とすことができないのは、アメリカ山岳会のF・D・エーレス、J・C・オーバリン両氏から、アルバータ第二登をやったときに頂上で発見した槇有恒、三田幸夫氏らの残してきたピッケルを持ち帰ってきた記念にと、別誂えのピッケルが贈られてきたことだ。二代目ゲブラール・ウイリッシュ製作のアイスピッケルには銀メッキが施され、シャフトの表に贈り主両氏の名前、ピックの裏面にMt. Alberta—1925—J.A.Cと刻印されている。昭和二十四年十二月に送ってきているので、ルームが開かれた年の年末のことであり、充実していないルームにひときわ鮮やかな光彩をそえたばかりでなく、日本山岳会も戦後ふたたび国際的に仲間入りができたのかという感を深くしたものだ。三田さんはこのことに関連して、両氏に親近感をもち、旧知の友人のように連絡をとり合われ、それは今日なお続いているらしいが、望月達夫氏も、西欧の情報にとぼしかった打開策として、渡りに船とエーレス氏に依頼の手紙を送り、各国のアルパイン・クラブの住所などを確かめるのに協力を受けたらしく、それが縁でマザマ・クラブの会報や、A・A・Cの年報などがつぎつぎに贈られてくるようになったという話だ。書棚に

一冊一冊と蔵書が殖えていくことは何にも増して大きな楽しみであった。

ニューヨークへ行った折アメリカ山岳会を訪ねたことがある。陳列室でアルバータのピッケルを見つけ写真を撮ろうとして苦心をしていると、ミスだったかミセスだったか忘れたがセクレタリーのモナ・モナハンさんから、ここは暗いからと室外へ持ち出し、A・A・Cのネームプレートがある玄関のわきにくだんのピッケルを立てかけてくれた写真は、私にとってもまたとない記念になったものである。

ルームは出来ても、日本山岳会はもちろん登山界の活動はまだ戦後が終わらない沈滞していた空気のなかで、さっと明るい陽がさしかけたような感をもたらしたのは、ヨーロッパ旅行中の会員伊藤愿氏がガイドも伴わずマッターホルンに登ったという知らせであった。ロンドンの宿屋で伊藤氏からその話を聞いた島田巽氏からの手紙によるものだったと思う。ルーム開設後一年ばかりたった時期である。私は会報の編集を担当していた。ヨーロッパ帰りの伊藤氏が土曜日の午後ふらりとルームの二階へやってきた。藤島さん、成瀬さんら居合わせた数人の会員たちと明るく賑やかな談笑が始まった。もちろんお酒もはいった。

話が横道にそれるけれども、伊藤氏と私とは次のような出会いがある。そしてこの日が二度目だったのだ。昭和の初期、学生だった私は涸沢の岩小屋に夏の幾日かを過していた。ひどい雨降りのなかあとから来た伊藤氏の一行がもぐりこんで来てザックの置き場もないくらいになった。涸沢へ来るまえ小槍をやって来た私は、残っていた伊藤氏の打ったハーケンを利用して登ったことを話すと、ついでに抜いてきてもらった方がよかったね、と言われたことや、瀧谷を単身で登った氏の苦心談など断片的に聞かせてもらったことがあった。そんな幾年か前の古い話をすると、よく覚えていて、あの時はねえ、などとなつかしんでくれたものだ。過ぎ去った山の話をするのにルームの屋根裏はこの上なく好ましい場所であった。お酒がまわってきたのをきっかけに、マッターホルンのことを会報に書いてもらえないかと頼むと、否も応もなく引受けてくれた。おかげで戦後はじめてのマッターホルン単独行で飾った二段組みのいい紙面作りができたことを思い出す。私なりにルームと人との忘れ得ぬ思い出である。



「山岳」第44年第2号より転載

*

クラブ・ライブラリーだから図書が充実されなければならぬ。その本も、何といっても日本山岳会である以上、創刊以来の「山岳」がほしいところだ。バックナンバーの揃いは、古書店を探せばないことはないが、眼の玉が飛び出るほど高く手が出ない。たまたま副会長をされたことがあり、惜しくも比島で戦死された黒田孝雄氏が「万一の場合は山岳会に送れ」と書き残されたなかに「山岳」初号から第三十六年までの合本や、日本アルプス四巻があったため、遺族の方の配慮でルームの書架に納まった。アルバータの記念ピッケルが米国から届いたのとほぼ同じ時期である。前後してアルパイン・ジャーナル全巻が購入されている。篤志家というものは居れば居るもので、自分達のあいだではあまり名前を聞く機会のない人であったが、入会早々の増田繁男氏が愛蔵の図書百数十冊を一遍に寄贈し、田辺主計氏も百余冊の蔵書を新設間もない図書室のために運んでいる。その中には、『アルペン行』『ヒマラヤ行』『登高行』、烏水の著作数冊、木暮理太郎の『山の憶ひ出』など当時としては容易に入手できないものが数多く含まれていた。

ルームの主体は

記録では見当たらなかったが、槇さんがド・ソシュールの“Voyages dans les Alpes”の八冊本を会のために割愛されたという話を図書整備に献身していた小野幸氏から聞いたことがある。二十五年九月には「ヒマラヤン・ジャーナル」も書架の一角を飾るようになり、戦後ふたたびスイスを訪れた高木正孝氏によってスイス山岳会の「ディ・アルペン」が斎らされ、独逸山岳会の会報は故人となった高橋健二氏の蔵書から、また伝統ある大学山岳部の部報類も会報を通じての再々の呼びかけに応じて集ってくるようになり、御茶の水時代の中期にしてようやく山岳図書室らしい体裁と雰囲気を醸し出すようになってきたのは、ほとんどすべて会を愛する会員の厚意や協力の結晶であったと言ってよいのだろう。それこそ、日本山岳会のクラブらしい古い伝統が、クラブ・ルームの再建に触発され、新しい芽吹きとなって引き出されてきたものと言えるのではあるまいか。

ところで、二階が談話室専用になってから、土曜日というと誰彼となく集まって来て、山小屋の午後の無為を楽しむような集りができた。クラブ・ライフの楽しみ方の一つであった。二十六年十二月から翌年十一月までの一年間ここに顔を合わせた連中の最多番付が会報一六五号にのっている。土曜日の合計が五十二日、その土曜にやってきた筆頭が田辺主計、成瀬岩雄の四七回、神谷恭四二回、吉田竹志、藤島敏男三九回、加藤泰安三二回、石原憲治二九回、日高信六郎、佐藤久一朗、織内信彦が共に二五回、堀田弥一は二四回となっている。年末にこの連中が一夕を楽しんだ際、ニッカウヰスキーの経営者だった長老の加賀正太郎さんから精勤賞をもらった。みんな小学生のように喜んだとある。これが今に続く土曜会の始まりである。なにしろ、田辺、成瀬両氏の四七回というに至っては、一年中ほとんどの土曜日をこの屋根裏部屋で過したことになるのだから驚くのほかはない。

*

ルーム開設

まもなく、小島烏水展が開催された。その詳細は島田巽氏が書いている「山岳」第四十四年一号に譲るとして、「ルームの落成を誰よりも喜んでくれる筈の小島さんに見てもらえないことが何より残念だった」という意味の松方さんの言葉が烏水展目録にのっている。正にその通りだと思う。二十五年六月、会員佐藤

久一朗氏の制作にかかるレリーフはルーム南面の外壁にとりつけられ、ありし日の小島さんの面影を偲ぶよすがとすることができるようになったことは、大先輩を追慕してやまないクラブや会員たちのせめてもの心遣りのあらわれであった。



日本山岳会史覚え書

望月達夫

一、本会の創立年月日について

社団法人日本山岳会が「山岳会」という名のもとに誕生したのは、明治三十八年（一九〇五）十月十四日であることを、こんにち熟知している会員は少なくないと思う。また今まで屢々述べられているように、その日に創立総会を開いたというような華々しいものではなく、創立に参画した数人の有志が、何度か会合を重ね、その最終の会合を開いたのがその日であって、後年その日を以て山岳会の、つまり現在の日本山岳会の記念すべき誕生の日と認定したということである。それもまた、かなりよく知られていることと思う。

では、その後年というのがいつなのか、その経過を年代を追って、やや詳しく辿ろうとするのが、本稿の目的である。また本会誕生の年月が最初から明確を欠いた理由も、叙述の過程でおのずから明らかとなるであろう。

*

まず本会機関誌「山岳」創刊号（一年一号／明治三十九年四月五日発行）の会報欄を見ると、「本会の成立」という標題の三頁余に亘る一文（筆者はK．K＝小島久太と推定される）があるが、そこには誕生の年月日について明確に書かれていない。また同誌同号巻頭の「山岳会誕生の主旨書」は明治三十九年四月五日となっているが、それは(1)「山岳」発行の日に合わせたもので、本会誕生の日とはとりにくい。

ここで「山岳」同号を少し注意深くみると、巻末に一頁二段組で「日本博物学同志会規則」と「会告」とが同志会(2)の名によって掲載されており、会告の最後に「一、本会会員ニシテ本会内山岳会ノ正会員タルベキ者ハ同会会費ヲ年額八拾五銭ニ低減サルルノ特典ヲ有

ス、云々」の一項のあるのに気がつく筈である。本会内山岳会とは日本博物学同志会内の、の意であり、創立当時の山岳会の年会費は一円（正会員）であった。またこの頁の四隅には会員募集の文字が見えるが、勿論山岳会の会員募集の意である。

さらに博物学同志会の機関誌「博物之友」を調べると、その二十九号（明治三十八年十一月二十五日発行）の表紙の裏面に、先ず広告として前記「山岳」一年一号巻末の会告と同じ意味の文章（会費低減のこと）が、博物学同志会内山岳会として大きく（一頁大）掲げられ、その日付は明治三十八年十一月となっている。山岳会の名が印刷して現われた最初であろう。また同誌同号の会報欄（三五二頁）には、〇支会ノ設立として「山岳及ビ山岳に関係セル一切ノ事ヲ研究スル目的ヲ以テ本会内ニ「山岳会」ト称スル一支会設立サレタリ」とあり、また〇第十三回例会記事として「十月十四日例場ニ開会ス来会者ハ市河三喜、小谷国次郎、河田黙、高野鷹蔵、田中健太郎、田中五一、武田久吉、内田清之助、梅沢親光、福田卓、北沢基幸、岸田松若ノ十二氏ニシテ当日左ノ演説アリ。／塔ノ嶽採集ノ話　高野鷹蔵君／　本会横浜支部ノ発起ニテ九月二十三、四ノ両日ヲ以テ相州塔ノ嶽ニ催シタル採集談ヲ試ミラレタリ（中略）此ノ旅行ノ詳細ナル紀行ハ山岳会発行ノ『山岳』第一号ニ現ハルベシト。」と出ている。

この十月十四日こそ、後年山岳会誕生の日となるのだが、これら創立当時の詳細な点は年月の経過と共に朧げになったようである。ことに山岳会が独立した日本山岳会として隆盛になる一方、会員が成長するに伴って自然その役目を終った博物学同志会であったため、同会内に山岳会が誕生したということは、博物学同志会から参加した発起人や会員を除いては、忘却されてしまったのも故なしとしない。

だが後年、山岳会誕生の年月が問題となったとき再燃することとなる。

＊

「山岳」五年一号は「山岳発刊第五周年紀念号」として明治四十三年三月三十一日に発行されたが、写真図版を多く添えた三〇〇頁を超える大冊は、日本北アルプスの巻とある通り探検時代最後の華華しい記事に溢れ、また「山岳」十年一号は「十週年紀念号」として大正四年九月十日に発行されたが、これもまた三〇〇頁を超え、後年有名になった辻村伊助の「スウィス日記」の連載が始まっている。しかし、当時はまだ会の歴史も短く且つ会の発展期にあたっていたためか、創立当時を回顧するような会合とか、記事は「山岳」誌上に見当らない。

それが現われるのはようやく昭和五年十一月刊の「山岳」二十五年三号、二十五週年記念号であった。そこには回想録として初めて創立当時の思い出等、昔のことにふれた文章が十一人によって綴られているが、創立当時を直接扱っているのは高頭、高野、武田、小島の四人である。

その中で注意すべきは「山岳会が成立したのが明治卅八年の秋、越えて三十九年の春に「山岳」第一年第一号を出した。……」（高野「山岳会創生記」―同誌一五七頁）、「明治三十八年の秋に会が誕生して、この秋で丁度満二十五年。」（武田「今昔の感」―一五八

廣告

日本博物學同志會會員ニシテ本會正會員タルベキ方ニハ同會會員籍ヲ有セラルヽ間ニ限リ本會會費ヲ年額金八拾五錢ニ低減致スベキヲ以テ奮テ入會アランコトヲ乞フ

但シ日本博物學同志會會員名簿ヨリ削除サレタル場合ニハ右ノ特點ハ直ニ消滅スベキコト又入會ノ際ニハ必ズ日本博物學同志會事務所宛ニテ申込マルベキコト

明治三十八年十一月

日本博物學同志會內

山岳會

頁）という表現に対し、「斯くして、明治三十九年に、山岳会が生れ、「山岳」が発刊された。」（小島「日本山岳会成立まで」―一六七頁）の表現の差異が見られることである。

それから約三年後の「会報」三〇号（昭和八年十一月刊）には、同年十一月二日「懐古と幻燈の夕べ」という小集会が催され、そこで講演した武田の「『山岳』の定まる迄」という速記（武田校閲済）が載せられているが、そこでも山岳会の設立は明治三十八年秋とされている。

時代は進んで本会が三十年を迎えるころには、会の歴史も厚味を加えてきたし、創立当時の発起人たちもかなりの年齢になってきたせいか、三十周年記念行事を盛大に行っている。即ち昭和十年（一九三五）五月四日には三十周年記念晩餐会が開かれ、五月三―七日の五日間、日本橋丸善で山岳図書展覧会[3]が開催された。また大阪に於ても三十周年記念関西大会が十一月一日に開催され、有志懇談会、有志晩餐会につづいて記念講演会がもたれた。名誉会員として小島、武田、高野、河田、高頭の五発起人と辻本満丸が推挙されたのも、この時であった。

「山岳」は三十年二号（昭和十年十二月三十日刊）を三十周年記念号とし、それには黒田孝雄の「日本山岳会三十年」と題する会の歴史が初めて掲載された。注目すべきことであろう。会の誕生について、そこには次のように書かれている。

「会の発起人（氏名略）七名の名前を連ねた『山岳会設立の主旨書』が発表されたのは明治三十九年四月五日のことであるから、それを以て日本山岳会が公に設立されたと見るべきである。」

また黒田が同時に作成した「日本山岳会々誌 一九〇六―一九三五」にも、「一九〇六 四月山岳会設立せらる」と明記されている。

右の黒田の文章は、会の長老であり創立当時重要な役割りを果した小島の校閲を経たものようである。文中に小島の注記が、二、三見られるからである。しかし小島は、創立年月日については何ら手を加えていない。

ところが「山岳」三十一年一号二〇八頁以下に掲載された武田の「山岳会の成立する迄」によると「三十八年の秋、十月か遅くも十一月には、日本博物学同志会の支会として『山岳会』が誕生した云云」とあって、その詳細な説明があり「設立を三十八年としなければ事実に反する」と断言している（二一三頁）。三十八年十月か十一月という具体的な説明が初めてなされた注目すべき一文である。

さらに武田は「会報」七二号（昭和十三年一月刊）に「日本山岳会誕生の年月」の一文を掲げ、昭和十二年十二月の「会報」七一号に載った冠松次郎の文中に、山岳会の成立を明治三十九年四月としてあることの誤りを指摘し、重ねてその理由を述べているが、ここでは「十一月に結成されたと見る可きである」と書いている。

以上で判るように武田の主張は明治三十八年十月、遅くも十一月ということに終始一貫している。

*

本会が社団法人改組の創立総会を開いたのは昭和十六年二月二十七日だが、それに先だって作成された設立趣意書は、木暮理太郎、小島、田部重治、冠、槇有恒の五人の名によっている。それには「本会ハ明治三十八年十月ノ創立ニ係リ、……」の字句が見られる

ので、当時役員会では三十八年十月創立が認められていたと解せられる（この趣意書は偶々筆者の手許にあったものだが、他に採録されてあるのを知らない。昭和十六年一月ごろの印刷と思うが、起草されたのはもう少し前かも知れぬ）。

本会創立四十周年にあたるのは昭和二十年だが、時あたかも敗戦の年にあたり、本題に関することも勿論、会の記録には何も認められない。

＊

昭和二十三年（一九四八）十二月十三日、本会にとってかけがえのない小島が病歿した。その最後の著書『山の風流使者』は昭和二十四年七月、即ち遺著として刊行されたが、そこに収載された「山の因縁五十五年」は、小島が昭和二十二年秋の口述筆記を殆んど書き改めて「山と渓谷」誌に掲載したものであり、本邦登山史上逸し難い文献として収録されたものである。そこでも小島は山岳会設立の年を明治三十九年としている（同書二〇六頁）。しかし同文中（二二九頁）に、地理学者の一群が創立当時の山岳会を扶掖誘導したという例として「地質学雑誌」（明治三十九年一月号）に「山岳会の設立　ヨーロッパに有名なるアルプ協会と其主意を同うせる山岳会は旧臘本邦に生れたり。（中略）事務所は……城数馬方なり」を引用して、明治三十八年暮れに誕生したという一文を示してもいる。

「山岳」四十四年一号は小島烏水記念号として刊行された（昭和二十四年十月十日）。「山岳」がその全頁を一個人の追悼に捧げたのは、これが初めてである。同号には前年遠逝した小島の思い出が、山岳関係ばかりでなく、文学、浮世絵研究、書物、等多方面から寄せられたが、なかでも武田の「日本山岳会の創立と小島烏水君」は特に注目すべき一文と言わねばならない。

これは昭和二十四年三月二十六日の烏水記念小集会での「山岳会創立までの小島君との関係」と題する講演速記を、武田自身の校訂を経て収録したものである。そこに縷々記述されていることを要約すると、「明治三十八年十一月には日本博物学同志会の支会として、山岳会が既に出来ていたことは誤りない事実」ということ、更に一歩を進めて、当時の武田の手帖の記入やその記憶からして、三十八年十月の博物学同志会の小集会（第十三回例会）が十月十四日であり、その小集会が終った後に、高野、小島、武田、梅沢、河田、城、高頭の七名が飯田橋の駅の近所の川縁の富士見楼という三階造りの料亭の階上で山岳会設立のための相談会をしたこと、相談会はそれ迄も何度かやっていたが、この十月十四日が最後の相談会であったこと、従って十月十四日に山岳会が本当に設立されたこと、など（同誌二三―四頁）である。

ここに初めて十月十四日という具体的な日附と、飯田橋富士見楼で最終の相談会云々という説明が現われたのであった。これが昭和二十四年三月であるから、山岳会誕生後かれこれ半世紀近い歳月が経過しており、またそれが発起人の一人烏水の追悼講演のなかでだったという点は、ひとしお印象深く思われるのである。

＊

これ以後のことは些か蛇足のようだが、もう少し続けることとする。本会誕生が明治三十八年十月十四日ということは、しだいに会の内部に浸透して行ったと思われる。例えば「山日記」十六輯（一

九五一年版、昭和二十五年十二月二十日刊、編集委員林和夫、金坂一郎、神山勉、崎田澈）は、戦後刊行された三冊目であるが、その日記欄十月十四日の個所に「日本山岳会最初の会合（一九〇五）」が見られ、十七、十八、十九輯に同様な記載がある。「最初の会合」と些か遠慮っぽい表現に注意したい。

「山日記」の記載は二十輯（一九五五）から暫らくなくなるが、二十八輯（一九六三、昭和三十八年一月一日刊、編集代表皆川完一）に至って復活し、十月十四日の個所に「日本山岳会創立、明治三八年」と記載されるに至り、以後三十四輯（一九九九）まで続くのである。

「山日記」の例は以上に見たとおりだが、さらに昭和三十年（一九五五）本会は創立五十周年を迎えたので、当時の模様を振返ってみよう。この年十一月二十六日午後二時半から麻布の国際文化会館で記念講演が行われ、高野の「五十年の回顧」、今西錦司の「カラコラムの旅」、松方（当時副会長）の「山岳界展望」の講演があった。終って秩父宮妃殿下ご臨席のもとに同会館で記念晩餐会が行われた。高野、今西の講演要旨は会報一八三号（一九五六年一月刊）に掲載され、また「山岳」五十年に高野の講演速記と松方の「回顧と展望」（先の講演速記を自ら補訂したものと推定される）が掲載された。また「山岳」同号には志村寛の「日本山岳会創立前后之見聞」が載ったが、本会創立当時の貴重な証言が見られる。そこでも山岳会は明治三十八年十月ごろ発足したことが読みとれる。

五十周年にあたって特に注目すべきは沼井鉄太郎の「日本山岳会五十年史―近代日本登山史抄」が「山岳」五十一年（一九五七年十二月刊）に発表されたことであろう。ごく小さな誤りもあるが約五〇頁にわたる労作であり、先の黒田の「日本山岳会三十年」と共に、将来会史を纏める場合の重要な里程標であろう。右には「明治三十八年十月十四日東京で日本山岳会最初の会合が行われた。それはまず日本博物学同志会の支会としての山岳会設立の相談一決であったが実際問題としてその日は日本山岳会の発祥ということに外ならない。……」と書かれている。

先に「山日記」のところで指摘した、その一九五一年版（昭和二十五年刊）に初めて掲げられた「山岳会最初の会合」という表現から、一九五七年当時（沼井の五十年史は一九五三年に着手されているが）には発祥という表現にまで至り、一九六三年版の「山日記」に創立という文字が使用されるようになった経過が理解される。

さらに本会として創立記念日十月十四日をはっきり会員に印象づけたのは、創立六十周年記念式典と祝賀パーティーが、昭和四十年（一九六五年）十月十四日に開催されたことであったと考える。当日の模様はまだ記憶にとどめている会員も多いと思うし、また「創立六十周年記念行事」と題して「山岳」六十一年[5]に六頁に亘り松田雄一によって記述されているので、ここに改めて縷説は避けるが、そこには「会の創立については……正式にいつ発会式をあげたかということは明らかでない。ただ明治三十八年（一九〇五年）十月十四日、飯田町の富士見楼において山岳会創立の最終的な打合わせ会が開かれたという記録が残されている」と書かれ、十月十四日に式典及び祝賀パーティーを開いた旨が述べられている。

*

以上縷々述べたが、第一の主眼は明治三十八年十月十四日という具体的な年月日を言い出したのは武田であり、その時期は昭和二十四年三月だったという点であり、それが本会のなかに浸透していった経過は叙上の通りであった。

（注1）この主旨書は小島の執筆にかかわるもので、イロハ順に七人の発起人（河田黙、高頭式、高野鷹蔵、武田久吉、梅沢親光、小島烏水、城数馬）の名を掲げてある。

また「山岳」一年一号より早く明治三十九年二月四日附で発行された高頭式『日本山嶽志』には、附録として山岳会主意書規則書が添附され、その主意書の日附は明治三十八年□月□日となっていて、月と日の個所はブランクである。

なお本稿に直接関係ないことだが、「山岳」奥付に見られる発行兼編輯者が高頭仁兵衛になっている点は、昭和七年十二月発行の二十七年三号までほぼ二十六年も長期間続くのだが、本会創立当時高頭が財政上の責任を負ったことの現われである。

（注2）日本博物学同志会は東京尋常中学校（後の第一中学校）の生徒たちが明治三十三年創立した会で、機関誌『博物之友』を刊行した。同会員中山岳会の創立発起人になったのは河田、高野、武田、梅沢の四人だった。

（注3）当時まだ学生だった筆者は、この展覧会において内外の珍しい山岳書に接して多大の感銘を覚えたことを、半世紀後の今日なお歴然と思い起すことができる。山岳書ばかりを陳列したこのような展覧会は、恐らく日本で初めて行われたものであったろう。その目録は「山岳」三十年一号の附録として収録されている。

（注4）筆者は幸い、この武田の講演を聞き強い印象を受けた記憶がある。またその後の武田の本会創立当時についての講演も殆どすべて聞くことができた。

（注5）「山岳」六十一年にも、昭和四十年十月十五日に行われた創立六十周年記念講演の内容が纒めて掲載されており、武田の「山岳会創立前後」の一文がある。創立年月日についての説明は、武田のそれまでのものと少しも変ったところはないので詳述はしない。ただ本稿で気のつく点は小島の「甲斐の白峰」に触れた個所で、小島が「あれは小説だよ」といったという話が出ているが、武田が公の席で発言したのは恐らくこの時が初めてであろうと思う。

二、会報について

本会の歴史を調べる場合、「山岳」と並んで最も基本的な資料である会報（現在の「山」――便宜上本稿では会報という名称で通す）について、特に先の戦争中から戦後のある期間について、注意すべき点を記してみたい。

会報は周知の通り昭和五年（一九三〇）十月、第一号が発刊された。現在は正しく月刊となっているが、過去においては必ずしも毎月一回の発行ではなく、年間の発行回数もまちまちとなっているので、煩を厭わず初めに過去の発行状況をみてみることとする。

（年）	（発行号）	（発行回数）
昭和　五　年（一九三〇）	一―　三号	三回
〃　六　年（一九三一）	四―　一一号	八回
〃　七　年（一九三二）	一二―　二二号	一〇回
〃　八　年（一九三三）	二三―　三三号	一〇回
〃　九　年（一九三四）	三三―　四一号	一〇回

昭和 十 年（一九三五）	四二―　五二号	一一回	昭和三十四年（一九五九）	二〇二―二〇六号　五回
〃 十一年（一九三六）	五三―　六二号	一〇回	〃 三十五年（一九六〇）	二〇七―二一二号　六回
〃 十二年（一九三七）	六三―　七一号	九回	〃 三十六年（一九六一）	二一三―二一八号　六回
〃 十三年（一九三八）	七二―　八二号	一一回	〃 三十七年（一九六二）	二一九―二二四号　六回
〃 十四年（一九三九）	八三―　九〇号	八回	〃 三十八年（一九六三）	二二五―二三〇号　六回
〃 十五年（一九四〇）	九一―一〇〇号	一〇回	〃 三十九年（一九六四）	二三一―二三六号　六回
〃 十六年（一九四一）	一〇一―一一二号	一二回	〃 四十年（一九六五）	二三七―二四六号　一〇回
〃 十七年（一九四二）	一一三―一二〇号	八回	〃 四十一年（一九六六）	二四七―二五八号　一二回（注iii）
〃 十八年（一九四三）	一二一―一二八号	八回	〃 四十二年（一九六七）	二五九―二七〇号　一二回
〃 十九年（一九四四）	一二九―一三二号	四回	〃 四十三年（一九六八）	二七一―二八二号　一二回
〃 二十年（一九四五）	――	〇回	〃 四十四年（一九六九）	二八三―二九四号　一二回
〃 二十一年（一九四六）	一三三―一三七号	五回（注i）	〃 四十五年（一九七〇）	二九五―三〇六号　一二回
〃 二十二年（一九四七）	一三八―一四〇号	三回	〃 四十六年（一九七一）	三〇七―三一八号　一二回
〃 二十三年（一九四八）	一四一―一四二号	二回	〃 四十七年（一九七二）	三一九―三三〇号　一二回
〃 二十四年（一九四九）	一四三―一四八号	六回	〃 四十八年（一九七三）	三三一―三四二号　一二回
〃 二十五年（一九五〇）	一四九―一五二号	四回	〃 四十九年（一九七四）	三四三―三五四号　一二回
〃 二十六年（一九五一）	一五三―一五八号	六回		
〃 二十七年（一九五二）	一五九―一六四号	六回		
〃 二十八年（一九五三）	一六五―一七〇号	六回		
〃 二十九年（一九五四）	一七一―一七六号	六回		
〃 三十年（一九五五）	一七七―一八二号	六回		
〃 三十一年（一九五六）	一八三―一八九号	七回		
〃 三十二年（一九五七）	一九〇―一九五号	六回		
〃 三十三年（一九五八）	一九六―二〇一号	五回（注ii）		

（注i）一三三号で初めて「山」の誌名がつき一三七号まで続いたが、一三八号からまた会報に戻った。

（注ii）一九八、一九九号は合併号として刊行された。

（注iii）二五八号から再び「山」の誌名がついた。第三種郵便物認可を得るための必要条件だったからである。しかしその認可が得られたのは、ようやく昭和四十九年八月三十一日で、同年九月発行の三五一号以降に明記されているが、ほぼ九年の歳月を要している。それ以後は引続き年十二回発行されて現在に至っている。

以上によって会報の発行回数をみてみると、創刊から昭和十五年ぐらいまでは、概ね年十回を目標としたようである。昭和十六年二月、社団法人に改組後は年十二回（即ち月刊）を意図し、十六年はその目的を達したものの、時局は戦時体制に入ったため、十七年以降は発行回数もへり、十九年には僅か四回しか発行されず、戦況は日をおって激しさを加え、二十年五月二十五日夜間の大空襲によって、虎ノ門にあった会の事務所図書室が全焼したため、二十年には会報は一回も発行されずに終った。従って十九年八月二十五日発行の一三二号が、戦前に発行された最終号となったのである。

戦後の第一号である一三三号が発行されたのは、ようやく昭和二十一年四月二十日だったが、十二頁の同誌をいま改めて手にするとき、焼土と化したなかから、これだけのものを作り上げた当時の関係者の異常な熱意に驚かざるを得ない。その奥付によって編輯兼発行者が塚本繁松（当時主事）であり、また本会の住所が藤沢市鵠沼六三四〇となっているのを知ることができる。それは虎ノ門の事務所が戦災のため焼失したので、二十年六月二十日午後小島久太方で開催された役員総会（虎ノ門焼失後一カ月足らずの時期）において、理事鳥山悌成方に仮事務所をおくことが決定されたことによるものだが、そのことは会告として一三二号十二頁にも掲げられ、通信連絡所は目黒区中目黒一丁目七四二塚本方となった。

また印刷所が新潟市西堀通三番町、昭和時報社となっているのは、戦災のため東京での印刷が不如意になったため、在新潟の会員藤島玄の尽力によったからである。これは二十一年六月発行の一三五号まで続くのである。塚本は一三三号の編輯後記で藤島に謝意を表しているが、一三四号の編輯後記にも次のように述べている。

「本号も亦新潟市在住の会員藤島玄氏に一方ならぬ御面倒をおかけしました。氏は自ら印刷所に行って校正の活字を動かして下さってゐる状態で、其他印刷の促進に本会との連絡に、紙屋との交渉や発送等々並々ならぬ援助を受けて居ります。氏の援助なくしては本誌の復刊は決してさう順調に進まなかった筈であります。各位に報告して改めて氏に謝意を表する次第であります。」

いずれにしても昭和二十一年四月―一三三号、五月―一三四号、六月―一三五号と、あの戦後の困難な状況下で矢継早に会報を刊行した塚本の熱意と努力は尋常のものでなく、一三六号も更に充実した内容で二十一年九月に発行された。

また一三三号からは誌名が「山」となっているが、当時はまだ戦時中からの用紙割当制度が存続していたため、会報形式のものには用紙の配給が受けられず、それを受けるための措置であったと思う。

昭和二十一年六月二十二日の常務役員会（議長松方三郎）で、「本会の組織拡張並ニ新事業方針に関スル件」が決定され（会報一三六号一八頁）、更に八月三十一日の役員総会で「九月一日から本会は大日本体育会に加盟する」ことが決定された（一三七号四頁）。これは本会にとっては昭和十六年の法人改組と共に非常に大きな変革であって、本会の歴史を綴る場合に特に留意しなければならない点である。これに伴って会の事務所も九月一日から岸体育会館に移ることとなった。一三七号は十二月十五日に発行されたが、巻頭に「日本登山界の再編成と日本山岳会の新しい出発」と題する重要な

文章が掲げられた。松方によって草されたものである。誌名の「山」はそのままだが、後述する雑誌「山」の刊行案が既に芽ばえていたものか、一三七号あたりから会報の紙面は事務的な会務報告が主になった。

二十一年十一月九日の常務役員会で、会報に関する事項がとり上げられ、会報は今後会務報告を主とし、紀行、記録、研究というようなものは独立した雑誌として別途発行することが決定されたが（一三八号一頁）、それが実現して「山」第一巻第一号が刊行されたのは昭和二十二年九月一日だった。

ついで二号（通巻一三八号）が二十二年十二月一日、三号（通巻一三九号）が二十三年一月三十日、四号（通巻一四〇号）が二十三年四月二十五日、五号（通巻一四一号）が二十三年七月一日に発行された。発行所は本会、発売元は日本交通公社、頒価二十円、第一号に記されている編集委員は今村正二、大洞陽一、垣内政彦、関根吉郎、谷口現吉、浜野正男、林和夫、鈴木正彦の八名で、編集兼発行者は垣内であった。会報と「山」とを二本立とした理由は、「山」創刊号の編集後記に関根によって詳細記述されている。(1) 会報の内容はここで二つに分けられたのであるから、この時代の会報を調べる場合、あるいは会報の歴史を説く場合には、日本交通公社発売の「山」をも見なければ片手落ちになることを明らかにしておきたい。「山」の表紙には会報の通巻号数が明記されている（創刊号にだけは忘失されたようだが）のが、その現われである。(2)

ここで特記しておきたいのは、戦後会再建のため尽瘁した塚本が、二十二年六月二十五日急逝したことだった。会報一四〇号の短い文章は、おそらく松方の筆になると思うが左に掲げておきたい。

「熱があるといい乍ら六月廿日近くまで会の事務をとっていた塚本主事は、病院に担ぎこまれた時既に意識なく、入院数日にして廿五日長逝した。病名はチブスだったが、まことに哀悼にたえない。／戦争中日本山岳会の孤塁を守ったのは塚本さんだったが、終戦後の混乱時代に会報の復刊を敢行したのも塚本さんだった。戦後の会の再出発に、あの会報の復活がどんな役割を演じたかは、会員は誰もよく知っているが、今日の日本山岳会は全く塚本さんの奮闘に感謝すべき多くのものを持っている。言葉通り倒れるまで頑張った所も塚本さんらしいが、何とか早く手を打ったならば、こんなことにならなくてすんだのではあるまいかと、今だにそれが残念だ。事務所が整わないので、事務書類一切をルックに入れて、東京の町を歩いていた故人の姿は、いつまでも多くの会員の眼から消えまいと思うが、亡くなるまでバッヂのことを、うわごとに云っていたという塚本さんの霊も、永く会に止ることだろう。／遺骨は八月に郷里に帰った。」

また一三五号（一三頁）所収の会員通信（藤島玄）は塚本の苦労をよく伝えている。なお塚本の追悼は「山岳」四十四年二号に詳しい。(5)

＊

さて話を「山」に戻そう。折角五号まで順調に刊行された「山」は、五号の編集後記に「なお「山」は五号まで一切の業務は交通公社に委託していたが、六号からは梓書房の岡茂（マヽ）さんが、新に業務を引受けて下さることになった。」と書かれているように、会からの

委託先が変るのだが、岡茂雄との関係も話だけで終り実現をみなかった。そして会報一四二号(一頁)に「従来交通公社で担当の「山」も河出書房と話がまとまり十月発行予定の六号から同書房を煩はすことになった。」とある通り河出書房に引継がれることになった。当時「山岳」が河出書房から、戦後初めて発売されることが決定されており、それに努力した関根が、「山」のほうも同様に河出と折衝して成立させたと記憶している。

「山」十月号はA5判六四頁、編集人垣内政彦、発行所河出書房として十月一日発行された。[4] そこには松方の「日本山岳会のあり方」など、本会の歴史をさぐるうえで見逃すことのできない文章や、交通公社版「山」から続いている連載ものの堀田「ナンダコート初登頂(六)」などがあるほか、執筆者には槇有恒、田部重治、田口二郎、深田久弥、足立源一郎、伊藤洋平、額田敏、黒田初子、等が名をつらね、正に本会々報としての色彩が強い。

このように「山」は河出書房で刊行が続けられたが、翌昭和二十四年には早くも河出の経営がゆきづまったため、同年五月まで八冊を出した後朋文堂に引継がれることになった。

昭和二十四年七月号は朋文堂版第一号として発行されたが、その広告が会報一四六号に載っているのをみると「このたび『山小屋』と河出版『山』と合併し全然新しい雑誌が誕生しました。両者の特徴を活かし、増頁を断行、我国岳界の最強力誌として云々」とある。そして会報一四七号(昭和二十四年十月十五日刊)三頁の会務記事中八月二十四日の役員総会で、「会報が一四六号を以て、八頁に増頁を強行したこと、今後更に必要により一二頁乃至それ以上にでも増強することも可能である見通しがついたので、[5] 編集方針に就て慎重に協議が行われ、左の結論を得た。／会には、いうまでもなく、機関詩「山岳」、雑誌「山」、それに会報の三つがあるが、「山」が大体、高校学生級を読者層の基盤とすること(四頁関根理事発表)に対し、会報は会務の報道機関であり、同時に会の理想とか方向とかを反映し、一口に云えば昔のようなふんいきを盛り、且つ会員全体に呼びかけるべき信頼と興趣をも兼ねた広い面をもたせるものにしよう、と。」ということが決定されたのを知ることができ、また会報同号四頁には、右にも触れられた「雑誌「山」について」の一文が見られる。[6]

昭和二十四年七月号から朋文堂に移った「山」の奥付を見ると、編輯発行人新島章男となっているが、八月号から二十五年七月号迄は編集人が垣内政彦に訂正されている。[7] また七月号の編集後記は新島と垣内が書いているが、そこでは編集委員が明らかでない。八月号の末頁でそれが、入沢文明、浜野正男、関根吉郎、垣内政彦、永戸秀助、高須茂、勝田甫、池田朝子、森いづみ、大門八郎、責任者が新島であり、注6の関根の文中にある四人の編集委員というのは、入沢、浜野、関根、垣内であったことが分る。

朋文堂版「山」は、当初本会側の編集スタッフの意気込みも強く、従って本会の色彩も濃かったものの、かたや「会報」が頁を増し戦前からの本来の姿にしだいに戻ってきたこともあって、山岳会の色彩は号を追って薄くなった。そして遂に「山と高原」を合併した昭和二十五年八月号からは完全に本会と関係がなくなるのである。[8] そのことは、ややおくれるが昭和二十六年五月発行の会報一五

五号に載せられた「雑誌山について」からも明らかである。

「雑誌「山」は河出書房から朋文堂に発行を引継いだ後も、日本山岳会の責任に於て編集し多少とも会の機関誌的な意義をもって来ましたが、昨年「山」と「山と高原」が合併して以来、日本山岳会が同誌の編集に参画することもなく、寧ろ朋文堂の自主的立場で発行されているので、自ら会の機関誌的な役割も終了したものと御諒解願います。」

*

以上結論として言えることは、交通公社版「山」（五冊）は全く会報の分身と考えるべきこと、河出版「山」（八冊）は右と多少ニュアンスの違いがみられるが、これも会報の分身に準じて考えるべきこと、朋文堂版「山」は上記で明らかなように、その昭和二十四年七月から二十五年七月迄の十三冊は、日本山岳会の機関誌的な意味を以て編集されたといっても、朋文堂編集スタッフもかなり加わっており、会報の分身からは、かなりかけ離れていること、である。

戦後の会報の辿った足跡は以上であり、会報を論じる場合は、その点をよくわきまえておく必要がある。また、会の歴史をしらべる場合は、朋文堂版「山」十三冊にも目を通す必要があろうと考える。

（注1）「山」創刊号の編集後記は少し長くなるが、当時の事情を知る上で重要だと思われるので左に掲げておく。

「昭和五年から十六年間、百三十七号迄続いた日本山岳会会報も、今度の山岳会の改組に当り、会報が持っていた二つの面を分つことにした。一つは会務の報告であり、他は機関紙「山岳」に掲載する程まとまってない研究論文や短い紀行報告などの発表機関としての面である。この後の面を独立させたものがこの新たなる機関紙「山」である。／敗戦決定後、本会は会報を五回発行した。専ら事務的事情のために、紙名の必要にせまられ、非公式に「山」と仮称していた。今回も事務的に安易な事と他に是非これに改めねばならぬと云う程のよい紙名も見当らなかったために「山」を受けつぎ、これを正式な機関紙の名称とすることにした。／四十年を越す長い伝統と、勝れた登山者を豊富に会員として持つ本会が、この度は大日本体育会の傘下に入り、各方面各層の登山者を広く網羅しようとする運動を始めたことは御承知のことと思う。「山」もこの運動の一つの現はれでなければならない。兎角独善に陥り易い登山界に、最も正確な知識が、一番客観的な、又普遍性もあるものであることをこの「山岳」は示していくであらう。／第一号の原稿は、前の会報用として会に送られたものから撰んだものも多いが、大洞氏のものは、本会が昨年十一月主として学生のために行った、冬期登山講習会に於ける講演要旨を転載したものである。登山が復活すると、遭難も亦復活し始めたようである。今なお遭難を讃美する声は絶えないようでもあるが、幸ひ登山界の各方面に漸く遭難対策をとりあげる声が高まりつつあるのを聞く。これを機に全日本の登山界は、もう一度遭難に対して形而上的な検討をすると共に、実際行動としての対策も考へておいて頂きたいものである。／又この「山」は過去に発表されたものであっても、一部の人にしか読まれてゐないものであって、是非多くの人々に読んで頂きたい記事は出来得る限り掲載していきたい希望がある。堀田弥一氏のナンダコートの紀行がこれである。嘗て立教大学山岳部の部報にその前半が発表されたものもあ

るが、その部数も極めて少いものであった。今度は未発表の後半迄現在氏は執筆中であり、二号三号と号を重ねるに従ひ、その全篇に接し得ることは、唯編集者の喜びであるばかりではあるまい。／紙、印刷共に極めて不足の時代に、この仕事に不馴れの委員が受持って出発することになった。この号の印刷が大変遅れたのも全て私どもの責任であった。ところでこの度、日本交通公社が、一番困難な印刷、販売の仕事を引受けてくれることになり、難航のこの号も終に世に出ることになったのである。大変遅れたことはお詫するが、漸く前途の見通しもついたのであるから、今迄の会報以上にこの新しい「山」の育成に御援助を切に御願いする。（関根）」

（注2）ここに参考までに書いておくのだが「山」の表紙にかかれた通巻（会報としての）番号と本来の会報のそれとの対応を、発行年月でみると左の通りである。

（会報）　（「山」）

137号　昭21・12・15　一号　昭22・9・1
138号　昭22・3・30　二号　昭22・12・1
139号　昭22・6・10　三号　昭23・1・30
140号　昭22・9・10　四号　昭23・4・25
141号　昭23・5・20　五号　昭23・7・1

＊

私ごとになるが、私は昭和二十二年十二月、捕虜生活も含めた六年半の軍務から復員して、間もなく「山」がすでに二号まで発行されているのを知った。当時率直に感じていまでも忘れがたいことは、戦前あまり本会に寄りつきもしなかったような若い大学山岳部出身の会員が、何人か本会再建のため力を尽しているということだった。間もなく私もその仲間に入り、戦争直前会報を編集していた（九四号から一〇七号まで）こともあり、一四一号からは私が編集担当となり一五五号まで続いた。

（注3）塚本繁松さんは戦前、私が会報の編集担当時協力してくださった私には忘れがたい人だった。無事復員したときは一日も早くお会いしたい一人だったが、私が帰宅したとき、既に塚本さんは亡くなっていた。私は昭和二十三年初めごろ、同氏の末亡人が一人淋しく暮らしておられた目黒付近の戦災者住宅を訪ね、心から弔意を表し、塚本さんの冥福を祈った。夫人は間もなく郷里へ帰られたように記憶している。

（注4）河出版「山」には最初の昭和二十三年十月号から、表紙に本会のマークとその下に日本山岳会の文字が印刷されていた（但し十月号だけは、マークが反対であり、日本山岳会の文字を欠く）。また奥付には会報の通巻番号が記載され、十月号＝一四二号（但し一二四と誤植、次号から訂正）、以下昭和二十四年五月号＝一四九号と明記されていた。また河出版「山」の編集委員は特に明記されていないが、交通公社版「山」のスタッフと殆んど変っていないと考えられる。

（注5）戦中から引き続いていた用紙の割当統制が全面的に撤廃されたのは昭和二十五年一月一日からであるが、二十四年秋ごろにはその見透しが一般に周知されていたと思われる。

（注6）「戦後「会報」が唯会員通信だけの役をしていたのでは紙の配給が受けられなくなって、雑誌として一本立をしなければならなくなった。「山」という名を付けて幾号かを世に送ったことは会としても一つの慰めであった。／先ず会自身でやり始め、次いで交通公社、河出書房と転々とその発売所を変えていったが、亦々変向せざるを得なくなってしまった。／河出書房が相当の意気込みで、「山岳」

及「山」を引受けたのは、まだ昨年の夏のことであった。「山岳」の方は一号を出しただけであったが「山」は八号を出し、逐次順調に発展していったのは、河出書房の力の入れ方が大きかったことを証するものである。／然し乍ら昨年秋頃からの出版界の情勢は、門外漢の推察などよりは余程きびしいものであったらしく、さすがの河出書房も社内の態勢をととのえ直す必要に直面した。発行部数一万以下の「山」は整理の対象となってしまった。／戦後僅か二三年の間に「山」の通った迂曲（ママ）の道は長かった。亦編集者の感じた面もそれに相当して複雑なものとなった。／それらの結果を綜合して、今後の「山」の方針を結論として述べてみる。／一旦世に出したからといって、出す意味がないなら出版する必要は毛頭ない。会は伝統ある機関誌として「山岳」をもっている。「山岳」に対する会の態度は戦前、戦時中、戦後不変といってよい。／一時紙の都合が付かなかった「会報」も漸く紙の入手も可能になり次第に昔日の面影を回復出来そうに見える。／このような情勢に於て「山」を別にもつ必要さは、山岳会の戦後の一動向である、より広く大衆にという方向に向って残された道を進むことではあるまいか。／既に公通交（ママ）社の時代からそのつもりでいたのであるが、こゝに至って編集者一同は堅くこの意味の必要さを痛感した。我が国に於ては大衆に愛されることは即ちサロンに於て悪口をあびせられていることを意味する。会のルームで最近の山が数々の口から罵られているのを聞き、この調子なら見込みがあるとほくそ笑んでいるのは四人の編集委員だけであろう。／このような意味の下に「山」は最近朋文堂に移った。熱の人新島氏の下で「山」は亦別の育ち方をするかも知れない。然し、新制高校などの広い地盤に立とうとの方針は会の一つの明瞭な方針なのであり、その実現の程を長い眼を以って見守って頂きたいと同時に、変らぬ御援助も切にお願いする次第である。（関根吉郎）」

（注7）編集後記からぬき書きしておく。「いままで日本山岳会編輯河出書房で発行されてゐた「山」をわが社で発行……いままでも「山と高原」「山小屋」の二誌を通じて、及ばずながら登山界の精神交流の役割を果し……今度「山小屋」を発展的に解消し、日本山岳会の「山」と一緒にして、最もよい山の雑誌を作り……（N）」、Nは新島と解される。「今後の編集に当っては「山」と「山小屋」との長所を生かし、山岳界の最高の雑誌としていきたい……「山」の行きかたについては、正しい登山の指導啓蒙がその第一の目的であるのは勿論のこと……しかしそれとともに山をめぐる自然、文学その他いろいろの面から広い角度で山をみる点にも今後の編集の主眼を置いていきたい……（K）」、Kは垣内（かいと）であろう。

（注8）当然のことにこの号からは編集兼発行人は新島となった。ただ「合併の辞」のなかに編集アドヴァイサーとして入沢、垣内、浜野、関根がのこる意味の記述が見られる。

（附記）

一、事実をできるだけ客観的に叙述することにつとめたが、資料の読み違い、見落しがないとは測りがたい。誤謬があれば大方のご指摘を得たい。

二、歴史的叙述という建前から、すべて敬称をはぶいたことを諒とされたい。

《創立八十周年記念特集》

創立八十周年記念式典および晩餐会挨拶

日本山岳会創立八十周年記念式典および晩餐会は、一九八五年八月二十四日、東京目白の椿山荘でおこなわれた。詳細は会報「山」四八四号に掲載されているが、ここでは、会報に収録できなかった今西会長の記念式典での挨拶全文と、晩餐会での来賓挨拶、外国山岳会からの祝電を収録する。

今西寿雄

本日ここに日本山岳会の創立八十周年記念式典を催しましたところ、秩父宮妃殿下にはお忙しいご日程にもかかわりませず、親しくご臨席の栄を賜り、また内外各方面にわたるご来賓の方にも、炎暑の中、わざわざご来駕いただき、まことに有難く、光栄これに過ぎるものはございません。また会員各位にも全国各地より多数の方々がご来場いただきましてまことに有難く存じます。

本年は日本山岳会が明治三十八年十月十四日、イギリスの宣教師ウォルター・ウェストン師並びに志賀重昂先生のご教示によりまして小島烏水、高頭仁兵衛、武田久吉、河田（山川）黙、梅沢親光、高野鷹蔵、城　数馬の七名の方々によって創立されてより八十年になるわけでありますが、記録によればイギリスのアルパイン・クラブは一二八年、オーストリーは一二三年、イタリア、スイスが一二二年、フランスが一一一年、アメリカの八三年、カナダ七九年に次いで日本山岳会は世界第七位の歴史を有する山岳会として古くより登山界の発展につくしてまいりました。

この間、私どもの会はつねに登山活動のパイオニヤとして、国内においてはわが国スポーツ登山の黎明期より先達的役割を果し、また戦後は海外においても、マナスルの初登頂に始まり、エヴェレスト登頂、ナンダ・デヴィとカンチェンジュンガ山群での初縦走、チョモランマ北壁の初登攀など、数々の輝かしい記録をあげるとともに、登山活動を通じての国際交流と親善にも大きな役割を果してまいりました。またこの八十年の間には、登山活動も、初登頂、初登攀の時代から、季節的にも無雪期から厳冬期へ、そしてヴァリエーション・ルートによる登山、さらには無酸素による高所への挑戦など、技術的にも高度化する一方、他面では都市近郊に見られる婦女子ないし高齢者による熟年組の軽登山、レクリエーションにいたるまで、実に多種多様な登山が普及してまいりましたし、さらには登山を通じて山岳地域での動植物の観察とか、山岳医学、あるいは山岳にかかわる自然現象の研究など、多面的な拡がりを持った活動が日本山岳会にかかわってくるようになりました。

このような背景として、日本全土に二十支部を有し、会員数も四〇七一名と他に類を見ない多様な人材を擁して日々の運営にあたっておりますことは、私どもの会の大きな特色であり、またわれわ

れの誇りに思うところでもあります。

ただいま申し述べましたような歴史と登山界の中にあって、今年、私どもは創立八十周年を迎えたわけでございます。

創立八十周年記念の催しも本日の記念式典および晩餐会をもって山場を迎えたわけでございますが、昨年末、計画、実施してまいりました記念諸事業についてひと言ご報告申しあげたいと存じます。

記念行事は集会、登山、行事、特別基金の四つの構成になって、集会行事は本日の記念式典、晩餐会のほか全国七カ所の地域において、集会、晩餐会を催し、会員の親睦と団結をはかり、あわせて地域での日本山岳会としての啓蒙活動をおこなっております。登山部門では先に申し述べましたカンチェンジュンガ山群での初縦走のほか、東海支部を中心としたガウリサンカール峰登山をそれぞれ成功裡に終え、現在は中国のキレン山、カカサイジモンカ山での登山がつづけられております。

また行事部門では貴重な山岳関係資料の蒐集展示、百年史編纂に向けての資料整備をはかるほか、会員による絵画・写真展を催しました。また八十周年を記念したピッケルの作製販売をおこない、好評を得ております。

次に特別基金につきましては、私どもの会の運営は専ら会費によって賄われておりまして、財政的基盤はかならずしも強固とは申し難い面もあり、かねてよりまとまった資金の蓄積が叫ばれておりましたので、日本山岳会特別基金設置への足がかりとして一千万円、八十周年記念事業として一千万円、合計二千万円の募金につきまして、会員各位のご協力をお願いいたしましたところ、八月七日現在、全会員の四四・二%にあたる一七六八名の方々により総額二一、二六三、七二三円に及ぶご応募を得ることができました。厚く御礼を申しあげる次第です。

創立八十年記念の行事も中国キレン山群での登山、および富山での地域集会をもって、来る九月には一段落し、八十一年目に入るわけでございます。

先にも申し述べましたように、わが国の登山活動は技術的にもますます高度化して参るでありましょう。また登山愛好者の層もますます厚みを加えてきておりますし、諸外国の登山者との交流もさらに活発なものとなってくる趨勢にありまして、わが日本山岳会の果すべき役割も日を追って拡がってくることと思います。

しかしながら、一方ひるがえって目を転じますと、甚だ残念なことに、悲惨な遭難事故も未だ跡をたたず、われわれを苦しめております。また、われわれの愛する自然環境の破壊も眼を放せぬものがございまして、これらへの対応にもまた、われわれ日本山岳会員の役割が期待されていることと思うのであります。

このような時に創立八十周年を迎えた私どもは、全員一致協力して登山界の発展のため八十年の伝統にふさわしい山岳会として努力してまいりたいと念ずるものであります。何とぞ、ご来賓各位におかれましては、今後ともよろしくご指導のほどお願い申しあげる次第でございます。

なおこの八十周年記念事業は前期の佐々会長時代から企画され、実行されてまいったのでございまして、特に佐々保雄前会長ならびに田口二郎前副会長には大変ご苦労いただきました。この席を借り

まして感謝申しあげる次第でございます。

終りにのぞみ、本日の記念式典はじめ八十周年記念事業にご尽力たまわった会員諸兄姉に深甚な謝意を表する次第でございます。永らくのご静聴、ありがとうございました。

――英国大使館参事官、A. Millington 氏

皆さま今晩は。

本日はお招きをいただき、誠にありがとうございます。英国大使代理として日本山岳会の創立八十周年記念式典に参加できますことは、私にとって大変名誉なことです。日本人と英国人には、山を愛するという共通の趣味があります。皆さまご承知のとおり、日本山岳会はその生みの親ともいうべき英国人のウォルター・ウェストンを通じて、創設のそもそもの始めから英国山岳会と深い関係にあります。ですから、八十周年を迎えられた日本山岳会の皆さんに英国山岳会からのお祝いの言葉をお伝えできることは大変うれしいことです。

地質的に大変古い日本の美しい山に比べるなら、日本山岳会の年齢はまだ赤ちゃんに過ぎないのでしょうが、この八十年間に日本山岳会は数々の偉業をなしとげてこられました。地球上の主な山という山すべてを征服され、登山史に輝かしい業績を残してこられました。

日本山岳会は現在も活発な活動を展開され、余暇時間の伸張とともに若い人々の登山に割く時間は増え、会員も増え続ける一方です。私は、会の指導者の皆さまの献身的な活動により、日本山岳会のこれからの八十年はこれまでの八十年よりさらに輝かしいものになるであろうと確信いたしております。

八十周年、おめでとうございます。

――諸外国山岳会からの祝電

＊ イタリア山岳会とフォスコ・マライーニ氏から

50123FIRENZE 37/34 23 1545



IMANISHI ALPINE
TOKYO
(DEL TO CHIYODA-KU YONBANCHO 5-4 NIHON SANGAKUKAI)

ON HAPPY OCCASION 80TH ANNIVERSARY JAPANESE ALPINE CLUB LET ME SEND YOU AND ALL MEMBERS WARMEST CONGRATULATIONS PAST ACHIEVEMENTS AND HEARTY WISHES EVER BRILLIANT FUTURE

FOSCO MARAINI AND CLUB ALPINO ITALIANO

＊ アメリカ山岳会から

TOK

ZCZC TLB541 BDT939 DTB964 RJJ239 RMN3696 MIA0038 1-023786A233
JPTK CO URAX 133
A(04017) TDA VALDEZ ALASKA 133/124 21 1830 ADT VIA RCA



/ALPINE
/ATTN TOSHIO IMANISHI PRESIDENT JAPANESE ALPINE CLUB
/TOKYO
(DEL TO CHIYODA-KU YONBANCHO 5-4 TEL261-4433)

FROM THE AMERICAN ALPINE CLUB,
ON THE OCCASION OF THE 80TH ANNIVERSARY OF THE FOUNDING
OF THE JAPANESE ALPINE CLUB,
GREETINGS AND SALUTATIONS.
TO THE OFFICERS AND MEMBERS OF THE JAC, TO JAPANESE CLIMBERS,
AND TO PRINCESS CHICHIBU ARE EXTENDED THE STRONGEST
CONGRATULATIONS ON THIS HAPPY OCCASION.
THOUGH TO OUR GREAT REGRET THE AAC IS UNABLE TO SEND A
PERSONAL REPRESENTATIVE TO PRESENT OUR REGARDS PLEASE
ACCEPT THIS MESSAGE AS A SIGNAL OF RECOGNITION OF THE
DISTINGUISHED HISTORY OF YOUR CLUB, OF THE WELLKNOWN SKILLS
AND FREQUENT SUCCESSES OF JAPANESE CLIMBERS IN ALL AREAS,
AND OF ANTICIPATED COOPERATIONS BETWEEN CLIMBERS OF OUR
RESPECTIVE NATIONS.
ROBERT W. CRAIG, PRESIDENT
ANDREW R. EMBICK, VICEPRESIDENT
AMERICAN ALPINE CLUB

＊ シエラ・クラブから

TDRN LOS ALTOS CA 13/11 23 1024



ALPINE
TOKYO
(DEL TO CHIYODA-KU YONBANCHO 5-4 NIHON SANGAKUKAI)

CONGRATULATIONS ON 80 ANNIVERSARY
SIERRA CLUB, CLAUDE A LOOK

＊ ドイツ山岳会から

Greetings Telegram

No.	Office of Orig.	Words	Date	Time
TLB830	MUENCHEN/TF	91/88	19TH	0907

LT JAPANESE ALPINECLUB

5-4 YON-BAN-CHO CHIYODA-KU TOKYO/102

IT MEENS A GREAT HONOUR FOR THE GERMAN ALPINECLUB TO CONVEY IT'S MOST CORDIAL REGARDS AT THE OCCASION OF THE 80TH ANNIVERSARY OF THE JAPANESE ALPINECLUB. THE GERMAN ALPINECLUB ADMIRES VERY MUCH THE GREAT ALPINISTIC SUCCESSES OF THE JAPANESE MOUNTAINEERS IN THE MOUNTAINS ALL OVER THE WORLD, WE FEES VERY MUCH HONOURED TO SHARE THE ''ALPINE IDEA'' TOGETHER WITH THE FRMEST JAPANESE ALPINECLUB. CONGRATULATIONS AND BEST WISHES FOR THE FUTURE.

GERMAN ALPINECLUB (DR MAERZ)

WERNER SEDLMAIR SECRETARY

TOKYO U.O. AUG. 19. 1985 KDD JAPAN

KOKUSAI DENSHIN DENWA . CO., LTD.

＊ 韓国山岳会から

イワイ 四六 トウキヨウ 一二〇五 コ〇、四九 ヒ二〇

ニ三ヒゴゼン 配達日指定

チヨダク四バンチヨウ五ノ四」

ニホンサンガクカイ カイチヨウサマ

ソウリツハチジユウシユウネンヲシユクガシマスカンコクサンガクカイソンキヨングソク

＊ ポーランド山岳会から

WARSZAWA 42/37 17 1603 DELAYED DUE TO INSUFFICIENT ADDRESS

THE JAPANESE ALPINE CLUB 5-4 YON-BAN-CHO CHYODA-KU
TOKYO 102

TOSHIO IMANISHI CORDIAL CONGRATULATIONS ON THE OCCASION OF THE EIGHTIES ANNIVERSARY OF YOUR CLUB AND THE WISHES OF FURTHER GREAT SUCCESSES IN MOUNTAINEERING

ASSECIATION OF POLISH ALPINE CLUBS

COL



カンチェンジュンガ縦走

重廣恒夫

計画のはじまり

一九七六年ナンダ・デヴィの縦走を成功させた後、ふたたび日印合同でカンチェンジュンガの南峰、中央峰、主峰、西峰の縦走に挑みたいという夢が芽生えた。計画はゼムギャップから南峰に延びる長大な尾根を通過しての縦走か、もしくはタルンサドルから南峰南稜を登攀した後に縦走を開始するものであった。鹿野さんや伊丹君、その他大勢の方々の手によってシッキム入国の努力がされたが、色よい返事はもらえなかった。一九八一年にはネパール側から日本ヒマラヤ協会隊が、主峰―西峰の初縦走を目指して入山をしたが、両峰の登頂にとどまった。縦走の難しさを改めて認識すると同時に、一時シッキム側からのアプローチを中断して、縦走の可能性を探るとともに体験をしたいという思いが、ネパール側からの許可の取得へと移行した。

われわれの体験した、チョモランマ、さらにボゴダ後の中国領域内の山々への指向も高まりつつあったので、ナムチェバルワ等も夢みてきたけれども、現実性に乏しい目的であった。また比較的低資金で入山出来るだろうと計画をした中国側からのブロードピーク、ガッシャブルムの登山もその後完備された中国側のレギュレーションによってアルパイン・スタイルでという計画からは資金的に無理が生じ、頓挫せざるを得なかった。

カンチェンジュンガ全ピークの許可が取れそうだという伊丹君の情報を受けて、鹿野さんを中心とした、ナンダ・デヴィ、チョモランマの同志によってヤルン側からカンチェンジュンガ全山縦走の計画が発車をすることとなった。一九八三年五月には、宮下さんにお願いをして派遣母体となるカンチェンジュンガ委員会が組織された。

顧問　桜内義雄　花村仁八郎　寺尾一郎　岡村武　根岸真太郎
委員長　橋本龍太郎

事務局長　吉田宏
事務局次長　宮下秀樹
委員　田辺寿　斎藤惇生　湯浅道男　鈴木郭之　山野井武夫　浜野吉生　中島信一　神崎忠男　牧野内昭武　鹿野勝彦
事務局　三辺夏雄　長谷川良典　伊丹紹泰　前田文彦

目標となるカンチェンジュンガ南峰・中央峰・主峰・西峰の登山許可も問題なく取得が出来たが、南峰・中央峰についてはポーランド、スペイン両隊が無許可登山であったため、未登峰扱いとなり、ネパールとの合同登山という形式をとらざるを得なくなって、ネパール山岳協会より三名の隊員を参加させることとなった。

隊の目標としては、カンチェンジュンガ四峰の完全縦走の他に、種々の問題点はあったが、標高八〇〇〇㍍を越える地点からのハンググライダー飛行が多くの人々の調整、努力によって加えられた。

準備活動は、委員会事務局を中心に進められ、読売新聞、日本テレビ放送網両社の後援も決って、厳しい状況ではあったけれども、日本山岳会八十周年記念事業の一環として行なわれる「日本・ネパール　カンチェンジュンガ登山隊」が編成された。

総隊長　橋本龍太郎(46)（年齢はいずれも当時）
隊　長　鹿野勝彦(41)
チームリーダー　重廣恒夫(36)、平野隆司(36)、松沢哲郎（33／学術担当・登攀隊員兼務）
マネージャー　三辺夏雄(40)、梶　正彦(36)
登攀隊員　小原　俊(37)、寺本正史(35)、小林政志(34)、和田誠志(34)、尾崎　隆(30)、磯野剛太(29)、佐々木慶正(28)、片岡泰彦(28)、藤原一孝(23)、三谷統一郎(27)、小林春好(25)、北村貢(25)、大谷亮(24)、山本宗彦(24)、大谷直広(23)、広川健太郎(23)、アン・ツェリン(37)、ナワン・ヨンデン(31)、ニマ・テンバ(27)
ハンググライダー担当　只野直孝(38)
学術隊員　賀集　信(34／登攀隊員兼務)、丸尾祐治(39)、増山茂(35)、林田康明(28)、飯田　肇(28)
報道隊員　岩下完爾(48)、迫田泰敏(38)、中村　進(37)、三ツ橋徹肱(36)、田代啓史(33)、佐藤幸一郎(31)、木崎　徹(29)、村口徳行(27)、智片健二(25)、古野　淳(23)
リエゾンオフィサー　クリシュナ・ラナ(25)、スシル・ギミレ(25)
サーダー　ハクパ・テンジン(46)
ハイポーター二十八名、コック二名、キッチンボーイ六名、メールランナー二名
以上日本人三十九名、ネパール人四十四名、合計八十三名。

ベースキャンプまで

一九八四年一月二十五日、佐々木以下四名の第一次先発隊が成田を出発し、二月二十四日には鹿野隊長以下六名の第二次先発隊が相ついでカトマンズに向かい、船便で送った隊荷の受け取りや、ビラトナガールへの転送、キャラバンの出発準備が着々と行なわれた。

二月十九日、重廣以下十六名の本隊がカトマンズに到着。既に丸尾、ハクパ・テンジン以下の第一キャラバン隊は、ポーター約三百

人とともに、キャラバンの起点、ヒレをスタートしており、磯野、アン・ツェリン以下の第二キャラバン隊も、通関の遅れていたLPGガス、酸素等を受け取り、第一隊より三日遅れで、同じく三百人のポーターを率いて、ヒレを出発していたので、鹿野隊長とともに二十一日ビラトナガールへ向かい、二十二日ビラトナガールよりチャーター機でタプレジョンへ飛び、二十五日、第一キャラバン隊と合流した。

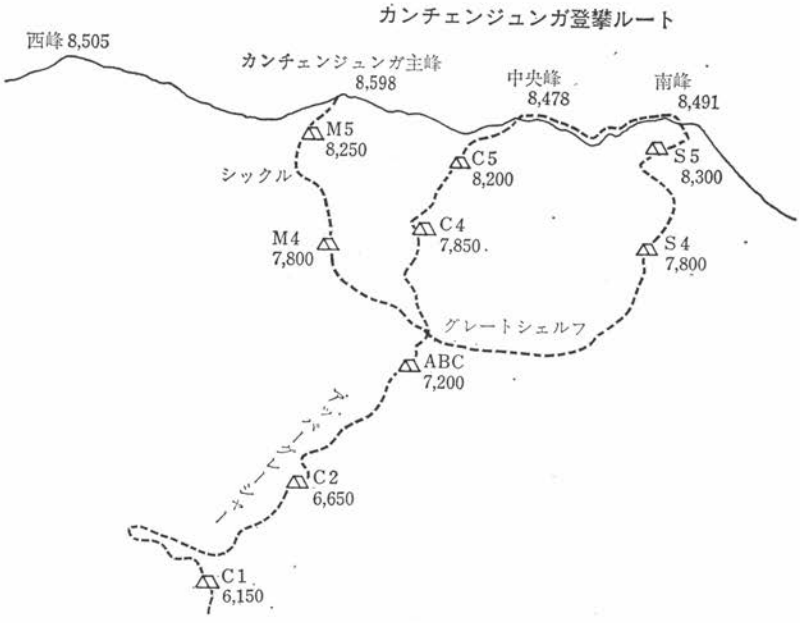
タプレジョンに四日滞在した後、カンチェンジュンガへのキャラバンを開始した。二月後半から三月前半にかけて、天候はずっと安定しており、加えて冬の積雪も少なかったので、キャラバンは順調に進んだ。最奥の村、ヤンポディンでポーターの交換に多少手間どったものの、従来の各遠征隊が雪で悩まされたラスタム・パスも難なく越え、第一隊は三月四日、ツエラムのキャンプ地から、立派な樹林帯につけられた細い道を辿り、河原を横切り、ジグザグに切られた道を登って、石積みの小屋が一軒建っているヤルンバラに到着した。さらに山腹の道を辿り、森林限界を過ぎると、ヤルン氷河の右岸のアプレーション・バレーに入る。凍った白い川の流れに沿って進むと、枯れた草原の平坦地となり、左からラプサン・ラの谷が入りラプサンに着く。小さな凍りついた池の左側を通って、張り出した尾根を回り込むと、アプレーション・バレーは大きく広がり、ラムゼーに着く。

標高四四〇〇㍍のラムゼーは、カブルー南峰やラトン・ピークの荒々しい岩峰や、六〇〇〇㍍台のいくつかの峰々に囲まれた、非常に広々とした草原である。草原の中央には石積みのガッチリした小屋が一軒建っている。春になれば、グンサ方面からヤクを追い上げてくるチベッタン達の住居となるのであろう。ラムゼーは登山初期の基地となり、その後登攀中の休息場所ともなるので、これからかなり長い間キャンプ地として使用される所である。

ラムゼーよりグレーシャー・キャンプ、コーナー・キャンプ、ベース・キャンプの偵察を終え、ベース・キャンプの場所を決定したわれわれは、三月八日、ラムゼーに下った。そこで二日間休養した後、ふたたびグレーシャー・キャンプ、コーナー・キャンプを経由して、三月十三日コーナー・キャンプよりベース・キャンプを往復した後、翌日ベース・キャンプ入りをはたした。

ルート工作

翌三月十五日、和田、三谷、重廣のパーティはC1へのルート工作に着手した。ベース・キャンプ開きのセレモニーが終るまでは、シェルパ達は登山に加わりたくないというので、信心深い彼らの意見を尊重して、しばらくは隊員だけの行動となった。ベース・キャンプに続く氷河の押し出しの急で堅い氷壁を突破し、氷河上に出てハンプ稜に向かって進む。所々にクレバスが出てくるが割れ目は大きくない。ルートはどこにでもとれそうであるが、最短距離のルートをとるべく、三段になった氷雪壁の一段目に向かって前進する。まだ時期が早いので、氷の状態は良いが、四月に入れば雪も降ってくるだろうし、あちこちにパドルが出来て、クレバスも開いてくることであろう。一一ピッチのフィックスをして一段目の雪壁へと入り行動を終了する。



三月十六日、昨日の終点よりさらにフィックスを延ばす。ベース・キャンプのラムゼーからの輸送も順調に進んでおり、上部のルートを早く開拓して次のパーティにバトンタッチをしたいと思う。第二の氷雪壁に取り付いた一〇時一五分頃、ピラタス・ポーターの爆音が聞こえてきた。しかし、いくら目をこらしても機影は見えない。二Pほど登った一〇時四五分、ふたたびピラタスが飛来し、われわれの上を旋回している。恐らくは田代カメラマンの空撮のための飛行だろうと、上からは見えないだろうが一所懸命手を振る。カトマンズから飛んで来たと思うと、久しぶりの文明の姿という感じがする。

二つ目の雪壁が終ると、ルートは突然ハンプ稜上の大きな岩のテラスに飛び出した。シッキム側はすっぽりと切れ落ちて、遠く眼下に氷河が見える。古いスノーバーが残っており、ルートはこの肩より稜線の下をトラバースするようにして、第三の氷壁に向かっていく。

氷壁は急になり、不安定なクレバスを持った場所に出た。和田が懸命にアイスハンマーをふるい直上する。しばらくトラバースした後、ルート途中の首のようになった部分、細いクーロワールに入る。傾斜が急で雪崩そうだが、左の岩にハーケンを打って安心する。今後は左側がすっぽりと切れ落ちているので、ルートはどうしても右斜上をするようになる、本日のルート工作はここまでである。若干の登攀用具をデポしてベース・キャンプに下る。

三月十七日、取付き八時三〇分出発、一一時、昨日の最高到達点に着く。三谷が急な氷壁を一歩一歩トラバースする。時折ヒマラヤ

の静寂な空気をひきさくようにルートのやりとりをする和田と三谷の声が交差する。前方はるか彼方、懸垂氷河上に赤いザイルがたれ下っており、上部へのルートが近いことを知らせてくれる。一ピッチほどトラバースすると、急な氷壁を直上するようになる。不安定な氷はアイゼンの爪がささりにくく、何度かスリップしそうになる。二ピッチほど直上すると傾斜の緩くなった雪壁上へ出た。この頃から視界が悪くなり、ルートが良く見えないが、行けるだけ行こうと前進する。しばらくすると雪稜もほぼ平らとなり、安定した場所に出たので、ここら辺りがC1になるだろうと予測して、天気の変り始めたルートを下降する。

ベース・キャンプ開き

三月十八日は鹿野隊長も到着して、待ちに待ったベース・キャンプ開きである。半日かけてセレモニーを行ない、登山の安全を祈願する。

一日おいた三月二十日、和田、三谷、重廣の三名はシェルパとともに、六一五〇㍍地点にC1を建設した。一二時の交信で後発隊の平野、只野パーティが昨日ツェラムに入り、本日ラムゼーを往復する無線連絡を傍受する。

三月二十一日、C1からC2へのルート工作に出発する。C1のテント地はクレバスの縁にあり、細長いが注意さえすれば安定した快適な場所である。テントサイトから、ハンプ稜をクレバスに沿っていったんタルン側に下り、小さなクレバスを越えて雪稜に取り付く。細い雪稜であるが、安定しているのでトラバースをしたり、頂稜を辿ったりしてスムーズにルートが延びる。しばらくすると、ハンプ稜のコルに出たので付近を偵察する。HAJのルートはさらに上部らしいが、われわれは途中小さなクレバスを越えて、一ピッチほどアップザイレンをした後、左手の岩壁基部に沿ってトラバースする。二〇〇㍍ほどでトラバースは終り、アッパーグレーシャーへと降り立つ。HAJのルートを見上げるが、非常に悪そうなルートなので、彼らの荷上げの苦労がしのばれる。氷河の状態が違っているのか、稜線の雪のコンディションが違ったのかもしれない。

三月二十二日、アッパーグレーシャーの広い台地をトラバースして、グレートシェリフに続く大雪壁に取り付く。

三月二十三日、二回のルート工作でもルートがあまり延びないので、和田、三谷が空身で先行をする。途中でデポを回収した二人は順調にルートを延ばし、一三時、六五〇〇㍍付近の横に走る大きなクレバスの縁に達した。何張かのテントが張れそうなので、ここをC2と定めC1に戻った。

一日休養をした後、三月二十五日には、C2を建設し、キャンプ入りをした。C1建設、C2建設と同じメンバーなので、疲れもひどいが、C3までのルートを開くとラムゼーに下り休養出来るとあって皆頑張っている。

二十六日にはキャンプ・サイトから右斜上して大雪壁の右端に出た。強風で一日C2で停滞を余儀なくされた後、二十八日にはグレートシェリフの一角の懸垂氷河の氷壁を横切って、さらにルートを延ばし、二十九日にはABC（C3）を七二〇〇㍍の地点に決定して三十日ベース・キャンプに下った。しかしこの頃にはいままでの

遠征ではあまり経験しなかった、寒気によるのか空気の乾燥のためか、のどをやられる隊員とシェルパが続出した。隊員は三パーティがなんとか動けたのみで、隊員の順化の遅れと頑張り不足が、前途多難を思わせた。和田、三谷、重廣はさらにラムゼーに下り、重廣はさらにツェラムに下り、ヘリコプターで入山された橋本龍太郎総指揮に経過を報告した。つづいて賀集、佐々木のパーティ、松沢パーティがラムゼーに下って来て休養をとった。

ラムゼーには五日間滞在したが、枯れた大地に緑が芽ぶき始め、入山時の凍てついた川は流れとなって音をたてていた。久しぶりに体を洗ったり、洗濯をしたり、のどかな日々を過ごすことが出来た。夕食の食卓にはヤクの肉があがり、差し入れのウイスキーとともに今後の活力源として蓄積されるようであった。

四月十日、入山以来はじめての激しい降雪があり、雪崩の危険のため、C2に滞在中のメンバーはいったんC1へ下った。前日休養あけでC1に入りなおした重廣たちも、足止めされた形となり、C3の建設は四月十三日となった。

翌十四日から、上部でのルート工作が開始された。南峰ルートは、ほぼ南北に延びるグレートシェリフの大雪原を南に辿り、南峰西壁の標高差一〇〇〇㍍の壁にジグザグにつらなる雪田部をつなぐように頂上へ迫るもので、一九七八年のポーランド隊の初登ルートとほぼ同じルートを辿った。重廣、和田、三谷、ニマ・テンバを中心とする南峰隊は、四月十八日まで連日ルート工作をつづけ、S4予定地である標高七八〇〇㍍付近までフィックスをのばして、いったんベース・キャンプへ休養に下った。

一方、中央峰―主峰間のルンゼにルートをとる中央峰隊は、十五日からルート工作を開始した。賀集、佐々木、片岡、大谷直、ナワン・ヨンデンらは、同じく十八日までに、C4予定地である七八五〇㍍付近までのルート工作を終了した。

主峰ルートのルート工作は、南峰、中央峰ルートからやや遅れて、四月二十日から開始された。ルートは、主峰―西峰のコルへ「シックル」と呼ばれる岩の上の、通称「ギャングウェイ」の雪面をたどる。一九五五年のイギリス隊の初登ルートである。M4予定地はこのシックル（鎌）の柄の直下にあたる、標高七八〇〇㍍地点だが、グレートシェリフからここまでは、どこにルートをとっても問題なさそうに見える。そこで、フィックス・ロープを節約するため、はじめ中央峰ルートを七七〇〇㍍付近まで辿り、左へトラバースするルートを試みた。しかし実際には、このトラバース部分で、落石がはげしく、荷上げルートとしては危険なため、結局グレートシェリフからシックルの柄を目指して、直上するルートに変更された。松沢、寺本、平野、磯野、大谷亮、北村、山本、アン・ツェリンらの主峰隊は、四月二十日すぎの悪天期間をはさんで、ルート工作を続け、二十五日にはM4予定地に到達した。

天候は四月中旬に入って、ようやく春らしい周期的な変化を明確に示すようになってきた。三月末より、ファクシミリによって天候の予測を行なっていたが、そこにも気圧の谷と峰とがはっきりあらわれるようになり、隊員の側も、実際の天候と天気図の関係をある程度まで把握出来るようになっていた。全体としては、相変らず天候は良く、四月二十二日から二十三日にかけての降雪で、ほぼ全キ

ャンプが停滞したが、これは入山以来、二度目のことだった。

二十六日から各ルートにより第四キャンプへの荷上げが開始された。標高七二〇〇㍍から七八〇〇㍍～七八五〇㍍へのこの荷上げは、酸素を使用しないだけに、あるいは最も苦しい部分であったかもしれない。ハイポーターも、C3（ABC）以上で確実に動ける者は、約半数にしぼられ、隊員の中には、第四キャンプに到達出来ず、途中でデポして引き返す者が少なくなかった。

S4キャンプの建設

四月二十九日、まずS4が、南峰ルートの標高七八〇〇㍍地点に建設された。このルートは技術的に最も困難で、頂上までのルート工作に時間がかかることが予想されていた。従来からの南峰隊のメンバーに、山本、ダワ・ノルブらを主なサポート要員として加えた南峰隊は、三十日からルート工作を開始し、五月七日、このルートの最難関部である標高八二〇〇㍍付近の岩壁帯を突破して、上部雪田に達した。これでS5の予定地までのルートが確保されるとともに、南峰までの見通しもほぼついたといってよい。

C4は、S4から二日遅れの五月一日に建設された。パサン・ツェリン、インドレらのサポートを受けた中央峰隊は比較的順調にルートをのばし、五月四日には中央峰・主峰のコル直下にあたる、標高八二〇〇㍍付近のC5予定地まで到達した。M4は、S4からさらに遅れて、五月五日にようやく建設された。主峰ルートの荷上げの主力となるハイポーターが、ハングライダーのサポート要員を兼ねており、最終フライトに備えて、ベース・キャンプからハングライダー機材の荷上げにあたっていたためである。しかしルート工作は順調に進み、五月七日には、松沢、磯野、大谷亮によって、主峰―西峰のコル直下、標高八二五〇㍍のM5予定地まで、フィックス・ロープが張られた。

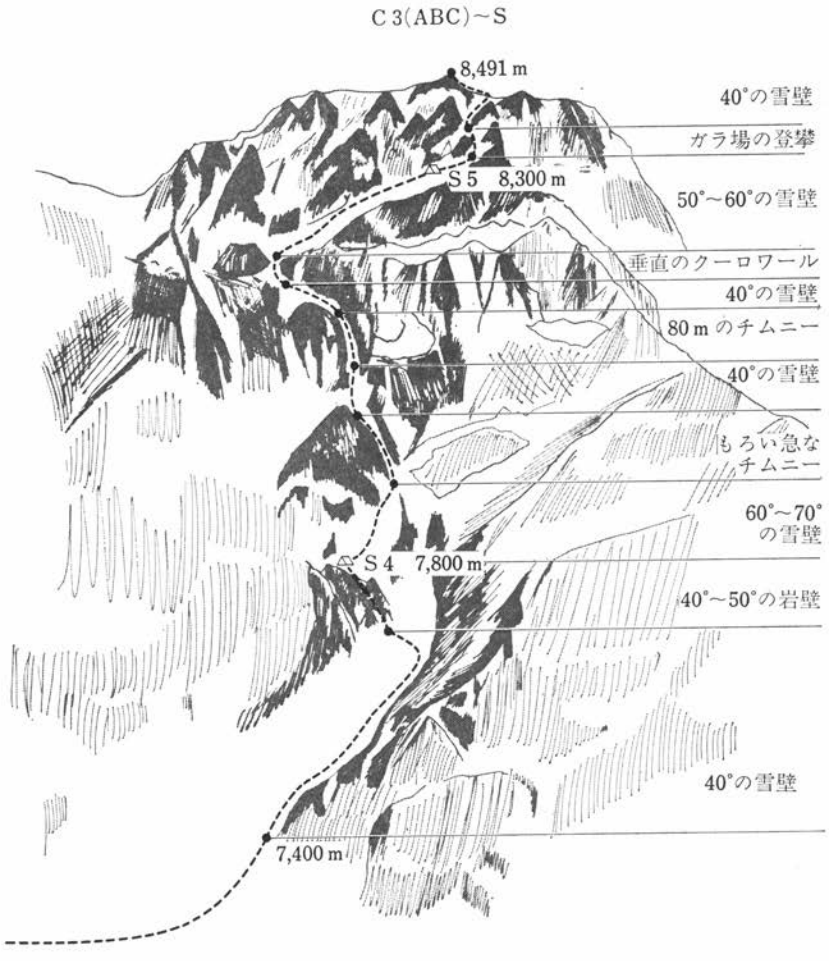
四月下旬から安定していた天候は、五月八日から悪化しはじめた。そして九日、隊員、ハイポーター計七名が滞在中のC2が表層雪崩におそわれ、テントはすべて埋没した。幸いにも、メンバーはすぐに脱出し、無事であったが、以後C2は原則としてデポ地点としてのみ使用し、荷上げはC3から逆ボッカで行なうこととなった。

ハンググライダーの飛行

十一日、ようやく天候が回復し、ハンググライダーのフライヤーである只野隊員は、サポートの寺本、北村、アン・ツェリン、中村らとともに、M4へ入った。当初、標高八〇〇〇㍍をこえる地点からの飛行が目標であったが、ハンググライダーの荷上げ、組立て、スタート位置の条件、残された日数や今後の天候等を考えあわせると、M4地点からの飛行が限界であると思われた。

五月十二日朝、最近ではまれにみる無風快晴の条件下で、只野隊員は主峰のC4直下、標高七八〇〇㍍の地点からスキーを使用してスタートし、約一九分のフライトで、ベース・キャンプの下、標高五一〇〇㍍のヤルン氷河上に無事ランディングして、ハンググライダー飛行の高度記録を達成した。

ハンググライダー計画の完了によって隊の全力を縦走に集中出来る態勢が整った。既に登攀活動を開始してほぼ二カ月が経過してお


C 3(ABC)～S
8,491 m
40°の雪壁
ガラ場の登攀
S 5　8,300 m
50°～60°の雪壁
垂直のクーロワール
40°の雪壁
80 m のチムニー
40°の雪壁
もろい急な
チムニー
60°～70°
の雪壁
S 4　7,800 m
40°～50°の岩壁
40°の雪壁
7,400 m

り、メンバーの疲労もかなり蓄積されてきている。モンスーンの到来ももうすぐのようで、谷を埋めて押しよせてくる雲が、しだいに高度を増してきた。縦走計画は既に和田、三谷、重廣の三名を実行隊として発表してあり、それに南峰のみの登頂を目的として、ニマ・テンバが同行することになっていた。

四月二十六日にC3以上に滞在していた重廣と、五月七日C3よりC1へ休養に降りていた和田、三谷はこの日ABCに集結をした。翌日和田、三谷はS4への荷上げを行なった。食糧や燃料の残量から計算しても、もう多人数がABCで生活をする能力はなかった。五月十四日、中央峰隊の賀集、佐々木がC4からC5へ向かう途中表層雪崩にあった。最初からこのルートを担当していたこのパーティは疲労の色が濃いこともあって、和田、三谷達とC1より登ってきた磯野、大谷亮に交代をさせるべく、最後のチャンスとして、ルート工作よりも頂上をうかがわせたのであるが、思わぬアクシデントで戦列を離れることになってしまった。やむなく主峰へ行くことになっていた寺本、北村を中央峰隊のサポートとして補強をする。五月十五日、ABCを後にし、S4へと三名のシェルパとともに移動をする。

グレートシェリフの長大な雪の台地も、もう二度と通ることがないと思うと、クレバスの一つ一つが、そしてフィックス・ロープのワンピッチ、ワンピッチが思い出深いものばかりである。五月十六日、中央峰のC5がようやく建設され、磯野、大谷亮、ナワン・ヨンデンの三名がシェルパ二名のサポートをうけて入った。

縦走隊のほうは隊員、シェルパ全員がS5の場所を決定するとともに荷上げを行なった。残照の中をS4に下り、二張のテントに隊員、シェルパと入った。五月十七日、中央峰の三名は、縦走隊の中央峰からの下降路を確保すること、南峰から主峰へのルートを中央峰側から詳細に偵察すること、そして中央峰と主峰とのコルに登路を見つけることを目的とし、中央峰を目指してC5をスタートした。C5より八ピッチ、フィックス・ロープを固定し、三時四〇分、中央峰の最高点に立った。

同じ日、重廣、和田、三谷、ニマ・テンバの四名は、シェルパ三名のサポートを受けてS5を南峰上部雪田の八三〇〇㍍地点に設けた。無線の連絡で、中央峰にたった磯野隊員から、南峰、主峰につらなる稜線について詳細な報告を聞く。

四峰縦走の始まり

いずれにしても明日からは天気が良かろうと悪かろうと、われわれの最終目標である四峰縦走が始まるのである。既にアタック日は最初の目標から大幅に延びて、ベース・キャンプでは食糧も底をついていた。ただABC以上では、縦走を成功させるために、C1で指揮をとっている鹿野隊長の計らいで、充分にないにしても、何種類かのメニューを楽しむことが出来た。

五月十八日、シューと鳴るガスコンロの音で目がさめた。三谷とニマ・テンバが早起きして水を作っている最中であった。縦走へのスタートが目前に迫っていた。みな、思い思いに出発の用意を始める。昨夜のうちに凍りついてしまったビデオ・カメラをガスコンロの炎に注意深くかざして、南峰の頂上で動くようにと祈る。シュル

ンドの中にあるこのS5には、まだ朝日はさしてこないが、天気はよさそうであった。

六時すぎ、ニマ・テンバ、和田が大きくふくらんだザックを背に南峰へ向かって出発した。忘れ物はないかとテントの中を見まわして外に出る。頬にあたる冷気に、いよいよ縦走だという緊張感に包まれる。

六時三〇分、重廣、三谷の順にS5を後にし、先行パーティを追う。まだ太陽の恩恵を受けない稜線は非常に寒く、フィックス・ロープを辿りながら、何度か立ち止まって手袋をこすり合わせた。ルートは雪壁を斜上し、岩とのミックス帯を直上する。最後の不安定なガラ場を通り越してフィックス・ロープは終り、一枚岩の上を飛び越えて雪稜に入る。降雪がほとんどないのか、大きなザラメ状となった不安定な雪に足をとられながら、稜線に飛び出す。南に向かって小さな雪のコブを越えた先に、朝日に照らされた和田、ニマ・テンバを見つけた。雪面に残されたアイゼンの爪跡を辿って二人の待つ南峰の頂上に着いた。お互いの肩をたたき合って、握手をかわすが、特別な感慨はわいてこない。いま出発点に立ったにすぎないからかもしれない。かたちどおり、ネパール国旗、日の丸、山岳会旗を持ってかわるがわる写真を撮る。ビデオカメラを取り出し、スイッチを入れ、ファインダーをのぞく。主峰が、西峰が、そしてジャヌー、チャムランやマカルー、雲海に隠れて見えないシッキム側と三百六十度のパノラマを撮影する。いちおうのセレモニーが終ったので、ニマ・テンバが南峰頂上をあとにする。

いよいよ三人だけの世界である。アンザイレンをした後、改めて、中央峰、主峰へのルートを目で追う。南峰の頂上から、雪庇のでた水平な雪稜がつづき、中央峰は見えず、大きな岩山の主峰とそれにつづく西峰の頭が見えるのみであった。

比較的安定した雪稜を北壁側の雪庇に注意しつつ、速い足取りで歩く。しばらくすると、ルートは南側の斜面を辿るようになり、強い風を真横から受けるようになってしまった。途中でスタカットに切り換え、コルへ向かう岩稜に達した。ここで重廣の酸素が完全になくなってしまった。酸素がなくなったのは前回のチョモランマ北壁でも経験があるし、一日くらいはなんとかなるだろうと思った。しかし、酸素マスクをはずした顔に、もろに寒気が突き刺さり、たちまち鉄仮面のように凍りついてしまった。

岩稜はもう歩いては下れないので、ハーケンを打ちアップザイレンをする。そしてザイルを回収。次のピッチは岩稜がさらに急になり、ホールドやスタンスも少ないので、中央峰に登れないことも考えて、五〇㍍ザイルを残置し、一一時、コルに下り立った。トランシーバーのスイッチを入れ、鹿野隊長を呼び出す。

「五〇㍍のアップザイレンで、南峰と中央峰とのコルに到着しました。風がたいへん強く、気温もマイナス二十三度。私はすでに一時間前に酸素が切れました。もう南峰へ引き返すことは出来ません。中央峰のC5に向かって前進するのみです」

交信中に和田、三谷は、中央峰めざして出発して行った。中央峰の一番東のピークの下で、三谷がアリ地獄に落ちた虫のように、岩になじんでいないザラメ雪の上をはいずり回っていた。振り返ればいま通ってきた、南峰に続く岩稜が絶望的に高くそびえ、引き返す

ことを拒否しているようであった。

中央峰へ

最終的に最初一番難しいと思っていた七〇度くらいの傾斜の岩壁にルートをとることにする。和田が酸素マスクをはずして、空身となり岩壁に取付く。ピッケルで雪を落し、ハーケンを打ち、アイゼンをガリガリいわせて前進する。少しずつ三谷の手元からザイルが延びていく。一五㍍ほどの凹状の岩壁を登った後、左へ氷のスラブを斜上して、さらに不安定な雪壁を直上してビレイをとる。八四〇〇㍍付近での岩登りは、重荷を背負っているため、なおのこと呼吸が苦しい。一歩登っては、手袋で顔をおおい、強い風の中でやっと自分の吸える空気を探しあて、深呼吸を繰り返した。雪壁から雪稜へ、そしてふたたび不安定な雪壁となり、何度かヒヤッとする場面はあったが、無事中央峰へ続く稜線に飛び出した。彼方には中央峰が見える。そして頂上には、サポート隊の取り付けた赤旗が見えた。三ピッチほどで、夕陽に照らされた中央峰の頂上に到着した。一六時三〇分であった。夕暮れのせまった中央峰の頂上は寒く、幾重にも保護した足先が痛み出し、衣類のファスナー部分から寒気がしのび込んでくる。撮影もそこそこに中央峰の頂上をあとにした。

頂上からの下降路は、サポート隊の残置した赤布と、フィックス・ロープに助けられて疲労困憊した私たちも安全確実に下ることができる。前日、磯野パーティが中央峰の頂上に到達して、不満をもらす隊員もいた。なぜなら彼らの第一目的は、最後まで未知の部分として残った、主峰と中央峰のコルに到達し、さらに余裕があれば主峰へ向かってルートを見つけることにあったからである。しかし私は、ひょっとしてこれが私たちを助けることになるかもしれないと思った。いまそれが現実になったのである。中央峰のルートは意外と複雑で、昼間ならいざ知らず太陽も西の彼方に没し、疲れ果てた私たちにとって、唯一の道しるべとなったからである。

トランシーバーでこの日、主峰隊は八二五〇㍍にM5を建設し、尾崎隆、アン・ツェリンが八四〇〇㍍付近までフィックス・ロープの工作をしたことを知る。明日は穏やかな天気になりそうだし、主峰への縦走もできるのではないかと思った。狭いテントのなかで北村が手際よく、食べ物を作ってくれる。和田、三谷の食欲は旺盛のようだ。夜も更けてきたので、明朝の五時に最終判断をすることにして、トランシーバーの交信を打ち切り、それぞれが眠りにつく。短い眠りであったが、恐らくは〝ドロ〟のように寝たに違いない。

時計を見るともう五時前である。今後の行動についていろいろなことが胸をよぎる。私のいまの状態では、続けて行動することは無理だろうし、ルートも考えれば考えるほど迷ってしまう。登攀装備も、アンザイレン用のロープは七㍉しかないのをはじめ、充分ではなかった。あれこれ考えるうちについに五時となり、鹿野隊長との交信が始まった。

「縦走隊を、寺本、和田、三谷に変更します」「ルートについては昨日寺本より提案のあった、第五キャンプより少し下った地点から雪壁をトラバースした後、直接主峰に出るルートにします」「重廣、北村はサポート、撤収要員として第五キャンプに残ります」

種々のやりとりがあった後、あわただしく出発の準備が行なわれ



7800 m 付近よりＳ４を見おろす．奥にクンバカルナ（ジャヌー）

た。

縦走隊の和田から、現在のルートは困難で、行程も遅々としてはかどらず直接主峰のM5に入りたい旨の申し入れがあった。また下から見守る鹿野隊長や平野から、下から見る限りではたとえクーロワールに入ることができても、上部は非常に傾斜のきつい岩壁となり、現状での登攀は不可能であろうとの進言があった。今日の主峰周辺は風もなく穏やかな天気で、絶好の登攀日和であった。昨日、強風のなかをついて縦走を開始したのは、苦しくはあったが正解だといえた。だがしかし、現況はそれぞれの場所で、それぞれの人々が今後の行動を苦慮していた。

いくつかの選択の道があった。たとえ失敗しても予定どおりのルートをとる。登攀を断念、ABCに下る。現在の場所からやさしいルートをトラバースして主峰のM5に至り、明日主峰に登る。縦走隊の各隊員、鹿野隊長や平野と何度かの交信をした後、私は縦走隊員にとっては苛酷であるかもしれないが、最も確実だと思われるルートを探ることにした。

すなわち縦走隊は現在の場所から中央峰のC4に下り、そこから主峰のM4にトラバースをして、ふたたび主峰のM5に登るコースである。何度かの激しいやりとりがあったが、結局この案で全員が動くことになった。この日主峰の頂上には尾崎、アン・ツェリンの二人が縦走隊のサポートのため待機をしていたが、予定の変更を告げABCに下ってもらう。代って松沢、山本と一人のシェルパがサポートのため、M4からM5に向かいつつあった。

翌五月二十日、モンスーンに突入していても不思議ではないのにこの好天はなんなのだろう。八時二〇分から四〇分にかけてそれぞれ出発した和田、三谷は昨日のサポート隊のフィックス・ロープを辿りながら一二時一五分、主峰の頂上に立った。頂上から和田の「なんとか主峰に登ることができたのは皆さんのおかげです。それを体で感じています」という喜びの声が伝わってきた。C1上のビュー・ポイントで、連日双眼鏡片手に縦走隊を見守り、ルート指示をしてきた鹿野隊長も「すばらしい日だと思います。三日間、よく頑張ってくれました。変則的にではあれ、三峰を縦走したことは、登山隊皆の力でできたのだと思います」と喜びの声が伝わってきた。

おわりに

ヒマラヤ登山の潮流は、いまや無酸素、少人数、シェルパを使わず軽量・速攻で登るアルパイン・スタイルである。カンチェンジュンガ縦走計画はその流れに逆らう物量登山であった。しかし、四座の縦走をねらうのは私たちが初めてである。情報の少ない初めての試みは、不意におとずれるアクシデントに対応するために、人、酸素、フィックス・ロープなど、多くの物量を要求された。

今回の縦走登山では、三十七人のメンバーがBC以上で行動した。単に頂上をねらうだけなら、アタックの際も、特にサポートを必要としない。しかし、今回の場合、南峰隊、中央峰隊、主峰隊、ハンググライダー隊の四つに隊が分散し、特に荷上げ管理が大きな問題となったので、変則的ではあるが、鹿野隊長がC1でこの任にあたり、ABC以上のタクティクスの立案実施については重廣、平

野があたった。

本来なら、ABCから南峰、中央峰を経て主峰登頂、帰路を西峰を経由してABCへというのが理想のパターンであるが、初めての挑戦でそこまでは無理だと思われたので、縦走隊員の安全と縦走の確実性を増すためにサポート隊をそれぞれの峰に配したのである。サポート隊の任務は、縦走隊に情報を提供し、頂上から無事にC5まで下山できるように配慮することであった。ルート工作と偵察が主任務だったサポート隊も、それぞれの仕事を終えた後、中央峰には磯野、大谷、ナワン・ヨンデンが立ち、主峰には尾崎、アン・ツェリンが登頂した。結果的には、三つの八〇〇〇㍍峰に同時に登山隊を出したのと同じことになり、これが縦走を可能にする原動力となった。

BCを五五〇〇㍍地点に建設したのは、まだ冬の風が冷たい三月十四日であった。そして登山活動を終え、BCを撤収した五月二十六日は、強い日ざしにうだるような暑さであった。登山活動だけで、えんえん七三日間。この間、七二〇〇㍍のABC以上に荷上げした荷物が約二・二㌧。活動したシェルパ二十人、ネパール側隊員三人、そして三十七人の日本人隊員であった。

ピークハントの行なわれた時代のヒマラヤ登山から、無酸素単独登山までヒマラヤの登り方は著しい変化をしてきた。アルパイン・スタイルでなければ価値のないように言う人もいるし、事実登山界はその方向に向かいつつある。

しかし、ヒマラヤ登山の潮流は、多くの人々が、〝自己〟の体験を積み重ねて作り上げていくものだ。その意味では、最先端で活躍する人はいても、あくまでその人個人の長い体験の結果であって、たやすく他人がマネはできないものである。現在すでにヒマラヤ登山は成熟し、個人の好みで自由な登り方ができる時代になっていると言っても過言ではないだろう。資金、物量の面はさておいて、縦走登山もそのひとつである。そして、今回の体験から、いずれ軽量で四峰縦走する人々も近い将来出てくるであろう。



日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊一九八四年

大野紀和

日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊は今回で四年目を迎え、東海支部が主管となり計画を押し進めた。

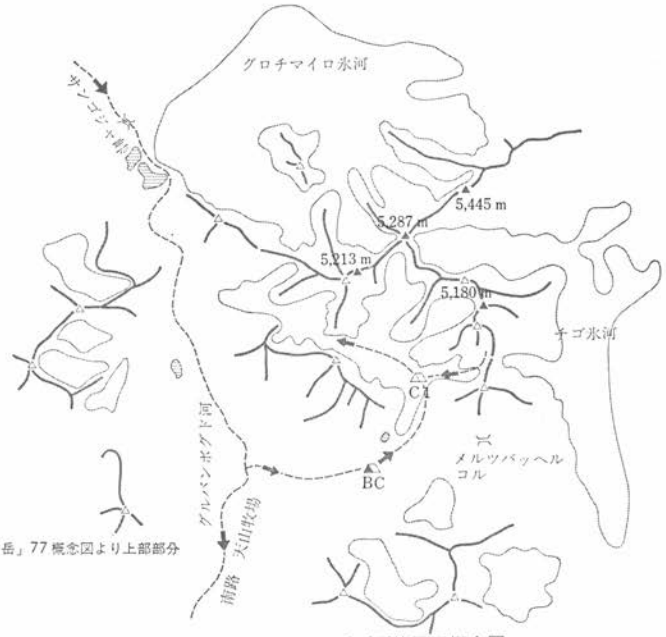
一九八一年には主峰（五四四五㍍）北東稜の登頂と第二の高峰の偵察及び試登。一九八二年には第二の高峰（五三六二㍍）の登頂に成功した。一九八三年は関西隊がチゴ氷河より主峰に挑戦したが途中で断念した。

今回はボゴダ西峰・中央峰・五一八〇㍍峰の三峰をスッド氷河側より攻略することになった。過去三回のボゴダ峰登山の報告では、チゴ氷河側の天候が悪いことと、チゴ氷河に入るのに日数が多くかかることなどを考え、スッド氷河側に入ることにした。登頂時期を八月初旬にすれば好天日がしばらく続くのではないかとの期待があった。隊員は広く東海地区学生を対象に募ったが、第四次ボゴダ隊は社会人五名と学生は東京地区三名を含む八名で構成された。

七月二十日、ウルムチ着。翌日新疆登山協会に発送してある隊荷と残留荷物の整理と食糧の買い出しを行なう（編註：第一回隊より幕営具、炊事具等をウルムチにデポしてある）。登山協会の連絡官とキャラバン・ルートについて話し合うが、今夏は天候が不順で最初予定していた将軍沟は増水により入域が困難であるとのことで、一つ北側の大東沟から三个岔峠を経て、グルバンボグド谷に入ることになった。隊荷についてはボゴダ峰南路を使用し、ラクダによってベース・キャンプまで運ばれることになった。

ウルムチから天池まではマイクロバスで入り、天池を舟で渡り、対岸のパオで一泊する。

翌日は森林地帯に入り、数カ所徒渉する。森林限界を通り抜けると、牧草地帯に入る。折からの雪で一面白くなっており、小馬が放されて群をなしている。三二〇〇㍍地点で幕営するが、夜半より雷と霰が降り、あとから雪に変り、積雪一〇㌢程度になった。翌日は三个岔峠に向かうが積雪が多くなり、馬も牛も脚が雪に埋まり、歩



「山岳」77 概念図より上部部分

ボゴダ峰周辺概念図

行困難となり、荷物を置いて下って行ってしまったため、隊員がボッカをする。

わが隊はグラチマイロ氷河の氷河湖とモレーンを巻くようにグルバンボグド川に沿い下降する。右側にあるショカルスキイ峰上部では雪崩が起き、不気味な音が谷に響きわたる。スッド氷河から流れてくる川との出合まで下ってくると、南の天山牧場の羊や山羊の群が草をはんでいる。ウスユキソウやそのほか黄色の花をつけた高山植物が短い夏に咲きほこっており、岩の間には天山山脈の名花、大きな黄色の花をつけた雪蓮が点在して目を楽しませてくれる。

ベース・キャンプ（三五〇〇㍍）は草地の上、スッド氷河のモレーン上につくった。

スッド氷河舌端部沿いのモレーンをたどってゆくと氷河が平坦になる。およそ四〇〇〇㍍地点である。はじめに西峰から時計まわりの縦走を試みるため西峰へのルートを見出そうと思うが、いくつもの岩峰が続き、しかも連日の降雪で表層雪崩が起きている。ロングルートでもあり、現時点では西峰への登攀不能と結論する。スッド氷河の最奥部から中央峰へ突き上げるルートも、日射による氷河氷の融解が午後に発生し、表面流水に伴い、小ブロック崩壊が随所に起きている。

七月三十一日、中央峰を尾根ぞいに目指し五一八〇㍍峰を経て頂上に出るルートに決める。C_1を三九五〇㍍のスッド氷河のモレーン上に、C_2予定地は五一八〇㍍峰の肩あるいは中央峰寄りに作る計画である。八月一日、C_1を設営した後、五一八〇㍍峰の第一ルンゼをつめ、右側岩峰基部に取りつく。ここでルンゼが二つに分岐する

が、左側ルンゼの氷壁を抜ける。上部は雪田と岩峰の混じったルートで、右、左と蛇行しながらコルに出る。コルより南稜をたどり、岩峰壁をスッド氷河側にまわり、雪田に出る。ここに登攀具、テント等をデポする。翌二日は天候が悪くC1にて停滞する。

八月四日、一昨日の最終地点より上部の五一八〇㍍峰の肩に着く。風が強く、降った雪が吹き上げてくる。

八月五日、スッド氷河から雲が湧き、風も強く昨日と同様な天候である。昨日入山した仙台一高山の会隊よりクレームがつく。交渉の結果、一部フィックス・ロープを残置したまま、登攀用具・食糧を隊員とともにC1に降ろすことになる(注:仙台一高隊は五一八〇㍍峰を目指していた。JAC隊は西峰からの縦走を目指した)。

中国登山協会の議定書見解

協会側としては、仙台一高山の会隊の南稜より五一八〇㍍峰の登攀活動と衝突しないようにとのこと、両隊とも議定書通り行動するようにとのことであった。つまり両隊で話合いで解決することであり、どちらの隊にも未踏峰への優先権があるわけでないということである。わが隊が登攀を中止したことに対して、連絡官の胡氏は、なぜ全員を降ろしたのか、私も登るから全員いままでのルートを登ろうとの強い発言もでた。彼は中日合同ナムナニ峰隊の中国側隊員でもあり、新疆登山協会の若手の実力者である。

ボゴダ縦走

八月七日、C1では昨夜は風が強く四人用テントのポールが折れ、中央峰よりスッド氷河に数カ所雪崩が起き、不気味な音が氷河に響きわたっていた。隊員三名と胡連絡官の四名で中央峰と五一八〇㍍峰の中間に続く長い尾根の岩壁を偵察するが、岩壁がもろくて直立しており、たとえそこが登れたとしても、下降が難しいと判断して断念する。翌日、ふたたび西峰へのルートを試みる。最低コルを目指して進む。氷河の横断はクレバスが危険だ。

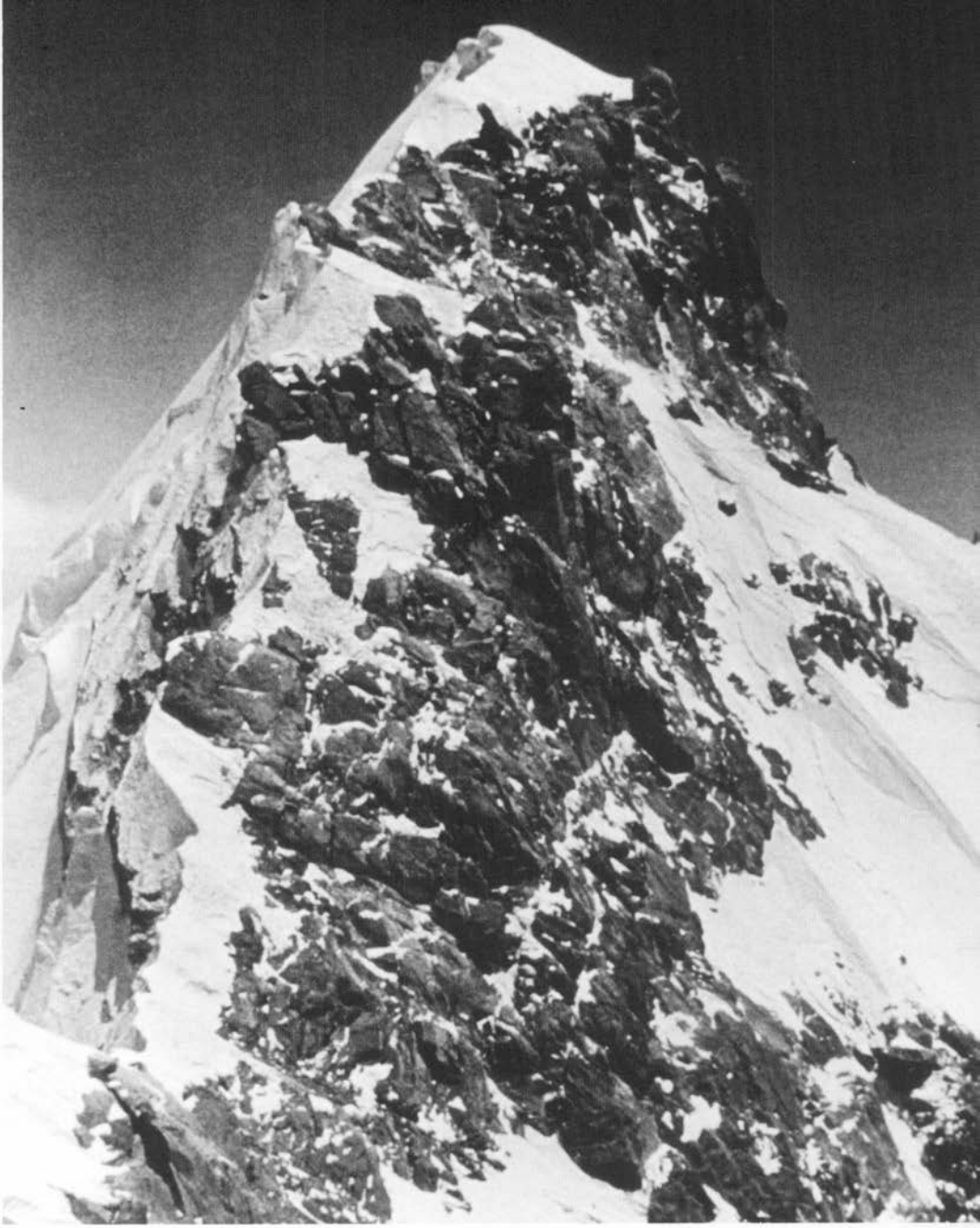
コルの直下で、直接コルに向かうものと、急な雪壁を登るものとの二隊に分かれ、それぞれコルに着く。コルからルンゼ内の広い雪壁にロープをフィックスして支稜線に出る。岩峰を右に半周してトラバース。次のルンゼの雪壁へと進む。岩場が少なく、ザイルを延ばすことは出来ても、ビレイ点はリスが少ない上に岩が脆くハーケン一本打つのにも苦労する。そこから五〇㍍ほどで稜線に飛び出る、高度は四七五〇㍍である。

八月九日、十名で縦走したい意向が固まる。六人用テント一張、ツエルト二張、三泊四日分の食糧と装備をもちC1を出発、昨日の最低コルにて野営、十日、中沼、興津、北川の三名でルート工作のため先発する。昨日の最高到達点で全員合流する。吊り尾根からまっすぐ上に突きあげる雪壁へと順調にザイルが延びる。雪壁は斜度を増し、最後の氷のつまったクラックになる。雪の終了点でやっとハーケンを打ち、氷と岩のミックスした足場の悪いところをトラバースする。二〇㍍ほど進んだところで、色褪せてはいるが残置シュリンゲをみつける。ハーケンを点検して新しいシュリンゲをかける。右側に回り込んで下降するが、そのあと岩場となり、四〇㍍いっぱいで雪の稜線に出る。右に回り込むように高度を上げる。この地点に残置シュリンゲ一本発見する。頭上にも張り出した雪庇があり、



カンチ山域の飛行に成功した只野隊員。スタート地点7850mはハンググライダーでの世界の高度記録。

Tadano made a succesful flight among Kanchenjunga Area, starting at 7850m, it's a world highest record. *Photo by Yasuaki Hayashida*



カンチェンジュンガ　中央峰取付より南峰を望む。
Looking back South Summit along the summit ridge below Central Summit. *Photo by Tsuneo Shigehiro*



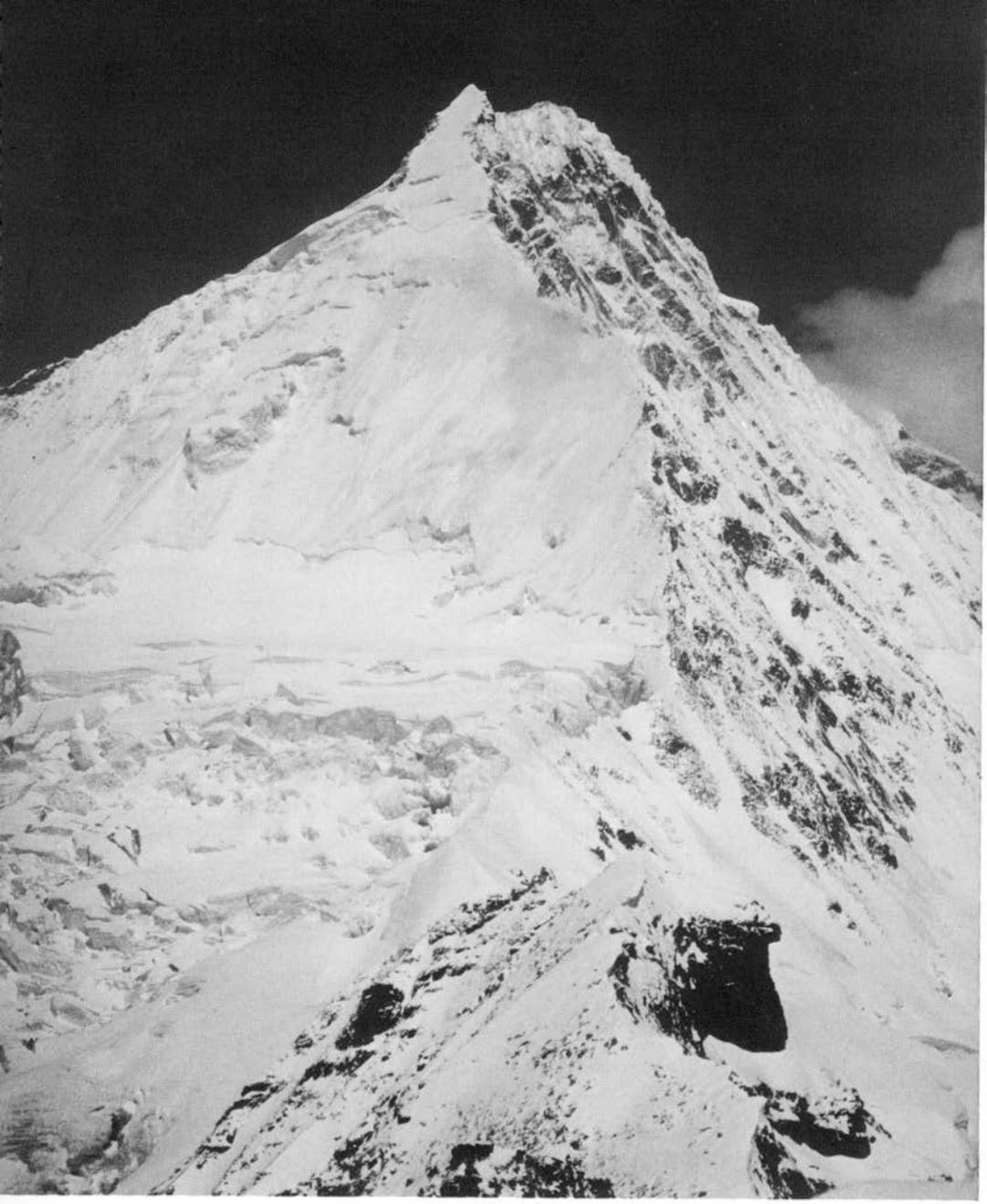
カンチェンジュンガ　南峰，中央峰を登った後，主峰に立つ三谷隊員。うしろに西峰（ヤルンカン）
Mitani on Main Summit, the third summit of Kanchenjunga. West Summit (Yalung Kan) in background. *Photo by Seishi Wada*



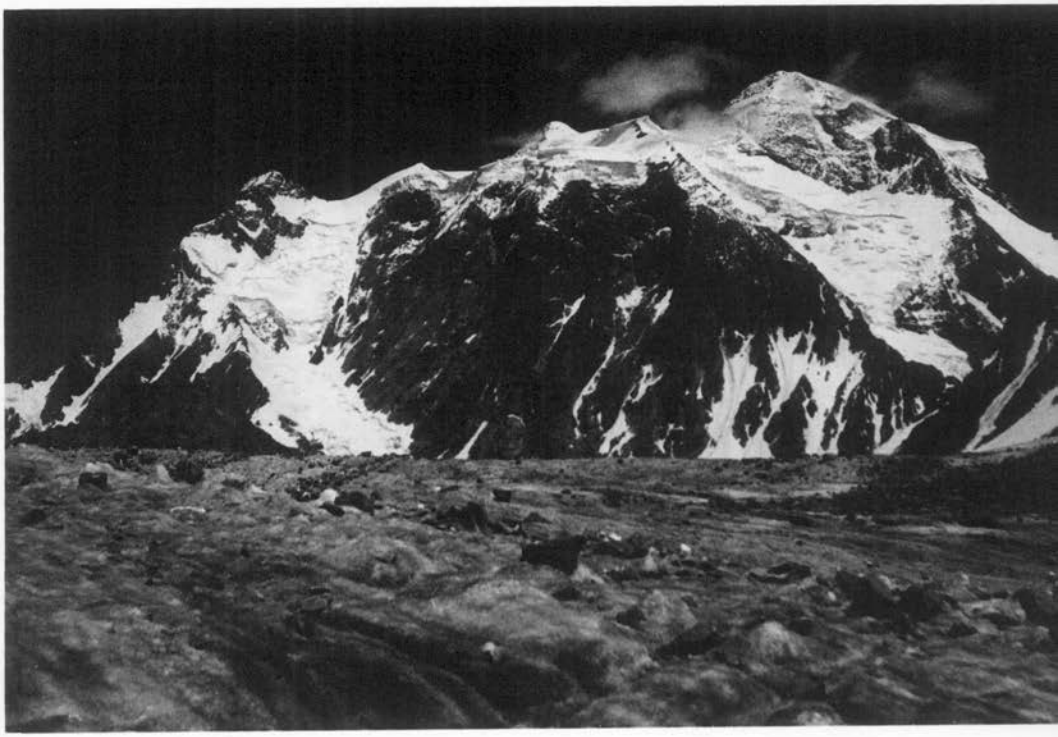
Ｃ４よりむずかしい80ｍのチムニーを登る。8100ｍ付近。
Climbing at difficult chimney on the South Summit route above South Camp 4. *Photo by Tsuneo Shigehiro*



ボゴダ西峰　5180m峰より望む。
West Peak of Bogda (5213m), view from 5180m peak. *Photo by Norikazu Ohno*



ジャンゴタン側からのジチュ・ダケ。
Jichu Drake, seen from Jangothan side. *Photo by Junko Tabei*



マモストンカンリ南面　マモストン氷河より。
Mamostong Kangri and Mamostong Glacier ; We chose the back side route to the summit.
Photo by Yoshio Ogata



K７　Ｃ３上の城塞の登攀。
On the vertical wall named" castle" above Camp 3.
Photo by Toichiro Nagata

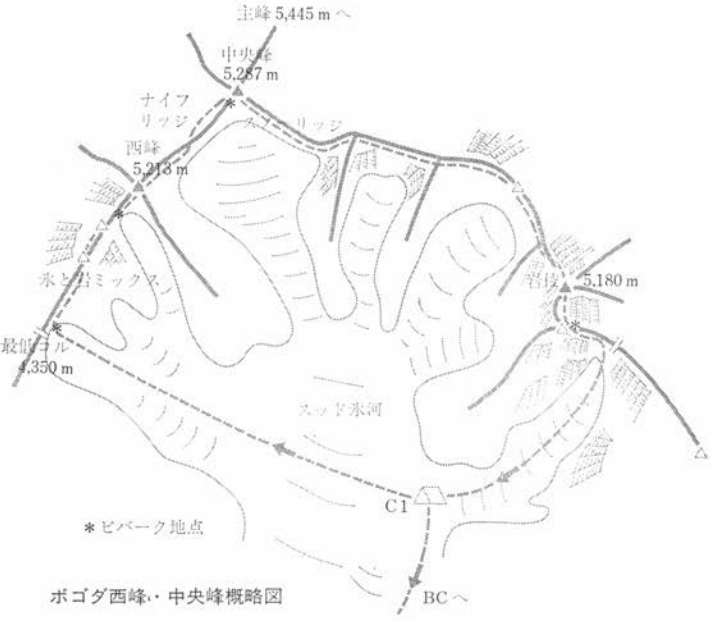


K７の全容　チャラクサ氷河より。
K7 from Charakusa Glacier. Dots indicate camp sites. *Photo by T. Nagata*

美しい独立峰，ラハーモ近し。
Lahamo〈6000m〉(A beautiful isolated peak.)



ドゥルン・ドゥルン氷河とラハーモ。
A glacier stream on Dulung Dulung Glacier.



ボゴダ西峰・中央峰概略図

左に回り尾根に飛び出る。あとは急な尾根から雪壁となって主稜線に突き上げる斜面を登る。二一時、全員が集合して、狭い稜線をけずってテントサイトをつくる。高度計は五一〇〇㍍近くを指している。

十一日、六人用テントに十名が入り、シュラフをかぶったままの状態で一晩過ごす。どんなに朝が待ち遠しかったことか。吉田、中山、北川の三名が先発する。二ピッチ目の岩場を登るが、全員で登り終るまでに一時間以上もかかる。

「ここより高い所はないから頂上だ」という感じで西峰の頂上に立つ。午前一〇時四八分。ここから縦走が始まる。中央峰と主峰が重なって見え、一瞬、中央峰がなくなったのではないかと錯覚する。前方に山を見ながら進むのはとても楽しい。縦走はいくつものピークを越さなければならないが、トラバースを多用する。岩場のトラバースは氷化していて、確保に力が入る。三本のフィックス・ロープを順送りしながら進む。やがて広い雪田に着く。ここはいままで歩いて来た西峰からの稜線と、中央峰の主峰へと続く稜線と、五一八〇㍍峰への稜線の接合点にあたる。ここに荷物を置き、未踏の中央峰に向かう。前方には主峰への稜線が延びているだけである。中央峰の頂上に立つ。一七時五五分。ふたたび広い雪田に下降し幕営する。

十二日、無風快晴、素晴らしい天気の朝をむかえる。最初の歩きだしで、空洞になっている雪を踏みはずし落ち込んだり、雪の亀裂を避けるために苦労する。岩峰の稜線は岩の上を忠実に歩くが、どうしても岩ぞいの雪面を歩くようになり、軟雪であったり、氷化し

ていたりで難しい。岩場も多くあり、振り子トラバースを余儀なくされる。五一八〇㍍峰への登りは部分的に凍っていて危険なのでザイルを固定する。前方の稜線には仙台一高山の会隊のつけたトレースがみえる。われわれは左の稜線に出て頂上をめざすことにする。凹角の岩の間を直上し、少し右に出て二ピッチ進む。太陽が沈みはじめた。稜線も頂上付近ではチゴ氷河側に切れ落ちている。

五一八〇㍍峰の登頂は感激も少なく、急いで下らねばならない。あたりはすっかり闇に包まれている。二二時四〇分。ヘッドライトの光をたよりに下降するが、寒さで光は弱く、足元だけをボッーと照らしている。二日前登頂した仙台隊のトレースを探すが、氷の斜面では見つからず、残ったフィックス・ロープをつなぎあわせて下降する。残置されたフィックス・ロープを発見する。ロープを借用するが、ザイルがピーンと張られた状態で、カラビナを一枚通し、バックで下降する。雪に埋ったロープを掘り出しながら、見慣れた五一八〇㍍峰南稜の四七五〇㍍地点までもうすぐである。南の空には満月が煌々とし、南稜を明るく照らしてくれている。最後のビバーク地点（四七五〇㍍）に到着したのはもう零時を過ぎていた。

帰路キャラバン

入山時の大東沟ルートが雪解けで増水し使用出来なくなり、帰路はグルバンボクド川を下る南路を登山協会から指定される。前々日には人民公社の遊牧民は羊や山羊を連れて下山してしまっている。下山時に予定していたラクダが集まらず、二回に分けて隊荷を運搬することになり、夜遅く全隊荷が集結した。天山牧場付近では、空には筋雲が出来、虫が鳴き、秋の気配がただよってきた。

隊の編成

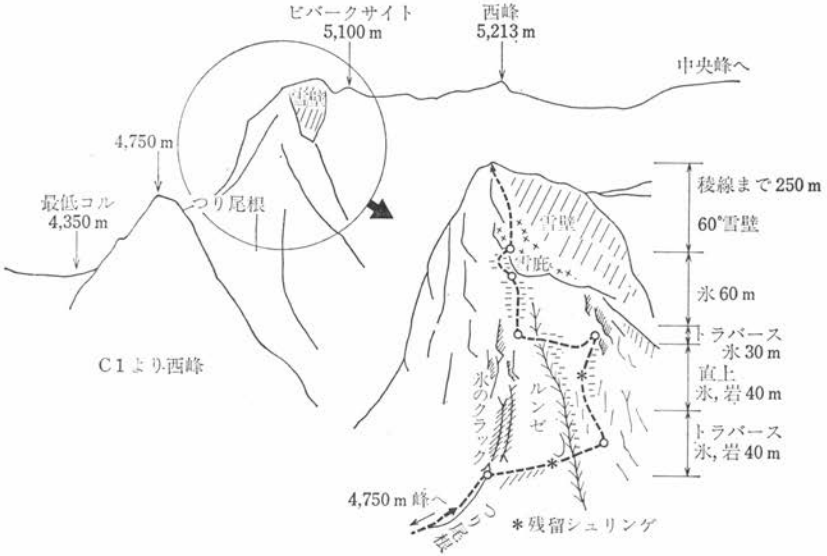
隊　長　大野紀和(40)、副隊長　西井正義(37)
隊　員　北川みはる(35)、岡　芳正(30)、藤田元弘(23)、中沼秀之(21)、吉田和正(21)、興津　豊(20)、村松聖子(21)、中山孝司(21)、田中一成(21)、片岡正弘(21)
顧　問　鈴木重彦(51)
連絡官　胡　峰岭(25)
通　訳　劉　青書(27)
隊長、顧問、および村松聖子を除く日本人隊員が全員縦走。

四年間のボゴダ登山とその成果

児　玉　　茂

日本山岳会のボゴダ山五年継続の登山計画は、一九八〇年当時の、手続き、費用などから入り難いとされていた中国へ手軽に入れるうえ、対象が五〇〇〇㍍クラスの小規模な山のため、初心者の、特に学生たちの海外登山経験の場としてふさわしいと考えられていた（「山岳」七十七年参照）。

一九八一年の第一次隊は、入域自体がめずらしく、大いに注目されたが、時代の流れは予想をはるかに越えて速く、この年以降、中国側の受け入れ態勢もすみやかに整備され、解放される都市も地域



も、山も急激に増加した。それには中国側の努力（政策）もあろうが、外国、特に日本の働きかけも相当に盛大に行なわれたようで、わずか四年の間にめぼしい高峰のほとんどすべてに日本隊が足跡をしるした。それは、かってのネパール・ブームやカラコルム・ブームと同様、中国ブームともいえるような状況であった。そしてこの盛況は、現在もまったく衰えを見せていない。

このような外的状況の中で、日本山岳会のボゴダ登山計画は四年（四回）をもって終息し、ボゴダ計画と同様の主旨で、一九八五年度からは、祁連山脈に対象を移すことになった。

ボゴダ計画四年間の推移を記せば次のごとくである。

㈠ 第一回目はほとんど偵察ということで、主峰の第二登（初登は二カ月ほど前）と地図づくりや、第二の高峰の確定と試登、各稜の調査をおこない、次年度以降の目標を明確化した。とはいえ、狭い地域ゆえにこの時に計画の概要はすべて終ったともいえる。次年度以降、目的は参加者自身の趣好によって決めるとしても、ボゴダ周辺に限れば、ルートと方法の選択という課題しかもはや残っていない。

㈡ 各種の調査は完結せず、また新しい調査項目も各年次ごとに追加されることはなかった。また対象範囲も地域的に拡大するのではなく、ボゴダ三山のみの登山へと特殊化していった。さらにその登山のほうも、前回を踏まえた一貫性（拡大発展）を欠いていた。

㈢ 一、二回（東京）と三回（大阪）、および三回と四回（名古屋）の引きつぎはむしろ悪く、いずれも前回の経験が十分に生かされ

ボゴダ計画の推移　（作成・児玉 茂）

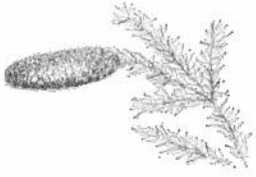
期間	1981 8/10～10/1	1982 7/31～9/30	1983 7/20～8/20	1984 7/23～8/20
参加者	15 名 （うち学生4名）	15 名 （うち学生7名）	（関西支部） 8 名 （うち学生2名）	（東海支部） 13 名 （うち学生8名）
登山活動	主峰登頂（北東稜） 二峰試登（北稜／東南稜） 北面，南面の一周によるルート偵察，グラチマイロ氷河と第一氷河に BC	二峰登頂（南稜） 13 名登頂 南面第五氷河に BC	チゴ氷河より（縦走を目的として）主峰～二峰間に出る。試登 チゴ氷河に BC	西峰～中央峰～5,181 m 峰縦走 （10 名） スッド氷河に BC
その他目的	氷河地形，氷河調査， 地質調査 地図作成（カムカルテ） 民具収集（カザフ族） 気象観測 鳥相調査，蝶標本採集	氷河地形，地質 森林生態学（テンシャントウヒ，ポプラ調査） 気象観測 パイアンコウなど未開放地域に入り登山協会に保護される		学術調査は認められなかったが，小哺乳動物（ネズミ類）の調査をする
帰路	三派に分れて下山 10/1～10/12 未開放地域（トンコウ）へ個人旅行を試みる	9/1～9/10	8/30 カシュガル等へ観光	協会指定の観光地めぐり
報告	「山岳」77 年	「山岳」78 年		「岳人」452 号

てはいなかった。したがって、計画は発展拡大してゆくよりもむしろ縮小していった。

(四) メンバーはしだいに学生が多くなり、本来の主旨に戻っていったが、その反面、はつらつとした新しいタイプの登山活動は見られなかった。また、登山期間も短くなっていった。

(五) こうした内的また外的状況の変化から、次年度にさらにボゴダに行きたいというメンバーがいなくなり、結果として、対象の山、地域を変えることで当初の主旨を継続するようになった。

ボゴダ計画に加わったメンバーの中の幾人かは、昨年のカンチェンジュンガ縦走隊に参加したし、本年の祁連山脈計画や、同時に計画されている八十周年事業の中国登山計画の中心となって活躍していることから、日本山岳会の登山を担う若手がこのボゴダ計画から確実に育っているといえるだろう。したがって同様の主旨は、今後とも継続されることが望ましいであろう。



テンシャントウヒ
（児玉 茂）

マモストン・カンリ初登頂

尾形好雄

はじめに

カラコルムの東端を流れるアッパー・シャイヨーク河とヌブラ谷の荒々しい大河に挟まれて南東方向につらなる山脈には、リモ・ムズターグやサセル・ムズターグなど、未踏峰の宝庫ともいうべき魅惑の山群が横たわっている。

しかしながら、この辺りのヌブラ、シャイヨーク、アクサイチン地区は、インド、パキスタン、中国の三国が踵を接するジャム・カシミール州の辺境地区で、一九四七年の印・パ分離独立以降、たびたび国境紛争の場となり、一般外国人の立入りが許されない厳しい制限地域となっている。

日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）が、この魅惑の山群に興味を持ってインド登山財団（ＩＭＦ）をはじめとするインドの関係諸機関にアプローチを開始したのは一九七三年のことである。以後、色よい返事をもらえぬまま一〇年もの星霜を重ねるに至ったが、一九八四年になってようやくこの長年の継続折衝が実って、垂涎の地への入域が許されることになった。

ＨＡＪでは、サセル・カンリを当初申請し、長らく折衝してきたのであるが、登山許可がいよいよ具体的になってきた時点で、東部カラコルムの未踏の最高峰マモストン・カンリ（七五一六㍍）に目標を変更した。

こうして待望久しい計画は八四年の一月にＩＭＦとの合同隊という形で具体化にこぎつけた訳だが、その後も、われわれの入域許可をめぐる情勢には予断を許さないものがあった。

八四年に入ってインドでは、パンジャブ州のシーク教徒の暴動、スリナガール発国内機のハイジャック事件、反ガンジー派のカシミール州政府の崩壊、シアチェン氷河における印・パ両軍の衝突など不穏な事件が相次いで勃発し、とても入山が楽観できる情勢ではなかった。焦燥感にかられるわれわれに最終的な許可がもたらされた

のは、先発隊を送り出す一〇日前の七月四日であった。

千人の悪魔の峰

「マモストン」の謂は、ヤルカンドの伝説からきているといわれる。昔、中央アジアからの隊商の一隊がサセル峠（五三二八㍍）の高嶺を越えた所で大勢死んでいるのが発見され、それ以来この山は「千人の悪魔の峰」と呼ばれるようになったという。このような伝説もこの巨峰が、ラダックのレーと中央アジアのヤルカンドを結ぶ古来の中央アジア交易路の傍らにそびえていたからであろう。

マモストン・カンリは、こうした怨念のこもった名前のせいか、一八六〇年までに発見された山でありながら、長い間沈黙を保ち、本格的な登山活動の記録が見聞されないまま不遇をかこってきた。インド測量局がK32のマップ・ナンバーを付与したこの山麓を最初に探査したのは、一九〇七年のA・ニーヴ、D・G・オリバーの一行である。その後は一九二七年にインド測量局のM・ゴンパーツがマモストン氷河を含むサセル周辺の測量に入った。しかし、以後約四〇年もの間、この山への足跡は見られず、一九六九年なって、プレム・チャンド大佐の率いるインド陸軍隊がマモストン氷河に入って、登山のための偵察を行なった。

このように同峰の記録は少なく、従って写真も少ない。これまで発表されたほとんどの写真が、遠望のものばかりで、ルートを検討できるような写真は未見であった。

当初は、日本で入手可能な地図などをもとに北面のチョング・クムダン氷河側から北東稜に取りつくプランを立てた。

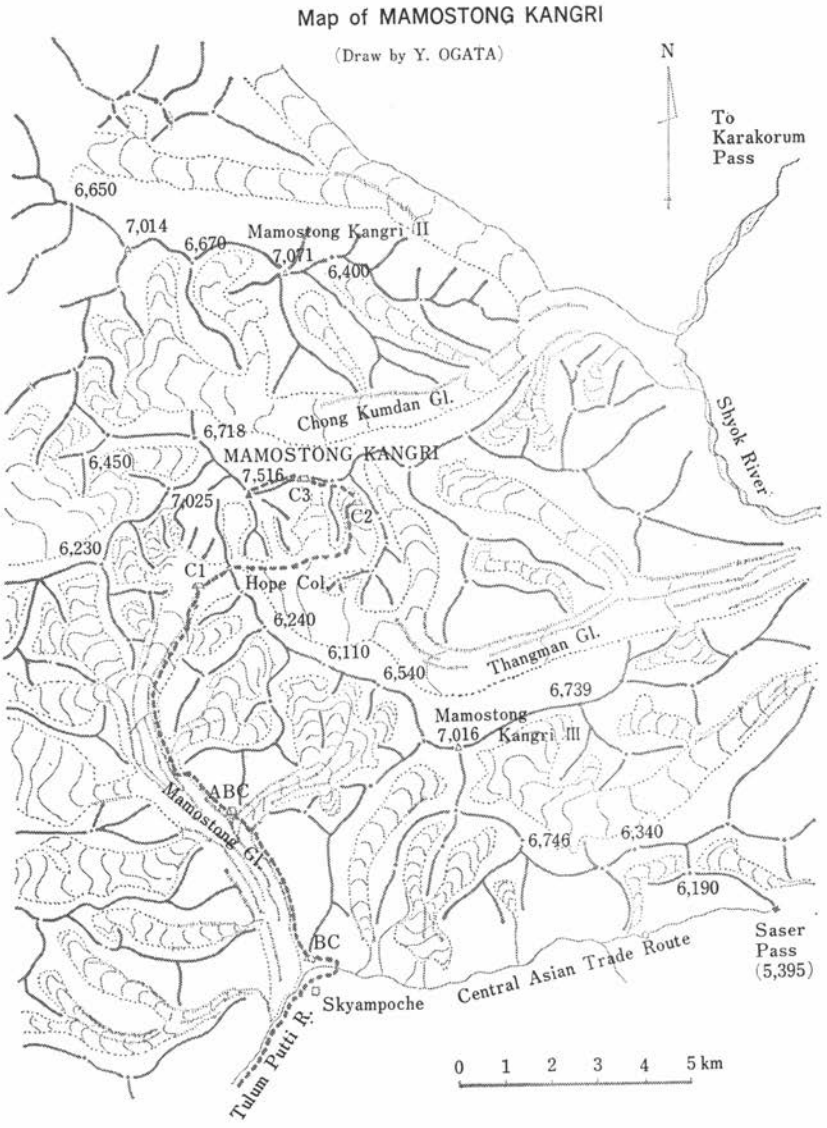
もっともこの北面に登路を求めたのには、もう一つの理由があった。それは日本人としては一九〇九年の大谷探検隊以来、実に五五年ぶりということになる中央アジア交易ルートを辿って、一歩でもカラコルム峠（五五七〇㍍）へ肉迫したいという熱い想いと、リモ氷河周辺の踏査もしたいという願望からであった。しかし、このプランもデリーで修正することになった。インド陸軍にはこのエリア全域にわたって美しい三色刷りの五万分ノ一地図があり、日本から携えていったAMS（US Army Map Service Corps of Engineers）マップや学研などいくつかの地図は、尾根・氷河の派生具合が全く違っており、参考にならなかったのである。

結局、四〇㍍間隔でコンターの入ったこの詳しい地図による地形判断と計画当初から懸念されていたアッパー・シャイヨーク河の増水問題から北面は諦め、南面のマモストン氷河側から攻略することになった。

ラダックの関嶺を越えて

七月二十九日、本隊が灼熱のデリーに到着。その翌日、われわれはインドの陽気な仲間達と合流した。インド側のメンバーは、ほとんどが登山学校のインストラクターで、いわばプロの連中ばかりである。

八月一日、隊荷を積み込んだトラックを送り出し、翌二日にわれわれは空路スリナガールへと飛んだ。さらに三日にはスリナガールから三〇分ほどのマウンテン・フライトを満喫してラダックの首都レーへ到着。折柄、この荒涼とした山間の古都では夏のフェスティバルが開催されており、街には外人観光客があふれていた。ポーター、ポニーのアレンジなどで一週間の滞在を余儀なくされたが、こ


Map of MAMOSTONG KANGRI
(Draw by Y. OGATA)
N
To
Karakorum
Pass
6,650
7,014
6,670
Mamostong Kangri II
7,071
6,400
Chong Kumdan Gl.
6,718
MAMOSTONG KANGRI
7,516
6,450
7,025
C3
C2
6,230
C1
Hope Col.
6,240
6,110
6,540
Thangman Gl.
6,739
Mamostong
7,016 Kangri III
ABC
Mamostong Gl.
6,746
6,340
6,190
BC
Saser
Pass
(5,395)
Skyampoche
Central Asian Trade Route
Tulum Putti R.
Shyok River
0 1 2 3 4 5 km

の夏祭りのおかげでレーの滞在もあきることなく楽しむことができた。

十日、レーを後にヌブラ谷へと向かう。隊荷を乗せた三台の軍用トラックは、ブラウン一色の山腹を砂塵を巻き上げ、エンジン音を唸らせながら時速一〇～二〇㌔の遅々としたスピードで進む。レーから喘ぎ登ること二〇〇〇㍍、自動車で越えられる峠としては世界で最も高いカルドン・ラ（五四八六㍍）に着く。レーからヌブラ谷、シャイヨーク河へ入域しようとする場合、どのルートをたどろうともラダック山脈の高い峠を越えなければならない。幾多の先蹤者達を苦しめたこの絶嶺も、いまでは前進基地への軍用道路が通り、難なく車で越えられたのだから便利になったものである。

峠のすぐ下で懸垂氷河を横切った後、車はパルカ・トゥクポ（河）の壮絶奇絶の渓谷に沿ってシャイヨーク河へとひたすら高度を下げて行く。

母なるインダスの遥かな水上（みなかみ）の一つであるシャイヨーク河は想像以上の河幅で、墨流しのように怒涛が渦巻いていた。カルサルのアーミー・キャンプからシャイヨーク河左岸に沿って広漠とした河原を走り、しばらくして吊橋を対岸に渡る。なおも悠久なる流れに沿って下り、やがて小山のように盛り上がった扇状地の押出しを越えると、正面に青々としたヌブラ谷が現われる。

「ヌブラ谷」とはラダックの言葉で「緑の谷」を意味するという。そしてラダックの人達はこの谷を緑の多い、この世で最も美しい所だと誇らしげに語る。

レーからの第一日目はヌブラ谷の入口にあるスムレの村に泊る。

十一日、スムレからキャラバンのスタート地であるサソマまでは約四五㌔の道程で、車で三時間ほどである。この日は、スムレ村を出発する前に、この村の大きなゴンパに立寄る。サンタンリン・ゴンパは今から約三五〇年ほど前に建立されたといわれ、四つの本堂にはいずれも素晴らしい仏像、仏画、タンカ、教典等が数多く置かれ、目を見張らせられる。レー近在の由緒あるゴンパがすっかり観光名所化されてしまった中で、ここはまだゴンパとしての本来の姿を保っている。

サソマへの途中、豊富な温泉の湧き出るパナミック村を通る。一九〇七年、中央アジアのヤルカンドからカラコルム峠を越えてこの地に至ったわが国の先蹤者、日野強もこの温泉に浸り、「清国の垢と英領の垢とを同時に洗い去る、あに快事ならずや」とその著『伊犂紀行』に記しているところである。

パナミックからサソマまでは約一五㌔、小一時間の距離である。ヌブラ谷左岸につけられた軍用道路をひた走り、やがて正面に飛行場を思わせるような広々とした河岸段丘が現われると、ほどなくしてサソマに到着する。この広大な河岸段丘を見ると「新しい土地」を意味するという「サソマ」の謂もわかるような気がする。

われわれのレーからサソマまでのアプローチでは、二日間の山岳ドライブで約一六〇㌔の道程を走行し、高度にして約二〇〇〇㍍登って二二〇〇㍍下ったことになる。

中央アジア交易路を辿る

サソマからはヌブラ谷に沿って北へシアチェン氷河が横たわり、一方、東へは有名な中央アジア交易ルートがサセル峠、カラコルム

峠へと続く。

われわれの入域した時期にヌブラ谷でポーターを募るのは難しい。このことは既にレーで聞かされていたので、レーからネパール人の出稼者をポーターとして傭い、あとはパナミック周辺の馬を傭った。それでも馬の都合でサソマの出発は四隊に分散することになり、十二日、十三日、十五日、十六日と順次出発することになった。

サセル峠及びその周辺域を源流とするトロンポティ・ナラ（川）は、サソマでヌブラ谷と合流するが、その手前で大ゴルジュ帯を形成して、沢沿いに遡ることを阻んでいる。道は右岸にそそり立つ大岩壁にとられており、どこを登るのかと思うような岩の道を一気に六〇〇㍍も高度を稼ぐと、トロンポティ・ラの峠に出る。この峠に立つと眼下にはヌブラ谷の白い河床が俯瞰でき、行く手には両岸が切り立ったトロンポティ・ナラの激流が眺められる。峠の下にはこの細いギャングウェイから転げ落ちた哀れな馬の死骸が炎熱の岩礫に横たわっており、これがあの中央アジア交易ルートかと思うほど峻嶮な道であった。

この古き交易路も今ではインド軍の補給路として使われており、途中のウムロンやスキャンポチェには石積みのシェルターがあってインド軍の哨兵が駐屯している。ウムロンの先は、両岸に道がつけられており、往路は左岸の道をとった。ウムロンの下でゴルジュにかかる岩の橋を対岸に渡り、ボロボロの懸崖につけられた道を登ると第一日目の泊り場、ジンモチェに着く。

二日目は、ジンモチェから左岸の河岸段丘上の山を辿るが、途中、二カ所でナラ（川）が出合い、水量が多く徒渉に苦労させられる。この日は四時間弱の短い行程で打ち切りとなり、スキャンポチェの四〇分ほど手前の所で幕営となる。

サソマからトロンポティ・ナラに沿って遡ること三日でBCに到着する。スキャンポチェからいったんサセル峠の方へ続く道を辿り、マモストン氷河出合のさらに上流でトロンポティ・ナラを徒渉して対岸のモレーン台地に上がるとわれわれのBCはすぐである。このBCはちょうどマモストン氷河がトロンポティ・ナラに合流する地点のモレーン台地にあり、高度は四六〇〇㍍であった。

十八日には、最後の隊荷も到着してすべての隊荷がBCに集結した。

登山活動

十六日には先発隊によってABC予定地が決められ、翌十七日からABCへの荷上げが開始された。

ABCは、BCからマモストン氷河左岸のサイド・モレーン上を辿り、左岸側から最初に流入する枝氷河を横切った地点のモレーン台地に位置し、近くにはコバルト・ブルーに輝く美しい湖がある。高度は四九〇〇㍍。

十八日に安全祈願の「ハタケ」の儀式をすませ、翌日から本格的な登山活動を開始した。

十九日、このBABCへ荷上げに上がった尾形ら八名は、さらにC1へのルート偵察のためマモストン氷河を遡り、約五三〇〇㍍地点まで達した。この日の偵察によって、これまで前衛峰に阻まれて見ることができなかったマモストン・カンリ南面の全容が明らかに

なった。南面は圧倒的な花崗岩の大岩壁におおわれており、一見してタンマン氷河経由のルートしかないように思われた。

二十一日、C1建設。前日ABC入りした七名によってC1が建設され、山田、吉田ら四人がそのままC1入りする。C1はマモストン氷河源頭部の氷河中央に走るモーレンの上で、高度五六〇〇㍍の地点。南壁の基部までは一五分ほどの所である。

二十二日、山田、吉田ら四名がC2のルート工作に向かう。南壁から南東に派生する岩稜は、南面のマモストン氷河と東面のタンマン氷河を分けており、この岩稜を南壁直下のコル（希望のコルと命名、五八八五㍍）で横切ってタンマン氷河へ入る。コル反対側の懸垂氷河の下降は懸念されたほどのこともなく、四ピッチのフィックスで難なくタンマン氷河の源頭部に降り立つことが出来た。

源頭部から俯瞰するタンマン氷河はなだらかな雪原となって続いていて、クレバスも心配するほどではなかった。ルートはこの先、この雪原を二～三㌔にわたって横断した後、北東稜側から落ちてくるアイス・フォールの一番右寄りにルートをとる。数箇所のクレバスと氷壁に三ピッチのフィックスを施し、さらに右上のアイス・プラトーに一ピッチのばしてこの地をC2予定地とする。前後に大きなクレバスが食い入る六一〇〇㍍の地点である。

二日間にわたってC2へのルート工作が完了した後、二十六日には尾形、新郷ら三名がC2を建設してそこに入る。

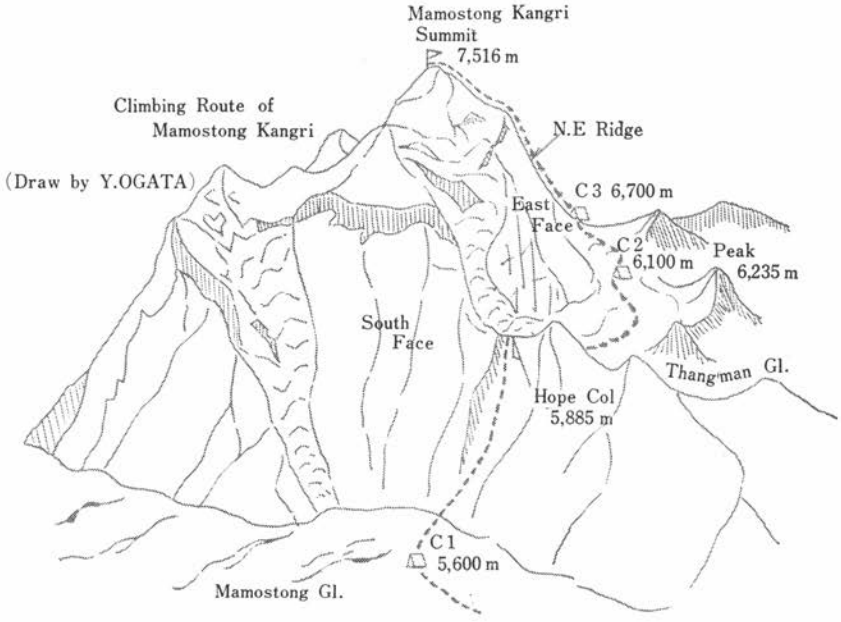
二十七日、尾形、新郷ら三名がC3へのルート工作に向かう。C2からC3の間は、大きなクレバスが錯綜する雪のスロープで、そのクレバスとクレバスの間を縫うルート・ファインディングには時間を費やされる。北東稜へ続く雪原に出るまで、三カ所大きな断層帯があり、その箇所に全部で九ピッチのフィックス・ロープを張って最後の雪原に出た。この雪原に出ると北東稜のコルは目の前に眺められるが、この雪原の横断は意外に長く、小一時間のアルバイトを強いられる。

北東稜に飛び出た所は、高度六七〇〇㍍のコル状の地点で、そこからマモストンの北東稜は男性的にスカイラインを描いて急峻にせり上がっている。また、眼下にはチョング・クムダン氷河が俯瞰でき、その対岸にはマモストン・カンリⅡ峰（チョング・クムダン峰、七〇七一㍍）の峻峰が眺められる。さらに遥か向うにはカラコルム峠、デプサン高原に続く赤褐色の山脈が展望できた。

二十八日、前日到達したコルをC3予定地とし、この日、尾形ら五名はC3を建設する。

三十日、岩崎ら三名はC3上部のルート工作に向かう。彼らが三ピッチ、フィックス・ロープをのばしたところで、この日C2から一気に上がった山田、吉田と交替し、さらにその上部に一〇本のフィックス・ロープを張る。結局、この日は氷塊が折り重さなるようにつらなる急峻な北東稜上をうまく縫って一三ピッチのフィックス工作を施し、約七一〇〇㍍地点まで到達した。

一応これでアタック態勢は確立したので、翌日、全員がABCへ下り、アタック前の最後の休養に入った。ところが九月に入ったとたん気象パターンががらりと変って悪天が続き、われわれのアタックは延び延びとなった。一度、九月五日、六日にアタックに向かわせたが、天候が思わしくなくC2で断念してしまった。



全員登頂

九月十一日になってバロメーターの針がぐんぐん上り出し待望の好天が到来した。今度こそ、この好天をものにしようと、一次隊の五名をABCから一気にC2へ送り込む。ABCからC2まではかなりの長丁場となるが、それでも五時間ほどで到達した。

翌十二日、すっかり消えてしまったトレールに深いラッセルを強いられ、フィックス・ロープを掘り起しながらC3へ移動する。

十三日、山田、吉田、ラジブ、ダス、チョーハンの五名はC3を午前四時半に出発した。八時過ぎにはフィックスの終了点に到達し、さらにその上部に五ピッチのフィックス工作を新たに施して下降時の安全を確保する。七二〇〇㍍の肩まで登ると北東稜は幾分傾斜が緩くなり、ピラミダルな山頂へと続く。やがて北東稜は徐々に細まり、急峻になってくる。チョング・クムダン側はすっぽりと切れ落ち、眼下には二〇〇〇㍍の空間が口を開けている。細く切り立った氷稜を慎重なアイゼン・ワークで登りつめたスノー・ピークは頂上ではなく、真の頂上は、さらにその奥につらなる頂上稜線の先にあった。切れ落ちたチョング・クムダン側を避け、マモストン氷河側を捲きながら痩せ細った頂稜を辿り、三つ目のピークに立つとそこがマモストン・カンリの絶頂であった。一次隊は六時間の登高の末、一〇時二〇分に初登頂に成功した。

頂上からの眺望は素晴らしいものであったが、あいにくと西方には雲海が広がり、シアチェン氷河などを俯瞰することはできなかった。しかし、雲海の上にはK12、サルトロ・カンリ、リモ、サセル山群などの白い頂が顔を出し、めずらしいアングルのパノラマが楽

しめた。

翌十四日は、前日までの好天が一変して風雪が荒狂い、二次隊の七名はC3に閉じ込められた。

十五日、相変らず強風が咆哮し、地吹雪を吹き上げていたが、上空に好天の兆しが見え出したので二次隊のアタックを敢行する。七時にC3を出発した尾形、新郷、岩崎、マハビール、ラッタンの五名は午後一時少し前に登頂に成功した。サンドゥ、ナンドゥの二名は途中でアタックを断念してC3に戻る。

十六日、前日のアタックが惜しまれるような好天に恵まれたこの日、前日途中から引き返した年寄りコンビが再度アタックを敢行し、第三登に成功した。ここにわれわれ登攀隊員十二名全員の登頂が成ったのである。

こうしてわれわれは合同隊という形ながらも、久しく外国人の立ち入りが禁止されていたヌブラ、シャイヨークへの入域を許され、地球上に残り少なくなった最後の輝きともいえる七五〇〇㍍級の未踏峰に初登頂することができた。

一九八五年になってインド登山財団は、二月六日付で東部カラコルムのオープンを世界各国に表明した。オープン・ピークは、サセル・カンリ、マモストン・カンリ、リモ、アプサラス、テラム・カンリ、シンギ・カンリ、ゲント、シア・カンリなどの十五峰とインディラ・コルである。東部カラコルムをめぐる印・パの緊張厳しき折、あえてインドが開放に踏み切った裏には、それなりの高度な政治判断があったのであろう。

マモストン・カンリの遠征を終えて帰国してから、インドではインディラ・ガンジー首相の暗殺、総選挙とラジブ新内閣の誕生など国内事情が揺れ動く。東部カラコルムのような問題のある地域は当分、外国人の入域は凍結されてしまうのではないかと懸念されたが、これほど早く一般にオープンされるとは夢にも思わなかった。日印合同隊によるマモストン・カンリ登山が一つの契機になったことは確かなようである。

△記録概要▽

隊の名称　日本・インド合同カラコルム登山隊一九八四年

活動期間　一九八四年八月～九月

目　的　未踏峰マモストン・カンリ（七五一六㍍）の初登頂及びインド登山家との交流親善

隊の編成　日本側　隊長＝尾形好雄(36)、隊員＝山田　昇(34)、新郷信廣(41)、吉田憲司(31)、岩崎　洋(24)

インド側　隊長＝バルワント・S・サンドゥ(49)、医師＝ランジット・クマール(38)、隊員＝H・C・チョーハン(33)、マハビール・タクル(27)、ナンドゥラル・プロフィット(42)、P・M・ダス(31)、ラッタン・シン(31)、ラジブ・シャルマ(29)

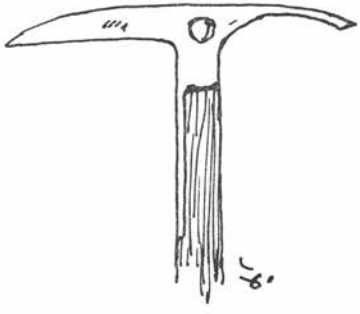
行動概要　八月十四日、マモストン氷河出合にベース・キャンプ設営（四六〇〇㍍）。二十日、前進ベース・キャンプを設営（四九〇〇㍍）。二十一日、第一キャンプを設営（五六〇〇㍍）。二十五日、第二キャンプを設営（六一〇〇㍍）。二十八日、第三キャンプを設営（六七〇〇㍍）。三

十日、第三キャンプ上部の北東稜上に一三ピッチのフィックスを施し、約七一〇〇㍍地点まで到達。アタック態勢が確立し、翌日から全員前進ベース・キャンプに下ってアタック前の休養をとる。九月十三日、第一次隊の山田、吉田、チョーハン、ダス、ラジブの五名が初登頂に成功。十五日、第二次隊の尾形、新郷、岩崎、マハビール、ラッタンの五名が登頂に成功。十六日、第三次隊のサンドゥ、ナンドゥの二名が登頂に成功。二十二日、ベース・キャンプ撤収

記録発表

尾形好雄　マモストン・カンリ初登頂「ヒマラヤ」一五七号　1～16頁　一九八四年

尾形好雄　七五年振りにその山容を現した千人の悪魔の峰「岳人」四五一号　22～24頁、40～45頁　一九八五年



初めてのブータン登山

田部井淳子

私たちのブータン登山許可は思いがけないことからやってきた。一九七五年エベレスト登頂後、私たちのクラブ（女子登攀クラブ）では「未知の地域へ行こう」という声が強くあがり、それはブータンとかシッキムをめざそうということだったのだが、「ブータン会」が希望者により発足することになった。早速一九七一年からブータン、シッキムあてに許可申請の手紙を送り続けた。当時登山に関しては鎖国状態であった当国からは何の反応もなかった。そのまま五年が過ぎた。八〇年に中国はチベットを開放し、私たちは八一年にシシャパンマ登山許可を得たのでブータン会はそのままシシャパンマ登山に移行していった。

その翌年、八二年の十月、カトマンズで五〇回目のＵＩＡＡの会合が開かれ、ラインホルト・メスナー、加藤保男、田部井淳子の三人が特別ゲストで招かれた。その会合で各国登山関係者にまじってブータン特有の民俗衣装を身につけた三人の男性がいることを発見し、田部井は個人的に話しかけた。

「私は毎年申請の手紙を出しています、ブータンの山の開放はまだでしょうか、今後の見通しだけでも教えて下さい」と話してみた。「ブータンの山については多くの方から関心をよせられています。明日話し合いましょう」ということになった。その日私はカトマンズの市内の本屋で地図を買い、友人宅でタイプを借り、もしかしたら許可がおりるかもしれないと思いつつ申請書を作り上げた。翌日の会合ではブータンの山を目指す何隊かの代表も同席した。その席でブータンは八三年から二年に一度ずつ山を開放する、一つの山には三隊まで許される、チョモラリは許可できない、最初の山はチョモラリ三山の中の一つジチュ・ドラケ（約七〇〇〇㍍、現在はジチュ・ダケという呼称が一般的に使われている）であることを知らされた。申請書に打ちこんだチョモラリの名をジチュ・ドラケと書き直して提出し、許可を下さいと申し込むと即座に「いいでしょう、

来春第一号の許可を与えます」という返事にかえって不安になった。思わず「あなたはこの場で許可を与えることが出来る立場の方ですか」と質問してしまったが、この人が観光局長シグミ・チュルテン氏であった。そのうえ外国人には許可されないタシガンまでのトレッキングとブムタンからルナナへという新しい地域の入域も許可された。

こうして第一号の許可はとったものの山の写真、資料が少なく、ブータン側もはじめての登山隊受け入れにとまどい、お互い手さぐりながらの準備に入ったのである。八三年二月からカルカッタ、パロ間にドルック・エア（十六人乗り）が週二便飛ぶことになり、荷物だけはカルカッタから陸送でパロに運ぶことにした。頂上から右にゆるくのびている東稜を登ることにし、シグミ氏のアドバイスもあってジャンゴタン（四一〇〇㍍）にBCをおくことにしようと思っていた。

頂上直下が急峻であるので一〇〇〇㍍のフィックス・ロープを用意することにしたが、この稜の末端はどこへおりているのか、下部の状態がわからない。はたしてBCがジャンゴタンでいいのか、荷物の輸送は、連絡の方法は、と不安要素満載のままこれがパイオニアだと割り切って、八三年四月私たち十二名の隊員はブータンの山に向かった。一日一三〇ドルという滞在費は高額なので、登山期間中はすべて自分たちが持参した食糧でまかなうのだから安くしてほしいと交渉し了解された。平均年齢二十八歳の若い隊である。

隊長　田部井淳子
グループリーダ　田中昌子、倉松由子
隊員　橋本しをり、藤原すみ子、柳沢伸子、安原真百合、山口一美、平井裕子、河井由利子、黒石川由美、岡　美樹
カメラマン　江口政博
　内村　泰（ブータンの発酵食品を調査するため同行）
リエゾン・オフィサー　リンジン・ウォンチュック
アシスタント　カルマ・テンジン
　カンドウ・ウォンチュック
　シゲ・ポッブ
コック　ニマ・ドルジ
　アペイ・ドルジ
キッチンボーイ　ソナム・タルチェン

一九八三年四月十日　先発隊出発
四月十三日　本隊出発
二十一日　パロよりキャラバン開始
二十三日　ジャンゴタン到着

ジチュ・ダケ（現地入りしてはじめてジチュ・ドラケではなく、ジチュ・ダケと発音することがわかり今後はジチュ・ダケと書くことにする）の偵察を行なった結果、下部岩壁はむずかしすぎること、東稜の末端はジャンゴタンよりかなり離れていることが判明し、末端に一番近いリンシへ移動することにした。

四月二十六日　リンシ着
リンシにきてはじめてジチュ・ダケの頂上は双峰になっていることがわかる。ジャンゴタンから見えたピークは本当のピークではな

かったのだ。さらに東稜の末端はのこぎり状の岩峰（一峰～七峰）になっていることもわかった。リンシではあまりにも離れているので四三〇〇㍍の湖の側にBCをおくことに決定した。

四月二十九日　BC着、ここまでヤクが荷を運んでくれる（四三〇〇㍍）

五月一日　C_1（四六〇〇㍍）ここにも美しい湖がある。

五月五日　C_2（五一〇〇㍍）第二と第三岩峰の下部にあたる狭雪面上に幕営。

五月十日　C_3（五三〇〇㍍）第三岩峰の頂点にテントを張る。基部からフィックス・ロープを張ったので、ここまでで三〇〇㍍近いフィックス・ロープを費した。

十一日から第四、第五峰へとザイルを延ばしにかかったが第六峰が終るまではほとんど高度が稼げないこと、フィックス・ロープなしでは荷上げが出来ないこと、そして一番致命的だったのはフィックス・ロープがあまりにも足りなさすぎたことにより日数もなく、このままジチュ・ダケにこだわることは無理と判断し、他の山の登頂をねらうことに決定した。

五月十三日　C_2集結、転進のための準備。

五月十四日　他の山の登山許可が届かないので周辺の山のハイキングに出掛ける。五〇〇〇㍍のハイキングも高度順化隊員には鼻歌まじり。ジチュ・ダケを対面に見ながら、あらためて東稜の急峻な稜に息をのんだ。

五月十六日　リンシ着

五月十七日　ショドウ着

五月二十日　偵察の結果、選んだ山は無名峰であったが、この近くがセプチュという名の所であることからセプチュ・カン（カンとは山の意味）と呼ぶことにし、ここに登ることにした。折良くティンプーからも五二〇〇㍍以下の山なら許可するという返事が届き、リンシより一日登った四三〇〇㍍にC_1を作り、二十日に四名、ブータン・スタッフ二名が初登頂した。ここでも三〇〇㍍のフィックス・ロープを使用した。

五月二十二日　昨日の四名に新たに四名の隊員が加わり八名が登頂。

五月二十三日　ショドウ（四〇〇〇㍍）

五月二十四日　パルション（三二〇〇㍍）

五月二十五日　ティンプー着

ティンプーで解散。田部井、橋本、平井、柳沢、黒石川の五名が七月九日まで東、北ブータンのトレッキングに出発した。

＊編註　ジチュ・ダケには時を同じくオーストリア隊が入り、五月十七日南西稜より初登頂した。一九八四年に日本ヒマラヤ協会隊が東稜からの登頂（五月二十日）に成功している。（児玉）

冬期アンナプルナ南壁敗退記

八木原圀明

計画のはじまり

純然たる群馬岳連によるヒマラヤ登山は、ダウラギリⅣ峰への一九七一年春の偵察、翌一九七二年春の本隊に始まる。

一九七八年秋のダウラギリⅠ峰南東稜登山は、前年の偵察を経た後の四隊員を失う壮絶な戦いの末の頂上であった。この南東稜からの登山は数々の私達のヒマラヤ登山の中で、技術的にも精神的にも最も困難を極め、忘れられない登山であった。

その後「第三次」を模索し、目標を「八〇〇〇㍍峰」の「バリエーション・ルート」と定めたが、ネパール政府の冬期登山解禁の報に、目標に「冬期」を加え、三つの大条件を前提に山とルートの選定に入った。

一九八二年秋、本岳連会員九名が参加したカモシカ同人によるダウラギリⅠ峰北壁・ペアールートの初登攀に成功した帰路のキャラバン初日、いくつかの候補の山とルートの中から、ターゲットを「アンナプルナⅠ峰南壁のイギリスルート」と定め、下山後ネパール政府観光省に対し、仮申請をした。

本岳連登山隊員による七〇〇〇㍍以上の高峰登頂は延べ一五座、うち八〇〇〇㍍峰の登頂は冬期のエベレストを含む八座である。それらの経験を踏まえ、自信をもって計画したつもりであった。

アプローチ

十月二十七日、成田を出発した星野総隊長以下九名の本隊はバンコック経由で翌二十八日カトマンズに入る。

三十一日、インドのインディラ・ガンディー首相暗殺のニュースが飛び込む。影響はすぐ現われ、インド・ネパールの国境は封鎖され、プロパンガスも入手できなくなった。しかし、これも三日ほどで手に入り始めたが、早朝六時から並んでも、長い行列のため手に入ったのは半分だけであった。

シェルパは七二年のダウラギリⅣ峰以来何度かのヒマラヤ行をともにしているペンバ・ノルブをサーダーに、顔見知りを中心に集めた。しかし、冬期ヒマラヤ登山の場合は、秋との間隔が短いことと気象条件が厳しいことから、ヒマラヤの高峰における登山意欲が失せたようなシェルパは雇うべきではない。

カトマンズにおける出発準備を終えた十一月六日、山田、名塚を残してバス、トラックでポカラに向かう。秋のトレッキング・シーズンのまっ盛りとあって外国人トレッカーの数が物凄い。

外国人トレッカーに付けば、楽をしながら最低でも往復一〇日から一五日間ほど稼げるが、登山隊は片道だけの八～九日間のため、一日四〇ルピー位では敬遠されてしまう。約百七十名を必要とするのに、本隊出発の朝集まったポーターは五十四名のみ。

十一月九日、第一陣星野総隊長他十二名が出発。翌十日には百十六名のポーターとともに宮崎副隊長ら五名が出発。ところが第一日目の幕営地であるヤンザの部落で、二十二名のポーターに逃げられ、しかもそのうち一名は自分で担いだ三十余㌔の米を持ち逃げする始末。

十五日、マチャプチャレBC（三八〇〇㍍）に到着し、高所順応トレーニングを開始する。隊のBC選定と隊荷の集結に二日間を費やす。

十八日、南アンナプルナ氷河左岸の約四二〇〇㍍の草原台地にBCを設営。この日、最後の第三陣も到着する。BCは最高に日当りの良い氷河横の草原。眼前には目指すアンナプルナ南壁がそびえたつが、毎日眺めていると、だんだんと傾斜がゆるく見えてくる。大岩壁に負けない精神力がしだいに培われてくるようだ。

二十日、前日同様、ほとんどの隊員が本格的高所順応トレーニングでテントピーク方面の五一五〇㍍地点まで達した。翌日、星野総隊長、田中岳連理事長らがこの日BCを下る。

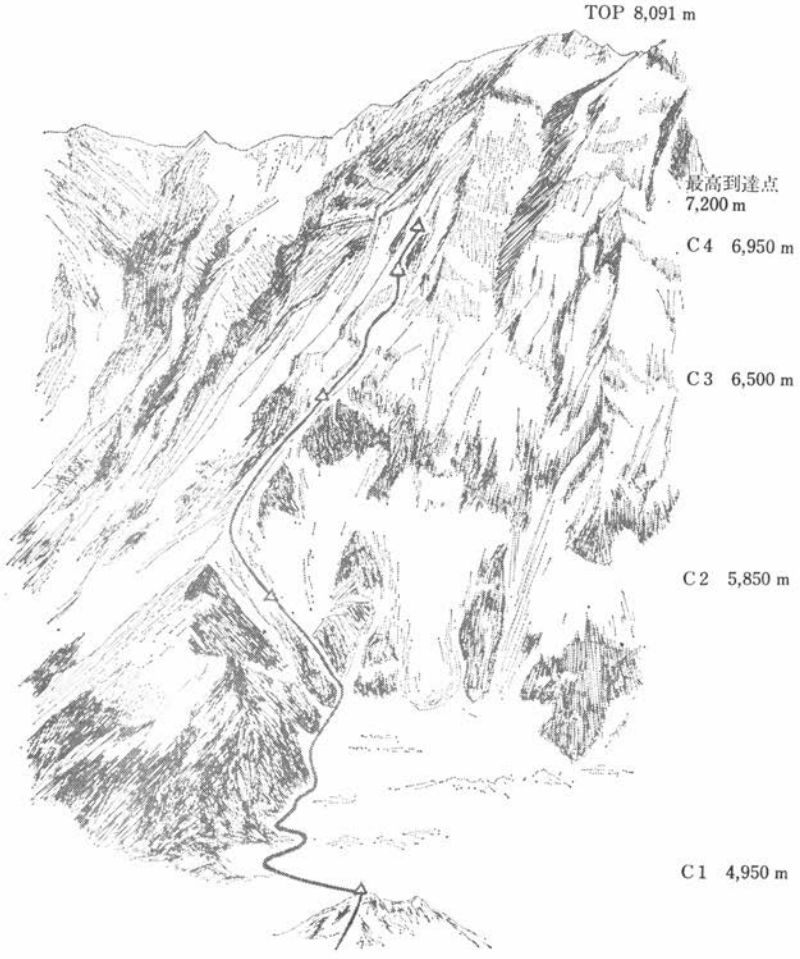
南壁に向けて

二十三日より五〇〇〇㍍を越す高所で泊る順応トレーニングを開始する。標高四六〇〇㍍に二泊、五三〇〇㍍に一泊するが、全員頭痛などの障害もなく、本番準備オーケー。二十七日、山田登攀隊長と阿久沢が第一キャンプ上までのルート偵察に出発。その結果、七〇年のボニントン隊、八一年のイエティ同人隊と同じ四九五〇㍍地点に決定する。

十一月二十九日、安全登山祈願祭。この日を正式なBC建設日とする。シェルパ達は用意してきた四本の木にロープをかけ、一〇八枚の経文入りの布を吊す。祭壇を作り、護摩をたく。日本から持参した諸々のお供物が供えられ、カトマンズの仏教寺ボードナートで祈とうしてもらった米やツァンパも皿に山盛りになっている。二人のシェルパによる読経。何度やってもおごそかな気持にさせられる。

三十日、明日からの登山活動にそなえて全体会議。ルート工作、荷上げ等の人員編成の決定や登山開始に当っての諸注意、再確認をする。夜、満天の星は凍りつくような光を投げてはくるが、翌朝の暖かい陽光をも約束してくれる。

アンナプルナⅠ峰南壁ルート図
（1970年のイギリス・ルート）



登山開始。第一キャンプ建設

十二月一日、午前六時半、モーニング・ティー。七時朝食。満を持しての登山開始である。隊員は快調。装備、食糧も各キャンプごとに分けられ準備万端おこたりない。八時半、全隊員、祭壇の前に立ち、護摩を体中にこすりつけ、万感を胸に手を合せ、出陣。

南アンナプルナ氷河はおびただしい岩石におおわれている。ケルンを積み、赤旗を立てて道しるべとする。アイスフォールの中へ入り込む。きれいな自然の造形美ではあるが、数㍍もあるセラックスは崩れやすく、クレバスは数十㍍もの深さで切れ込み、地獄への暗い深淵をのぞかせている。

初日にして四九五〇㍍に第一キャンプ建設

ここは氷河の真中にあるインゼル上端の安全な台地。宮崎、山田、阿久沢を残してBCへ辿り着いたのは、陽も落ちた午後五時過ぎになっていた。BCと第一キャンプの間は三分の二ほどが氷河の岩屑のモレーンの上とアイスフォールであったが、それでも運動靴で歩けるため非常に能率があがる。

五日、五八〇〇㍍地点に第二キャンプを建設し、松永、佐藤、清水が入る。八日（仮）第三キャンプ建設。ここはボニントン隊の第四キャンプに当り、キャンプを一つ省略する展開となる。しかし、その上のルート工作により、とても荷上げ等に適さないことが判明した。

結局、ルートはこれを放棄して一本左の尾根に変更することになってしまった。BCでのルート指示がボニントン・ルートに固執したことや、ルートを現場で見て判断するというルート工作隊の誤りがあった。

十二日、第三キャンプを移動。午前十一時頃から雪が降り出し、新キャンプは建設できず。雪は十四日未明まで降り続き、（仮）第三キャンプで一二〇㌢、第二キャンプで六〇㌢、BCでも二〇㌢の積雪となり、すべてを真白におおってしまった。このため、十三日、十四日の両日は全キャンプとも雪崩の危険が大きく、行動中止。

十五日、松永パーティーは深い雪をかき分け、雪崩を落しながら第二キャンプまで下る。第一キャンプの宮崎ら七名は第二キャンプの途中まで、トレールをつけに登り、上部キャンプ隊員の下山に備えた。

山は強風がゴーゴーと鳴り、山頂からは雪煙を吹き上げ、吹き下ろしてくる。山容は一変し、茶色に蛇行していた南アンナプルナ氷河も真白になったが、その中でもアンナプルナ南壁の大岩壁だけは茶色の山肌の色を変えることなく、ごう然とそびえたっている。あれほどの雪も切り立った南壁には付着しないようだ。

その南壁の上部からは「敵機来襲」と私達の呼ぶ「ブーン」という落石の音が絶え間ない。すさまじい勢いで落下するが、私達のルートからはかなり離れており、見物気分で見たり、聞いたりしていられる。しかし、その恐ろしさは書き表わせないほどである。

十六日、上部キャンプにいた隊員はすべて第一キャンプに集合し、BCからも福島以外がマージャンまで持って全員登って来た。翌日は全員休養。最初の調子であれば十二月中の「決着」も可能だ

ったであろうが、冬のアンナプルナ南壁はそう簡単にはそれを許してはくれなかった。しかし、私達には焦りも、悲愴感もない。多少の不調者はあっても極めて意気軒昂であった。

十八日、山田、三枝、シェルパ一名がルートの先端に立つべく第二キャンプに入り、名塚もシェルパ二名を連れて新第三キャンプ建設のサポートに第二キャンプへ入る。残る隊員は荷上げにまわる。

第三キャンプ建設。六五〇〇㍍

山田パーティーは先日の新ルートの最高到達点に着き、午後五時テントを張る。前に張った固定ロープは数日のブランクで青い氷の下に沈み、その掘り起しにピッケルを振り続けた。新田ドクターは第一キャンプに持ち上げた眼底検査器具で全員の検査。数人に眼底出血が見られた。

寒気、落石、大雪に阻まれて

十二月二十日、いよいよ大岩壁にアタック開始。これより先は雪の障害は少なくなり、大寒気と烈風との戦いになるはずである。標高は七〇〇〇㍍に達し、核心部の登攀。いよいよ頂上へと迫る。

二十二日、朝からアンナプルナにはイヤな感じの雲がかかる。今にも雪が降り出しそうである。どうも変だと思っていたら、東京から知り合いの女性二名がBCを訪ねてきた。アンナプルナは豊穣の「女神」である。おこぜであっても女性訪問客は喜ばないらしい。この日、第四キャンプへのルート工作は六八〇〇㍍地点に到達。以後悪天候続く。

二十三日、肝心な七〇〇〇㍍付近から上に雲がかかり、ルート工作に手間どる。しかし、アイゼン片方を落したシェルパを残して、松永、佐藤が第四キャンプ地点到達。六九五〇㍍。

十二月二十四日、第四キャンプが建設され、松永、名塚、佐藤が入る。大きな雪庇の下だ。夜はBCからクリスマス・ソングを流す。翌二十五日、BCは晴天だが、第四キャンプから上は雲がかかり、寒い。ルート工作隊はテントを出るが、すぐに戻ってしまい、テントの中で身体を温めてまた登る。進まない。この日の工作は六〇㍍だけ。用意した宇宙服こと羽毛のつなぎは先端に上げてない。午後からBCも雪に見舞われる。荷上げのシェルパが右手指三本を凍傷にやられる。

二十六日、ルート工作隊は第四キャンプを出てはみるが、太陽の恵みを受けられない彼等は寒さのためにすぐテントに戻ってしまう。どうにも寒くてガマンが出来ないのだという。

しかし、厳寒、烈風は百も二百も覚悟の上で、冬の八〇〇〇㍍の岩壁を登りに来ているのだ、と叱咤する。技術的問題ではなく、寒さだけの問題である。佐藤が手の指に凍傷をおう。第二キャンプから第三キャンプへ荷上げに向かった宮崎はクーロアールの中で雪崩に襲われるが、ロープのおかげで無事。しかし、それを見たシェルパはクーロアール基部に荷物を置いて逃げ帰ってしまう。

二十七日、ルート工作は山田、阿久沢。三枝はお茶やロープを荷上げする。午後四時二〇分、第四キャンプに戻った山田からの交信が入る。「本日、四ピッチ（二〇〇㍍）のロープを張り終え、七一五〇㍍を突破した。しかし、下る準備をしていると三～四〇㌢ほど

の石が二～三個、急な雪壁を吹っ飛んできて、そのうちの一個が山田の右ヒザの上に当った」という。痛みとしびれで一瞬骨折か？と思ったというが、何とか動けるので、キャンプに帰り、羽毛のつなぎを脱いで調べると傷口は横に四～五㌢パックリと口を開き、骨や筋も見えているという。応急手当をさせて、明日下ろすことにした。

ルートがやっと延び始めた矢先のエースの負傷は痛い。なんといっても山田の前線での活躍がそのままわが隊の成功、不成功を左右するのである。

十二月二十九日、松永、名塚によるルート工作も、前々日の到達点より一ピッチのみで終ってしまう。約七二〇〇㍍。

十二月二十日以来、あまり良い天気ではなかったが、三十日より雪が本格的に降り出す。しばらく様子を見ることにしたが、しだいに大雪の様相を呈し始めたため、年が明けた一月一日より、雪崩におびえながらのBCへの一時撤退を開始する。

一月三日夜になり、全員がBCへ集結。雪は一月五日まで降り続き、BCで八〇㌢の積雪となる。好天は戻ってきた。しかし、雪崩の危険性はますます増大している。作戦としては、この好天期は待ちに徹し、次の悪天をやり過ごして登山を再開することとした。

全く太陽が顔を見せず、雪が降り続く日ばかりであったのが、やっと朝・昼が快晴、午後から曇っての小雪も、夜になると星が輝くといった普通のパターンに戻ってきた。読書、マージャン、トランプ、花札に明け暮れるが一月十三日より登山を再開することになる。食糧、装備の関係、そして一番肝心な隊員の精神的、体力的な面からも二週間から三週間が限界と考え、一挙に攻めることにする。

再び頂上を目指して

一月十三日、BCでの約一〇日間の休養は体力的な回復は多少あっても、登山開始からすでに一カ月半が過ぎている。精神的には辛い時期になり、投げやりな気分にならないとも限らない。そのためにも早期結着の必要がある。気を引きしめての再開を全員で誓い合い、第一キャンプに向かう。

しかし、BCと第一キャンプ間のアイスフォール帯ですら、クレバスはさらに大きく開き、今までのルートを変える必要が出てきた。シェルパ一名がクレバスを飛びそこねて転落負傷。幸先が悪い。

第一キャンプ～第二キャンプ間のクレバスに架けてあったワイヤーばしごは広がりに耐えられず切れ落ちている。隊員、シェルパ八名はクレバスや深雪に阻まれ第二キャンプ入りが出来ずに第一キャンプへ戻る。二週間のブランクは氷河の様相をだいぶ変えてしまったようだ。

一月十六日、第三キャンプへの移動も深雪、雪崩の危険のために胸までのラッセルでトレール付けのみ。「あと二週間、あと二週間」と念仏のように唱えての上部キャンプ入りも空しく日が過ぎていく。

十七日、阿部、三枝が第三キャンプ入り。武田とシェルパ五名が荷上げに向かう。下山中にブロック雪崩の直撃を受け、シェルパ二

名が負傷。夕刻やっとのことで第二キャンプへ戻る。ケガによる人員減もさることながら、彼等と他のシェルパに与えた精神的ショックのほうが私達にとっては痛かった。

十八日、阿部、三枝が第四キャンプ入りすべく登るも、深雪ではかどらず、十一時頃から降雪が始まり、中間部で雪崩が出始めたために断念して第三キャンプへ戻る。シェルパ三名が第三キャンプ入りのため向かうが、一名は昨日の事故でおじ気づいてしまい、頭が痛い、といって下って来てしまう。いよいよ心配していた事態となる。

登山中止を決定

一月十九日、前日からの雪は止まず、第三キャンプで六〇㌢、第二キャンプで五～六〇㌢の積雪。終日テントの中でシュラフにもぐる。そしてまさに断腸の思いで「登山中止」を決断する。結局、昨年暮れの最高到達点七二〇〇㍍にまでも到達し得なかった訳である。

隊員、シェルパ各一名の凍傷、再開後のシェルパのクレバスへの転落負傷、シェルパ二名のブロック雪崩による負傷などで、荷上げ、登攀要員が絶対的に不足し、これに悪天候が追い打ちをかけるかたちで、昨年暮れには気を楽に構えていられたものが、再開後は全く打ち砕かれてしまった。

隊長としての力不足、一市井登山家としても力不足をはっきりと認識させられてしまった訳である。私は胸の芯まで凍えるような寂寥と口惜しさを味わいながら山を下った。

予想外の冬の大雪に阻まれたとはいえ、数多くの友人をヒマラヤや日本の山で亡くし、私自身もヒマラヤの山中で凍傷にやられたり、雪崩とともに墜落し、九死に一生を得たりしながらの登山人生の中で、それらを差し引いても幸運な人生を歩めて来たと思っている。その私自身の口から、このアンナプルナという八〇〇〇㍍峰の大岩壁を冬期に登攀しようという企てを中止するというのは辛いことであった。

われわれが予想した冬のヒマラヤ登山とは様相を異にし、強風と寒気はあまり感じられず、あまり降らないであろう、と思っていた雪が「大雪」として私達を襲ってきた。しかし、まだまだ冬のヒマラヤ登山が少ないとはいえ、雪のことも注意を払うべきであったであろう。私達の側の数人の冬の経験だけで、アンナプルナの南壁のすべてを判断した甘さもあった。

失敗の原因を認識したいま、私はそれらを克服することで成功させ得ると考える。一九八六年～八七年の冬にもう一度やり直してみるつもりでいる。それには隊長自らが頂上を踏む覚悟が必要であろう。

△記録概要▽

隊の名称　群馬県冬期アンナプルナⅠ峰登山隊一九八四～八五

活動期間　一九八四年十二月～一九八五年一月

目　的　アンナプルナⅠ峰南壁の冬期登攀

隊の編成　総隊長＝星野　光(51)、隊長＝八木原圀明(37)、副隊長＝宮崎　勉(36)、登攀隊長＝山田　昇(34)、隊員＝松

永幸雄(36)、阿部　源(31)、名塚秀二(29)、清水人志(29)、武田芳政(28)、木村文江(28)、阿久沢芳雄(27)、三枝照雄(26)、佐藤光由(23)、福島光男(36)、医師＝新田安紀芳(29)

行動概要　十一月二十九日南アンナプルナ氷河左岸にBC建設（四二〇〇㍍）、十二月一日登山開始、第一プキャン建設（四九五〇㍍）、十二月五日第二キャンプ建設（五八五〇㍍）、仮第三キャンプ建設（六四五〇㍍）、ルート悪く変更するも悪天。十二月十九日第三キャンプ建設（六五〇〇㍍）、十二月二十四日第四キャンプ建設（六九五〇㍍）、十二月二十九日最高到達点（七二〇〇㍍）、一時BCに撤退し、一月十三日再開、一月十九日第三キャンプ上まで登山中止。

報告書　ANNAPURNA 8091
SOUTH FACE—BRITISH ROUTE '84~85



K 7 初登頂（一九八四年）

中村純二
武中誠

東京大学スキー山岳部並びに東大山の会（OB会）では、これまでバルトロカンリ、キンヤンキッシュ、アラスカのヘス、チューレンヒマール並びにシヴリンへ五回の遠征を行なってきた。そして今回はシヴリン北壁のあとを受けて、手応えのある岩峰K7が目標として選ばれることになり、遠征ごとに継続してきた学術調査も併せて行なうことに決った。

当初、計画は永田を中心とする若手OBと現役部員の間で進められたが、山の会及び大学側として、誰か責任者に参加して貰いたいとの希望が出てきたこと、さらに参加予定であった遠征経験者が参加できなくなったこと等のため、当時スキー山岳部長であった中村が総隊長として加わることになった。

さて、ヒマラヤの氷河調査はこれまで東のネパール地域で行なわれ、西のカラコルム地域ではほとんど行なわれていない。この際半砂漠地帯のカラコルムにおける氷河調査も主な遠征目的に加え、名古屋大学水圏科学研究所の協力を得ることになった。

一九八四年十二月二十四日、パキスタン政府からK7の入山許可もおり、大学側の派遣本部や後援会（会長安芸皎一）の組織も整った。しかしタクティクスをつめていた段階で、K7南西稜をルートにとった場合、人数不足で時間切れとなる可能性も出てきた。氷河調査を行なうには氷河上を歩くことになり、どうしてもアンザイレンの相棒が必要である。それまで高所医学調査の松田、千葉に氷河での協力を期待していたが、若手は六名とも登攀隊員に繰り入れたほうがよいとの結論に達し、冬山や部の歓迎山行にも参加していた中村の妻が急拠調査隊員として加わることになった。

最終的にメンバーは八名、総隊長の中村と妻あやが氷河調査を担当、他の六名が登攀を行ない、OB三年生の永田東一郎が隊長、これにOBの三谷英三と医学部の千葉厚郎、現役の神沢章、武中誠、それに医師として医学部院生の松田道行が加わることになった。

日本でのすべての準備を終って、先発隊四名は六月一日パキスタン入り、猛暑と飲料水のためか全員下痢や発熱にやられたが、一週間の間に現地の事務処理や物資調達をなんとかこなした。本隊四名は六月八日ラワルピンディ着。六月十日朝、大型バスに全員荷物とともに乗り込んで、ギルギット経由スカルドゥに十一日到着した。ここからジープとトラクターでインダス河支流のフーシェ谷に入り、マチュルで七十八名のポーターを雇傭、リエゾン・オフィサーのチャンゲス大尉、メイルランナーのイバラシヤ、およびコックのメルバンシヤとともにキャラバンを開始した。私どもは高所ポーターを利用しないので、ベースキャンプに留るのは十一名である。かくして六月十九日、五日間のキャラバンの後、待望のBC予定地に到着した。

BCはチャラクサ氷河四四〇〇㍍地点。夏には高山植物が咲き乱れ、蝶が舞い鳥が囀る別天地であった。まわりを取り囲む針峰群の壮大な風景も素晴らしかった。

K7初登頂の記録

武中　誠

最後の村フーシェからマッシャブルムに別れを告げチャラクサ氷河へと折れると、K7が眼に飛び込む。頂上から南西に落ちる尾根は日本で何度も食い入るようにして写真で見た馴染みの姿。五段の階段状、しかし段の間は三〇〇〜五〇〇㍍の垂壁が立ちはだかる。これを非力な、しかもヒマラヤ登山には全く素人のわれわれが登る？　登攀隊長の永田が苦心の末作ったタクティクスの結論は「不可能」だった。

K7――過去四カ国六隊の挑戦は、スイスのボリンダーをしてミステリーゾーンと言わしめた複雑な地形のため各隊異なるルートを試みては敗退に終っている。

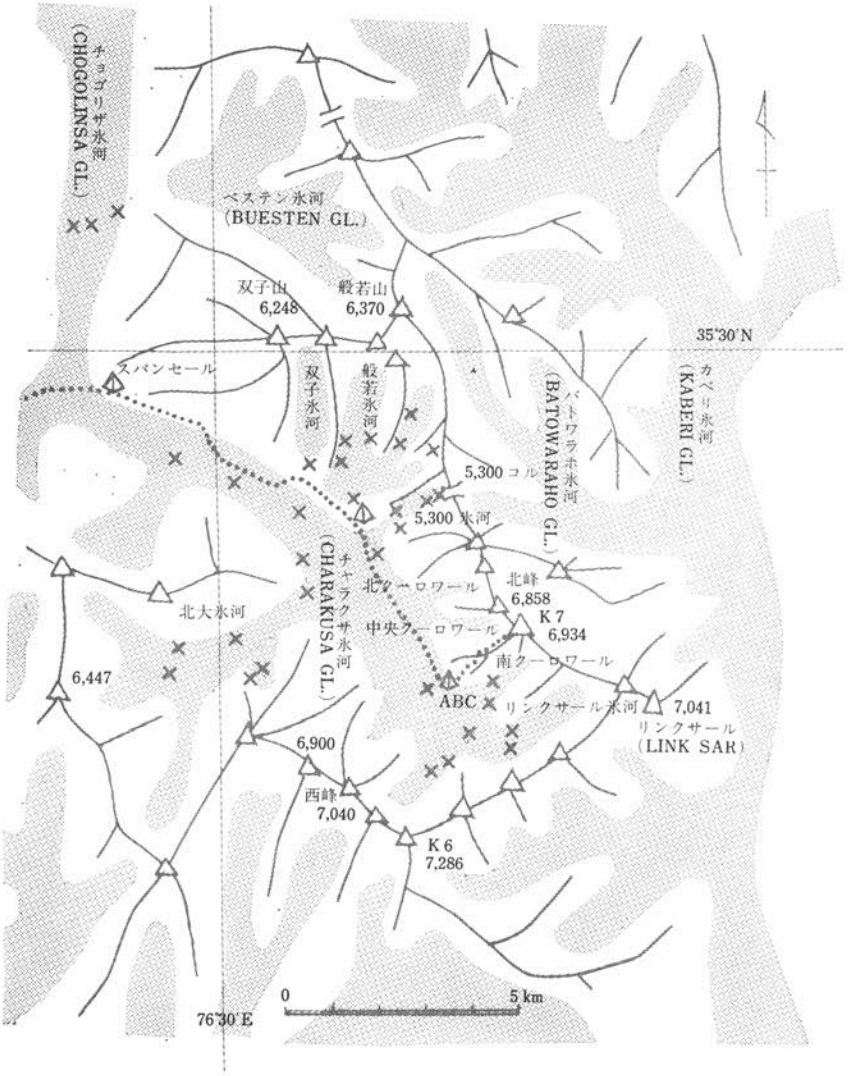
一九七六年初めてK7に挑んだ福岡GCC隊は、はじめカベリ氷河側から攻めたが断念。チャラクサ氷河側に転進し、北クーロワールを試登。翌七七年亜細亜大隊は、チャラクサ氷河側からK7とリンクサールとのコルにつき上げる南クーロワールを登ったが、コルより上七〇〇㍍あまりある岩壁に阻まれた。八〇年イギリス隊は南西稜左の上下が切れた氷河、中央クーロワールを登り、われわれが「城塞」と名づけた大岩壁下まで。八一年スペイン隊の挑戦。八二年鵬翔山岳会は遠く北にある五三〇〇㍍のコルから主稜線に取付いたが主稜線の途中で断念。そしてわれわれが入る二カ月前に悪天候をおして挑んだオーストラリア隊は、亜細亜大と同じ南クーロワールにルートをとったが敗退した。

K7――なぜわれわれはこの山を選んだのか

国内での岩登り中心の志向をヒマラヤでぶつけてみたかった。この点四年前、部の若手OBがシヴリン北壁を成功させたことは、部員に大きなインパクトを与えた。永田は手応えのある未踏峰を主張した。さらに全員高所は未経験であるから高さの問題、休暇の都合などさまざまな条件も考えて、K7が第一候補に上った。

ルートの選定については何回も討議が重ねられた。幸いにも過去日本隊が三隊も入っており、付近の山を登った北大隊、K7偵察を行なった京都の須藤氏からも、御好意で写真、資料を送って頂いた。これらの情報を厳密に分析し、地名を細かくつけてタクティク

スを練り上げた。鵬翔隊ルートは主稜線上が長過ぎる。福岡隊ルートとイギリス隊ルートは、上部の懸垂氷河が崩れる可能性があり極地法では危険が大きい。亜大隊ルートは主稜線のコルから上の見通しが立たない。コルからK7氷河に下りる案も、BCとの交信が不可能となるのが問題であった。そこで、一見難しく時間もかかりそうに見えるが危険の少ない南西稜が取り上げられた。写真を分析してみると、岩壁にくい込むルンゼが数本ある。これらに「中央岩溝」「左岩溝」と名をつけて、最終的に現地で偵察後、可能な限り利用もするが、タクティクスとしては南西稜を末端壁から取付くルートを予定することになった。



装備はこのタクティクスに基づいて、固定ロープ六五〇〇㍍、ピトン、ボルト合計四五〇本などが用意された。たかだか六〇〇〇㍍の山の、六人二カ月の登攀活動では前代未聞の多さではなかろうか。他にも岩、氷、雪のあらゆる装備を持って行った。フレンズ、ナッツ類、ボンボン、各種アイスハーケン、スノーバーなどなど。またわれわれが「城塞」と名づけた岩壁はワイドクラック、チムニー登攀が考えられ、特製の大型パイプチョックも準備した。もちろん各自EBシューズも用意した。

BCに到着した翌日の六月二十日から二十四日まで全員で偵察と試登を行なった。さすがに末端壁のスケールは大きく、「これを登るのではとても時間が足りない」と実感される。これに対して中央岩溝は、傾斜五〇度ほどの雪と氷のつまったゴルジュ状ルンゼである。幅は一〇〇㍍ほどだが、中央に樋状のラビーネンツークがあり、小規模の雪崩はすべてここを流れるようだ。落石もそれほど見当らない。「よし使える」一気に一〇〇〇㍍は稼げそうだ。ただ、これを登りつめた先はどうなっているのか皆目わからなかった。

二十三日、岩溝入口の氷河上標高四六一〇㍍に前進ベース・キャンプを建設。二十五日、三谷と私とでルート工作を開始する。中央岩溝は二〇〇㍍ほど簡単な雪壁を登るとチョック・ストーンをもつ氷瀑が出てくるが、これを右岸寄りから越えるとまた容易な雪面となる。この氷瀑は後日融けて二〇㍍位の完全な滝となり、登り下りともシャワークライムをさせられ消耗であった。二日目には早くも第一キャンプ予定地（五三〇〇㍍）を通過、三日目には三番目の氷瀑の下（五五三〇㍍）までザイルをのばした。たまっていた力が爆発した。

交代した千葉、神沢の工作隊は、悪天もあったが七月四日、長かった中央岩溝を抜け、支稜上の台地（五七一〇㍍）に達して第二キャンプ予定地とし、さらにルートをのばし続けた。第二キャンプ予定地からは氷の帯をうまくつなげ、五日、ついに南西稜に出た。工作が速いので荷上げが追いつかず、数日は荷上げとルート整備のみを行ない、八日に第二キャンプを建設、その後の悪天をやりすごす。

七月十一日から調子のよい永田と私とでルート工作を再開。南西稜上の雪庇の下をトラバースしたところで六〇㍍ほどの岩壁につきあたる。今回の登山で初めてピッケル、バイルを捨て、素手で乾いた岩登りをする。トップの永田はこの世でこれ以上楽しいことがあろうか、といった顔でザイルをのばしていく。クラックにはフレンズの一～二番が良く効き、ビレイピンに打ったV字アイスハーケンの赤色が目に焼きつく。五㍍ほどのスラブをボルト連打で抜け、チョック・ストーンをかかえたチムニーを越すと、広いプラトーに出た。プラトーからクラックがきれいに走る垂壁を左に大きく巻いて、城塞取付の台地に達する。

ここに第三キャンプ（六〇五〇㍍）を建設し、いよいよ十五日から城塞攻略。工作はエル・キャピタン帰りの神沢と、垂直に強い器用な千葉のパーティーだ。神沢は壁をやりたいと遠征に参加したのだから、まさにうってつけだった。城塞は二〇〇㍍ほどの垂壁。下部一五〇㍍はかぶりぎみのチムニーからクラックへ、一カ所大きなハングを越える。

ハング上一ピッチまでは幅は異なるがクラック登攀で、マイクロ

ナッツから特製の大型パイプチョックまでのすべてを駆使し、前進用ボルトは一本も打たずに登った。上部五〇㍍は段になったスラブとなり、ボルトに頼らざるを得ない。二人はわずか三日間で城塞を突破した。

十八日、悪天周期に入り全員BCへ休養のため、いったん下山。皆表情は明るかった。あれだけまわりの人間に不可能視され、自分たちでも、登頂ということより、やれることがやれれば、楽しく登ることさえできたらと納得させて来たのに、われわれの取付いた中央岩溝が幸いにもうまく南西稜につながっていたおかげで、後もうひとふんばりで大きな目標が手に入るのだ。この興奮をおさえることはできなかった。

最後のBC休養ということで、皆思い思いに過ごした。家に手紙を書く者、読書にふける者、音楽に聞き入る者、しばらくは見ないであろう草花にも心を和ませた。夜は残り少ない酒で宴会をする。高度の影響か少量でも酔える。針峰に囲まれた氷河に山の歌が響きわたる。

七月二十四日、ルート工作を再開、城塞上の第一ステップに入る。下から見上げた感じでは容易な雪稜に見えたのだが、リッジ上は雪庇のため歩けず、左側の氷壁、雪壁をぬうようにパズルのようなトラバースを強いられた。ダブルアックスの長い水平トラバースはいやらしく、一日一ピッチから二ピッチの遅々とした進み工合になった。このため第一ステップの頂稜を巻き終り、肩とのコルの狭いキノコ雪上に仮C4(六二〇〇㍍)を建設したのは三十一日になった。この間高度はほとんど稼げていない。余裕がなくなってきた。

一方、城塞での荷上げも難行を窮めた。壁のピッチの切れ目ごとに位置し、滑車とユマールでフォールバックにつめた荷を上げる。これをつるべで五、六ピッチ行なった後、第一ステップのトラバース。このトラバースは、墜ちればユマールとはいえ墜落距離もあり、復活するのもしんどい。荷上げも神経をすり減らす作業だった。

工作は急がれた。八月三日には肩(六四九〇㍍)に第五キャンプを設営、頂上攻撃の最後の基地となる。同日のうちに三谷、神沢の工作隊はキノコ雪帯を突破、頂上壁の取付きまでザイルをのばし、最初のクラックを一〇〇㍍ばかり登った。翌四日、永田、千葉にメンバーを交替し壁に挑む。傾斜の強いミックス壁。クラックに続くチムニーに入った永田はじりじりと進む。頂上岩壁はK7の最後の砦としてわれわれの前に立ちはだかる。この日は二ピッチのびただけ。

五日、これまでルート工作は二人でやってきたのを初めて三人に増やし、神沢が工作メンバーに加わる。頂上岩壁最初の前衛峰は右から巻き、右上へ右上へと進む。ピナクルが乱立し、どこが頂上なのかさっぱりわからない。

六日、千葉に代って三谷が工作隊に入る。二ピッチのばすと雪面となり、雪のピーク直下に来た。三ピッチ目ピークに立つ。しかし、目指す頂上ではなかった。コルをはさんでまだまだ岩場が続いている。コルにスノーバーを埋めてアップザイレン。それにしても幸いなこの好天続き、もう悪天周期に入っても不思議ではない。しかし、ここで悪天につかまってしまっては成功は望めなかったであ

ろう。疲れてはいるが皆の士気も押せ押せムードであった。

七日、コルから岩場左の岩まじりの雪壁を左上。続く雪壁を左へトラバースする。K7双耳峰の北峰が自分たちより低い。本峰は北峰より八〇㍍高いだけだから、後もうわずかのはずである。

八日、永田が下って私が工作隊に入る。高度計はあまりあてにならなかったが、北峰との比較で頂上が近いことは確実である。ふだんより一時間早く起き登頂に備える。ただすでに南方の空には雲が増えつつあり、好天の日に見えていたナンガパルバートはもう見えない。

神沢と私とで昨日の最高到達点までユマーリングを急ぐ。三谷は国旗とトランシーバー、それにビヴァーク用具を持ち、少し遅れて来る。疲労と高度で、はがゆいほど身体の動きが鈍い。一五ピッチほど登り、工作を開始したのは十二時近くだった。

一ピッチ目、神沢が露岩を越え雪面に消えて行く。ほぼ五〇㍍のびたところで私が進む。ふかふかの不安定な雪で、足を上げても進まない。登攀具が入ったザックを上げてもらう。二ピッチ目、今度は硬い雪壁となりダブルアックスで左上する。三谷が追いついて来た。頭上の雪庇を左から巻くようにしてルートをのばす。雪庇の上は頂上なのだろうか。トップをかわるがわる交代して四ピッチ目、神沢が雪庇の切れ目から稜線にとびだした。頂上が見えた。八〇㍍ほどゆるく屈曲した雪のリッジの一番奥から先はもう何もない。はやる気持を抑え、私がリッジ途中までザイルをのばす。興奮した声がBCと第五キャンプへトランシーバーで運ばれる。

そして午後三時四五分、トップの三谷がついに六九三四㍍の頂点に立った。初めてサルトロ・カベリ側の山々が見え、K2やチョゴリザが穏やかな夕日に輝いて私たちを祝福してくれる。いま、夢にまで見たK7の頂が自分の足下にある。K7氷河も手をのばせばとどきそうだ。

夕暮れがせまってきていた。下降の準備を始める。神沢が降りて行き、私の番がきた。いま一度心を静かにして三六〇度、山々を見渡す。山々は優しかった。そしてすべてのものに対して感謝の念がこみ上げてきた。

翌九日、永田、千葉、松田も登頂を果たし、ここに全員登頂のパーフェクトゲームは幕を閉じた。

△記録概要▽

隊の名称　東京大学スキー山岳部・カラコルム学術登山隊（一九八四）

活動期間　一九八四年六月～九月

目　的　K7峰（六九三四㍍）南西稜登攀と氷河・気象・高所医学調査

隊の編成　総隊長＝中村純二(60)、隊長＝永田東一郎(25)、隊員＝三谷英三(23)、神沢　章(20)、武中　誠(20)、千葉厚郎(24)、医師＝松田道行(25)、調査＝中村あや(55)

行動概要　六月一日と八日に出発。

六月十九日ベース・キャンプ（四四〇〇㍍）設営。南西面中央岩溝をつめ稜線にC3。以後南西稜登攀、八月八日、三谷、神沢、武中が初登頂。九日永田、千葉、松田が第二登。この間中村らは氷河調査。八月十五日ベー

ス・キャンプ撤収。

報告書　東大カラコルム学術登山隊編　K 7 報告書　一九八五年十月発行予定

学術調査　中村　純二

詳細は前記報告書に譲る。ネパールの氷河とカラコルムの氷河について氷河氷を分析の結果、前者の降水は海水起源、後者の降水は陸水起源であることがほぼ明らかとなった。またカラコルムは乾燥地帯に属するので、融雪量が大きく、氷舌や氷河平衡域の標高の高いことも確かめられた。

高所障害については、入山時標高四〇〇〇㍍付近で全員例外なく、軽度の障害を受けたが、その後の馴化は全く順調に行なわれた。



会心のヒマラヤ

ザンスカール ラハーモ登頂

――一新制大学の初登攀考――

村井葵

頂き

歩一歩、確実に氷雪の山巓が迫っていた。けがれなき処女峰である。心身は頂きの一点に集中し、抑えようもなくたかぶっていた。ステップが大きすぎる。ユマーリングしながらからだを持ちあげると、そのたびに虚空に浮き出てしまう。トップで攀じた仲間の興奮が読みとれた。迷いはない。間違いなく私たちは夢に見つづけていた麗しいピークに立てるのだ。あと数歩で三〇〇㍍の壁は尽き、頂稜に跳び出る。突然視界は展け、痩せたリッジを、雪庇を気遣いながらたどるとそこはもう天上界から舞いおりてくるラハーモのステージなのだ。頂きに息づく神の霊波がからだに伝わってくる。うしろを観ると紅一点の楠田が歯をくいしばって頑張っている。彼女の登頂もまず間違いない。時計をみる。まだ八時半だ。早すぎたのではないか。いや別段慌ててはいない。昨夜遠藤との打合せで十一時を引き返し点と決めていたので、間に合うように夢中で登っただけだ。これで三日かけて全員が登頂できることになる。『五輪の書』の「勝つと思うな！　斬られる。負けると思うな！　これまた斬られる。唯、無心になれ！」という武蔵の観想がよぎった。まさにその境地ではないか。

雲れている。雲一つない。しかし三時になればこの独立峰に雲が湧き、必ず定期便の雪がくる。ここ数日の天気の癖なのだ。でも充分間がある。心は豊かだ。アタック・キャンプは氷壁に隠れて見えないが、その下には険悪だったヒドン・クレバス帯が広がっている。私たちを手こずらせたところだ。高差四〇〇㍍のその魔界を苦労して乗り越えてきたのだ。壮絶なその斜面はドゥルング・ドゥルング氷河に融合し、いぶし銀に光る龍の背は、見事に蛇行して四〇㌔彼方のベース・キャンプに流れこんでいる。遥かヌン、クン、ブラマーが見渡せる。

美しい。荷上げは辛かったが、若者たちは未知にわけ入る好奇心

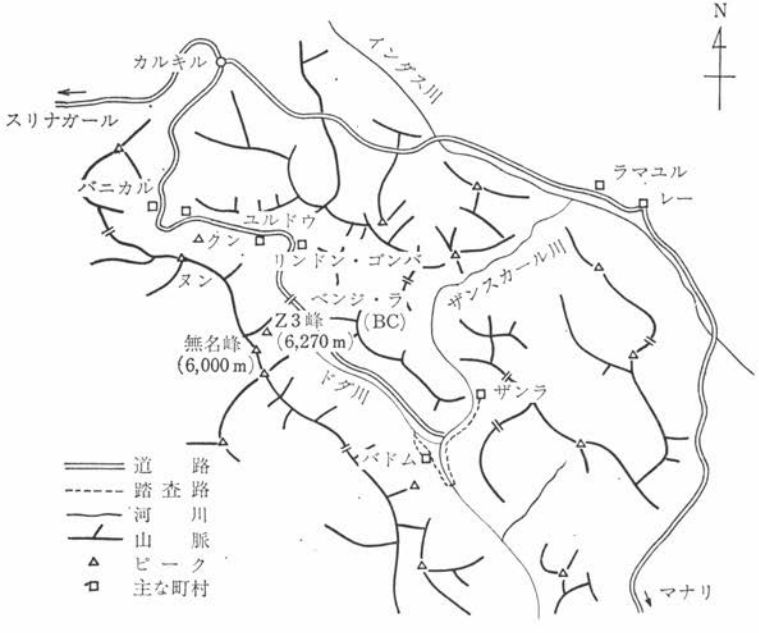
に胸躍らせたに違いない。好奇心は辛さを克服してまだ余りあった。ときとして若者は持てる以上の能力を発揮するものだ。原初の本能に火がつき、燃え始めたときその現象が起る。舵とり役の私としては、そのパワーがチームの枠からこぼれないように、違った判断をくださないように、そしてまた不安を取り除いてやるようにするだけでよかった。若者らしいチームワークの底力を見た。九人、一人ひとりが会心の行為であったはずだ。自我に目覚めた心の山登りであったはずだ。九人のうち八人がヒマラヤは初見参であったが、六〇〇〇㍍の処女峰とチームの意思が調和した理想の山登りといえたのではあるまいか。

起

さて話を戻そう。初登攀の自慢話をしてもあまり意味はない。結果はドラマチックでも、それは皮相的なものでしかない。結果よりも、それを産み出す過程を詳らかにした方が、面白みはないが得るものはある。成功は点でしかない。その底辺に重いものがなければピラミッドの安定美はのぞめないのだ。それを述べて訓練途上の若者の志気に役立てばと思うのである。

私と独協のかかわりから説明せねばならない。学園は長い歴史を持つが、大学は戦後十数年を経て創設された新制大学である。最初の学長は天野貞祐であった。私がローツェ・シャールから帰ったころ草加に大学が生まれ、山岳部が起った。早稲田の仲間が独語の講師（現在教授）をしていて初代部長でいたことが縁であった。新しく何かを始めようとする群衆心理は異常と思えるほど情熱的なものだ。私は否応なしに渦の中に巻きこまれていった。冬の済州島の漢

ザンスカール概念図



拳山三角峰（初登）を登りに行ったり、ヨーロッパの山に遊んだりはしたが、憧れはやはりヒマラヤの難峰であった。若者たちはよく私を訪ね、酒を飲み、夢を語った。

理想の山の発見

「ザンスカールにいい山があるゾ！」といってこうのとりが吉報をもたらしたのは四年前（八一年）のことであった。当時山岳部員の遠藤雄悦が仲間とインド、パキスタンの踏査に出、ドゥルング・ドゥルング氷河の最奥部に美しい独立峰を見つけて帰ってきたのだ。私は既に監督の座を降りていた。しかしヒマラヤとなるとそうはいかない。若者たちは足繁く私を訪ねるようになった。かねがね目標の条件として、

①山の容姿が秀麗であること
②未踏のピークであること
③六〇〇〇㍍を少し越えていること
④困難度はあっても危険の少ないこと
⑤できたら明るい健全な山域であること

の五点を挙げていた。写真を観、説明を聴き、それをほぼ満たす理想の山と思えた。氷河をかなり遡行しなければ人の目に触れないことも神秘性が濃く、探検的要素があった。高度に関しては、巨峰のバリエーションが叫ばれている折、いまさら六〇〇〇㍍峰でもあるまいとする声もあり、それは百も承知であった。しかしひとつのチームのステップとして考えたとき、安全登山を全うし、次に備えるために妥当と考えた。六〇〇〇㍍でも参加する者一人ひとりが心の奥底で満足できる山登りであればよいと結論づけた。

不器用かもしれないが、三年間を訓練期間と決め、スケジュールをカリキュラムに組んだ。水も漏らさぬ緻密なものができた。折よく、大学二〇周年事業のひとつとして取り上げてもらおうという大方針も決まった。しかし困った問題が発生する。隊員が揃わないのだ。現役部員が少ないのはさておき、層が厚くなったOBの中でも、社会的諸事情がからんで、あれだけヒマラヤに憧れていたのに、大多数が参加できない立場に変化していたのだ。お膳立ては整ったが、肝腎の料理の盛りつけができないのである。

五部合同隊の結成

独協の若者は知恵を絞って考える。同じキャンパスの野外を舞台にするサークルに広く呼びかけることに思いあたった。ワンダーフォーゲル、ユースホステリングに働きかけ、まず「山連合」を組織し、有志の交流の場を「ユーラシア研究会」と命名した。そこで組織固めと意思の統一が計られた。

空海がもたらした真言密教の源流を探り、チベット系人種の調査をするという目的で、学術踏査班も加えることになる。やがて自転車競技同好会、独協医大ラングラーカントリークラブからも参加の申し出があった。五部合同隊となると性格、思想、目的、行為の違う異分子を統合するのは不可能とはいわないまでもリスクは大きい。山のイロハから始める者もいた。これは全国でも初めての試みである。果たしてうまく行くだろうかという不安はあった。しかし案ずるよりは産むが易し、山岳部がイニシアティブと責任をとることで、順調にチームづくりが整っていった。もちろん、ここに至るまでには紆余曲折があった。協議を重ねた結果、八三年三月、山岳

部監督の酒井勝雄をリーダーにして、正式に「ヒマラヤ委員会」が発足、設置された。

志気の高揚、目的意識の統一、チームの結束、この三本柱を掲げ、富士山、八ヶ岳、谷川岳、戸隠、奥武蔵等のフィールドで、基礎技術、応用技術の修得というカリキュラムが着々と消化されていった。学内合宿の研究会の場では「チベット概要」「インドの神々について」「ラダック登山史」「ザンスカール地域概要」「シルクロード」「ナンガパルバートの研究」「タクティックス」「高山病」「氷河雪崩」「フィールドワークの方法」「高所登山について」等の発表が行なわれた。知らずのうちに盛りあがりができていくのは痛快であった。一年少し前の五月、インド登山財団（IMF）から、無名峰及びZ3峰の登山許可が正式に下り、実現の機運に参加者の瞳は光を増していった。

特殊訓練

型にはまったカリキュラムの消化だけでは短期実力養成は覚つかない。日常生活でも次のことが打合せられた。

①呼吸法の実施（全生活的）
②一二分走の実施（日曜、休日）
③柔軟体操（ストレッチング）
④座禅による集中力養成
⑤各自の自覚による独創的努力

これは登山、学術の両隊に指示された。呼吸は意思の力で変えうる唯一の自律器管である。大量に酸素を取り入れるための肺活量の増大、酸素拡散能を高める肺の周囲の毛細血管の発達を促すトレーニングである。シェルパが行なう腹式呼吸をマスターした。最大酸素摂取量が地上で4リットルの者は、高所で1/7～1/10に落ちることを認識し、その仕上がりぶりを数回の富士山行で実感した。ランニングはすべてのスポーツの基礎であるが、ただ走るだけでは効果はしれている。科学的な裏づけのあるケネス・H・クーパーの一二分走を休日に行なった。三〇〇〇メートルをクリアすることを努力目標と決め、それ以上の者は目標をあげた。女性隊員も含めて、二五〇〇メートルに達することをチームの最終目標とし、一分間、体重一キロあたり四二ミリリットル以上の酸素を消費する基礎体力を望んだ。これは山登りに必要な赤血球中のヘモグロビンの増加、血液量の増加と併せて、心肺機能と筋力の強化を図ることでもあった。からだが異常に硬い者がいたので、全隊員ストレッチングを実施した。未知を怖れない心、ハプニングに動揺しない肝を養うために座禅による意識の集中を試みた。そして、各自の自覚による独創的努力を最も重要視して考えた。

若者は押しつけの強制だけでは発芽しにくい。問答を重ね、アドバイスはしても、自主性に基づくヤル気と創意工夫が必要だ。それが五部合同のチームに力をつけ、理想通りの隊に仕上げる必要条件と思えた。この頃、大学側の責任者、総元締めの三本茂総隊長（体育部長、心理学教授）が決まった。組織の中に鉄骨の芯が通ったように感ぜられた。

トレーニングの成果を筑波大の低圧実験室で確認した。エルゴメーターに乗り、限界の負荷をかけて、最大心拍数、呼吸数、酸素の血中濃度、血圧、呼気のガス分析、運動五分後の心拍数などを調べ、隊員のカルテを作った。完全とはいかなくとも、成田を発つ二

週間前には、体力、精神力、技術、知識、チームワークという必要条件がおおむね充電完了となり、隊の総力が頂点に達するようにした。

しかし、私はこれだけではまだ完全ではないと思っていた。現地で未知の世界に入っていったとき、「危険に対する感覚」をどのように全隊員が感知し、萎縮せずに安全でしかも自由な深い満足感を得る山登りが実践できるかということは、私に課せられた唯一のテーマと考えていた。

念力登山の試み

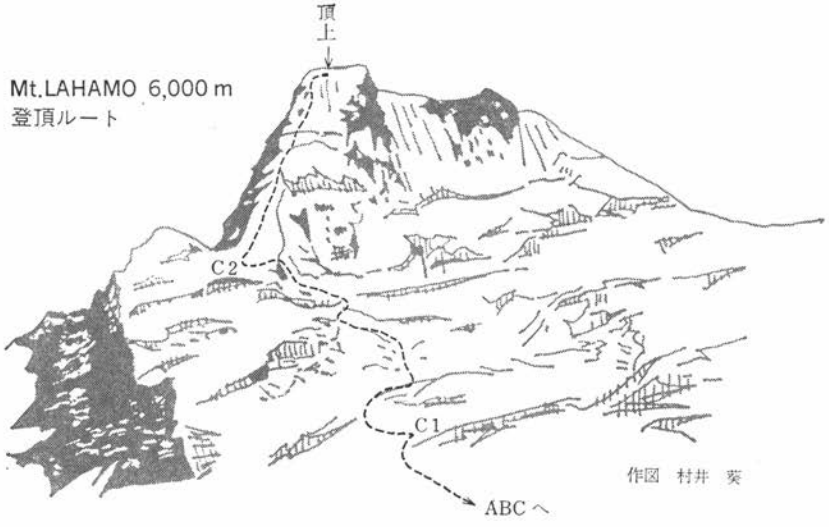
高峰登山に於て、速攻型のアルパイン・スタイルが叫ばれて久しい。個人の心の問題として考えたとき、それは山登りの究極的な本質を追求するものになるだろう。しかしまだ未熟な学生登山者が、これだけに捉われていたのではいつかは失敗する公算もある。学生登山はとりもなおさず教育登山であり、自らをむき出しにした個人主義よりも、安全の比率の高い枠の中で行動する、チームプレイが理想であろう。大自然の驚異に独りの人の力は遠く及ばないからだ。宇宙二〇〇億年、地球を含めた太陽系四五億年、生命史三五億年、人類史二〇〇万年、宗教史三〇〇〇年、登山史二〇〇年、人生八〇年と考えていったとき、その端末に私たちは存在しているにすぎない。しかし、宇宙次元の悠久の太古は、現在の私たちのいのちと密接なつながりを持っているのだ。だからこそ謙虚に慈み深く大自然を見つめねばならない。

学校登山は心を合わせた組織登山しかない。それなりの指導者もいるが、強いチームの結束により安全でしかもかなり高度な山登りが可能なはずである。私たちと同時期に、早稲田のアンデス合宿に同行した前監督の田村修一は「チーム登山にスーパースターはいらない」と言いきっている。この言葉には深い意味がある。特に思想的な面で、たったひとつの異分子が不協和音となりチームのリズムが乱される可能性もあるのだ。心がひとつになり、前向きの矢印が描けなければチーム登山のすっきりした成功はあり得ない。スーパースターを否定するのではない。むしろ一人ひとりの力がスーパースターに近づき、それが協調性のリズムの中に組み込まれたら、チームの強化は著しく増大するのである。それ以上の個の追求は学校で基礎をみっちりつけて、卒業してからやっても遅くないではないか。

さて、独協大学の成果を説明するために話をふたたび登山の場に移そう。

隊長の酒井勝雄以下、仕上げの終ったチームは八月五日、ペンジ・ラ（四四〇〇㍍）のBCに集結する。呼吸法、一二分走の効果があって低酸素の影響はほとんど受けない。特に四十八歳の私は感受性が鈍ったのかと危ぶむほどコンディションは申し分なかった。これにはひとつのわけが考えられた。地球の限界八〇〇〇㍍を飛翔して数千㌔移動する渡り鳥にヒントを得、その驚異的なエネルギーのもとをマイクロ・カプセルに加工して持ってきたのだ。種をあかせば体内にとりいれた栄養をいかに効率よく燃焼させ、高所で血液の循環を正常に保つかという秘薬である。その薬効があったのだ。

スリナガルから一木一草もない不毛で苛酷な山なみを幾つも越えて、車で三日かけてたどりついたペンジ・ラはまさに桃源境であっ



た。遥か天空に次の目標のZ3峰が白銀の輝きを見せ、長大な氷河は豊富な水を湛え、ペンジ・ラを潤している。可憐な花、草を食む牛、水は生命の根源という実感がわかざるをえない。その水をもたらす白い山々はまさに神ではないか。ここに起った密教の源をつきとめたのだ。それは宇宙の気息の中に人を同一化する法でもある。想念のアンテナを鋭敏に働かせていけば、チームと大自然の調和に至る道が開けるはずだ。

氷河の上を一二㌔遡行したモレーンの上にABC（アドバンス・ベース・キャンプ）が設置された。そこで初めて、白いライオンのたてがみを思わせる無名峰と対峙した。予想以上に険しい山容である。小高い一枚岩に座して瞑想する。だんだん私のからだに無名峰がそっくりとびこんでくる感覚が高まってくる。六〇〇〇㍍の白嶺と一体となっていく。登路が読めてくる。そこでのチームの行動パターンがはっきり認識できてくる。念ずる力が天に届いたのだ。ほぼ思惑どおりにC1ができ、クレバス帯をジグザグに切り拓いてC2ができた。

アタック態勢が整ったその夜、私の夢の中に密教界の女神、ラハーモが現われる。ラハーモは鈴が鳴るように澄んだ声で囁く。長い会話の末、全隊員の無事登頂を約束してくれる。全員登頂は私にとって全く予期せざることであった。八月十七日の最初のアタックの日、氷壁にとりついた四人の若者にハンディ・トーキーを通じてラハーモとの会話の一部始終を伝達した。声も嗄れ、疲労の極にあった彼らは、まるで新しい生命をからだに注ぎこまれたように生まれ変り、三〇〇㍍の壁にステップを刻み、綱を伸ばし、一二時三九分

に贋の頂上に達し、一三時きっかりに初登頂の栄誉をものにした。それはまるで見えない糸に導かれた繰り人形のように見えた。独協隊はこの無名峰を栄光と恵みの女神にちなんでラハーモ峰と名づけた。

結

チームをまとめる手だてとして二つの方法があると私は思っている。そのひとつは厳しい命令を発してチームを金縛りにし、好むと好まざるとにかかわらず最終目標に邁進させることである。他のもうひとつはチーム全体に暗示をかけ「やればできるのだゾ！」という自覚を持たせ、人跡未踏という重苦しい気持を解き、能力以上のことをやらせてしまう方法である。

どちらも波長が合うことが成功の条件である。私は後者を選んだ。金縛り法よりこの暗示法の方が三年しか練磨の期間がなかった独協隊には適していたし、試みとしても愉しかった。この暗示法は私自身にも思わぬ効きめがあったことがあとでわかった。私のためにラハーモの夢を見たのかもしれないと思うほどである。その証拠に隊を暗示にかけたその夜から、束縛から解かれたように、安らかに眠りにつくことができたし、成功まちがいなしという手ごたえのある自信に浸っていたからである。自己催眠の効果があったのだ。

初登頂は何回やってもいいものだ。それは内なる心が希求するものである。それが起爆剤となり、原動力になる。この好奇心がなくなるとき、日本は、あるいは人類は衰退しはじめるのではないだろうか。生きているという実体は不確かなものだ。生きるよりどころを求めて山に登り実感するのだ。プリミティブな実在感が沸き起ってくる。地球、そして、宇宙と一体になるのだ。一体になれたという感覚がこみあげてくるひとときは貴い。調和融合したとき、宇宙も山も人も同一体の神そのものではなかったか。

隊員の関係者の中に「山登りは危いからやめさせたい」という意見があった。私にはそれは「生まれてこない方がよかった」という言葉と同意語のように聞こえた。子を思う親の本能のことばかもしれないが、厳しくいえば過保護にすぎる。生を否定するのでは始まらない。私たちは既に生きているのであり、山登りを愛好しているのだ。生には能動的な体験が伴うものだ。そのひとつとして山登りを選んだ以上、ベストを尽くさざるをえない。死と対峙することにより、真剣に生を見つめなおす機会があってもいいのではないか。

独協大学インド・ヒマラヤ登山・踏査隊

総隊長＝三本　茂(49)、顧問＝村井　葵(48)

登山隊　隊長＝酒井勝雄(34)　隊員＝遠藤雄悦(28)、青山正和(25)、伊藤英樹(25)、楠田愛里(23)、松崎　淳(22)、斉藤幹郎(22)、橋口　隆(24)、ドクター＝柳沢孝嘉(28)
リエゾン・オフィサー＝B・J・シン(46)
コック＝ゴビンダ(23)、キッチンボーイ＝ナンダン・シン(17)

踏査隊　リーダー＝若林和夫(22)、佐藤陽一(24)、佐藤淳一(24)、山口由美子(20)、春日真知(20)、ドクター＝横山誠之(39)
コック＝カンチャマン・ラマ(39)、キッチンボーイ＝プレム・シン(38)

※以上スペースの関係で登山隊のみに絞って述べた。

関連記事

●「山と渓谷」 580-11 特選クロニクル
インドヒマラヤ 無名の六〇〇〇㍍峰初登頂 村井 葵
●独協大学学報 No. 12 昭和五九年度
インドヒマラヤ登山・踏査の旅から 三本 茂
●サイクルスポーツ 1985-2
ブルックスのサドルに刻まれた思い出を語ろう 佐藤淳一
●「岳人」 459 85-9
ザンスカールの山と谷―魂とロマンの旅― 村井 葵
●「遥かなるシルクロードの果て」独協大学インド・ヒマラヤ登山・踏査隊報告書 一九八四年



三五年まえの取立山の遭難をおもう

今西錦司

三五年まえといえば、私はいったい何をしていただろうか。北部大興安嶺を探検したのが一九四三年で、ネパールのマナスル偵察に行ったのが一九五二年だったから、当時はもっぱら探検熱に浮かされているときだった。北陸のたいして有名でもない山で、高校生が遭難したという記事は、新聞にはのっていたのであろうけれども、私には省みる暇さえなかった。しかるにこのたび出版された福井市在住の増永迪男さんの『取立山・しらやま考』を開いてみて、はじめてそんな遭難がおこっていたことを知ったのである。増永さんの麗筆になるこの遭難記を読んで、私なりに感動したものの、なにしろこの遭難は全員が死んで、生き残ったものがおらないため、詳細な点で不可解なところが、すくなくない。折からの梅雨空で毎日うっとうしい天気のつづく中で、こういう不可解な問題を考えていると、気が滅入るばかりである。こんなときどうしたらよいか。これは自分で一文を草して、不可解な問題と取りくみ、極力不可解な点を、理解可能なところまで持ってくるより他なかろうと思った。増永さんに聞いたら、当事者として知っておられることもあろうが、それをことさら伏せておられるのかもわからぬ。どうせ問い合わせても五〇歩一〇〇歩のことなら、推理小説を書くつもりで、資料は不十分のままで、書いてみることにした。この点増永さんのご了承をえておきたい。

1

この遭難の特徴は、それがはっきりとした二重遭難であるというところにある。遭難者はたしかに知合い同士であり、学友でもあったかもしれないが、みんなが同じ原因で、いっしょに死んだのではない。第一の遭難すなわち一九五〇年一月二十二日における牧田君

の死には、増永さんの記述にもあるとおり、どこにも不可解なところはない。牧田君は友だちに見守られて、いわば幸福に息を引きとってゆくのである。不可解なのはこの第一の遭難の後におこった第二の遭難であり、中村・加藤両君の死である。

この二人は牧田君の遺体を国境稜線に安置し、目印しにスキーを立てておいて山を下った。それからその日のうちにか、翌日になって、滝谷出合附近で倒れていた。その間にどこを通って、なにしていたかは、死人に口なしで、一切わからない。しかし、室目谷を下ったらしいというのが、大方の意見の一致するところである。

これだけでは情報資料として、はなはだ貧弱である。

この一行は一月二十二日のうちに、取立山を往復するつもりで、出かけたものかもしれない。それが二十二日の夜になっても帰らず、二十三日も一日待ったが帰らぬというので、ご家族や友人の間で、遭難やないかという疑いがはじめて持ちあがる。だから正式の捜索隊が東山へ向ったのは、早くとも二十四日であろう。捜索隊長にだれが行ったか知らぬが、捜索隊長になるほどのものは、みずから捜索隊の陣頭に立てるだけの力量をそなえていなければならないのだが、そういう人がこの場合はたして見つかっただろうか。学校の山岳部長がお役目がら出かけたところで、何の役にも立つものではない。

一方現地の東山では、遭難と聞いて、さぞかし驚いたことだろう。さっそく捜索隊がつくられる。当時の東山はまだ戸数も多く、その中には熊狩りや羚羊狩りの経験者もいたことだろう。こうした山に明るい剛の者がいたからこそ、どこにおいてあるのかわからぬ牧田君の遺体を見つけだし、それを村まで運び出すことができたのである。滝谷出合まできて斃れていた中村・加藤両君の遺体も、こうした捜索隊の活動がはじまってから後のこととしなければならない。

さて捜索隊は何人で組織されていたかは知らないが、問題の取立山へどのルートから登ったかということである。これは村からいちばん近い西尾根に、たとえ急峻であろうとも、ルートをえらんだことであったろう。東山の人間ならそれ以外のルートは考えられないはずである。そして国境稜線に至って、牧田君の遺体を見つける。もちろんこの地点はこれで図上に明示できるはずである。私ははじめはもっと護摩堂峠に近いところを想定していたが、おそらく取立山の頂上と護摩堂峠との中間ぐらいのところであったろう。

室目谷というのはどの谷を指すのだろうか。四十六年版の四色刷りの五万「越前勝山」にはこの名前は出ていない。護摩堂峠から出て

いる胡麻堂谷と滝谷とのあいだに、地図にはもう一つ「から谷」と記入された小谷がある。私はこれが室目谷であろうと想像している。

取立山の頂上から国境稜線をえらんだ中村リーダーは、国境稜線をどこまで伝うつもりだったのだろうか。彼の頭には護摩堂峠へ出て、そこから峠道を五所ヶ原に避難するという考えは毛頭なかったようだ。二十二日のビバークの翌日でも、このルートの可能性はあった。前日にくらべると、余程天候は悪化していたけれども。中村リーダーははじめから室目谷に下降のルートをとる覚悟であったろう。

増永さんは書いている。「室目谷を見おろしながら私は長い間ただ立っていた。谷の周囲の木々はすべて伐採され、古シーツを掛けたような白の斜面となっている。雲の底が少し高くなって山の景色が見渡せるようになっていた。中村さんの経験をもってすれば、何ほどのこともなかろうと思える山と谷のたたずまいだった。たとえその日は風雪であったとしても。」だから室目谷になにが待ちかまえていたのだろうか。

2

室目谷に難所があったとしても、それを切り抜けて、二人は滝谷まで出てきているのである。そして中村さんは滝谷との合流点附近で倒れ、加藤さんはそれより一キロあまり下ったところで倒れていた。

二人はどんな死に方をしていただろうか。うつ向いていたか、あお向いていたか。スキーをはいたままだったか。凍傷にかかっていたか。骨折はなかったか。ルックサックの入組み品になにがあったか。まるで検死の立会人みたいなことをいうが、すくなくとも私は死後何時間経っていると判断されたのかが知りたい。彼らは二十三日中に倒れたのか。それとも二十四日まで生きていたのか。

さてこの辺でもう一度、東山村から出動した捜索隊の剛の者のことを記しておこう。私はさきに彼らは登りにはきっと村からつづいている西尾根を、多少険しくてもえらんだにちがいない。そして取立山の頂上から国境稜線に向かって、そこで牧田君の遺体を発見するというところまで書いておいた。問題はそれから後の彼らの行動である。彼らは彼らのつけた登りの足跡を追って、もう一度取立山の頂上を踏み、険しい西尾根をつたって村までかえったであろうか。もしそうとすれば、彼らは登山の鉄則である「もときた道を引きかえせ」ということを、忠実に守ったことになる。さすがは山のベテランである。これに反してわれわれの中村リーダーは、取立山へついたときから、もときた道をかえろうとしないで、国境稜線に踏みこみ、未知の室目谷へおりて遭難した。弁解の余地のない黒星で

あるといわれるかもしれない。

しかし、いくら国境稜線はなだらかであるといっても、取立山の頂上からは下りである。遺体は多分死後硬直していただろうから、背負うわけにはゆかない。そうすればスキーにしばりつけて、雪の上をすべらせるということは考えられても、これを取立山の頂上まで運びあげるということは、いかに捜索隊が剛の者ぞろいであったとしても、並大抵の苦労ではなかろう。衆議一決、室目谷へ運びおろそうということになるのは、この場合誰が考えても無理のない処置であろう。彼らは勝手を知った室目谷へ飛びこんで、その日のうちに首尾よく遺体を村まで運び出したのである。

さてこうなると、はじめから室目谷に降路をとろうとしていた中村リーダーの判断も、頭からけなすわけにゆかなくなる。むしろその判断の正確さに敬意を表すべきでなかろうか。そのうえ中村・加藤の二君は風雪の中を、室目谷を下り切って滝谷出合まで出たところで、倒れていたのである。あともうひと息で村というところまできて、むざむざと倒れていたのである。その死因はなにか。やはり疲労死であるか。私は中村・加藤の二君の死に、この言葉を適用する気がしない。二人とも一日や二日の風雪で、くたばってしまうような男とは思われないからである。そういえば牧田君の死だって、あまりにもあっけないところがある。なにか常識では考えられないような原因が、彼らの死の背後にひそんでいるのでないだろうか。

一九五〇年といえば、すこしはよくなっていたものの、まだ食糧事情の悪いときで、国民の大半は慢性の栄養失調に悩んでいた。その頃全国的規模で蛔虫の蔓延したことがある。しかしこの蛔虫の被害は、国民の栄養状態の好転とともに、いつしか消滅したのである。こういう個人的な体力の強弱を超えたところではたらく社会的要因の影響はおそろしい。遭難者は普通なら発揮しえた最後の抵抗力が利かないような状態に追いこまれていたのかもしれない。中村君も加藤君もどこかから「いまならなにも死ななくてもよかったのに」といっているような気がしてならない。いまなら風雪から身を守る軽量のテントもあるし、インスタント食品は巷に氾濫している。

梅雨の雨はまだやまない。このうえうっとうしい遭難の話はもうごめんだ。私はみなさんとともに日の光を浴びながら、もう一辺生を謳歌したいのである。

（一九八五・七・一記）

図書紹介

四手井綱英『森　林』

法政大学出版局　昭和六十年三月刊　四六判
二九二ページ　定価二〇〇〇円

森と人間とのかかわりを具体的に描く

本書は、法政大学出版局の「ものと人間の文化史叢書」の五十三番目の本として出版された。この叢書は人間をとりまくさまざまなものと人間の関わりを考える叢書であるが、その「もの」に森林を据えるとなると、その書き手としては四手井先生を措いて他に求めることは難しいことに思われる。

先生は、永年京都大学農学部で森林生態学の研究をされた方であるが、大学に勤務される以前には、林業の専門家として国有林の事業に携わられた経歴を持っておられる。学会での先生の御発言や御著書から先生が一貫して自然科学としての生態学と現実の社会の中での森林や林業の在り方とを関連させて考えておられることが伺えるのである。さらに、先生は、京都市山科で幼少時を過されたと本書に書いておられるが、そこは里山と里人の関係が、里人の生活を通して存在する場所で、一昔前の日本の至る所でこうした関係が見られたとのことである。つまり、先生は里人の生活者としても森林とつき合ってこられたのである。

本書の構成は、先生の経歴や立場がうまく反映されたようになっているように感ぜられる。本書は十一の章からなっているが、第一章森林と樹木、第二章日本の森林は、森林生態学的な立場から記述されたものといえる。この中で、まず樹木とは何かが語られ、それは植物を木と草とに分けた時の考えは、その植物の暮し方を示すことで、木とは地上に芽をもった形の植物であることが示される。樹木をその暮し方の面からとらえる見方はすぐれた生態学的見方で、これに続いて展開される常緑と落葉、針葉と広葉の区分はこの見方の延長として把握される。

我々登山に関心を持つものは、少なくとも日本に於いては、森林の中を登ることが極めて多いが、まず、森をどうみるかの前に樹木をどう観るかを教えられることである。特に、登山者は山岳景観の一要素として森林を考えることが多いが、そのことに関連して、高緯度地方へ行くほど日光は散光が多くなり、その関係で樹形が細長くなること、などの記述は示唆的である。森林の見方として、表日本と裏日本の森林の在り方も読者にとっては参考になるであろう。

第三章森林と農業、第四章森林と林業は、広い意味の林業専門家としての立場が主になって展開されているように思われる。第三章では農業のことが主として語られているようであるが、古い農業の形態である焼畑が林業の発祥の元となったということである。現在では林業と農業は全く別世界の観があるが、古くは両者はひとつの

ものとして日本人が森林とつき合ってきたことが改めて理解される。第四章では、一転して近代の林業ないし林学がドイツに起り、日本の林業の手本になったことが解説される。ドイツの林学の管理・経営の気風が今の日本の林業関係者に少しは残っていると書いておられるが、登山の際の入山許可の件で営林署を訪れた経験のある方でなるほどと肯く方があるかもしれない。この章の人工造林と伐採は、林業専門家として一般人がふだん考えてもみない民有地と所有者の生活の関わりなどが紹介され、林業そのものを理解するのに勉強になることである。

第五章以下は人間の生活ということに比重をかけて物質資源としての森林から、さらに多様な意味を含めた森の価値に話が展開されてゆく。

第五章薪と炭、第六章ドングリと果物は前者の内容が主となっている。第七章森の神では一転して森の精神的価値が語られ、それはやがて自然保護論へと発展する。そして「自然破壊と科学信仰」の節では、現代の日本人の過度の科学信仰が自発破壊を招来する危険のあることが指摘される。また、日本人の公共心の欠如が貴重な自生植物の危機となると説かれている。私も全く同感である。

第八章森林と国土の利用は、現代社会の施策という面から森林をとらえたもので、都市と緑化の問題が深刻化している一方、森林資源が忘れられようとしている現在、林業人を含めて考えなければならない問題が投げかけられている。第九章木材としての利用は、やや方向を変えた内容で、木の性質と加工技術が詳しく述べられ、一時、森林を離れて興味深い内容となっている。第十章生きた木の利用では、森林生態学に立脚した林学者の立場で、森林の木材生産以外の利用の在り方が解説される。水源涵養林の在り方では、確かに一般的に説明されていることと少し異なっているようであるが、至極明快で、なるほどと納得させられる。

第十一章は樹木紳士録で、スギとヒノキ、マツ類、カラマツ、ブナ、モミ類とトウヒ類がとりあげられている。ここで先生は、生態学者でもあり、林学者でもあり、自然愛好者でもある一個性として樹木を語っておられるようである。「いろいろ言ったけど、私は樹が好きなんだよ」と目を細めて樹木を見上げておられる先生の姿が見えるような気がする。

登山というものは、かのウェストンの著作にもあるように、山頂に立つだけでなく、山岳全体の自然やそこの人々の生活も含めて探訪することに意味を見出すとすれば、日本の森林について人間との長い関わりや現代の林業の在り方から具体的に紹介した本書は、登山者にとって大いに有難いに違いない。

登山について本書では触れられていない。しかし、これは余談になるが、機会があって今年七月に天山山麓のウルムチを訪ねた時、中国科学院の人から、四手井先生が学術調査員を含めた京都大学学士山岳会、同志社大学山岳会、中国登山協会の三者合同のチベットのナムナニ峰登山隊の隊長として、ウルムチから出発されたことを聞かされた。先生と登山との関係はかくのごとしというわけである。

本書は二九〇頁で、それほど膨大なものではないが、一気に読みとばすことは難しい。文章の表現は、大声で自説を主張するという

よりは、むしろ淡々と展開されている。内容が濃いから一読した後で、折々に再読されることをおすすめしたい。

（近田文弘）

山村正光『車窓の山旅・中央線から見える山』

実業之日本社　一九八五年二月刊　A5変型判　二八六ページ　一九〇〇円

山岳紀行の一形態を創造した魅力あふれる快著

日本山岳会の発足と中央線の塩尻までの開通とがほぼ時を同じくしている。日本アルプスを舞台とする近代登山の開幕は、鉄道によって京浜地方と信州の山岳地帯とが結ばれたことと密接な関係をもっている。それ以来、中央線は高い山々を目差す者たちのメインルートでありつづけてきた。山あいを縫って走る列車の旅は、たんに登山基地への移動手段というだけでなしに、車窓から見える山々の姿に見入る登山者にとって山旅のこよない序曲であり助走であり、そして精神的な意味では山旅そのものの一部であった。

当然、車窓から見える山々についてつづった文章は、すでに早くからあった。明治末年に発表された小島烏水の『冬季山岳観望汽車旅行』が中央線の車窓から見える山をかたっていた。だが、烏水の視線は、夜行列車で仮眠したあとで韮崎から先に見える南アルプス北部の高山に向けられ、そのまま北アルプスに至るまで高くそびえる峰々にそそがれつづけた。それはいかにも高きをあこがれる人の視線だった。これの古典的な例は明治三十年代にヨーロッパにわたった巌谷小波がマルセーユで長い船旅を終えて、そこから任地ベルリンに向けて北上する汽車の旅をしたときの旅便りの中に見出される。スイスに入ってアルプスの高峰を目にした小波は「白い處女山」つまりユングフラウが見えたといって感動した。彼の辿った経路からして見えるわけはないのだが、美しい名から生じた連想の産物である確信は、彼本人にとっての真実であったにちがいない。正しく山の名を言い当てたか否かを問わず、ひときわ抜きん出て立つ山々に思わず知らず畏敬の思いをいだくのは人の常である。

日本山岳会の発足後、もはやあこがれるだけの山は存在しない。のみならず、高い山々への探訪からはじまった日本近代登山は年とともに裾野を広げ、かつては登山者の注意を引かずにいた低い山々にも、年々数を増す登山者たちの足跡が印されるようになり、そして今日に至った。

山村正光氏の『車窓の山旅・中央線から見える山』は、まさしくこのような歴史が辿り着いた地点に立つ記念碑のような、魅力あふれる快著である。はるか遠くにちらと頂をのぞかせる峰への好奇心とあこがれが生み出すロマン主義と、完成の域に達した地図に裏打ちされたリアリズムとが、たがいに近寄って一つになった、と形容してみたくもなる。

この、中央線の車窓から見える山々をかたる書物で標題として名のあがっているのは計一三五の山なのだが、富士山が六回登場する

ので、見開き二頁ずつ延一三〇の山が紹介されているということになる。何も特急でいたずらに早く走るばかりが能ではあるまい、と著者自身が言う通り、中央本線の新宿・松本間の計四八の駅の三倍近い数の、ぜいたくな各駅停車、それどころか各駅間停車の旅を、本書によって存分にたのしむことができる。どこから読みはじめてもよい、どこを拾い読みしてもよい。乗り降り自在。

見開き二頁に美しい写真とコースの概念図とその説明の文章とを要領よくアレンジした本は、ドイツのパウゼが著したアルプス地方の山とスキーの案内書二冊があるし、ほかにも、写真と文章をほどよく組み合わせた植木知司著『かながわの山　山名をたずねて』（神奈川合同出版）という、人目につきにくいが細かな心配りのされた本がある。だから、二頁ごとに目まぐるしく登場するという点に関しては、残念ながら山村氏の書物が独創的であるというわけにはいかない。

だが、たんにどの山が車窓から見えたというだけの報告でもなく、また二頁ずつに仕切られたガイドブックというだけのものでもない。そのどちらでもあって、しかもはるかにそれらを越えたものとなっているのがこの『車窓の山旅』なのである。

まず第一に、固定された一地点からの展望ではなく、線上を移動しながら視点を求めることが基本作業となって本書を生んだ。四十年にわたって中央線で車掌として勤務した筆者にしてみれば、職場から見える山々の探訪記録にほかならないが、束の間にしか見えない峰を探求するには並々ならない努力と執念が欠かせない。こうした発見の喜びが本書を読む者につたわってくる。このことが本書に魅力あふれる紀行文集としての価値をあたえている。

第二に、つねに、しかも急速に移動しつつある状態のもとで、文章の上だけでなしに、写真を撮ることによって著者の視線そのものを記録する努力がはらわれた。加うるに沿線イラストマップ（藤井龍二氏）と展望解説図（藤本一美氏）が、筆者の視点と視線および視野の三つの要素を表現すると同時に、不運にもタイトルにあげられなかった山々にも登場の機会をあたえている。心憎い配慮といわずにいられない。

第三に、それこそもっとも大事な点であるが、筆者の視線がことさら高い山々にばかり向けられているわけでなく、逆に近くにありすぎるばかりにかえって鉄道旅行者の気を引かずにいる低い山々にも注がれている。一〇〇〇㍍にもみたない山が二一もタイトルに名をつらねて堂々と三〇〇〇㍍峰たちに仲間入りしている。もっとも低いのが愛宕山で四二七・五㍍だが、これは筆者の故郷であり生活地でもある甲府市の、いわば裏の丘といえるほど身近な山である。「我が家からかけ足であがると八分で愛宕山に着く」本書のちょうど真ん中辺で出番をもつこの低い山が、文字通り本書本来の原点であり中心地点でもあるように思われる。高い山々に奪われがちな視線を、沿線の、これぞといって見ばえのしない小高い丸い頭の山々にも向けようとする筆者の目と心は人間的なぬくもりにみちている。山々だけをかたるのではない。山々と人々との、そして控え目に筆者自身とのかかわりをも、本書は淡々とかたる。それは、山名の由来をたずねる地誌と民俗学の領域に足をふみ入れることであったり、『甲斐名勝志』等々の古書をひもといて歴史をさぐることで

あったり、登山史のエピソードをつたえることであったりもする。各々の項目にあてられた文字のスペースは、もとはといえば朝日新聞山梨版での連載であったという事情からして、きびしく制限されているというのに、内容は驚くほど多岐にわたっていて、しかも充実している。

第四に、車窓から見える山を、観察者の立場からかたるだけでも十分に名に恥じない書物となるだろうけれども、筆者は車窓観望旅行者であると同時に（いや、それより先に、というべきか）それらの山々のほとんどをみずからの足でたしかめている。審美的な鑑賞者と実践的な行為者とが一つになって、つまり筆者は四十余年の登山家としての本領を発揮して、中央線からはるか西に立ついくつかの山々以外にはすべて登りつくしている。本書執筆のために登ったという山も若干あるにちがいないにしても、これは驚くほどの執念であり良心である。郷土への愛情は筆者の登山歴にも証明されている。だれにも簡単に真似のできることではない。

以上の諸点を総合すれば、本書は立派に山岳紀行の一形態を創造してみせたパイオニアワークとなっていることが納得されるにちがいない。若干訂正したい個所があると著者はいうが、どのような書物にも完全は期しがたいものであって、版をかさねるごとに書物もまた完全にむかって成長していくのが常なのであるから、ここでは初版本の小さな疵についてはあえて云々するまいと思う。それ以上に感じとれるのは、本書が成立するまでに多くの人々の力が直接間接にあずかっていたという事実である。人々や資料との出会いという点に関しては、筆者は大いに幸運であったし、その幸運を呼び寄せた筆者自身の人徳が大いに讃えられなければなるまい。そうとことわった上でいうのだが、筆者とつきあいのある山岳人たちからのさりげないヒントが数多く本書に生かされている。その意味で『車窓の山旅』は、筆者を中心とする日本山岳会々員たちとの友誼が織りなす網目をなしている、とも形容できる。日本山岳会の会員である筆者が、これまた会員である人々から敏感に多くを学び知ろうとする謙虚な、しかし情熱的な姿勢をもっていなかったとしたら、たぶんこれほど魅力ゆたかな書物にはなりえなかったであろう。こう書いたからといって筆者はけっして、自分の才能と努力が割り引きされた、などと私に抗議することはあるまいと思う。なにしろ私自身が、多くの会員たちから得た滋養分によっていくつもの著作をすることができたと実感している人間であるのだから。日本山岳会創立八十周年にふさわしい好著として『車窓の山旅』はユニークな光を放っている。

（宮下啓三）

杉本誠

『山の写真と写真家たち
—もうひとつの日本登山史—』

講談社　一九八五年四月刊　B5判上製
二五八ページ（内別刷写真　九六ページ）
四八〇〇円

読みごたえのある充実した労作

筆者はもとより山岳写真について、特に研究している者ではないので、本書の評者としては不適任である。また、副題にある「もうひとつの日本登山史」という点からいっても、いわば登山史に古くから、ひと一倍興味をもっている程度の者であるから、正鵠を射た批評ができるとも思っていない。よって、一旦は固辞したのだが、編者からのたっての要請によって、やむなく読後感と言った程度のものを書くことにした。

従って筆者が主として触れたのは明治・大正・昭和初期に亙る時代であり、本書の内容でいえば一九三ページ位までであること、また筆者自身カメラの器材としての発達史などについては、充分な知識がないので、そうした点については言及できないことも、併せて諒承ねがいたいのである。

著者杉本誠氏が最初に本書のテーマにとり組んだのは、昭和三十七年であるというから、二十数年の昔であり、途中一旦途切れることがあったものの、その後も書きつがれた長年月を要した労作であることにまず注目したい。

また、その発端はお茶の水時代の本会図書室で初期の「山岳」の幾冊かに接し、それから志村寛、高野鷹蔵、ついで河野齢蔵、辻本満丸、武田久吉氏らの人々を発掘し、当時まだ存命していた人々には、著者自ら何度も足をはこんで聞き書きをとり、既に物故していた人々については、その遺族をさがし求めて資料を得るなどの、手間暇をかけた労力の末にものした点が、特に本書前半の価値を高め、且つ読みごたえのあるところとなっている。

殊に本会創立発起人中で最も永く存命し、しかもその記憶力の抜群さと、科学者としての精確さをもって他の追随を許さなかった武田久吉氏の知遇を得、多くの示唆を受けている点は非常に幸運であったと思う。

まず最初に出てくる松本市の保里写真館については、著者も指摘しているように岡茂雄氏のすぐれた記述がある（岡茂雄著『炉辺山話』所収「保里写真館」参照）。同館の写真版を載せている点も意味が大きい。

筆者がここで直ちに思いおこすのは、本書には採り上げられていないが、飛騨高山で早期に山岳写真を撮った住広造（一八八〇～一九六四）のことである。住氏は高山にあって住伊書店を経営する傍ら、後には斐太中央印刷株式会社も創設して、『飛州志』、『飛騨山川』、月刊誌『飛騨史壇』等多くの郷土に関する歴史地誌の刊行をおこなった本会々員（明治四十二年入会）であり、小島烏水氏が初めて双六谷に入った当時（大正三年）にも高山で会っている。住氏は明治十三年の生れだからカメラをかついで乗鞍岳、槍ヶ岳、穂高、御岳、白馬岳、立山、等を跋渉して写真撮影をしたのは、おそらく明治四十年代から大正の初期であろうと思うが、その写真をもとに約三百種の絵葉書を作製販売し、北アルプス及び飛騨地方の紹介につとめたという（「山岳」六十年、一八九ページ以下参照。また「会報」二五二号に冠松次郎氏の思い出がある）。

但し筆者は残念ながら住氏の写真はおろか、その作成になる絵葉書なるものも見ていない。従って、それらが本邦山岳写真史上いかなる価値があるかについて語る材料がない。唯ここには、そういう

古い岳人のいたことを指摘し、後来の研究者に些かの材料を提供するにとどめたい（なお住氏については飛騨山岳会刊、創立70周年記念特別号『山刀』昭和五十六年七月刊にも記述がある）。

次に初期山岳写真集『高山深谷』の製作者高野鷹蔵氏の詳しい紹介と、従来あまり知られていなかった辻本満丸氏について採り上げた点は本書の大きな特長であろう。

山岳写真草創期の卓越した作者研究者であり、且つ無類の凝り性であった高野氏については、本書に詳しく述べられている通りだが、筆者も何度か面晤の機会をもったことを回想する。高野氏は山岳写真史上に巨跡を遺したばかりでなく、本会の初期に労多い幹事の役をひきうけ、文字通り東奔西走して本会発展のため測り知れぬ功績があった。「山岳」六十年追悼欄に詳述されている。

高野氏が手塩にかけた『高山深谷』の三輯、四輯、同扉、六輯が本書に写真版で掲げられているのは、見逃すことができない。

また辻本満丸氏（一八七七*～一九四〇）は烏水氏ら創立発起人と同時に本会名誉会員に推挙されたほどのすぐれた岳人であって、木暮理太郎、武田氏らも辻本氏を敬していたことが、その追悼文からもよく窺える（「山岳」三十五年二号参照）。今回本書に掲げられた明治四十二年辻本氏の撮影にかかわる佐伯平蔵（当時三十一歳）の写真（二〇―二一ページ）は特に貴重なもので（平蔵の写真は筆者の知る限りごく少ない）、後年の藤木九三『雪・岩・アルプス』対三五四ページに収められた平蔵の写真と比べてみると興味深い。また二三ページの中村清太郎氏、三枝威之介（守博）氏、遠山兵三郎の写っているもの、二四ページの広河原野営中における、後年南アルプス北部の名案内人となった水石春吉の写っているものなどは、登山史上の資料として得がたいものである。

本書に扱われていないが、一高旅行部の大木操氏（本会々員・一八九一～一九八一）が河童橋上でウェストン夫妻と嘉門次をとった写真（大正二年夏、二種類ある）は、一言しておく要があろう。大木氏は一時本会の会籍を離れていたが晩年、自分は日本山岳会々員として瞑目したいとの意志のもとに復籍し、前記のウェストンの写真等を含め、良好な状態で保存されていた数多くの乾板を本会に寄贈されたが、それらは大正初期の北アルプスの各地域に亙り、史料的価値の高いものである点を述べておきたい。

昭和初期の時代で特に感じられることは、そのころまでいわゆるアルピニズムの見地からやや魅力に乏しかった「山岳」の写真（内容と共に）が、生彩をとり戻してきたのは昭和四年発行の「山岳」二十四年あたりからで、冠松次郎、岩永信雄氏らの黒部渓谷の見事な写真が載りはじめる。また「山岳」編集にも大学山岳部出身の渡辺漸氏らが参画し、さらに欧州アルプスでの豊富な経験を持ち帰った（昭和三年）松方三郎氏が積極的に編集に協力して、従来と全く違った「山岳」の出現となる。それには、当時若い登山者の間で注目されていた大学山岳部、旧制高校山岳部の部報、RCCなどの報告書の類が、大きく影響していたと考えられる。

その頃、発刊されると間もなく輸入されていた海外の山岳書や、それに基づく登攀の模様など、或いは『青の光』とか『マッターホルン北壁登攀』の山岳映画などの影響が、山岳写真のうえにも大きな影響を与えたと考えられる。それらを敏感に受けとめ、小型カメ

ラを駆使して、静止している山岳景観ばかりでなく、そこに躍動する登攀者の姿を共にとらえて、新しい山岳写真を作り出したのは、困難な登攀にたちむかった学生登山者であった。当時の名のある山岳部報をひらけば、これらは直ちに了解されるであろう。

つぎつぎに舶載された P. Bauer : *Im Kampf um den Himalaja* (1931) や *Um den Kantsch* (1935) また F. Bechtold : *Deutsche am Nanga Parbat* (1935) などに収載された写真が、若い登山者の心を強くとらえ、日本での岩登りや冬山の写真に少なからぬ影響を与えたことは否定できない。筆者もこれらの写真やマッターホルン北壁登攀の映画に、若い血をわかした一人であり、同時代の登山者のなかには同様な経験をもたれている方が、決して少なくない筈である。

そういう意味から、世は既に太平洋戦争に近づきつつあったが、朝日新聞社が刊行した『山に闘う』(昭和十四)と『氷雪に挑む』(昭和十五)の二冊の写真集は、特に触れておく要があろう。今でこそ特に珍しい写真ではないものの、当時にあっては若い登山者に迎えられたものだったからである。

この辺の叙述が、本書には充分でないように思われるが、或いは筆者の見落しがあるかもしれぬ。

以上思いつくままに読後感めいたものを述べた。後半は最初におことわりしたように精読していない。叙上の点が認められるものの、筆者の実感としては近来珍しく充実した労作であり、掲載された貴重な許多の写真の発掘に払われた努力には脱帽したい。

＊辻本満丸氏の生年は、『世界山岳百科事典』及び『岳人事典』の記述(山崎安治氏)によれば一八七九とあり、二年の差異がある。ここでは杉本氏の記述を採った。なお「山岳」三十五年二号に木暮、武田両氏の追悼記があるが、それには享年六十四歳とだけあって、生年が明記されていない。

＊

(本稿執筆後、会の長老島田巽さんに「山岳写真の先駆者たち」という一文のあるのを知った。一九七八年十二月刊の『日本の山』という写真集に収められたものだが、たまたま私はそれを読んでおらず、今度纏められた同氏の新著『山稜の読書家』で知った。これを読んでいれば、本書の書評は島田さんにお願いするのが一番よかったと思うのだが、後の祭りである。なお私が本稿中に述べた朝日新聞社編『氷雪に挑む』も、その編集は主として島田さんが担当されたことが、「あとがき」のなかで藤木九三氏によって述べられている。)

(望月達夫)

近藤等

『アルプスの名峰』

山と渓谷社　一九八四年四月刊　B5変型判
三三六ページ　二九〇〇円

アルプスの山登りの文化的芳香を伝える

戦後、アルプスについて色々な本が出たが、アルプスの昔を今に語りつぎ、また今の山登りを手広く伝える本が欲しかった。

本書はこの要望に応えるもので、書く人としても実体験と教養から、今日著者に勝る適任者はいない、と思う。

多くのフランス山岳書の訳業で広く知られた著者をいまさら紹介する要はあるまい。本書の内容との関わりであえて記すなら、著者の幸福な人生はフランスの山の名手、ガストン・レビュファの著作の訳業を契機として、華々しく開花した、と書いても著者に失礼ではないだろう。

一九六二年の二月、著者は初めてシャモニを訪れ、レビュファ一家に暖く迎えられた。その年の夏、ガストンの計らいで同地の国立登山スキー学校に入門し実技を学び、アルプス流登り方（著者の言葉）の基本を身につけた。

研修を終えると長年の希望だったガストンと、初めてザイルを組むことが出来た。グレポン、エギーユ・ロシュフォールの登攀は、それからの、夏ごとのシャモニ通いの序幕だった。アルプスを登り初めてから、いつか二十二年が経っていた。アルプスを端から端まで歩いたこの長い年月に、踏んだ頂の数は百を越え、フランス、スイス、イタリー、オーストリアの十一山群にひろく足をのばした。

この広い体験を背景に、著者が本書に託した企画は、有体にいえば欲深いほど、野心的なものである。

タイトルの「アルプスの名峰」は、著者が足跡を印した百のピークから六十五峰を選び、さらに登りたいと望む五峰を加えた七十峰を示す。

七十峰の地域的分布は、フランス・アルプス三十三峰（内モンブラン山群二十五峰）、スイス・アルプス三十三峰（内ヴァリス二十峰、ベルナー・オーバーラント十一峰、エンガディン二峰）、ドロミテとオーストリア三峰である。

この七十峰を一つ一つとりあげ、写真で紹介し、文章ではピークの特徴と古事来歴、いま使われている主要ルート、それに著者自身の登攀印象もあわせて織りこむ、これによってアルプスの全貌を伝えよう、というのが著者の意図である。

書き方ではとても一冊には収められない多面的内容だし、あまりはしょると無味のガイドブックになってしまう。そこが著者のたいへんな苦心のしどころだった、と思う。

昨年この本が出て、会の会報に紹介を書いた時は、急いで読む必要から、フランス・アルプスの部分が何か読みにくかった記憶がある。著者が歳四十を越しアルプス登山に入門し、いちばんの好奇と新鮮味の対象になったモン・ブランの部分が、である。しかし今度、本書を二読した時、そういう抵抗は何も感じなかった。実に面白くスラスラ読めた。しかし正直いってヴァリスやグリンデルヴァルトの山々の方が、遥かに素早く面白く頭に入った。つまり私はスイスの山は知っているが、フランスの山は知っていない、ということなのだ。

著者はこの辺の読者の事情を心得ていたろうか。

勿論、「アルプス特選一〇〇コース・シリーズ」の紹介者である著者のことだ。アルプス紹介の近代的手法、映像的手法をさすがに誰よりも心得ていた。

＊

私が何よりエンジョイしたのは、本書にふんだんに盛られた写真である。三三六頁の本に百四十枚の写真が入っている。カヴァーの濃藍の空に浮ぶエギーユ、口絵の十数枚のカラー。これは圧巻というよりない。半分は著者の、また半分はプロカメラマンで秀れたクライマー、故中野融の作品だが、クライマーの目をもって初めて捉えることのできるアルプスの、生きものの如き躍動感と量感が映し出されている。また、どの頁をひらいても目に入る白黒は、登攀ルートの説明や古典的エピソードの叙述に、魂を入れるほどの効果をあげている。山の本で写真をこれほど上手に使った本を私は知らない。

その写真の素晴しさは、アルプスの小さなアルバムとして机上に備えるだけで十分楽しめるものだ。

＊

七十峰の記述については、これは写真とちがって一目瞭然とはいかない。ピークを叙述する七十の小節に、小さな半導体に万余の情報を積むように、歴史と現在についての豊富な知識がぎっしり入っているからだ。それを総括して語ることは容易ではない、人によって受け取り方、利用の仕方、関心の置きどころは自ずとちがってくるだろう。

私の如きオールドタイマーは、昔の女にめぐり会い懐旧に胸いっぱいにされる箇所が多かった。久しく耳にしなかった谷や峠や山小屋の名前、あの道この道、この本でどんなに多くの記憶がよびさまされ、思わず古地図を引っ張り出したことだろう。

本書で貴重なのは、昔を今に語りつぐ登山史だろう。懐しい古典的人物がふんだんに登場する。ゲォルグ・ウィンクラーやシグモンディー等は記憶の中に埋まっていた。ウィンパー、マンマリー、W・ヤング、ヴェルツェンバッハ、ラウパー、近くはボナッティーとそれぞれの時代の人たち、おびただしい数の現代の旗手。本書に登場する人物は数え切れない。まさに人来り去りアルプスは残る、との印象が深い。

戦後の新技術（用具）の伝播でアルプスは、またたく中に隅々まで登られた。百年も未登だった壁が一度登られると、五年の中に十本以上のルートが開拓される状況が、どこでも語られている。超人的業績と訛われたドリューのボナッティー岩稜が、今では軽靴で気軽るに登られているそうだ。アルプスの山登りが爛熟期にある姿が、よく察知できる。

アルプスでの日本人の業績もピーク毎に注意深く記されている。初めてモン・ブランに立った邦人、日高信六郎、大正初期のシュレックホルンで遭難した辻村伊助と近藤茂吉、モン・ブランのカガミ・ルートを残した各務良幸、槇さんの名前は勿論のこと、十七年も下って私達兄弟や高木正孝も記されている。戦後舞台は一変して賑やかな六十年代になる。シャモニにあれやこれやで生活の資を稼ぐ邦人クライマー達。戦前考えられなかった国際現象だ。世界の経済が大きく変ったのだ。著者は初めは仏人インストラクターとザイルを組んだが、スイスやさらに遠く足を延ばすようになるときには、シャモニ在住の邦人を誘っている。主に中野融。加藤保男も山行を共にしている。戦後アルプスで活躍した邦人は書き切れない。

長谷川恒男、小西政継、加藤保男等、アルプスをバックにヒマラヤに出た著名クライマーは頭に浮ぶが、グランド・ジョラスで日本人ルートを拓いた内野寿、鈴木勝、中野融、宮崎秀夫、斉藤和英、神田康夫、富樫直義、加藤保男となると、誰が現地居住者なのか、著者は書いていない。日本人で初めてアイガー北壁を登った高田光政やグランド・ジョラス北壁、冬期初の女流、長尾妙子、鈴木恵磁、それにモン・ブラン山群での鴫夫妻等の名前が、読後頭に残った。しかし、他にも目ざましい業績を残した多くの名前が記されている。

*

今のアルプスを学んだ著者の言葉で、技術は進み、壁という壁は登りつくされても、アルプス登山の原則は変っていないな、と思うことが一つあった。それは「スピード＝安全」という鉄則である。夏のアルプスの天候は日本より遥かに安定しているが、どんな好天でも岩峰が雲を呼び午後には雪が来る。午前中に登ってしまわぬと難儀なことになる。日本のダラダラ登山に慣らされた私は、アルプスの最初のシーズンでガイドの早足に参ったことを、この本で思い出し苦笑した。現在でも日本人同士でアルプスを歩くと、少しゆっくり行くのではないだろうか。

いずれにしても、本書は私にはたいへん楽しい読みものだった。やはりアルプスは別世界なのだ。

ボニントンは、エヴェレスト南西壁成功を書いた本の最後に、冒険の前途はまだほうぼうに転がっている。カラコラム、ガルヴァル、アラスカ、アンデスに、といった意味のことを書いているが、その中にアルプスを含ませていない。近藤等の本書のなかには、モン・ブラン針峰のどこかでのボニントンの業績も言及されていたが、ヒマラヤ後のこの英登山家の眼中にはアルプスは入っていない、ということだろう。

しかし一人の実践的な冒険家の目をもってではなく、広い登山文化の観察者という立場に立てば、欧州アルプスはいまなお、世界の山岳の中でユニークな舞台を保ち続けているように見える。レズリー・スティーヴンのプレイグランドは、百年以上たった今日でもますますプレイグランドとしての本領を発揮している姿がこの本に映されている。遊戯としての登山は、アルプスでその文化的濃度をたえまなく再生産しているのだ。新しい道具技術と登山風俗、冒険と安全双方への対処、近代的な遭難対策、国際的協力機関ＵＩＡＡの創設、創意と変化に富んだ山への接し方と山の扱い方、冒険的な関連スポーツの創出等。

本書はこういう面に直接触れていないが、アルプスの山登りの文化的芳香も十分に匂わす内容になっている。（一九八五・八）

（田口二郎）

Two Generations

by Edmund and Peter Hillary, Hodder and Stoughton, London, 1984.

書名が示すように、エドマンド・ヒラリーと令息ピーターとが、ほぼ半分ずつ執筆した二代にわたるアドヴェンチュアの記録であり、また、それぞれの自伝的回想記でもある。

父エドマンドには、すでにエヴェレストや南極縦断などをはじめとして、著書が五種、共著が三種あり、ピーターもまた著書一、共著一を刊行している。ことにエドマンドにはまとまった自伝もあるので、父子で七章ずつにわたって記している本書の内容の、かなりの部分は、精粗の差はあっても、読者にとって既知のものが少なくない。

著者もその点は承知の上で、エヴェレスト初登頂などは、第一章の青年時代で簡単に触れた程度で、それにつづくバルン氷河踏査、南極縦断、イエティ探検、マカルー遠征なども、第二章の一部におさめている。したがってアドヴェンチュアとして、比較的詳しく記されているのは、一九七七年に行なわれたガンジス河溯行と、一九八一年に米国隊に乞われて参加したエヴェレスト東面への遠征との二つである。

これも前者は From the Ocean to the Sky と題して刊行されているが、ピーターも同行した溯行を父エドマンドは a great trip と自賛しているだけに、特に一章をあてて詳述している。ジェット・ボートで河口から内陸まで二四〇〇㌔、その間三二〇㌔に及ぶ激流帯を突破した上、徒歩に移って四六五〇㍍まで達して力尽きたのだから、自負するに値する業績といえよう。

ヒラリー父子が、このアドヴェンチュアに全力を傾けたのには、それなりの背景があることを、本書の読者は感じとるにちがいない。それは一九七五年三月三十一日、ネパールでの飛行機事故で、ルイズ夫人と末娘ベリンダを失った深刻な傷手から、立ちなおろうとする、精いっぱいの努力の現われであったように、少なくとも私には感じられる。

この悲劇は、ヒラリー自伝が刊行された直後に起ったので、夫君と令息が受けた衝撃の大きさについて、公に語られるのは、本書がはじめてである。さきの自伝では、エヴェレスト初登頂後に婚約、結婚へと進んだ折の喜びが率直に語られていただけに、本書でとくに「悲しみ」と題する一章を設けて、妻として母としてヒラリー一家を支えた故人を偲ぶ文章には、胸を打たれずにはいられない。とくに、この悲運に堪えてヒラリー父子が、ネパールの山地で学校、病院、橋梁など援助の仕事に没頭する態度には、頭のさがる思いがする。

エドマンド・ヒラリーが、ガンジス河溯行と並んで、とくに一章を当てた登山遠征は、さきに触れたように、チベット側からのエヴェレスト東面ルートへの挑戦であった。ヒラリーの筆で、この遠征について記されるのは、これがはじめてなので、本書のなかでとくに注目される一章である。サンフランシスコのリチャード・ブラムの企画推進による米国隊の遠征に、乞われて参加したエドマンド・ヒラリーは、すでに六十二歳になっていた。

この遠征は、東面の状況が非常にむずかしい上、はげしい雪崩のため六五〇〇㍍近くまでの偵察で、ついに打切りとなった。その二年後に米国隊が、この東面を克服して登頂に成功した時、finest efforts の一つとヒラリーは最高の賛辞を呈している。

ヒラリーにとって不運なことには、BCが設けられ本格的な活動が開始されて十日目あたりに、はげしい高度障害に悩まされ、ドクターのすすめで下山を余儀なくされた。それに加えて下山の途次、あれ狂ったヤクに襲われ、頭部に重傷を負うという一幕さえあった。

「名誉会長であろうが何であろうが、私の大きな山の日々が、これで終わったことは確かだ」

との感懐が、この章の終りにある。

翌一九八二年の秋、インド旅行中のエドマンド・ヒラリーは英紙の報道で、八五一一㍍のローツェに無酸素で仲間四人だけで挑んだピーターたちが、頂上近くまで達しながら荒天のため引返したことを知る。カトマンズへ飛んで、ピーターたちを迎えたとき、八一〇〇㍍までがんばり通した若者の情熱と喜びとに、父として羨望を感じながら、

「私も同じように感じたものだと、ひとりうなずいてはみたものの、もう、そういう日々は去ってしまった」

と記している。

たまたま、この父親の感懐が、父子二人の執筆分の間の、たくまざるバトン・タッチとなっているように私には思われて、とくに注目した点であった。事実、ピーター執筆の七つの章のうち、後半の四章がローツェ登攀に当てられているほど、若いヒラリーはこの八〇〇〇㍍峰への仲間四人による挑戦に、全力を傾けたのであった。

ピーター執筆の後半部も、父の場合と同様に生い立ちからはじまり、スキー、航空、登山に熱中する青年時代に移り、長ずるに従って自分独自の考えで登山・遠征を試みる段階へと、章を重ねている。そのような独自の企てとしては、一九七九年秋のアマ・ダブラム西面、一九八一年の二六五日わたるヒマラヤ縦走、そして前記のローツェ無酸素、小規模隊による登攀などがあげられている。父親のガンジス河溯行もなかなか雄大な企画であったが、ピーターのヒマラヤ・マラソンと称する縦走も、舌をまかずにはいられない規模のもの。この詳細は唯一の同行者グレアム・ディングルとの共著First Across the Roof of the Worldがあるので、ごく概略しか触れていないのは惜しい。カンチェンジュンガからカラコルムのK2まで、時には六〇〇〇㍍の峠を越えて歩きつづけたのには驚かされる。

そして、ピーターにとって野心的な上記のローツェ挑戦を詳述する四つの章で本書は締めくくられる。その詳細を紹介する紙幅がないのは残念である。

この父子それぞれの業績について、父エドマンドは序言のなかで、短文ではあるが彼自身の見解を明らかにしている。大きく変貌する登山界、その技術、装備ばかりでなく山への態度の変容が進行するなかでの、父子それぞれの行路を、冷静にみつめる父の眼が、そこに感じられる。二人には共通点も多いが、大きく異なっている面もある。古い伝統に影響されがちな自分とはちがって、ピーターは自分自身の考えで実行するし、はるかにタフでもある。父子ともに挑戦を受けて起ち、それぞれ最善をつくしてきた、と父は述べている。読むに値する二代の記である。

（島田　巽）

『エヴェレスト'82』

—ソ連隊の世界最高峰登攀記—

出版社——フィジクリトゥラ・イ・スポルト社　一九八四年版　一七〇×二五五㎜　p.p.三六八

露文題目

ЭВЕРЕСТ '82

—Восхождение Советских Альпинистов На Высочайшую Вершину Мира—

一九八二年春、ソ連隊はようやく、長年の宿願であったヒマラヤ登山の途についた。目ざすはエヴェレスト南西壁中の左側にある岩稜からの登頂。もちろん、未登のルートである。

一九五八年秋、中ソ合同隊がロンブク氷河からエヴェレストの北面を偵察して以来、二四年ぶりのヒマラヤ見参である。あの時は翌五九年に起った中ソ紛争のため、合同隊によるエヴェレスト計画は頓挫してしまった。

それ以後は、ソ連隊にとってヒマラヤ遠征は高嶺の花になってしまった。オリンピックの種目に入っていない登山部門には、外貨割当てがほとんどなかったからである。そこで、ヒマラヤに行けない尖鋭登山家達は、自国の六、七千㍍峰を徹底的に登りつくした。それらの高度差二、三千㍍の岩壁登攀、六五〇〇～七〇〇〇㍍の高度での十数㌔にわたる縦走などである。そしていまや、八〇〇〇㍍峰のヴァリエーションをやるしか彼らの腕をためすべきフィールドはなくなっていた。このような段階にきていたソ連隊が、エヴェレストでどこまでやるか世界の登山界の注目を集めていた。

そのエヴェレスト登山隊の苦悩と栄光を記したのが、この本である。興味深いのは、隊や隊員でなく、「体育スポーツ出版社」の編集長が、遠征隊が出発する前から、もし隊が登頂に成功したら、この遠征の成果を単なる記録に留めるだけに終らせず、広い読者を対象にした、一大叙事詩に仕立て上げようとしたことである。

そこで、登頂のニュースがモスクワに届いたと同時に、執筆者には「文学新聞」のユーリ・ロスト氏が起用されることになった。このプロの物書きは、本文の冒頭ですでに、事件が解決されているミステリーを書くような手法で、物語を進めていく。すなわち、登頂はすでに成功しすべては解決している。しかし、なぜ、十一人が頂上に立ち、六人がこれを断念せねばならなかったのか。

筆者は現場検証のためにネパールに飛ぶ。ネパールの風物の描写。下山して来た隊員とのルクラでの出会い。そして、登攀へと話はさかのぼっていく。

その間に、隊員の選考の方法が記されている。ここには登山をスポーツの一分野としている、実力第一主義の厳しい登山界の現状が浮び上ってきて、興味をひかれる。最終的にはエフゲニー・タム（当時五十五歳）を隊長に、トレーナー二名、マネージャー一名、ドクター一名、コック一名、通信員一名、映画班三名、そして登攀隊員十七名により構成されるソ連隊が編成される。

選ばれたルートは南西壁、英国のボニントン隊のルートのすぐ左の岩壁と岩稜よりなるルートで、最終段階で西稜に合する。

登攀の記述では、著者は最終段階のアタックに入るまでの、ルート工作や荷上げなどの複雑極まる隊員の動きを、ものの見事に切り捨てている。登山家でないプロの物書きであるが故にできた大英断である。ルート工作についての詳細は第三部の隊員の手記にまかせ、一般の読者をいきなり登山の核心部に引きずり込む。

登山隊は四、四、四、五人の四グループに分かれ、原則的に二人ずつのパーティで、ベース・キャンプから、すでに工作されたルートをつたって頂上に向かう。その時の隊員同士、グループ同士、そして隊長タムとの意見の違いを克明に書きこみ、隊員一人ひとりの動揺と確信の中へ、著者は深く喰い入っていく。

そこに、各隊員の個性豊かな姿が浮彫りにされると同時に、登頂に成功した者と失敗に終った者の背景が次第に浮かび上ってくる。冒頭にも言ったように、謎解きの面白さを登山記の中に織り込み、読者をひきつける。

第一登の栄誉を勝ち取ったのはムィスロフスキー（現在ソ連山岳連盟会長）とバルベルジン。だが二人共、下降時体力の消耗がひどく、第四キャンプから最終キャンプ（第五）に登って来たベルショフとトルケヴッチが、その日の夕方から救援のために登っていく。途中で彼らに酸素ボンベなどを与えたベルショフらは夜間登攀を続け、登頂。さらに下りに疲れ果てた二人を連れて、翌日の昼に第四キャンプで少し仮眠をとっただけで、第三キャンプまで連れ降ろすという、超人的な活躍をする。

すぐに続いて、第三登頂グループ、第四登頂グループ（これも夜間）各二名が頂上に立つ。そして締めくくりに第五登頂者三名、合計十一名が登頂に成功した。

この間、第五登頂者二名が疲労していたため、最終の第五キャンプで登頂を窺っていたイリンスキーら二人は、登頂を断念し、彼らをベース・キャンプまで降ろさねばならなかった。また最後の登頂者となった三名は、天候悪化のためすでに下山命令が出されていたが、ベース・キャンプとの交信の間隙をぬって登頂に成功したものであった。

本書を読む前は、ソ連の遠征隊であるから上意下達の中央集権的集団であろうと思っていたところ、まったくそれとは反対で、個人色の強い集団であった。やはり八〇〇〇㍍の高度での岩壁登攀は、何にもまして個人個人の力量と判断がなければ、成功はおぼつかないということを感じさせる本であった。

本書は四部に分かれ、第一部はすでに述べた登頂のルポ、八八頁。第二部は写真集、一六五頁。

第三部は隊長と隊員の交信記録及び登攀隊員の手記で、各人の最も感動的な体験をした数日間のことに絞られ、簡潔明瞭である。しかし、登頂できるポジションにいながら、隊長命令で隊員救助のため、登頂の機会を逸したイリンスキーら二人の手記がないことは、帰国後のしこりを感じさせる。これらの手記は第一部のロストの文章の裏づけ資料という意味も持っている。八三頁。

第四部は資料で、隊員紹介、登高ダイアグラム、各グループの行動概要、エヴェレスト登攀史などが付されているが、これらは記録

の羅列ではなく、読者の理解を助ける辞典的役割りを果たしている。二四頁。

職業ライターが書いた山の本には、一九六三年のアメリカ・エヴェレスト西稜隊の公式記録があるが、この本も実に面白い。二冊の本を読み比べると、登山家という人種は、まったく異なる体制の中にいても、一卵性双生児のようなものであることを痛感する。また登山家自身の書いた、大部分の山の本が、これらの本に比べるといかに、登山者の心情の機微を描き出すのに遠慮勝ちであるかも感じさせる。

余談になるが、ソ連エヴェレスト隊員の内、四人がその後訪日し、日本の登山家達と交歓し、エヴェレスト登山時の裏話などを聞かせてくれた。

（田村俊介）

『日本登山記録大成』

同朋舎出版　全二〇巻　定価二十万円

これは、日本登山史の研究に生涯をささげた山崎安治さんが、生前に残してくれた最後の仕事です。

全二〇巻の内容は次のとおり。

槍・穂高（第一～六巻）
剱岳（第七～一〇巻）
白馬・後立山（第一一～一三巻）
笠ヶ岳・錫杖岳（第一四巻）
薬師岳・黒部川（第一五巻）
南アルプス（第一六～一九巻）
木曽駒・富士山（第二〇巻）

収録された登山記録は六五〇点、原典を個々にさがして読もうと思ったら、ひと骨もふた骨も折らなければならないものばかりです。しかも各山域の登山史にとって不可欠な記録はすべて網羅されており、山崎さんの目くばりの広さと厚さに、あらためて感銘を受けます。

とはいえ、この全集が刊行されたとき、まず考えたのは、いったい誰が、どんなときに、これを読むのだろうか、ということでした。まあ、辞典や事典のように、いちおう全巻そろえておいて、必要に応じて各項目をひろい読みするのだろうが、さて、その〝必要〟なときとは、どんなときだろうか。いずれにしても、ひとつの完結した読物として、アタマから全巻を読むやつなんていやしない。

ところが今回、この全集の書評をたのまれて、ほかならぬ自分が、全二〇巻をアタマから読むはめになってしまいました。正直にいって、いささかウンザリする気分で読みはじめたことはたしかです。ところが、読みすすむうちに、じわじわと魅きこまれていって、途中で飽きるどころか、つぎが読みたくて頁がどんどん進むのです。事典をアタマから読んでいくような苦行感はちっとも感じない。おかげでこの一カ月ほど、他の仕事ができなくて閉口しました。

これは、どういうことなのか。もちろん個々の記録のなかには珠玉の名篇ともいうべき文章もあるけれど、大部分の登山記録というやつは、まあ皆さんもご存じのように、なんらかの思い入れがあって読むのでなければ、それほど面白いものではありません。ことに高校や大学の部報の文章たるや……。それなのに、この種々雑多な記録の集積をアタマから読む作業が苦行にならず、むしろ快楽になったのは、二つの理由があると思います。

ひとつは、この『日本登山記録大成』が、山崎安治さんという、すぐれた歴史家の手で編集されたことでしょう。初登頂・初登攀・初縦走などの記録をもれなく集めるのは、たしかに大変なことですが、それだけでは、まだ歴史家の仕事ではありません。一定の史観とパースペクティブをもって、個々の史料を〝編む〟ことにより、それぞれの事象を全体の歴史のなかに位置づけることが、歴史家には要求されます。

私は、この全集を通読して、司馬遷の『史記』にはじまる〝紀伝体〟を想い起こしました。各巻のはじめに山崎さんは「総説」を書いていますが、これは、いわば本紀にあたります。そして、個々の登山記録は〝列伝〟です。各巻末の、山崎さんの筆になる各記録の「解説」は、さしづめ〝讃〟（『史記』では太史公曰）にあたるでしょう。こうして、ひとつひとつの、それだけでは断片的な登山行為に歴史性が付与され、その集成が有機体としての〝世界史〟をかたちづくります。山崎さんは、この全集を編むことによって、貴重な登山記録を広く紹介するだけでなく、その読み方を教えてくれているのです。

もうひとつ、この全集をアタマから通読すると面白い理由は、追体験の楽しみを満喫できるからでしょう。ここに集録された記録は、明治から戦後まで、ほぼ百年間の登山史の歩みを伝えています。そこには、いくつかのエポックで画された、登山思想と技術の〝進化〟がみられます。たとえば二〇巻のうち六巻をとっている「槍・穂高」の各巻の内容は次のとおり。

近代登山の黎明（明治25年～大正11年）
岩登りと積雪期登山の展開（大正12年～昭和4年）
バリエーション・ルートの開花（昭和5年～8年）
奥又白谷の開拓と極地法登山の展開（昭和8年～15年）
極地法登山と岩壁登攀の開幕（昭和16年～32年）
残された未登ルートと継続登攀（昭和32年～51年）

この、重厚な進化の過程と段階を、考えてみれば〝いま〟の登山者は自己一身のうちにすべて体験しているのです。登山が他のスポーツと決定的に異なるのは、この点にあります。学校山岳部や活発な山岳会に所属すれば、百年の重層的な登山発達史を、せいぜい四、五年で追体験できるのですから。たとえ初登攀ではなくても、自分の登山史にとってはやはり初登攀です。そして先人の登山記録を段階的に読みすすむとき、それが自分自身の足跡と二重写しになって、肌身にしみるような一体感を覚えます。読書の楽しみのなかでも、内容との一体感は最高の境地でしょう。

というわけで、この全集の読み方、使い方、楽しみ方は他にもいろいろあるでしょうが、私はアタマから通読することをおすすめします。

（平井吉夫）

日本山岳会　信濃支部三十五年

日本山岳会信濃支部編集ならびに刊行　A5
判函入　六二二頁　一九八四年五月刊　頒価
六〇〇〇円

本書は、昭和二十二年六月、長野県下の会員を結集して発足した信濃支部の三十五年史稿である。本会にはいま二十の支部があって、各地でさまざまな活動がおこなわれているが、そのなかでも支部そのものの歴史を、このような六百ページをこえる大冊にまとめたのは、信濃支部をもってその嚆矢とする。編集人・小林俊樹氏によると、はじめ三十年記念誌として刊行をくわだてたものの、資料・記録の収集・整理にかなりの時間をついやし、「三十五年史」にきりかえたとある。そして「歴史記述には、物語や小説のような虚構はいらない。その限りにおいて、本誌は、できる限り忠実に、支部その他の業績をたどったつもり」と書かれているのだが、そのかぎりにおいては、実に丹念に歴史的経過を集約されている。まずはじめにその努力をたたえたいとおもう。

あらためていうまでもなく、信濃は山の国である。日本の山岳人の多くがここを舞台にして育ってきた。播隆上人の槍ケ岳開山という十九世紀はじめのすぐれた登攀記録をはじめとして、近代にはいってからは、学術研究、測量事業などにくわえてかずかずの探検的登山がおこなわれてきた。明治三十八年の日本山岳会創立後、四十四年に信濃山岳研究会が発足し、その発展として大正八年に信濃山岳が生まれたのも、信濃の風土的特色を生かしたものであった。本書ではそのような前史をふまえて、信濃支部の活動がまとめられている。

昭和二十二年六月、北安曇郡常盤村に疎開していた槇有恒氏を初代支部長として発足した信濃支部は、翌二十三年五月に支部報を出している。岡茂雄氏の編集になるその第一号には、槇有恒「支部設立に際して」、松方三郎「スウィスの山と人」、小林国夫「山岳の地学的研究」、尾崎喜八「背負子」、赤羽次郎「日本アルプス諸温泉の医学的研究計画」、百瀬慎太郎「山靴」、無名氏「河童のごとく」などの随想・研究のほか会務報告、会員消息、山の便り、日本山岳会行事計画、支部規定があって、みごとな出来栄えをみせている。なかでも槇氏は「此の日本アルプス其の他の立派な山岳に取囲まれておる立場は、単に県内会員相互の関係だけに止まらず、より広いそして直接的な関係を各方面にもつもの」と言い、国土の自然を愛するもののひとりとして、山岳の開発と保存、山小屋の正確な現状の報告、登山路・案内人にかんする問題、山岳博物館の建設など、どれをとっても重要なものばかりで「山岳のお膝下であるだけにその処置なり報告なり計画は各方面に影響するところが大きいと思います」と書いた。このような大局的な綜合判断と啓蒙性が、支部活動の大きな柱となったことはいうまでもない。

本書の第一章「信濃支部三十五年史抄」は、支部報第一号から第

十三号（昭和四十四年三月）までの内容を中心にその足跡が書きこまれている。支部のアンナプルナⅠ峰遠征における遭難（四十八年五月）をさかいとして、第十四号再刊（五十七年六月）まで、約十年の空白の時をすごさねばならなかったとあるから、紆余曲折のあったことを知らされるのだが、支部報による二十二年の歴史は、実に多くのものを教えてくれる。格調の高い誌面には、山の文化、山の科学のほか登山技術講習会、遭難対策、自然風景地の保護と利用について、さらに会員の動静について多くの記述がある。ときとして第三号（二十四年五月）のように全ページが縮刷掲載されているところもあって、登山史資料としてもたいへんおもしろい。

信濃支部の主要行事は、なんといっても毎年上高地でひらかれるウェストン祭である。第二章には寿像建立、戦時中のとりはずし、再建という前史を資料にあたりながら正確を期して叙述されてゆく。この項の執筆を担当した小林氏は、長野県の計画製作になる真鍮板の英文解説にふれ、誤刻（Walter が Waltar になっている）は中屋健一氏の指摘があったのにもかかわらず、そのままになっていることをあげ「今さら訂正もできないのであろうか。……今日に至るまでまだ製作時のまま」だと書く。ウェストン祭行事の経過については、第一回（昭和二十二年六月十四日）から第三十七回（五十八年六月四日～五日）まで、各年度の様子を具体的に記述、信濃支部会員諸氏の尽力の跡がたどられる。そこには尾崎喜八前支部長の碑前朗読の詩が収録され、本部から出向した役員や講演内容も簡潔に記されていて、戦後という時代の推移がうきぼりにされている。この第二章は、のちに別刷にされて小冊子にもなった。

そのほか第三章「支部活動」、第四章「長野県境地帯一周踏査」、第五章「海外登山」（ニュージーランドの山。アラスカ―マッキンレイ、フォーレイカ。アンナプルナⅠ峰。アンナプルナⅠ峰については別に正式報告書が出された）、第六章「信濃支部主要行事年表」があって、三十五年間の歴史がみごとに位置づけられている。

一支部の歴史がこのような大冊となってあらわれたのは、初代支部長の槇氏の高邁な志をついだ尾崎喜八、高山忠四朗、塚本茂樹、奥原教永、蒲生明登氏ら歴代支部長をはじめ、支部会員諸氏の熱誠がなさしめたものとおもう。私は今年、久しぶりにウェストン祭に出席して、信濃支部の旺盛な活躍ぶりにあらためて敬意をいだいたが、この『信濃支部三十五年』はさらにまたそれを教えるのに十分なものがあった。

（近藤信行）

対談『三高時代の思い出から』

今西錦司
西堀栄三郎

＊この対談は、一九八四年三月十日、図書委員会主催の「山岳史懇談会」でおこなわれたものです。当日の概要はすでに会報「山」四七一号で紹介されていますが、両氏の著書でもふれられていない話が多いので、速記録を整理、両氏の校閲をへたのち再編集したものを収録します。

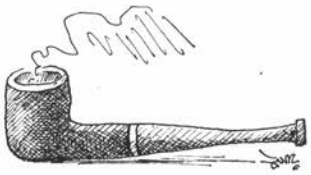
激動の時代

西堀　きょうは主として今西君の話が中心になっていいと思うんです。ということは、三高当時は兄貴分である今西と一緒に行動していることが多かったから、今西の話を聞いてもろうたら、三高時代のことはそれで尽きると思う。だから、一時間でも二時間でも今西にしゃべってもろうたほうがいいし、私はまた補足的にはいくらでもやりますから。

今西　題は「三高時代の思い出から」としてあるんです。「から」というのは、思い出全部をしゃべったらきりがないので、その中から思いついたことをしゃべるということにしてもらいます。

初めに申し上げたいのは、われわれの三高時代というのは非常に激動の時代やったんですね。たとえば私は一九一八年に燕から常念、槍、前穂高を歩いているけれども、わらじ、脚絆で金剛杖を持って、今どきそんな姿をして歩いたら後ろを向かれるやろうと思うけど、そういういでたちで、よう槍へ登ったと思うんやけどね。槍の横手の何という雪渓か知らんけど、あれをゴザを敷いてその上に乗ってすべったら、スピードが出よってね、びっくりしたことがあった。（笑）これを何というか、近代登山の前近代登山といいますか、その時代から始めているんです。

三高の入学は一九二一年です。二一年という年は日本の登山の歴史においても忘れ



ることのできない二つのイベントがある。一つは槇さんのアイガーの東山稜ですが、そういう日本人がおったかとわれわれは非常にショックを受けました。もう一つは、イギリスがいよいよエベレストを狙って、一九二一年はレコネッサンス（偵察）ですが、隊を派遣した。これも今から思うと、頭に刻み込まれた最初のイベントです。

しかし、それは両方とも海外で行なわれていることであって、日本の中ではそのころはまだたぶん沢の時代といったらいいかもわからん。京都の先輩に田中喜左衛門という人がおりますが、その人とか冠松次郎というような人が黒部を盛んに探検しておった時代です。

ぼくが一九二一年に三高へ入りました時は、ぼくらの相棒に河村というのがおって、これは早うに死にますが、西堀、河村、今西の三人で初めてテントをつくって、西山温泉から農鳥、間ノ岳、北岳と歩いて、そのあと仙丈を登って赤河原から戸台へ抜けたんです。そして、戸台へ日の暮れに下りてきて泊まった家が、後年知り合いになる竹沢長衛の家やった。これはあとからわかったんですけれども。長衛の話もおもしろいけれども、ちょっと待ってですね……。その南アルプスへ行ったということは小島烏水の影響です。小島烏水の『日本アルプス』の第一巻に出てくるルートを通って行ったわけです。それから、『日本アルプス』のほかにも「山岳」のバックナンバーを買い求めて、日本各地の山の勉強をしました。そのころ、「山岳」を読むためにはやっぱり地図が要るというので、だいぶ五万の地図を買い求めたんです。

関温泉でのスキー

それと、ぼくの経歴からいうたら非常に重大なことは、一九二二年の冬に初めてスキーをやり出したんです。ぼくも西堀も京都一中ですが、同級生に藤江永次というのがいまして、これがスキーをいちばん初めに三年ぐらいの時からやり出した。その次にやったのが西堀栄三郎で、中学の四年ぐらいからやっています。それで、おもしろいからやれと何度勧めよっても、ぼくは頑として「雪の上をすべるのが何がおもしろいか。おれは山登りをやる」（笑）と言うて頑張っていたんです。そしたらある時、慶応の大島亮吉が、相棒は小林（達也）さんでしたが、白馬へスキーで登りに行ったというのが新聞に出まして、スキーはやっぱり登山のためのものかと翻然として悟りをひらいて（笑）、よし、始めようということになった。

そして、どこへ連れていきよるかと思うたら、越後の関温泉です。京都一中と関温泉とがどう結びついていたんやというのは、ぼくにももうひとつわからんけれども、先ほど申しました藤江永次の兄さんが慶応へ入っておったんです。そういう関係で、慶応のスキー合宿に行ったことから結ばれて、京都の中学生が関まで乗り出していったのかもしれません。関西ではどうやったんやといいますと、京都に中山再次郎という京都二中の校長がおりまして、これがちょっと風変わりな男で、どういうわけか知らんがスキーを始めようと思って、高田へレルヒ少佐の教えを受けに行ったんです。

西堀　前は高田の小学校の校長先生や。

今西　ヘェ、そうか。そしたら、因縁は

ありますな。それで、レルヒ直伝のスキーをしておったんや。場所は伊吹山です。

西堀　そこのところを補足すると、彼が高田から京都の二中の校長に命じられた時に、せっかく覚えたスキーをどこでやるかと思って汽車に乗っていたら、伊吹山が見えた。それで、これこそはいい練習場になるぞといって帰ってきて、田中喜左衛門などと語り合ったんだ。

今西　そうか、草分けやね。その講習を受けた人の話を聞いたけれども、軍隊式で、キック・ターンでも一、二、三と号令があって、一で片足のスキーをシュッと立てて、止めとらなんだらいかんのや。それから二で回して、三の号令で合わすんですな。それをテカテカのゲレンデでやらされると、みんな片足を立てるだけでステンとこけてしまうそうな。(笑)たいへん厳しい講師やったらしいですよ。もうちょっとスキーのことを言いますが、ぼくらは西堀に連れていってもらって、高田にヤマゼンというスキーを売っている店がありまして、そこへ行ったらずうっとたくさんスキーが並べてあるけれども、みんなそのころはリリエンフェルトといって足をのせる台のついたスキーで、普通の靴でもはけるスキーやな。それを買うと、初めからセットになって一本杖がついているんですよ。それに対してノルウェー式のスキーというのがありますが、「あのリリエンフェルトは旧式やから、お前きょうからスキー始めんのやったら新式のをはけ」と西堀が言うて、われわれは初めからフィット・フェルトをはきました。それで初めから二本杖ですよ。



そして、関へ行くと前からのなじみで朝日屋です。二階の端っこに十畳ぐらいの部屋があって、三高の幹部部屋と称してわれわれはそこへ入った。三階の真上の部屋は慶応の幹部部屋でして、慶応のお偉方が入っているんですよ。慶応と三高のほかに明治が同じ朝日屋に泊まっていましたな。それから、関には笹屋という宿屋もあって、そこに学習院、四高などが泊まっておった。

非常に重大な転機というのはやっぱりきっかけがあんのや、というのは、ぼくは朝日屋へ泊まったのがよかった。でも、慶応はちょっと怖いんですよ、向こうさんもお高くとまっておられるし。(笑)それで、明治と仲よくなりましてな、明治のリーダーは米沢という人でしたけれども、その人から耳学問で「わらじばきの登山はもう古いんだ。まず金剛杖をピッケルに替えて、アイゼンというものをはかないかん。それからザイルが要る」ということをいろいろ教わったんです。

それで、これは何とかせんならんぞと思うておったんですが、どこで買うたらいいかもわからへん。そしたら、そのころ大阪に好日山荘、今の海野さんやらのいちばんの元祖ですな、西岡一雄というのがいるんです。その西岡一雄に「こういうものをそ

ろえんならんのやが、何とかしてくれ」といって申し入れたら、「よし、お前らだけ特別の取りはからいして、店に出る前の品物を分けてやるわ」と言うて、大阪というところはようけ川がありますが、どっかの川べりに船が積んできたものを入れておく倉庫があって、その現場へ来てくれと言われて行ったのを覚えてますわ。そこで荷物をほどいてピッケルとアイゼンとロープとを手に入れた。

それを関へ持っていって、二二年にスキーを始めて、二三年の春にもうちゃんと米沢さんとザイルを結んでやったんです。関の裏に神奈山という山があって、あんな山はこのごろの人やったら誰でも登っているやろうけど、なかなか難しそうな山で、登ったという人はあまり聞いたことがなかった。そこへ真似ごとみたいなもんやけど、最後の九合目あたりからスキーをデポして、ザイルで結び合って登頂したことがあります。

西堀　その出発の時に、宿の主人が水盃で送り出したんです。（笑）

今西　関まで行く間のちょうど中間ぐらいに一軒茶屋という家があって、そのころからボロボロの家やったから今はもうないやろうと思うけど、そこで一個十銭で塩ようかんを売っておって、それを行く時に必ず一つ食うていくんですよ。そしてしばらく遊んで、スキーをやって。

その一軒茶屋でぼくは槇さんが滑るところを見たことがありますけれど、あんまり上手なことありません。（笑）われわれはビギナーで始めたところですけれども、その時代に滑っていた先輩連の中で光っていたのは、岡部長量と波多野ですな。これは学習院の二人で、あとでアルバータへ行きますけどね。岡部、波多野が通るところは草木もなびくと言うとったんや。（笑）どこでもサーッと通りよったね。ぼくたちも脂ののりきった時というのは一九二九、三〇年ごろですけど、その時にはわれわれも草木がなびくという感じがしましたよ。（笑）

三高の三羽烏

それから、これはとっておきの話じゃないけど、三階の慶応がある日、ガチャガチャと朝早くから出かけていきよった。それは年中行事で赤倉行軍というのをするんですな。われわれも赤倉行軍をやったことがありますけどね。その時に、慶応はスキーにでもストックにでもペンの印の焼き印が押してあって、われわれのは桜の花の焼き印が押してありますけど、慶応が出よったあとで三高山岳部のストックが一本足らんというのや。ペンの印のが一つ残っているんやから、慶応が持っていったに決まってる。よし、これはとっちめないかんぞと言うて、慶応が日の暮れに帰ってきよるのを一人ひとり調べて、間違えたやつを見つけよったんですよ。

それで、「君、ちょっと三階の幹部部屋まで来てくれ」と言うて引っぱりあげよった。別にいじめる気も何もないのや、魂胆は幹部をつるし上げようと思うているからね。（笑）幹部部屋へそいつを連れて入って、実はこうこうや、こんなことは幹部の監督不行届きで、責任は君らにあるんやないかといって、怒りよったんですよ。そのころ、三田さんよりも次の時代になっていましたね。佐藤久一朗さんなんかが幹部の

ときやな。青木勝さん、大賀道内さんというところは、われわれも一目置いていたんだけど、そこらへんは謝りよらん。(笑)幹部の中に西川不二雄という人が、まことにすみません、幹部の責任です、と謝ってくれたんで、われわれは悠々と引き揚げたことがありました。(笑)

何でや知らんけど、大島亮吉とは関でいっぺんも会わなんだわ。大島という人は慶応の中では異色で、あんまり偉ぶらん人やったですよ。何かものを言うてやれば、必ず克明に返事をくれてね。ぼくの手紙はないけれども、往復した向こうからもらった返事は残してありますよ。あれは最後はここ(日本山岳会)のルーム行きやな。

それで、二二年にスキーを始めて、二三年に神奈に登って、二シーズン目の二四年の春はもう立山へ行っているんです。そのときは西堀と私と高橋健治。高橋は早う死んだです。そのころ三高の三羽ガラスというたら、西堀、今西、高橋となっていて、どこでもそれで通っていた。ところが、早う死んだら損ですな、今ごろになると三羽ガラスは、西堀、今西、桑原になってる。(笑)これはたいへんな誤りですから、ここで訂正しておきます。

今でも高等学校は三年制でしょう。われわれも三年制やったんです。いまでも高校野球はどんな無理してるかと思うけど、三年間でリーダーをつくらんならん。そのためにたいへんな無理をしてますね。無理に背伸びさす。背伸びしすぎて、遭難が起こるということが悪循環として出てくる。それはわれわれの時代よりちょっとあとで、三高がよう遭難する時代出てきますけどね。それは、やっぱり背伸びしすぎた結果やろうと思うんですね。

岩登りは大学に入ってからですね。三高のときはまだ岩登りはやっていません。そのころ、大阪にRCCというクラブがあって、藤木九三が大将で、水野祥太郎なんか、それに加わっていたんですね。そいつらのテキストがいかんのやね。エイブラハムの『コンプリート・マウンテニヤー』をテキストに使うておる。われわれのテキストは、ウィンスロップ・ヤングの『マウンテン・クラフト』なんですよ。それで、エイブラハムの本なんかで勉強したやつはろくでもない、いっぺんどんな岩登りをしとるか見にいこうといって、六甲へ見にいったことがある。そしたら登山靴で岩をガリガリ、音をさして登っている。あんなアホな岩登りがあるかというて、鼻であしろうて帰ってきたことがあります。(笑)

しかし、ヤングは詩人でしょう。あんな難しい本ないですよ。ボキャブラリーが多くて、字引どんだけ引かんならん。ぼくがヤングを読みだしたのは、三高のときからんけど、毎日、教科書やらと一緒にカバンに入れて、ヤングを持って歩いていた。「読書百遍、意おのずから通ず」という言葉が昔の人の本に書いてあるけど、それがわかりましたよ。百遍読んだか、何遍読んだかしらんけど、ある日、忽然と悟りをひらくみたいにして、ヤングの本がみなわかってしまった。そういう根本的なものをつかんだら、末梢の文章なんか、独りで読めるようになるんですな。

しかし、ぼくの『マウンテン・クラフト』はバラバラになってしもうて、それで製本し直したですよ。あれも将来、ここのルームに預かってもらおうかな。あれは記

念品ですな。

カツどんのこと

それから、ぼくの三高時代、一九二三年の秋だったと思いますが、関東大震災が起こるんですな。これからの話は、カツどんの話なんですよ。カツどんはどこで発祥したか知ってますか。松本ですね。そのころはカツどんくれ言うと、「お醤油味にしましょか、ソース味にしましょか」と聞いたもんです。ソース味というのは、ご飯の上にキャベツの刻んだのが乗せてあって、その上にカツレツが並べてあって、食べる前にソースをかけて食うんです。醤油味は、今でも続いているもので、卵やタマネギが入ってますが、カツレツは一回炊いてあるんですね。

その震災のとき、横浜からゴッソリ移住してきよったやつが学校の近く、一町ほど離れたところに来よってね。そこへ行ってカツどんくれと言ったら、知らんというのや。横浜から来ているくせに、カツどんぐらい知らんのか、と言って教えてやった。ルームから電話をかけて、きょうの昼、カツどんをいくつ持ってこいと言うたんだが、カツどん食うと松本へ行ったような気がして気持ちがええのや。(笑)そのころ松本へ行ったらカツどんを食うというのがジンクスになっていてね。

あるとき、西堀もいましたけど、霧ヶ峰へ登って、その最後の日に残りものをみんな食おうやないかと言うてライスカレーをぎょうさんこさえて食べた。気がついたらこんなにお腹が膨れていて、松本でカツどん食えへんやないか、何とかせんかいな、ということになって、あそこから下りてくる街道にある松並木の松の木を千回押そうといって、ヨッショ、ヨッショと押してお腹をすかして、それで松本へ乗り込んだということもあります。

それから、この間あるところでお腹がすいておって、カツレツでちょっとビールを飲もうといって店に入った。そしたら、そこの店のおやじがちょっとツムジ曲がりやったのかは知りませんけど、「カツどんならいたしますけど、カツレツはうちの店ではいたしておりません」と言う。そんなおかしなことがあるかと思ったが、気のきいたのがおって、とっさに「よろしい。そんなら、カツどんの台抜きしてくれ」と言うたら、上のカツレツだけ持ってきてくれたんです。(笑)

ヒマラヤへの想い

大学時代のことは言いません。きょうは三高ということで話をしてんのやからね。大学というたら、一九二五年に源次郎尾根を登りまして、一九二七年が三ノ窓のチンネです。そのころ、どこかへ遠征しようやないかという機運が出ておって、カムチャッカあたりはどうやというので、ステン・ベルグマンという人の『ノマーデン・ベーレン・ウント・ボルカーネン』(漂泊の民・熊・火山)という本を伊藤愿というのが甲南から入ってきて訳しよった。しかし、どうももう一息やなと言うてたときに、パウル・バウアーの『カンプ・ウム・デン・ヒマラヤ』というのが出たので、伊藤愿に訳させたら(編註・伊藤愿訳『ヒマラヤに挑戦して』)、非常におもしろくて、しかも二万円で行けるという。今と貨幣価値が違うから、そのつもりで聞いてもらわんといかん

が、二万円やったらわれわれの手の届く範囲やないか、そんならヒマラヤやろう、ということになった。それで同志を結成したのが、AACKという今日まで続いている京都大学山岳会で、その創設が一九三〇年です。

その後、京大へ入ってから本を集めることに熱心になって、そうとう充実したライブラリーを持っていたんです。これが戦争でやられずに無事に残っておったのに、戦後、火災に遭って本が全部なくなってしまった。その本はわしらがポケットマネーで買ったんやなくて、図書館で買うてもろうたやつをルームへ貸し出してもらってたんや。

そのときのライブラリーに独逸山岳会の本なんかもあったけれども、「アルパイン・ジャーナル」のコンプリート・セットがあった。これが手に入ったときはうれしくて、毎晩一冊ずつ借りて帰って読んで、非常に知識をつけたのを今でも覚えてるな。

もう一つ話をしますと、山岳部というのは学校におるときには何もせえへんのか、と言われたことがある。それで腹が立って、ほかの運動部はみんな放課後に練習するので、オレらもやらないかんといって、ノコギリとナタを買うてきたんです。それで、三高の校庭に松の木がずいぶん生えていたので、それを毎日放課後に一本ずつ切って割り木にして、裏のグラウンドでたき火の練習というのをやった。(笑)切っているときに先生が通るとうるさいから、見張りを一人置いとくんですよ。現場を押さえられんようにしないといかんからね。だから、山岳部は顔でわかるのや。目がみんな煙でいぶされて、はれて汚い目をしておった。寒くなってきたら、スキーを裏のグラウンドで練習しました。

西堀栄三郎を語る

三高山岳部の思い出ということでしゃべっていますけれども、今まで申したようなことは実は三高山岳部に西堀、今西という大スターが入ってきて、それがいかに成長していったかという成長過程を説明したようなことであったかと思います。西堀、今西といえば一中時代からいつでも一心同体みたいにして、どこへでも一緒に行ってやってきたんですけれども、そういうふうに言うと、まるで同じような人間かと思われるかもしらんが、これほど違うた人間もあんまりおらんのですな。

一九二一年に南アルプスへ行ったとき、大門沢の奥にそうとう急な雪渓があるんですが、そこの上を歩いているときに西堀が滑ったんです。すると、雪渓の上で体をクルクル回転させて、三回転か四回転の間にパッと雪渓の外へ出てしまいよった。わしらはそういうことは真似できませんから、あれよといっている間にスピードが出てしまって、ダーッと落ちていくんですけれどね。(笑い)穂高の遭難(編註・昭和二年七月、奥又白から涸沢へ、霧の中をグリセード中に転倒、滑落)はそれですわ。なんと器用な人間もあるなと思いましたね。

それから、ぼくが大学へ入った年の五月に御岳へ行きました。御岳も八合目ぐらいから上にそうとう大きな雪渓がでてきます。われわれは七合目か八合目の小屋に入ったんやけど、西堀は何をするかと思ったら、「雪がごっつうあるさかい、スキーを持ってこなんだで、スキーこしらえるわ」

と言っているんですよ。それで、便所の板をはがしてきよって、スキーの大きさに切った。ベンドをどうしよるかと思ったら、湯につけて根気よく曲げてると曲がんのやね。それでちょっとしたベンドができて、ビンディングはどうするかというたら、クギを両方へ打って、とじ革で結ぶようにしよった。「このビンディングは一回クリスチャニアをかけたら、それでぶっ壊れるさかいな」と言うてね。(笑)

そしてあくる日、リックサックのうえに小さいスキーをつけて頂上へ行きました。目指す雪渓へ下りて、一ぺんグーッと曲がったら、もうそれでしまいですわ。パーになりました。(笑)

じっとしているのが嫌いな人でね。そのかわり、あんまり考えないのやないかと思うんだけど、(笑)瞑想するのが嫌いなんですな。「考えない葦」ですわ。(笑)

もう一つびっくりしたのは、鹿島川を上ってカクネへ入ろうと思って行って、「明日、沢歩きやぞ」と言ったら、「そうか。わらじやないと困るぞ」と言っていた。そしたら、西堀は小さいときから六尺のさらし木綿の腹巻きをしているんですが、それをはずして裂きよって、親指と次の指との間にはさんで、ちゃんと縄をよりよるのや。そして、「わらじはたしか、こうしたらできるのや」と言うてやってるうちに一足分のわらじをこさえて、あくる日それをはいて鹿島の本流へ行きましたよ。これはまぁ、何でもできる人やな、と思うてね。(笑)三高の歌に「権化」という言葉が出てきますが、そのころからもう技術の権化でしたな。

ぼくは物理や数学は嫌いやけれども、それでも若いときは今ほどではなかったんです。ところが、西堀がいると見るに見かねて、「オレがやったる」と言うて、じきにやってくれるんやな。それでぼくは何もせんでもええことになって怠けていたら、やっぱり技術は進みませんわな。(笑)クギ一本打たへんねん。学校で日が暮れてきて、電気のスイッチを押してもともらんので、「勉強でけへんやないか」と営繕課へジャンジャン電話をかけたら、しぶしぶ出てきましてな。そして、電気を調べて、「あぁ、先生、これは球がゆるんでます」と言うて帰りよった。(笑)その程度で、何もかもおんぶしてるもんやから、ぼくはいつでも女房に軽蔑されてね。「あんたはこれでも理学博士か」と言われて。(笑)これはやっぱり、西堀と一緒に山へ行っているうちにこういうことになってしもうたんや。(笑)

司会　どうもありがとうございました。では、今西先生のお話に引き続き、西堀さんのほうからお願いいたします。

西堀流ハードウェア

西堀　今西君から十分話があったし、非常にクロノロジカルに正確なものであったけれども、私は「考えない葦」やから、(笑)断片的なことしか申し上げられませんけど。何しろ、ぼくは大学時代と高等学校時代との区別が十分つかんところがありますから、その点許してください。

今西君の話の中に立山に行ったという話がありますが、槇さんの遭難―立山で板倉さんが亡くなった―の翌年だったかな、翌翌年だったかな。今西と私はアザラシを持っていたんですけど、高橋は例のナワアザ

ラシでした。当時、私たちはキックターンをするときに谷向きキックターンをしていたんです。それでは下へ降りてしまうので、二歩損することになる。それで、山向きのキックターンをしようということで、その練習を始めたんです。そのときが一本杖から二本杖に替わる時期で、今西は初めから二本杖やった。あのときに明治大学の馬場忠三郎と、妙高の冬山へ行ってね。

今西　初めて行ったんだな。

西堀　それもやはり水盃。そのとき、馬場忠はまだ谷向きのキックターンをしていたんですけれども、今西と私は秘密練習で十分山向きのキックターンが練習してあって、そこでいつでも二歩得していました。いま今西君が言ったスキーの問題は、そのころ明大、慶応、学習院、その他の人たちと交流できたということで、たいへんよかったと思います。

どうも細かいことばかり言われて恥ずかしかったんですけれども、私は今西の一つ年下でもありますし、いつも今西君がリーダー格であったので、全体の把握なり計画はいつも今西君が立てていた。私はむしろ兵站部的な役割をして、今でいうハードウェアのほうを引き受けていたわけです。だから、今西がハードウェアから離れていってもしょうがない。(笑)　しかし、今西君の直観的な判断力にはいつも敬服していましたね。考えると言われましたが、たしかに今西のほうがよく考えてやっていたです。私だって考えないわけじゃないんですけど、(笑)　考え方がちょっと違っただけのことですね。



先ほど、ヤングの『マウンテン・クラフト』の話がありましたが、その中にダンシング・クライミングという言葉がありまして、岩登りにしても何にしてもきわめてリズミカルに登っていくことが大切なんだということでした。つまり、人間のバランス感覚、ロジックではない、直感的というか反射運動的というか、そういうものでうまくリズムに乗っていく。すると疲れもしないし、危険もないし、石ころも一つも落ちない。

今西　西堀は忘れたかもしれませんけれども、三二年に樺太へ行って幌内川をさかのぼった。そこに上から流れてきた材木が水の中に入ったままで貯めてあるところがあんのやね。幌内川ってそうとう幅があるんですけど、西堀はその材木の上をピョンピョン跳んで渡って、また跳んで帰ってきた。(笑)　片足をかけると材木がグラッとくるんですけど、そのときはちゃんと次の動作を考えておって、それで移れるんやね。それが今のバランスの問題です。われわれは岸から見ていてヒヤヒヤしていたんやけど、実に鮮やかに往復しました。あれは西堀先生にして初めてできるので、皆さんには勧められん。(笑)

西堀　そういうことが私にはいっぱいあります。ですから、御前沢から上へ上がっ

たときも非常に楽な気持ちで上がりましたし、八峰でロック・クライミングしたときもそうでした。その後に三ノ窓のチンネへ行ったときも、そういう要領でロック・クライミングをやりました。そういうリズミカルな登り方の練習を、もっともっとやるべきだと思いますね。

私はそのダンシング・クライミングというのを吉田山で練習したくらいですから、やろうと思ったらどこでもできるものです。

それから、ハードウェアを私が引き受けているという話で、スキーをつくったり、わらじをつくったり、はくものばかりですが、私は実は靴まで自分でつくりました。南極へ行ったときも、結局そういうことの積み重ねが非常に私の心の支えにもなったし、何がなくともやっていく、創意工夫で克服するということの練習になった。いちばんものぐさで何もしない今西と一緒に行っていたおかげでね。(笑)

もう一つ、その後に黒部へ入ったとき、立山温泉で一酸化炭素でもうちょっとでみんながやられるところでしたけれども、幸い助かったんです。平の小屋へ下りてみたら、平蔵だのそういう連中がいっぱいおりまして、そこに二晩ばかり滞在しました。そのとき、彼らは何を食うとるんかと見たら、米倉にネズミがいっぱいおって米を食い荒しよる、それをまた人間が食おうというわけです。戸のすき間をちょっと開けておいて、ネズミがチョロっと出てきたときにバチッと閉めてつぶすとか、(笑)いろいろおもしろいことをやっていました。

もう一つおもしろいのは、スキーでワックスを塗る代わりに何かペンキみたいなものでよく滑るものはないかと思いまして、おそらく日本で、世界でも最初かもしれないと思うんですけれども、関西ペイントへ行って樹脂性のペイントを買って、それを塗ってアザラシをくっつけたんです。なかなかうまくつかなくて、画ピンでつけたりしたんですけれども、上へ行ってからパタッとはずしたらすぐ滑れますし、あれはその当時としてはきわめて珍しいものでしたね。自分で言うのはなんですけど、おそらく日本で最初だったろうと思います。

それと、東沢に行ったときには、みんなビリグリー・アイゼンというのをつくっていました。これは、スキーの両側にこのぐらいの幅の鉄の板をカチャンとはめるようにしまして、二ミリか三ミリぐらい下に出ているんですが、その当時はスティールエッジなんてないものですから、そういったものをつけた。これは風が吹いている斜面を横切ったりするときに、非常に安全でもありました。

それと、短いスキーをつくりました。これの発想は、体の貧弱さをカバーするためです。兵隊検査で、今西は非常に体がいいものですから、甲種合格になったんですけれども、私は第二乙というて、兵隊にもならんような、いちばんカスみたいなものです。つまり体が弱かったんですけれども、そういう体の人間ですから、どうしてもそういう道具で補うしかなかったんです。

リュックサックの中には、ほかの方のあまり持っていないものがたくさんありました。たとえば、ノコギリ、カツオ節、謄写版の刷りかすのロウ紙、これは私の三種の神器としていつも中に入っていた。そのほかに特殊なものとしては、カンフル注射の

道具まで入っていた。私は昔は酒があまり飲めなかったものですからね。今は飲めますけど。(笑)それで、もし何か体の具合が悪くなって心臓マヒでも起こしそうになってきたときに、そのカンフル注射をしてもらえるように、ちゃんと用意しておいたわけです。今西やほかの人に、「このリュックサックのここにカンフルの道具が入れてあるで、こういうふうにしてや」と言って、テニスのゴムボールでプスッとやって練習さしといたこともあります。(笑)今西は「そんなん知らんぞ」と言うて、決して触りもしなかった。

金作沢を下る

そのころ沢歩きで楽しかったのは、金作沢へ下りたときです。

今西　その話、せえへなんだな、オレ。

西堀　それと東沢とがあるわけだけれども、槇さんの遭難に少なくとも私は刺激されて、そう言っちゃ失礼な言い方になりますが、槇さんの遭難が私たちには大きな影響を与えた。どうしたらそういう遭難を避けることができるかということのほうに、うんと力こぶを入れようじゃないかと、私は少なくとも思いました。スキー術そのものは、まだきわめて幼稚なものであったんだけれども、しかし、そういう積雪期の登山としては私は非常にいい経験になりました。

特に帰りに立山温泉のほうへ回って、雪崩の研究というか観察を今西君と並んで一生懸命やったんですが、このときも今西君が言った学説というものは、その後になっても非常に卓越した雪崩に対する観察であり、観察から得た彼の結論であったと思います。ちょっと変な言い方だけど、そういうことの物理的裏付けをすることについては、いつも私が手伝いはしました。けれども、こうじゃないかというアイディアはいつも今西が出していましたね。それから、今西は非常に計画好きでありますから、山行きの計画はほとんど全部、今西がつくって、その実現を手伝ったということになるかもしれません。

今の金作沢もその線ですけれども、私も沢というのは非常におもしろいといいますか、ことに神秘的なにおいが強いので、上廊下も行ってみたいと思うし、中廊下も行ってみたいと思うし、非常に興味は持っていました。それで、金作沢を下りるときに、そのときは金作沢という名前ももちろんまだないわけですが、薬師岳の頂上から黒部へともかく下りようじゃないかということで、黒部の奥廊下へ行ってみたらどんなところが徒渉できるか、それさえもわからなかったんですけれども、幸いうまいことといって、赤牛のほうへ上がった。

今西　金作というのは宇治長次郎の一の子分やったわね。和田というところの人ですが、和田の人がどうしてあんなに沢歩きが達者になったのか、わからんのやけど、そもそも和田川という川が荒れ川やったんですな。それでいえば常願寺でも荒れた川やけど、あそこらの者は沢に強いかというと必ずしもそうでもない。そのころ沢歩きをする人間が何人かおって、長次郎なんかは先約があってなかなかついてきてくれんのや。それで、金作がリーダーで行きましたんやけど。

沢の強さということでは、黒部の本流を徒渉するときに、石を拾うたらいかんとい

うことをまず言いよるね。われわれは石のあるとこ、あるとこ行こうとしますでしょう。それをしてる間に足が冷えたり足をさらわれたりするから、何も石に触らずにまっすぐ向いてダーッと沢を横切れ、石の上に乗っているときはよろしいけど、次はズボッと深いところへ入ったらここまでくるね、と言う。そして、金作が下流の浅瀬のところで大の字になって手を開いて待ってるの。「あんたら流れたらわしが拾うから、そんなこと考えんと来い」と言ってね。しっかりした人夫でした。

西堀　あの金作はびっこをひいていたな。

それから後、東沢へ下って、当時の平の小屋の辺では徒渉すると本当に足をかじられるぐらい、イワナがたくさんおりました。そして御前沢を登って立山へ直接上がろうじゃないかということで、それをやり出したんです。御前沢と本流との出合のところで、たくさんイワナが見えておるし、「きょうはひとつイワナのたらふく食いせんならんぞ」と言って盛んにクシを削って用意しておったんですけれども、一匹も釣れない。きわめて残念でありました。御前沢を上ったときはそれほど困難ではありませんでしたが、その当時としては精一杯であったんです。

山登りそのものについては、先ほども言ったように体が弱いものですから、なるべく体が弱くてもやれるように、能率のいいような歩き方、能率のいいようなテントの張り方、キャンプのしかたなどということをやりました。富士山に登りましたときも、その当時は私はトナカイのシュラーフザックを持っていっていました。加藤泰安などは強い風で吹き飛ばされて、細野と二人がお鉢へ落ちたんですが、私はその翌日に中へ入っていって、お鉢の中に入ったすぐのところに雪洞をほった。テントがあったんですけれども、伊藤愿やほかの人がいっぱい入っておって中に入られんので、私は「そんなゴチャゴチャしたところへ寝るよりか、雪洞のほうがええわ」と言って、雪洞を掘ってそこで寝ておりました。たいへんコンフォートでありました。

今西　それは大学のときやな。

西堀　昭和六年。大学を卒業してから忙しくなって山へも行けませんし、特に東芝へ入ってからは行きませんでしたね。

司会　北岳の話を少し……。

冬の北岳へ

西堀　これは本来は今西君が計画し、今西君がリーダーになって行くべきであったんですよ。ところが、ちょっとしたご不幸があって今西は行けなくなって、私がそのかわりのリーダーになって行くことになったんです。ちょっと変わっているのは、田中喜左衛門翁、今から考えるとそんなに年寄りやなかったんですけど、その当時としてはたいへん年寄りに見えましたが、この人が依然として一本杖で仙丈へ登ったんです。おそらく、一本杖で仙丈へ登った最初で最後だと思います。

北岳へ登ることそれ自身は、二俣の奥に滝がありますが、それが青氷になっていまして、あれを登るのが私としてはいちばんいい経験になりました。アイス・テクニックということはあまり知らなかったんですが、なるほど、こういうふうにすればやれるものだなと、その前に本を読んだり話

を聞いたりしておりましたので、それを頼りに滝登りをしたわけです。青氷のいいところで、非常に硬い氷でしたが、わりあい楽に登れました。

その年の秋に野呂川に入ったとき北沢の小屋を見つけた。できたばかりで、まだだれも使っていない、それで、よし、これを使ってやろうや、というのが話のきっかけでした。この山行きも非常に楽しい山行きでしたね。

われわれのその時代というのは、モダン・アルピニズムになった途端みたいなものですし、ことにハードウェアについては私もずいぶん開拓したつもりです。登り方それ自身もずいぶん勉強しましたが、今からみれば幼稚なものですな。

あのときはカモシカをあてにして行ったんです。ちょうど、禁猟になる前で、その三月から禁猟になったんですが、そんなことは知らずにいたわけですけれども、八匹とりました。端的にいえばたらふく食いもええところで、食べるところはもう食べ飽きてしまったものですから、ともかく体中全部食べようということになって、味わってみたわけです。ああいうことでもなかったら、キンタマの味がどんな味してるのか、わからんかったやろうと思いますけどな。(笑)腹も食うたりいろいろしたけど、最後に食った骨の髄がいちばんうまかった。桑原が、それまでに骨をみんな犬にやってしもうたんやから、骨の髄がいちばんうまいので、取り返しにいかにゃいかん、(笑)幸い犬が寝とるよってに、こらええわというんで、そっと取りにいきよったら、ウーッとやられました。(笑)

(写真提供・滝川　清)



西堀，今西氏と司会の故・山崎安治氏

＊
＊＊

『チベットおよびその付近の山々』補遺

水野勉

一九八三年発行の「山岳」（第七十八年）にぼくは「アルパイン・ジャーナル」（一九八二年）掲載の表題の記事を訳して発表した。そして、筆者であるイギリスのフランク・ブースマン氏に「山岳」を送ったところ、「訳者のあとがき」を英訳して知らせてくれとの手紙をうけとったので、「あとがき」の英訳よりもやや詳しく自分の感想を書いてブースマン氏へ返事した。それに対してブースマン氏はふたたび長い手紙を寄こし、「山岳」の読者に自分の態度あるいは考え方を知らしてほしいといってきた。すなわち、「訳者あとがき」の中の「ブースマンはこの記事の中で中国の地図および測量について全くふれていない」ということ、また「これからはもっとも信頼すべきは、中国科学院の成果であろうと思う」ということに対する、彼の意見を述べたいというのである。

ぼくも訳者として「山岳」に発表した以上、責任も感じるし、また一部の会員には興味もあると思い、ブースマン氏の書簡の内容を紹介しておきたい。

〈ブースマン氏の書簡〉

まずお断りしておきたいのだが、わたしはこの調査を一九八〇年から一九八一年はじめにかけて行なったのである。しかも主としてアルパイン・クラブ図書室およびRGSマップ・ルームにおいてであった。その当時、中国の三百万分の一地図もマップ・ルームになかった（最新の中国地図集が発行されたということを知っていたが、その「最新」が時期的にどれくらいかは知らなかった）。一方、一九八二年発行の Roof of the World という本はもちろん発行されていなかった。このように、わたしがあの記事の中で中国の発行した資料にふれなかったのはじつに単純な理由によるのである。わたしはそれらについて全く知らなかったし、それらはいずれにしろ目にすることができなかった。

わたしの記事に対する貴兄のコメントでは、たぶんわたしがチベットの山々の高度に関してこれら中国の資料をすべて故意に無視したことになっていると思われるが、じっさい、前述したように、それらについてわたしが全く知らなかったのが唯一の理由であり、またたとい知ったとしても、その当時英国においては入手できなかったのも事実である。

だから、この事実について「山岳」の次号（一九八五年）で簡単なノートを掲載して頂けるならたいへんありがたいと思う。わたしが中国側資料あるいは情報を故意に無視したと「山岳」の読者に思われては心外なのである。これら辺境の、いまなお未知の山々の真の高度を確認するという、じつにすばらしい、非常に興味ある事柄に関して、わたしはそんな片手落ちなことをするはずもないし、したくもない。

じっさい、わたしはONCの正確性について疑問を持っているし、同様にこれら新しい中国の高度についてもいささか疑問を抱い

ている。貴兄の手紙と同封された資料から判断すると、貴兄もこれらの数値が得られた方法に関する詳細については全く知っておられないようである。同様にわれわれも用いられたテクニック、テクノロジー、方法などを知らない。われわれが知っていることといえば、アムネ・マチンの高度を七一六〇㍍から六二八二㍍へと、われわれの遠征により得た高度を非常に低く訂正したという事実である。しかもこの数値（一九六〇年）は非常に正確に確認されたと報じられている（アムネ・マチンに関するわたしの説明参照。「アルパイン・ジャーナル」一九六一年十一月号を参考にしてわたしは書いている）。また、Roof of the World のいくつかの数値は三百万分の一地図とはちがっている。いったい、三百万分の一地図、Roof of the World、ONC（これはつねに訂正をつづけている）、あるいは古い探検家の「オリジナル数値」のいずれが真の高度にもっとも近いのであろうか。

中国側のメソッド、テクノロジー、テクニックなどに関する詳細がわかっていないので、現在のところ、彼らの高度数値もまた実証されていないとみなすべきだと考える。これらは陸地測量だとうけとっている――もしそれが空中測量あるいは人工衛星によるとしたら、わたしはむしろアメリカの数値をとりたいと思う。それはテクノロジーの優秀さから考えて、全体としてはるかに正確であるからだ。たぶん、そう遠くない将来において、誰か（アメリカ人、日本人？）がすぐれた最新の人工衛星テクノロジーを駆使する方法を採り、それ以前のすべての努力を無価値にしてしまうほど正確なものとするであろう。じっさい、一九七八年頃、ナサNASAはSEASAT という人工衛星をあげ、数㍍の誤差範囲で sea hills を測定することができた。一九八三年にこのことを知って、わたしはナサに手紙を出し、(1)そのテクニックが山の高度の測定にも応用できるかどうか、(2)もしそれができるならチベットの山々の真の高度を確かめるためにそのテクニックを用いる機会があるかどうかを尋ねた。じっさいには、返答を催促してみたけれども返事が得られなかった。たぶん、そのテクノロジーは高度の秘密事項となったのだろう（国防省によって用いられたので秘密なのである）。

この正確性の問題については、貴兄は米国国防省陸地測量部からテリス・ムア博士へ宛てた同封の手紙の写しに興味があるにちがいない。御存じのとおり、ムア氏はミニヤ・コンカの初登頂者の一人である。ムア博士はこの手紙をRGSへ送ってくれたので見ることができるのだが、もちろん、ここでもONCデーターの正確性に対する疑問は否定されていない。貴兄はこの山に対するONCの数値が低すぎると指摘し、それが中国によって測量されていると主張しているが、残念ながら、貴兄はその数値を明確に述べていない。今度の新しいONC数値はムア博士たちの数値より約三〇㍍ほど低いが、この新しいONC数値二四七九㌳（七五五六㍍）は最終的な、真の数値にほぼ近いと明確にいえると思う。

上記の高度において、貴兄はONCの不正確性の二、三の例にも興味を抱かれると思う。一九八〇年、わたしはアンデスの(1)アコンカグアおよび(2)オホス・デル・サラードの高度に関してDMAと文通を交した。この数値は次のとおり――アコンカグア＝二二二四〇㌳（スタンダード数値 二二八三一㌳――約六九六〇㍍）、オホス・

デル・サラード＝二三二四〇フィート（七〇八四メートル）。またアンコウーマは二三〇一〇フィート（七〇一四メートル）と測定されていて、結局、南米では最高がオホス・デル・サラード、二位がアンコウーマ、三位がアコンカグアとなる。わたしはオホス・デル・サラードに関してDMAに尋ねた――その返事によると、その高度は一九五六年二月に登頂したレネ・ガハルドの測量値と一致した。ガハルドはアネロイド・バロメーターにより測定したというのだからおどろく。それで、正確な測定方法として、かようなメソッドは笑止千万である。そしてその頃（一九五五―五六年）この山にはいくつかの未確定の標高があったので、アメリカ山岳会は一九五六年八月に、オホス・デル・サラードの正確な高度を測量することが唯一の目的を持ったパーティを派遣した。彼らは六八八五メートル（二二五八八フィート）という数値を持って帰って来た――少なくとも五つの異なった基点から観測した数値の平均で、それぞれ慎重にチェックされた結果の数値であった。わたしはそれ以上のことを聞いていないが、おもしろいことに一九八〇年のタイムズ地図帖はオホス・デル・サラードおよびアンコウーマに対してONCの数値をともに採用している（個人的な通信による）。しかし最新版ではオホス・デル・サラードの標高は六八八五メートルというスタンダードな数値にまで減じている。一方、アンコウーマはリストにすらない。かくしてアコンカグアは今や南米第一位の高い地位についてしまっている。なぜこうなったか全く知る由もないが、DMAがこの二つのピークの標高を訂正したとはとても思えない。

疑わしいONC高度のもう一つの例は、シャプカ・モノマカ Shapka Monomakha の場合である――これについては、この山に関するわたしの解説を参照せられたい。わたしはスペースの関係で書けなかったのだが、初期のONC数値（五十万分の一――一九六七年六月）ではこの山の標高は二二五二六フィート（六八六六メートル）となっている。これは一九七九年の中国の三百万分の一地図に非常に近く、ウルグ・ムズタークの中国の数値ともそれほどちがっていない。今ではこの（初期の）ONC数値は一九七三年十二月のONC（百万分の一縮尺版）で示されているように、わたしがリストした三つの数値のどれよりもかなり高い。ウルグ・ムズターグおよびシャルカ・モノマカはかつてはつねにほとんど同じ高度で示されていた。中国が比較的これに近くもどしているというのは興味がある。だが、どちらが正しいのだろう。もっと権威ある測量を待たねばならないとわたしは感じるが、シャルカ・モノマカということでもう一度、かなりの高峰を存在させたいものである。

以上がブースマン氏の書簡の内容（関係する部分のみ）だが、読んでわかるように、彼は測量、殊に山岳の高度に関して強い関心を抱いており、専門家ではないかと思われるふしがある。ぼくのような素人が口をはさむのははずかしいとも思ったが、こんなことにより、山の高度が明確になっていけば、ぼくとしてもたいへんうれしいので、後悔はしていない。

なお、書簡の中でテリス・ムア氏への米国国防省陸地測量部の返事にふれているが、そこではミニア・コンカを 29°35′45″N：101°52′45″E と位置づけ、二四七〇〇フィートとしたと述べている。すなわち

ＯＮＣＨ―11で二二八二〇フィートとなっているのを訂正しているのである。ぼくがＯＮＣはいちじるしく低いといったこともまた取り下げねばならない。

なお、ＯＮＣとは United States Air Force Operational Navigation Chart のことで、これを発行しているのが Defance Mapping Agency すなわちＤＭＡである。ぼくが国防省陸地測量部と訳したのがそれである。



支部だより

今年度から「支部だより」欄を設けてみました。日本山岳会の支部も二十をかぞえ、おたがいがよりよく知りあえるよう、この欄を活用していただければ幸いです。各支部報や会報「山」の記事と重複せず、「山岳」に記録しておくのが望ましい事項を重点的に希望しています。送付のあったものを到着順に収録します。

熊本支部

「山岳」に支部だより欄を常設するということで山岳編集委員会から原稿の依頼があったので、早速こんな拙文を送った次第であるが、委員会の意向を十分伺えないにしても、各支部の動きや重要な行事、記録的なものを残しておくため委員会が取り上げて下さったことは、支部にとっても有難く、これまで主に海外登山が多い記録中心的編集だった「山岳」が、最近見直されている中で大変画期的なことであり、会員サービスの上からも一層充実したものとなります。折角この欄を作られるからには、限られた支部だけでなく、出来るだけ多くの支部情報を登載して、支部で行なわれている独自の個性ある行事や登山、あるいは会員の動向消息等を単に記録に残すだけでなく、会員が各地の情報を知ることによりお互いに認識と理解を深め、支部会員との交流をはかる上にも支部欄の活用をお願いしたいと思っている。また、熊本支部の場合内部的に例会記録はとっているが、支部で年報も月報も発行していないため出版物としての情報の交換がなく、支部自体で出版物を出していないとすれば、こうした「山岳」誌上で取り扱って下さると大変有難いと思う。

前置きが長くなったが、今年はなんといっても日本山岳会創立八十周年にあたり、本部支部を問わず全国的に行なわれた記念行事も数多い。九州地区では福岡、東九州、熊本の三支部合同により記念行事が福岡市内で行なわれた。日時は昭和六十年三月三日（日）午後一時三十分、まず中央区天神四丁目の都久志会館で講演と映画会が行なわれた。講師は佐々保雄会長にお願いし、八十周年にふさわしく日本山岳会創立当時の発起人について有益な講演があり、その後映画会に移り、第三次マナスル登山隊の登頂記録「マナスルに立つ」を観賞した。フィルムは少々古くなって見苦しいところもあったが、三十年にもなろうとする当時の生々しい登頂にかたずを呑んで見入った。映画が終ると会場を中央区大名の西鉄グランドホテルに移し、午後四時から記念晩餐会が開かれた。この席では東京の本部役員をはじめ名古屋、広島から会員の出席があり、地元福岡をはじめ東九州、熊本の支部会員総員九十四名の出席者となり大変盛会であった。熊本支部からも十名が出席した。

講演会及び晩餐会の様子については会報「山」に詳細報告してあるのでここでは割愛するが、九州で三支部が一堂に集まり集会を持ったのは九重山麓で行なわれた創立七十周年記念集会の時以来であ

り、かねて交流がない福岡支部の人達と会えたことは大変嬉しく、これを機会に今後も九州の会員が相互に交流を深め、三支部の連帯を結ぶことにより支部の活性化をはかることになれば甚だ幸いと思う。ともあれ、この日のために会場の設営から進行まで万端福岡支部にお世話になってしまい、衷心感謝に堪えない。

日本山岳会の創立八十周年記念行事が終ると、今度は熊本支部が昭和六十二年に迎える設立三十周年記念事業の準備にかからねばならない。どんな記念事業をやるのか目下内部的な段階で立案の緒についたところであり、まだ発表できる段階でないが、今考えている案を申すと、まず記念集会は昭和六十二年、時期は未定であるが、阿蘇山南郷谷の高森町南阿蘇国民休暇村あたりで行ない、翌日阿蘇高岳か根子岳に記念登山を行なう。九州で行なう場合最も代表的な阿蘇がまずあげられるが、熊本県のことであり、最近大きくクローズアップしてきた南阿蘇の風景をじっくり眺めてもらおうと候補地に選んだ。開催はまだ先のことであり、具体化すれば会報等で御案内申し上げる。このほか記念誌の発行及び海外の山へトレッキングも考えている。

この三十周年を前にして、今年は支部規約の改正を行なった。設立当時作った規約が今日、語句の表現や現実にそわない事項もあって、本部の定款を参考に見直しをはかり全面的に改正を行なった。この改正で支部役員の任期を二年とし、支部費現行一〇〇〇円は据置き、規約そのものが全面的にすっきりしたものとなった。また特に考慮したのは、支部でいつしか準会員的存在で認めてきた主に会員の奥さん方のことである。これまで夫の良き理解者として総会や登山に毎回参加されている方々であり、こうした支部の目的に賛同する人を今後も会友として迎えることになった。

熊本支部は会員数二十六名、全国十九支部中最も小さい仲間である。事業といっても特記するものはない。年に四回例会を行ない会員の顔合せを行なう程度に終っている。定例的な集会は新年早々に開く新年晩餐会と、春秋二回の例会が今年度から会員の要望により夏季例会を加え、春夏秋冬を通じて会員の顔合せができるようになった。これは九州の温泉地や民宿に一泊して翌日は付近の山へ登るという例会を行なっており、春は支部総会となっている。民宿や温泉地で一浴し、地元の焼酎で一杯やり山の幸に舌鼓を打ち、山の静けさの中で今日も会員と語らううちに酔いが回り、なんともいえない心の安らぎを覚え、お互いに絆が結ばれてくる。

最近行なった例会をあげると、

＊五十九・十・二十～二十一　秋季例会　宮崎県扇山（一六六一㍍）一五名参加　上椎葉から登る。

＊六十・一・十二　新年晩餐会　熊本市内ホルン山小屋　二二名出席

＊六十・五・十八～十九　支部総会　熊本県矢部町民宿平家の湯　一六名出席　翌日天主山（一四九四㍍）登山

なお、支部の行事ではないが、今西錦司元会長との登山が昨年秋及び今年に入ってからも行なわれ、支部会員多数の参加があった。

（西沢健一）

富山支部

何時の日であったか、越中の生んだ聖人播隆上人の顕頌碑を生誕地の河内に建立しようではないか、という話が支部委員会で出た。種々模索しているうちに成案が生れた。河内は大山町の行政地内である。建立の場所は生家中村家の敷地と決り、碑石は播隆の修業中歩んだ高原川から採石（安山岩）、石工は浜田石苑、大山町の協力で昭和五十八年五月八日、前日本山岳会長佐々保雄氏をはじめ先輩諸兄、廃村前の住民などが相い会し盛大に除幕式をあげた。

播隆は天明二年中村佐兵衛の次男として生れ、幼少の頃卯の花村の覚雲寺（現在廃寺）に入り、長じての出離は宝泉寺（大阪）で修業、一念寺（京都）にうつり、「諸宗皆祖念仏正義論」を書き、恩師見仏上人と阿辺ヶ峯で再会、許しを得て三昧の巡錫にうつり、一ノ宮南宮奥院で別時を修め、高原郷岩井戸村杓子窟で九十日間参籠修行、文政五年再度同窟で修行、衆生済度の途を深め、その翌年道泉和尚、円空、南裔に続いて笠ヶ岳に登る。文政七年丹生川村横山家を経て第四回目の笠ヶ岳登拝に出立、その年の冬すなわち十二月六日母死去、文政九年八月松本の玄向寺を訪れ、小倉村の中田又重郎を紹介され槍ヶ岳開山の一歩を踏み出す。母の三回忌に「追福之書」を送ったのは十一月二十二日であった。

文政十年七月二十日槍ヶ岳を開山、阿弥陀仏他二体を安置して「山彦の恐るゝ峯の槍のほゞ今に登らん我れ初かな」と一首を詠み、八月一日穂高岳に踏跡を残し名号碑を安置、諸国を行脚、天保元年摂斐藩岡田家家老芝山長兵衛の建立による播隆院阿弥陀堂（現在の一心寺）へ播隆を迎えた。初代住職である。天保二年生家の川内道場再興を覚証寺（富山市西四十物町）より許可され播隆の兄隆観が受け継いだ。この時、阿弥陀仏一体に親鸞、蓮如の六字の名号、喚鐘を贈り出家の目的を達成。天保五年八月第四回目の槍ヶ岳登拝、西鎌尾根から笠ヶ岳へ登り、我が生家を指呼の間に望み沙汰を謝したと考えられる。初冬に至って福井の丸岡町、安楽寺を訪れ護城山で冬安居。明けて六月、又重郎、弟子の見岩、隆芝、隆道、隆載、隆応らと共に五回目の槍ヶ岳登拝、七月二十五日父死去の報に接した。八月初め弟子と共に横山家（現当主横山利夫氏）に世話になり、高山の大雄寺（知恩院の末寺）の入仏式に参列、下って天保十年千葉県市川市本行徳徳願寺（勝願寺の末寺）二五世徳順大和生の下で修行和上位を受け、翌年七月玄向寺で発病（中気?）、信者の協力により槍ヶ岳に悲願の鉄鎖が掛けられ大願成就（鉄鎖資金調達のため三河周辺を巡錫）、十月十五日美濃太田、伊左衛門宅にはこばれ中田九左衛門宅で護持仏一光三尊に合掌しつつ入寂、時に十月二十一日の未明であった。死は一切を止め位牌に「念蓮社仏誉仏厳唱阿弥陀仏播隆比丘」とある。

播隆の名号碑、名号軸などを索すと濃州、信濃にみるが伊吹山西麓の伊吹町、山東町にも発見することが出来る。貴重なものとして美濃市片知藤田武夫宅に播隆花押の木製黒漆塗り応量器（文政七年甲八月と朱書）が現存している（笠ヶ岳第四回目登拝時所持か?）。

美濃を中心とした播隆の業績と松本を基点にした槍ヶ岳、上宝村を根拠とした笠ヶ岳、そして播隆を生んだ大山町、修業時代から行動時代の歴史のきずなを結び固めたいものである。

毎年播隆祭と称し播隆顕頌碑の前で旧河内集落居住者と共に催し播隆を偲ぶのであるが、今年（六十年）五月七日、顕頌碑の「採納寄付願」を大山町長に提出し受理され、新しい顕頌碑の一歩が印された。また、第一回播隆上人展が大山町歴史民俗資料館で日本山岳会富山支部協賛で特別展（六月二十二日～八月二十日）を催し、郷土の聖人の認識を新たにした。

支部の行事計画は山行を主体にしているものの播隆の研究にも力を注ぎ、一例をあげれば、河内で採れた「三椏、楮」の乾皮を背負って八尾の町（製紙業の盛んな町）まで運んだ駄賃を合せて「油揚げ」三枚にしかならなかったという。幼少の播隆は少年の心にどう受けとめたであろうか。河内の集落は熊野川の上流にあって鍋の底に在ったから外へ出るには峠を越えなければならず、背と脚に自信が必要であった。炭焼きの手伝いもまた同じであったろう。われわれは生活の場なり自然の環境を探求して播隆の人となりを偲び、道なき峠越えの山行を続けている。

立山連峰の自然を保護し、これ以上の乱開発を防止する責任がある。特に剱岳に現代文明の矛先（ほこ）が潜入しないように、剱の自然は剱岳の姿であるように願うものである。昭和四十五年の夏、ヒラリー卿が剱岳を訪れた折、別山からの剱に向かって「このままにしておきたい」と言った言葉が今も耳深く残っている。立山は時代の波に押されて商業的観光化されたが、あの山容美とマッチしない人工構造物の見苦しい姿を二一世紀へ伝えようとしている神経に誤りを知らせるシグナルを誰がするであろうか。自然も生きものであることを無視してはならない。支部の全員の望みは山岳人としての自覚が立山連峰を活かして護ることである。

今年は日本山岳会創立八十周年になる。その記念すべき行事の一環として、石川支部とともに九月二十八日から二十九日にわたり上市町の協賛で上市町文化会館、北アルプス山岳センターで講演会（講師西堀栄三郎氏）、ナンガパルバット富山岳連隊登頂記録映画（白い魔の山）を上映、山岳センターで極地登山装備用具などの展示、馬場島で晩餐会を催し、山の友情と親睦を深め交流の基をかためたい。

（石坂久忠）

■ 福島支部

「秋山小集会をいつにしようか」「今年のスキーツアはどこをやろうか」「総会はいつ頃にするかね」このような会員の会話の中から行事が進み、運営がなされているのが地方支部の実体であろう。

社団法人日本山岳会の支部として、これでよいのかと、自問自答しても答えが出ない。それは定款にも「支部」とは何ぞやの条項もなければ、評議員には各支部より一名ずつ出ているのが常識と思われるが、それすら考えられていない。評議員会とは何だか解釈に戸惑う。単に同一地方に住む会員が意気が合い結成し、和気あいあいのうちに山を愛し、また、社会的に交流しているのが支部であろう。むずかしい規約も必要としない、理論めいたことを言うものもいない。サロン的山岳会としてすませればそれでよい。しかし時代も変り支部もその県の山岳連盟に加盟していると思う。高齢者が多

いためか、それの運営面には期待されているが、実務面にはあまり呼び声がかかってこない山岳団体になってしまっている。日本山岳会が、国体を運営していた頃、なぜ各県に支部が続々と結成されなかったのかと考えると不思議である。現在十九支部で全国的に見ると三〇%強である。なぜ批判的な地方が多かったのか、それとも別の何かの理由があったのか判らないが……。

それより数年後これら批判的団体が組織化され、やがて現在の社団法人日本山岳協会が全国組織として結成されたのである。同じような法人化されている二つの中心的団体をもっている国が他にあるのであろうか。外国からも対応策に困惑している点もあろう。

横道に逸れてしまったが、地方の支部員は共通の趣味の上から入会し、山行を共にし、懇談をし、満足しているのである。本部の総会、晩餐会に誘いをかけても、〝私みたいなものが出ても〟と尻込みしてしまうのがほとんどである。このようなことでは若返りはおろか、増員をはかることは容易なものではない。

地方ではその県の岳連にいかに溶け込むか、他山岳会との交流をどうするか一番頭を悩ますものである。ルームに顔を出すのはおろか存在すら知らない会員も多いのが実体であろう。

このようなことではならないとまず手近の同じような山をもち、気心の合う東北各県の支部の皆さんと交流をはかっていくべきであろうと思い、五年前に各支部長さんに提唱し、山行を兼ねた懇親会を各支部持ち廻りで開催実施することにしたわけである。年々参加者も多くなり、北海道、他支部の方もわざわざ来られ、その席に本部からも出席願い、認識を深めることに役立ってきたのである。別の理由の一つとして先に国体のことを述べたが、山登りも山岳競技として、自然と親しみ、自然と闘うという本来の姿を失い、完全な競走となってしまい、各県の方々とお会いしても話がその方向に走り、お互いに腹のさぐりあいみたいな現象になりかねないまで、たちいたったわけである。その意味からも本来の楽しい山登りをすべきでないかとのこともあった。

海外遠征を最終目的としているわけでもなく、ただ、山が好きで好きでたまらない連中であることを認識されたい。過去においても、「山岳」に海外の記事、記録ばかりが載るようになった頃、相当数の会員が退会していった時代があったことも知っておいてもらいたい。

「山岳」「山」にはより多くの国内の山の情勢、各支部の動向、その他自然保護のことやら、問題点の参考となるようなものを掲載して啓蒙を計っていただきたい。

そうするにも支部自体、本部に協力すべきことは当然のことであろう。

（中島正夫）

■越後支部

三十九年間の軌跡

昭和二十一年に高頭仁兵衛、藤島玄（源太郎）、笠原藤七氏ら十名の発起人で結成された越後支部は、昭和六十年現在で二六六名の支部会員を擁している。

振返る三十九年間の支部の歩みは、決して順風満帆とは言い難い。会員の大量整理や二件の遭難死亡事故、県山岳連盟との確執など幾つかの試練を経て、支部も会員も成長してきた。支部在籍三十年以上の会員が三十六名も健在であるということは、日本山岳会という確固たる基盤と、結成以来三十五年間を支部長として活躍してきた藤島玄氏の、卓抜した指導力に負うところが大きい。

また第十九回新潟国体での、全国岳人による残雪期飯豊連峰の集中登山や、支部結成二十周年を記念した、新潟県境山岳六八七㍍の全縦走踏査登山といった、本県登山界をあげての大事業を成功させることができたのは、越後の山男たちの中核である支部会員の、友情と協調と、ホームグラウンドの山に対する熱意が実を結んだものといえよう。

因みに県山岳協会の役員をはじめ、県内登山団体の責任者はほとんどが支部会員であり、長い年月にわたって山で寝食をともにしてきた仲間であるから、越後支部と県山岳協会は表裏一体と見なして然るべきであろう。

初代支部長　藤島　玄（昭21～55）
二代支部長　斎藤平七（昭55～57）
三代支部長　佐藤一栄（昭57～　）

支部総会　支部の総会は会則にもとづいて例年、妙高山や八海山、鋸山など県下各地の山で開催してきたが、高頭仁兵衛翁のレリーフが鎮座している弥彦山で、新潟県登山祭と銘うって、農村の古い雨乞い神事を再現した松明登山を実施するようになってからは、行事に便乗して毎年七月二十五日に弥彦山上で、総会と高頭祭を併催することが恒例となった。しかし開催日がほとんど平日となって総会出席者が少なく、祭り行事に気をとられて、形式的な会議に終始する傾向にあるため、明年からは本来の姿に還して、県内の適当な山岳で総会と懇親登山を行なう方向で検討している。

なお、今年の総会では越後支部の初の名誉会員として藤島玄（会員番号一〇三三番）、笠原藤七（会員番号一二九二番）の両氏を推薦して承認された。

越後山岳　当支部は会員の登山記録を主として機関誌「越後山岳」を発行してきた。昭和三十年までに第一号から第五号を発行、昭和四十三年に第六号として、新潟県境全縦走踏査登山報告書（五三六頁）を発行した。第七号は海外登山と一等三角点の山の特集を企画し、大勢の会員の寄稿を編集して、すぐにも印刷にかかれる段階まで作業を進めたが、藤島氏の思惑もあって発行保留となり、折角の原稿が七年間も同氏の手許に眠り続けているのはまことに遺憾であり、執筆者には申し訳ない仕儀となっている。七号についてはいずれ委員と協議の上で、年代の推移にかかわりなく支部の記録として、当時の原稿をそのまま復活させて発行する考えでいる。

玄山会　支部行事の一つとして、本部の年次晩餐会にならい「玄山会」と称する会合を毎年催して、山行を共にする機会の少ない会員との懇親をはかってきたが、いつの頃からか飯豊登山に結びつけて、会津在住の会員と、下越周辺の一部の会員による行事といった形に定着した感がある。今年の総会でも話題となったが、支部行事という観念にとらわれず、会員同士の交流の場として、現状の姿で継続すると決った。また、当支部の会員が所有している山で、東北

地方特産の高山植物ともいえるヒメサユリを数千株も栽培しており、二年前から開花期の六月には、観賞を兼ねた野外パーティーが催され、支部行事に準じた形で楽しまれている。

八十周年記念行事　日本山岳会創立八十周年を記念して、去る六月十五、十六日に当支部が開催した行事は、支部会員のほかに県外からも大勢の参加を得て、二百名を越える盛況となり、長岡市での記念講演会、高頭翁の墓参法要、会員の作品展覧会、記念晩餐会、支部永年会員表彰、そして好天に恵まれた八海山の親睦登山と、多彩な催しで参加者に喜んでもらえたが、実行委員の献身的な奉仕活動のお陰もあって、百余名の支部会員が一堂に会するという、支部結成以来初めての快挙が実現した。

何もしない支部　「金と暇のかかる行事はやらない主義」が藤島氏の持論で、「何もしない支部」を標榜してきたが、会員は県山協の諸事業を通じて、積極的な登山活動を行なってきた。海外登山も会員の所属する団体や組織が、既に十指に余る遠征を実施している。一方、郷土の山をより深く知ろうと、地域研究に情熱を燃やしている会員も少なくない。こうした県登山界の現状に即して「しない支部」の看板は返上し、八十周年行事を契機として、新たな発想のもとに会員の親睦融和や、新会員の加入促進をはかるとともに、本部や近隣支部との交流を深めるなど、支部としても登山の視野を広める心構えが肝要と思われる。

八十二歳の高齢で、活動不能となられた藤島初代支部長の意志を受け継ぎながらも、結成四十周年目に向けて、越後支部の活性化を促すために、積極的な試行錯誤を繰り返すことが、当面の課題と思われる。

（佐藤一栄）

■岐阜支部

拝啓　時下益々ご清栄の趣、大慶に存じ上げます。

さて、七月十二日付けの書信でお申付けの「山岳」原稿の支部だよりの件でございますが、お手紙にございましたように「その年度内での重要事項または恒久的な事項で『山岳』に記録しておいた方が望ましい」といったことは特にございませんので、今回は見送らせて頂きたく存じます。大変、勝手を申して恐縮ですが、ご海容の程をお願い申しあげます。

敬具

■東海支部

東海支部の名誉会員

東海支部には現在までに六名の支部名誉会員が誕生している。生年順に記すと、須賀太郎、熊沢正夫、村井喜一、石岡繁雄、樋口敬二、石原国利の六氏である。この六氏は昭和五十六年五月十六日に開催された東海支部創立二〇周年記念式典の席上で、支部名誉会員に推挙された。

この東海支部の名誉会員というのは、支部規約にただ一カ所、会員の項に、本支部に特に功労があった者、という下りが出てくるだけで、それ以外に特別定めた細則などという洒落たものはない。い

ささかたよりない。

たよりなさついでにもう一つ。

この日、代表でご挨拶に立たれた熊沢先生から、「実は支部名誉会員に推されたのは今回で二度目である。しかし名誉なことは何回あってもよい」と素っ破抜かれ、幹部一同穴があったら入りたくなるような一幕があった。東海支部の事務処理のずさんさは昔から定評のあるところである。

しかしながら、そのずさんさに比べて、わずか二〇年をこえる支部の歴史とはいえ、数々の輝かしい山登りの実績を積み重ねてきたことは確かである。そしてこれらを語る時に、この六氏の名誉会員を抜きにしては決してあり得なかったことを書き添えたい。

紙面の都合でほんの略歴しか記せなかったのが残念である。それはやむを得ないとして、東海支部にとっては、大変貴重な記録である。これを「山岳」の誌上を借りて、書き留め置く機会が得られたことはまことにありがたい。大いに感謝する次第である。

須賀太郎（一九〇三～　）須賀太郎氏は、東海支部の初代支部長で、一九六一年四月の支部設立以来、一九六四年十月まで支部長を務められた。

須賀氏は名古屋大学設立と同時に工学部教授として迎えられ、その第一期生に石岡繁雄氏が居た。学生時代、陸上の四〇〇㍍の学生記録を保持していたようなスポーツ万能の氏は、石岡氏等とともに山を歩き、登山にも興味をもたれた。そうした関係から、石岡氏を中心に設立された東海支部の初代支部長に就任していただいた訳である。

氏は大学教授のほか、いくつかの要職を兼ねられる多忙な身でありながら、支部の集会にはほとんど顔を出され、若い支部員を指導された。

現在須賀氏は老齢のため、山とも支部とも疎遠になられ、自宅と病院の半々の療養生活を送っておられる。若い頃から鍛えられた強靭な肉体が、一般の方ではとても耐えられない危機を何度も乗りこえられたそうである。会員番号五一八五番（昨年退会）。

熊沢正夫（一九〇四～一九八二）熊沢正夫氏は昭和四十二年から六年間にわたって、東海支部の第三代支部長を務められた。在籍中、一番ご活躍されたのはマカルー遠征の時で、総指揮として資金集めやスポンサーとの会見に奔走していただいた。支部長就任は、いわばこのマカルー計画を推進させるための束ね役をお願いすることにあった。それまでは名古屋大学の理学部教授として学究一途であったのを、無理矢理口説いて支部長にご就任いただいた。

専門の植物学のほうは、牧野富太郎博士に師事され、わが国有数の植物学者として名を馳せておられる。

山のほうは八高山岳部、東大スキー山岳部に籍を置かれ、主に中部山岳を踏破されている。中でも大正十三年の十二月末に果された中央アルプス木曽駒ヶ岳の厳冬期初登頂が光る。日本山岳会への入会も古く昭和四年である。残念ながら昭和五十七年十一月五日、病で他界された。享年七十八歳。「常に真摯であれ、人には媚びるな、迷惑を掛けるな」。これが先生のご遺訓である。生涯をこの通りに過された。凡夫には真似ようにも、なかなか真似られるものではない。会員番号一一二九番。

村井喜一（一九〇九～　）村井喜一氏は、東海支部にあって一番の長老的な存在であった。支部集会の出席者の大半は若い連中が占めていたが、その中には何人かの年配者の姿が見られた。村井氏はそうした方の一人であり、しかも支部設立以来二十数年間、ほとんどの集会には顔を出していただいた。その温和な風貌はまさに長老という言葉があてはまり、その場に村井氏の姿をみつけるだけで、不思議に安心感をおぼえたものである。

村井氏は山好きの父上の影響を受け、若い頃から山に親しみ、新婚時代も山ばかり出かけるので奥様が大いになげいたとか、七十歳近くになってからもヒマラヤのトレッキングに出かけられるほどお元気であったが、近年は心臓を患われ、激しい山歩きは出来なくなったそうである。

昨年、ご長男の住む芦屋市へ転居された。それまで、長年にわたって支部の会計監事を務めていただいた。総会の監事発言では、「会計報告を今見せて頂きましたが、正確になされており……」とユーモアたっぷりに、しかもちくりと痛いところもつかれ、にこりとされるやさしい笑顔が印象的であった。会員番号四九三九番。

石岡繁雄（一九一八～　）東海支部は一九六一年に海外遠征に憧れる東海地区在住の若い会員の手によって設立された。石岡氏はその中心人物で、支部創立の最大の功労者であるといえよう。

生れは三重県鈴鹿市である。八高、名古屋帝大を卒業後、地元の旧制神戸中学で教鞭をとられた。その後、名古屋大学を経て国立鈴鹿工専の教授に就任されている。

石岡氏といえば、屏風岩中央カンテの初登攀があまりにも有名である。この登攀はその著『屏風岩登攀記』から、屏風にかける氏の執念と、大胆かつ緻密な計算によって企てられたことが窺い知れる。さらにその粘り強さは実弟若山五朗を冬の前穂東壁に失ったことを契機に発生した、世にいう「ナイロンザイル事件」で遺憾なく発揮された。そしてついにザイルの安全基準を制定させるにまでいたった。

鈴鹿工専退官後の現在は、自宅に石岡高所安全研究所を設立、いまだにザイルの安全性の追求や、下降用の緩衝機の開発に余念がない。最近では、この緩衝機がビル防災機器として注目を集め、流用されると仄聞している。ますます意気軒昂である。会員番号四〇〇六番。

樋口敬二（一九二七～　）日本山岳会の会員は多士済々である。樋口先生もその一人である。名古屋大学水圏科学研究所所長の肩書を持つ先生は、いまや押すに押されぬ、日本を代表する氷河学者として大活躍されておられる。いささか軽薄な表現で恐縮であるが、マスコミの寵児という言葉がぴったりするほどのもてようである。氷河学者というより、人が生きていく上で絶対に欠かすことのできない、今の時代にこそ求められる〝水〟の学者というべきであろう。

樋口先生は一九二七年、朝鮮の木浦に生れる。北海道大学理学部を卒業後、北大助教授、名大理学部教授を経て現在に至る。

先生はいかめしい肩書からは想像できない柔和さを備えられた優男である。またそこには山を愛し、自然を友として学問に生きる男のロマンを感じさせる。

第三代熊沢支部長の後を継がれ、一九七四年までの三年間、東海支部第四代支部長を務められた。

須賀先生、石原氏、熊沢先生、そして樋口先生と東海支部の歴代支部長は大変な学者ぞろい、知識人ぞろいである。その後を受け継ぐ支部長の貧弱ぶりばかりがやたら目につく。会員番号七七四九番

石原国利（一九三〇～　）一九六四年、東海支部は目標としたローツェシャールが早大との競合に敗れ、行き詰まりの状態にあった。そうした難しい状況の時に石原氏は第二代支部長の重責を荷ない、一人カトマンズに飛び、交渉にあたった。結果はネパールのヒマラヤ登山禁止令にぶつかり、失敗に終った。その後、方向転換したアコンカグア遠征でも中心的な役割を果した。しかし、一度挫折した支部のヒマラヤ計画であったが、石原氏のカトマンズでうっておいた布石が見事生き、六年後のマカルー遠征を実現させた。

当時氏は支部設立の中心人物の一人である石岡繁雄氏の下で名古屋大学に勤務していたこと等もあり、面倒な雑務、その他実質的な面で、支部に大きく貢献したのであった。

石原氏は全岳連の第一回ヒマラヤ遠征（ジュガール）の隊員でもあり、国内においても明神岳赤壁岩稜会ルートの無雪期、積雪期の両初登攀者である。

現在は福岡県直方市で家業を継いで活躍されておられるが、東海支部の重要な集会には、わざわざ名古屋まで足を運んでいただいている。東海支部を語る時の貴重な生証人の一人である。会員番号五一八〇番。

（尾上　昇／中世古隆司）

■宮城支部

本年度は、日本山岳会創立八十周年の東北ブロック晩餐会の担当支部として、栄ある記念大会を主催させていただいたこと、宮城支部の最長老会員として永年にわたりご活躍されてきた平沢亀一郎氏（九十五歳）が、椿山荘における記念晩餐会の席上、名誉会員になられたことなど、支部にとっては大変意義深く、忘れがたい年になった。

また、仙台での会場に、仙台ゆかりの山内ピッケルを二十数本展示し、参会者の皆様にご覧いただけたことも意味深いことであったと思う。仙台は山内東一郎翁の第二の故郷であり、この地を得てピッケル製作が続けられたので、実際には在仙のかなりたくさんの方方が山内ピッケルを所持されているものと思われるが、このような機会が与えられなければ蒐集展示までは至らなかったと思う。

その後、仙台ピッケル展のことは、佐々会長や岡沢理事より本部の平柳氏ら記念展示委員会の方々に伝えられ、あらためて本部から要請があって、山内ピッケル九本、その他ハンマー、アイゼンなどを集めて送り、八月二十三日より本会ルームにおける記念展に加えていただくことになった。

本部のピッケル展には、初代のエルクやヘスラー、シェンク、ベントなど、いずれも登山史上著名なピッケルが壁面を飾り、さらに国産初の山内や門田の一号ピッケルも展示されて、さながら世界の名品を一堂に会した観があった。ピッケル展を企画された平柳一郎

	番号	所蔵者	刻銘（）はブレード側	大きさ(cm) ピッケル長	ヘッド長	そり(cm) ピック／ピック長	ブレード／ブレード長	重量g	備考
山内ピッケル	なし	星　二郎	仙台 山内作 昭八 八九	98・5	29・3	1.6/17.2	0.3/12	970	特異型リング付
	89	岡田幸千生		92・0	30・0	2.5/18.5	2.3/11.5	963	
	170	森岡　昭	仙台 山内作 一七十 昭八		26・0	2.4/15.5	1.7/10.5	(420)	火災にてシャフト焼失
	275	細谷健太郎	NC1 仙台 山内作 二七五 昭九 (T・H)	88・0	30・3	2.6/18.6	1.9/11.7	920	
	978	佐藤　春郎	昭和十寅 仙台 山内作 九七八	86・5	27・1	2.6/16.1	1.8/11.0	910	リング付
	1123	高橋　憲二	仙台 山内作 千一二三 (高橋憲二)	83・5	31・8	3.6/19.6	2.3/12.2	1010	
	1213	葛西　森夫	仙台 山内作 一二一三	84・1	33・0	3.6/20.3	2.3/12.7	1114	
	1717	三原　千秋	仙台 山内東一郎作 一、七一七 (三原)	81・2	33・5	4.2/20.5	2.5/13.0	1050	
	1727	北川　正次	仙台 山内東一郎作 一、七二七	84・0	31・4	3.4/19.1	2.0/12.3	1040	リング付
	1958	登米　正孝	仙台 山内東一郎作 昭和卅一年一九五八	84・0	30・7	3.3/18.7	2.2/12.0	925	リング付
	1960	樋口　陽一	仙台 山内東一郎作 一、九六〇 (樋口陽一)	84・9	30・7	3.4/18.6	2.1/12.1	910	
	2002	伊達　篤郎	仙台 山内東一郎作 二、〇〇二	86・2	30・5	3.3/18.5	2.1/12.0	970	リング付
	2003	板橋　元一	仙台 山内東一郎作 二、〇〇三	84・6	30・3	3.5/18.2	2.3/12.1	945	
	2065	佐々木郁男	仙台 山内東一郎作 二、〇六五	81・5	30・6	3.5/18.6	2.4/12.0	960	
	2080	吉野　禎造	仙台 山内東一郎作 二、〇八〇	84・0	30・5	3.4/18.4	2.2/12.1	970	リング付
	2100	樋口　晟子	仙台 山内東一郎作 二、一〇〇 (晟子)	78・7	30・7	3.6/18.6	2.2/12.1	950	リング付
	2112	樋渡　順一	仙台 山内東一郎作 二、一一二	81・2	30・3	3.4/18.3	1.9/12.0	980	リング付
	2177	阿部　郁夫	仙台 山内東一郎作 二、一七七	84・0	29・9	3.2/18.1	2.2/11.8	(980)	摩耗がはげしい
	2185	佐藤　浩輔	仙台 山内東一郎作 二、一八五	81・0	30・5	3.4/18.4	2.1/12.1	915	
山内ステックピッケル		三原　良吉	贈 三原氏 山内	90・1	15・5	9.5	6	760	特異型
仙台ピッケル		加藤　英郎	鳥のマーク	C・86	30・1	3.2/18.5	2.1/11.6	(870)	山内を模して東洋刃物がつくったピッケル

氏に、展示された各ピッケルの由来や形の変遷など懇切なご説明をうけて、それらのピッケルの歴史的な重みをあらためて知らされた思いであった。

特に、火災などでシャフトを焼失したピッケルが数本展示されていたが、ピッケルとは、ヴィジィブルな部分だけでなく、内部までもよく吟味されて作られている様子がよくわかり、興味が尽きなかった。

そのようなわけで、仙台での展示に蒐集されたピッケルについては、折角の機会でもあるので、所蔵者にお返しする前に写真を撮り、さらに形や銘などについても別表のように記録させてもらった。

山内ピッケルについては、作者自身の手になる「ピッケル覚書」が数度の火災で失われていることもあり、少しでも多くのピッケルの存在が確認され記録されることが大切であると思われるが、それはまた当支部の息のながい仕事のひとつとも考えられる。

この記録が何らかのお役に立てれば幸いである。

（柴崎　徹）



追悼

加藤泰安氏（一九一一～一九八三）

泰安の思い出

加藤泰安は私にとってなつかしい男である。「なつかしい山友だち」と書くべきかもしれないが、そう書かないのにはわけがある。言うまでもなく加藤泰安は、日本近代登山史上に残る登山家である。別に掲げた彼の略歴を見ればだれにも明瞭である。私は彼が昭和十年に京大に入ったときから知り合い、亡くなるまで親しくしてきたのだが、山行きをともにしたのは、チョゴリザ遠征登山のとき一回だけである。私の登山が休眠期に入っていたせいでもある。

長い休眠からたたき起こされた私が遠征隊長をひきうけたのは無謀ともいえるが、それが成功したのは副隊長に加藤泰安を得たからである。彼もガス漏れ中毒の病後で、まだ顔に張りがなかった。糖尿病にもなりかけており、私は内心少々不安を感じていたのだが、彼は終始みごとにがんばった。私は国内での募金活動、パキスタンの都会地における外交折衝などではかなり活動したが、キャラバンに入ってからは、とくにベース・キャンプ以上は、全権を彼にゆだねた。そして登頂成功にいたるまでのいきさつは、すでに書いたからここにはくり返さない（『桑原武夫集』第五巻所収「チョゴリザ登頂」）。そして隊長・副隊長は完全に意気統合し、隊員全体の支持を得てチームワークは完璧というに近かった。泰安自身もいくつかの遠征登山に参加したが、チョゴリザほど楽しい山行きはなかった、とよく言っていた。

カラコラム遠征中に深まった泰安との友情はそのまま日本に持ち帰られ、山野でなくむしろ都会でさらに強められていった。彼は不二音響などの社長をつとめた。つぶれかけた会社を引きうけて、これを蘇生させる名人という噂も聞いたが、真偽のほどは分らない。私は文藝春秋など新しい社屋の建設のあるとき、この社長を紹介して仕事に割りこむ手助けを二、三回した覚えがあるが、どこが彼の企業人としての才能かついによく分らなかった。ただ彼は交際費を活用して私をよくバーに招待してくれた。おかげで私は銀座の一流の店をかなり覚えた。特に好きなのが「エスポワール」で、それを彼はエスポールと発音した。そこで彼と仲良しの財界人がいて、その人と流行歌といっても古いものだが、それを浪花節調でうなるときがタイアンの絶頂であった。

加藤泰安は、豊臣秀吉に任えた戦国武将、加藤光泰の子孫、伊予大洲六万石の大名の直系の血筋であり、家を継いだ伯父に子がなかったので、昔ならこの子爵家を継いで殿様となるべき人物であった。この長身痩躯の登山家に貴族的な匂いがあったのは当然である。しかし、本人はそこに一種のコンプレックスを感じていて、下情に通じたヤンチャぶりを示したがるところがあったが、それは必

ずしも成功したとはいえない。むしろ無理だったともいえる。

彼の死後、弔問に行くと、遺影を掲げた部屋はむしろ狭く、決して広壮とはいえないのだが、そこにならべられた花やお供物には、宮家からのものが極めて多かったことに改めて驚いた。言うまでもなく彼は学習院の卒業である。そして私たち京大学士山岳会の連中が東宮御所に参上して御馳走になり、登山、探検、生物学などについてご進講することが多かったのも、すべて彼の進言によるものだと思う。

常に加藤の企業活動の後ろ盾であった麻生太賀吉氏も学習院の同窓で、その夫人の父君が吉田茂氏にあたるわけだが、この老宰相は泰安をたいへんひいきにしていた。祇園の一力に彼をつれて行って遊んだこともある。たぶん『森林・草原・氷河』だったと思うが、彼の出版記念会がもよおされたとき、私もたまたま東上中で参加したが、その華やかさには目をみはった。登山界の有名人ばかりでなく、東京の上流社会を代表する人々、それに色彩を加えるかのように吉田・麻生グループの仮装部隊と、銀座の有名バーのママたち、さすが泰安の実力はたいしたものであった。

実力といえば泰安は登山が第一、話術が第二、文章はまだ少し、などというわさがあったが、彼はおよそ一九六〇年ごろから文筆に力を入れ、上手になった。私がなかなか優をつけないのに不満だったが、この本は好評だったと思う。彼の「第二芸術」の作品に見られる甘さがまだ残ってはいるが、たしかにうまくなった。もっともこの私の説に彼は大反対であった。謹厳が通称になっていた私の父が学生時代思いをよせた女性があり、大学を卒業するとすぐ結婚を申込んだが、成功しなかったという話を知り、泰安に話したところ大いに関心をよせてくれたが、やがてその逸事を一九六七年二月の「文藝春秋」に随筆として書いたところ、「大学の先生が書くと、どんないい話でも甘さが消えて冷たくなってしまう。感心しませんな」と批判したことがある。

泰安を知るには、この本は大変参考になる。終生憧れの地であった中央アジアに最初にひかれたのは、父君の口を通してスウェン・ヘディンの風貌、その業績などを聞き知ってからだという。彼がチョゴリザ遠征のキャラバン中、キャンプ・サイトの決定には口やかましく、周囲の風景を考え、テントはその入口が翌朝まず朝日のさす方向にむけて立てねばならぬとしたのは、まさにこのヘディンの影響なのであった。そこには生まれつき一種の古典的・貴族的美意識があったと思われる。それが年若い登山家としての形成期に、藤島敏男、松方三郎、今西錦司などからの無言の影響によって、さらに鍛えられていったようである。

彼が昭和十五年、陸軍中野学校に入れられたのは、彼の風貌と出身によるのであろうが、そこの出身者として大陸で地方軍閥との交渉要員に選ばれ、閻錫山との秘密交渉にあたって成功したのも、泰安における知的・美的冒険性と関係があるように思われる。彼が科学技術の進歩に期待せず、登山や遠征における通信等において機械を信用せず、むしろ嫌ったことは有名だが、これも一種の貴族的保守主義といえるかもしれない。

私たちは加藤泰安のことをいつもタイアンと呼びなしているが、これは正しくはヤスサダとよむので、戸籍の原簿にはそのようにル

ビをふって記載されているという。しかし、まだそのほかのよみがある。テイアン、それが京都祇園での彼の呼び名で、今もそれをおぼえている老名妓がいる。この風流の地も加藤がパイオニア精神を発揮して独力で開拓したのであった。むかし山の集まりのあとの二次会で祇園へ皆で行こうとしたとき、私が京大入学早々の彼に「きみはまだ学生だから」といって帰らせたことがあったらしい。私はすっかり忘れていたが、彼はそのときの不満をいつまでも忘れずにいて、酒に酔うときっと私にその恨みを述べてからんだものである。パスキタンへ行ったときも、むこうの政治家たちの招宴で、その話をおもしろおかしく披露しようと試みたが、彼の英語の実力がわざわいして、祇園がどこにあるのやら何も知らぬ相手には、さっぱり感銘をあたえなかったことがある。テイアンが京大在学中に花街でわれわれ以上の名士になっているとは知らなかった。この貴公子の清潔な遊びが若い芸者たちに人気があったのである。テイアンが童貞を捨てたのは大陸の戦地においてであったという。「まあ、惜しいこと」という嘆声がもれたというのは、だれからの情報であろうか。

チョゴリザ遠征から帰った直後、彼のひいきにしていた銀座の「赤とんぼ」という有名なライス・カレー店に二人で入って食事していた。すると街路に面したガラス戸のところに少女たちが数人立って、こちらをじっと見ている。タイアンは、ぼくらのことを知っているんですよ、あの顔付きは、と機嫌をよくしていたが、間もなく少女たちがさっと消えた。当時人気絶頂の石原慎太郎が近くのテーブルで食事をしていたのが立ち去ったからである。タイアンは慎太郎の小説なんて大したことないですよ、といやみを言った。彼にはそういう愛すべきところもあった。

略年譜

一九一一年一月十七日　東京に生まる
一九三一年十二月～三二年一月　学習院高等科在学中、槍・穂高冬季初縦走
一九三四年十二月～三五年一月　白頭山冬季初登頂（AACK第一回海外遠征）
一九三五年　京大入学、旅行部隊長としてこの年十二月より翌年二月にかけ大興安嶺最高峰（一八三五㍍）の初登頂
一九三七年八月～九月　単身東モンゴリア、ウジュムチン、ホロンバイル地方へ
一九三八年三月　京大経済学部卒業
五月～七月　内モンゴリア古北口―張家口―包頭一帯へ
八月～十月　内モンゴリア学術調査隊（AACK第二回海外遠征）
一九四三年　斉藤ひろ子と結婚
一九四四年九月～四五年二月　張家口―グンシャンターク―外蒙国境（蒙古善隣協会調査隊）
一九五三年三月～八月　JAC第一次マナスル遠征隊副隊長
一九五八年五月～十月　京大チョゴリザ（七六五四㍍）遠征隊副隊長、コンダスピーク（六七五八㍍）に初登頂
一九六二年五月～九月　京大・パキスタン合同サルトロカンリ（七七四二㍍）遠征隊副隊長
一九六三年十二月～六四年三月　京大ニューギニア探検隊長、スカルノ峰登頂
一九六九年～七〇年　JACエヴェレスト遠征の国内本部長
一九八一年十二月　JAC名誉会員

一九八三年四月二十四日　死、七十二歳

（桑原武夫）

矢田城太郎氏（一八九〇～一九八三）

もう十年以上昔のことになるだろう。本会の会員総会後の懇親会だったと思うが、私には初めての老紳士が出席されているのを偶々見かけた。「あそこに坐っている方を知っている?」と、古い会員について良く知っていた山崎安治君にきいてみたら「いや、ぼくも判らないので、いまあなたにきこうと思っていたところだ」ということだった。会の途中で出席者名簿を繰ってみると、その方はどうも矢田城太郎氏らしいと判り、後から会員名簿で調べてみると、一九〇九年（明治四十二）十二月入会、会員番号二四五という極めて古い会員であるのを知って吃驚したことがあった。爾来、矢田氏はどういう方かという思いが私の脳裡にあったのだが、多忙にかまけて私は生前同氏と殆ど面晤する機会をもたずに過ぎてしまった。僅かに覚えているのは、祐天寺で行われた矢田さんの告別式に、当時副会長だった渡辺兵力君と参じたことである（氏は昭和五十八年四月十八日、九十二歳で逝去された）。

矢田さんは生前（一九八一年七月）『おもいで草』と題する書物を自費出版されているので、右を基に「山岳」や会報「山」などによって同氏のことを書き留めておきたい。

一八九〇年（明治二十三）十一月十四日大阪で生まれ、一九二〇年東京大学医学部卒、日本産育会病院に勤務し、一九二三年から五年間外務省の委嘱により中国青島病院勤務、一九三一年医学博士、一九三二年東京海軍共済病院勤務、一九四五年東京共済病院（前記海軍共済病院改組・改名）院長、一九六七年勲三等瑞宝章、一九六八年退職というのが同氏の略歴で、専門は産婦人科であったようだ。

作家の丸谷才一氏は、その父親が矢田さんと昵懇だったという関係から『おもいで草』に序文をよせているが、そのなかで「愛想がいいほうでは決してないが、ぽつりぽつりとお話しになることがいちいち中身があつて、理科系の知識人の一典型に出会ったといふ気がするのだ。その人においては、自然科学の教養と人生の知恵とがまことに自然なかたちで結びついてゐると言つてよからう」と述べているが、それだけで矢田さんに就いて言い尽されているように思う。

登山を始めたのも非常に古く一九〇四年（明治三十七）夏、神戸から汽車で御殿場に至り富士登山を皮切りに、一九〇七年（明治四十）大峰山、一九〇九年には木曽御岳、木曽駒ヶ岳、八ヶ岳を登り、一九一〇年夏、徳本峠を越えて上高地に入り、前穂高、槍ヶ岳、焼岳、乗鞍岳に登った。一九一一年七月には大雪渓から白馬岳、また針ノ木峠越えで黒部川を渡り立山へ登って芦峅寺へ下ったのは年号が明らかではないが一九一二、三年ごろと思われる。

一九一三年（大正二）四月白川村御母衣、一九一四年青梅―柳沢峠―塩山、一九一七年金華山、一九一九年十和田湖と北海道各地の旅行の後、一九二三年勤務地が青島に移ってからは、労山に登り、

北京、孔子廟、万里長城等に旅行し昭和のはじめまで滞青した。

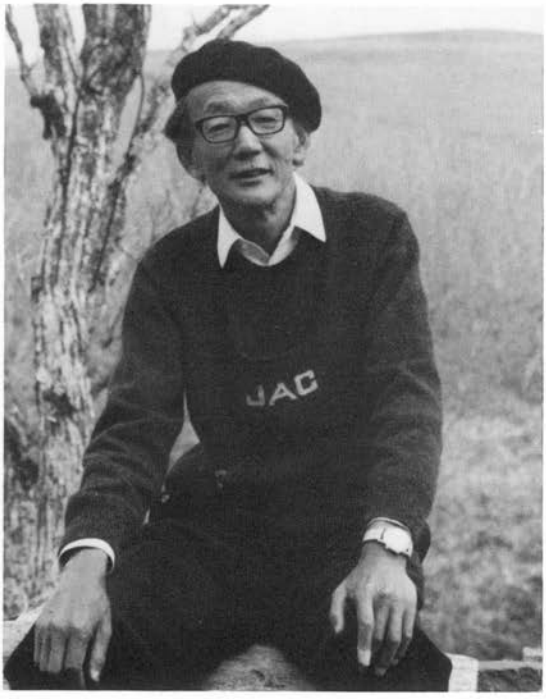
一九三〇―三一年にかけては、医学研究と視察をかねて世界一周の旅をし、その間七月にチロルの山々に遊び、さらにノルウェーではフィヨルドと氷河を観望、オランダ、イギリス、南欧を巡った後十月ツェルマットに入ってマッターホルンに接し（季節がおそく登山を断念する）、翌年フランスからアメリカを経て帰国した。

一九三二年（昭和七）牧野富太郎博士主宰の東京植物同好会に入会したことが、元来植物好きであった矢田さんの後半生にとって大きな影響を与えたように思える。それ以後の大小の登山、旅行は、その殆どが植物採集に関係があったと言っても過言ではない。

特に一九四〇年（昭和十五）九月二十三日、千葉太東岬付近で矢田さんが発見したダイトウラン（ラン科）は、牧野博士によって新種とされた。昭和以降の登山のなかでは、尾瀬（一九三六年、但しそれ以前二回行っているというが年月不明）、越後三山（一九三九年）、白峰三山（一九四〇）、甲斐駒、仙丈岳（一九四一年）、塩見岳、烏帽子岳（一九六四年）が主なものだが、その他北は北海道のアポイ岳（一九六八年）から南は屋久島（一九六二年）、或いは大隅半島、高隅山（一九六六年）、南紀尾鷲付近の僻地やたい峠などをはじめ、コウシンソウの自生地日光の雲竜峡（一九六二年）にも足を伸ばした。そのほかには関東周辺の名のある山、浅間山、赤城山、榛名山、妙義山、等をはじめとして中央線沿線や奥多摩、箱根、房総など極めて数多くの採集山行があり、殊に栃木県の大平山、晃石山、馬不入山などをかなり古く歩かれているのに私は興味を覚えた。

日本山岳会への入会は先に記した通りだが、「山岳」5の1、三〇八頁に明記され、同じ頃入会されたなかに南日（田部）重治、冠松次郎氏の名も見られ、矢田さんの住所は、本郷区湯島天神町一丁目三四鈴木仙吉方となっている。古い「山岳」の会員登山報などを見たが、該当するものはなく、一九一九年（大正八）九月七日清水谷皆香園での第五回小集会の出席者中にその名の出ている（「山岳」14の1）のが古い方であろう。戦前では一九二九年（昭和四）九月第四十三回小集会、一九三三年四月臨時小集会、一九三四年九月第六十三回小集会の出席者中にその名が見える。戦後では一九五三年（昭和二十八）四月マナスル登山隊基金、一九六七年向井ビル移転ルーム募金、一九七〇年エベレスト募金、現ルーム募金等に悉く応募しておられ、小集会、年次晩餐会、エ峰第一次偵察報告会、総会後の懇談会等に出席した。特に一九六五年（昭和四十）十月十四日椿山荘で催された六十周年記念祝賀パーティに出席し、その時発表された永年会員制の第一回永年会員二十七名のなかに入って永年会員章を受けられたことは、同氏の大きな喜びだったと推察する。

前記『おもいで草』は子息の次男氏が纒められたもののようだが、カバーには「植物採集と登山の覚えがき」の副題があり、またMemory of an Amateur と上段に記されていた。矢田さんは医師としての本業に専念されるかたわら、登山と植物にもアマチュアとして心を傾けたということを表わしたかったのだろうと思った。しかし、そのアマチュアの中味は、なまなかの専門家の遠く及ばないものが応々にあり、矢田さんも恐らくそういう一人ではなかったかと想像している。今にして遅きに失したが、矢田さんの生前に、会



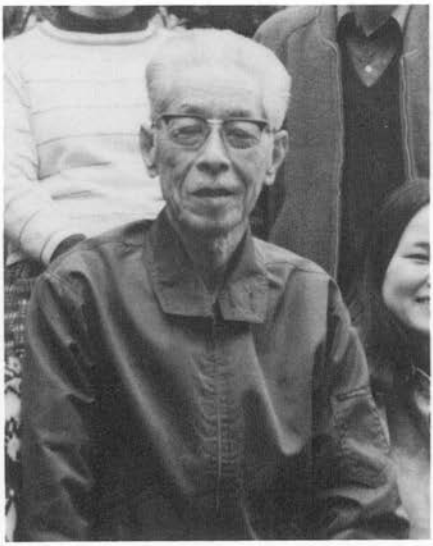
名誉会員
加　藤　泰　安　氏
Taian　Kato（Hon. mem.）
（1911～1983）



坂　戸　勝　巳　氏
Katsumi　Sakato
（1905～1983）

二 木 信 次 氏
Shinji Futatsugi
(1901～1983)

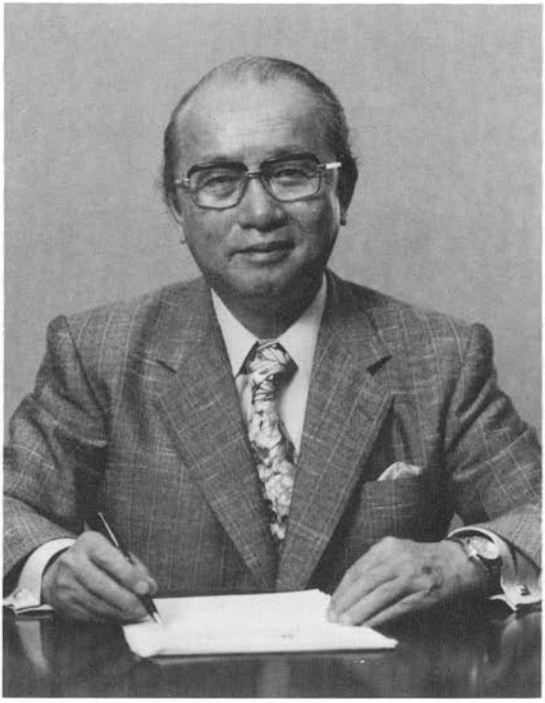




岡 田 喜 一 氏
Kiichi Okada
(1902～1984)



水 野 政 博 氏
Masahiro Mizuno
(1914～1983)

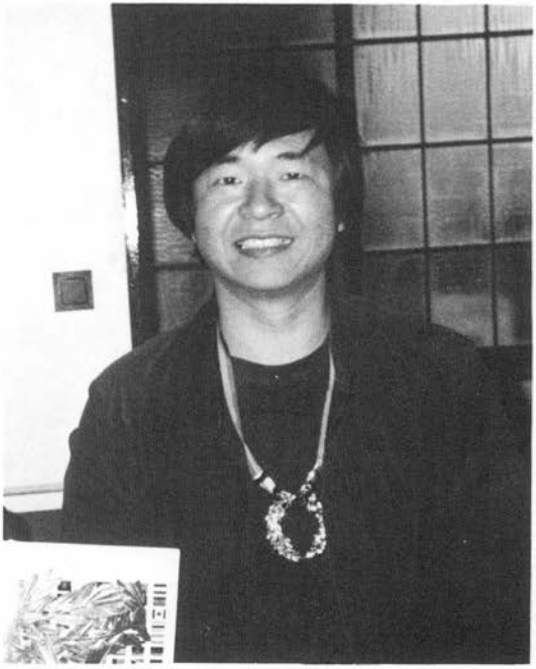


名誉会員

水 野 祥 太 郎 氏

Shotaro Mizuno (Hon. mem.)

(1907～1984)



植 村 直 己 氏

Naomi Uemura

(1941～1984)

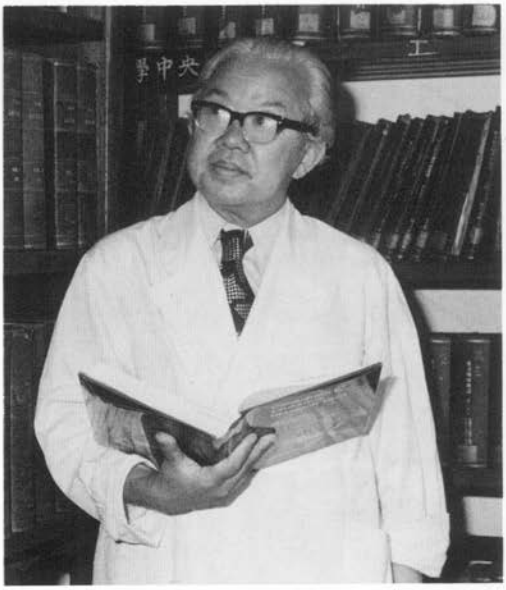
1979年3月バーラー賞受賞後。
板橋・植村宅にて

片　山　全　平　氏
Zenpei　Katayama
(1925～1984)
1970年エベレスト取材のとき





山　崎　安　治　氏
Yasuharu　Yamazaki
(1919～1985)



伊　藤　洋　平　氏
Yōhei　Ito
(1923～1985)

はもっと同氏から古い時代の諸々のことをきいておくべきだった。

矢田さんが植物採集行をさかんにやられていた頃の仲間に、先般秩父宮記念学術賞を受けた沼田真氏がおられるのを、巻末の思い出で知ったことを付言する。

＊

（追記）その後、「会報」第一号（昭和五年十一月）に矢田氏の会員通信が二通載っているのに気がついた。但し「会報」では名前が誠太郎となっているが、ご本人に間違いないことを内容によって確認した。昭和五年の世界一周旅行の時のものである。

チロル・チラータール

七月五日伯林出発、六日当地に参り渓谷を探勝致居候、十二日ギンツリングを経てベルリナーヒュッテに一泊、十三日盛夏に珍しき大雪の中を山案内と共にメーゼレ（三四二三㍍）に登攀、その頂上を極め候、山頂に居りし二、三十分の間幸にも一時晴れ渡り周囲の山々は眼前に展開し、氷河と新雪の賜に輝く眺めは実に雄大に御座候、十四日はシュワルツゼー及ロッスリュッケンを探勝、十五日下山致し候。／七・一六・マイルフーフェンにて

ノルウェイ

先月二十六日ハンブルグ出帆、ノルウェイ西海岸に沿ひフィヨルドと氷河を見物しつゝ、八月一日北極圏内に入り、昨日午前世界最北の町ハンメルフェストを訪ね、唯今欧洲の最北端ノルドカップに到着致し候。／八月四日

（望月達夫）

坂戸勝巳氏（一九〇五～一九八三）

坂戸勝巳氏の名は山の関係では二つの面を持っていると思う。一つは昭和初期に清水忠雄氏との共著『日本山岳文献ノート』二冊、および、同じく清水氏との共著「山岳に関する本邦文献」（共立社『山岳講座』第二巻所載）などを発表した、日本における山岳書の書誌研究の先駆者としてであり、もう一つは戦後、日本山書の会に入り、山岳書ばかりでなく人物研究などをされる一方、勤務先を退社後はじめられた古書店の主人としての一面であろう。

この二つの面は時間的にいっても分かれていて、前者は坂戸氏が二十代の青年時であり、後者は子育てを終ってからの時で、いわば晩年である。その間には、仕事の忙しさもあったが、大きく戦争がはさまっているのである。だから、年齢によって、ある人は坂戸氏を『日本山岳文献ノート』の著者としてとらえ、ある人は古書店の主人としてとらえているのもそれぞれうなずけるのである。

ぼく自身はもちろん昭和初期の坂戸氏を知るわけもないのだが、つき合いはやはり『日本山岳文献ノート』の著者としてはじまったのだった。それはもう晩年といってもいいくらいの時期であったが、二十年ほどのつき合いだからあまり短いものとはいえないであろう。若いときのことは全くといっていいほど知らなかったが、坂戸氏と山との関わり合い、人生に対する態度というものにはかなりふれ得たと思っている。

坂戸勝巳氏は最後は大阪に住み、大阪で亡くなられたが、生まれは東京である。明治三十八年九月十八日が生年月日である。昭和六年三月に慶応義塾大学経済学部を卒業されているが、山岳部とは関係なかったようである。というより、けっして家庭が裕福でなかったらしく、詳しいことは知らないが、学生時代からすでに印刷関係に勤めていたと聞いている。三田氏や大島氏などとは全くちがった環境にいたと思われる。しかし、山や山の本に対する情熱はものすごく、大学卒業の翌年の昭和七年には、三田の慶応大学の近くにあった清水書店の若主人と組んで『日本山岳文献ノート』二冊を発行しているのをみても、それはわかるであろう。当時、清水書店には山岳部の連中も出入りしていたらしいが、坂戸氏も学生時代よく通って、書店と仲良くなっていたのだと思う。この古書店は山の本を熱心に集めていたから、本の提供は清水書店、解説は坂戸氏という分担で、この日本で最初の山岳書の解題書ができ上った。坂戸氏二十七歳のときの著書であったが、その当時には画期的なもので、多くの人がこの本を参考にして山の本の知識を得たと思われる。

共立社の『山岳講座』に「山岳に関する本邦文献」を発表したのも、前記の『文献ノート』の著者として執筆を依頼されたからである。話は松方三郎氏を通じてなされ、洋書は松方氏が書き、和書は坂戸氏が書くことになったと聞いている。この原稿をまとめるにあたって、小島烏水氏と知己になり、執筆に際して小島氏の蔵書を借り、また助言を得たと本人は述べていた。そして、前から尊敬していた小島氏をますます好きになったらしく、『アルピニストの手記』には小島氏のサインをもらい、それは終生、坂戸氏の自慢であった。

時期は支那事変へと移っていき、坂戸氏も時事新報社から上海の大陸新報社広告部長として中国へ渡り、日本の山岳会からは姿を消したかに見えた。敗戦により引揚げてからも広告畑を歩き、電通その他放送局に勤務し、最後は大電専務取締役で昭和四十五年に退職した。

終戦後二十年くらいは、ぼくらの目には、少なくともぼくの目には坂戸氏の消息は全くわからなかった。彼が姿を現わしたのは、ぼくらが日本山書の会を創立して間もなく、彼の名が新入会員として現われたとき、坂戸勝巳氏が生きていたか——とびっくりしたものである。そして、もっと年輩者と思っていたのにまだ会社勤めと聞いて二度びっくりしたものであった。たぶん、日本山書の会という名が坂戸氏の心を惹いたのだろうし、それによって、山岳界へまた戻ってきたのであった。それからは山岳書についてばかりでなく、登山やスキーに関わった人物の研究をなされて発表していった。そのうちでも館潔彦の研究はそれほど長い論文ではなかったが、日本近代登山の先駆者としての館潔彦の業績を発掘したものとして長く残るものである。また、登山史ばかりでなく、日本の測量史の研究の上からも、坂戸氏の仕事は高く評価されたのである。

日本山岳会入会は昭和四十五年八月で、会員番号は七〇三九番である。すなわち、勤務先を退職されてからの入会である。登山そのものは記録に残るような登山をしていないが、若い人びとと、あるいは同年輩の人びととたびたび関西の山々へ登っていた。

退職、日本山岳会入会と同時に、坂戸氏は自宅で「淀川文庫」と

いう名で古書店を開き、主として山岳書を扱い、それ以外に文学書を少し扱った。まさしく、坂戸氏の晩年は山にのみ関わって幸せに過されたといっても過言ではない。そして、古書店を経営する一方で、多くの人びとと交際を深め、ますます山にのめりこんでいった。

昭和初期の若い頃のことがよくわからないが、坂戸氏の名は「淀川文庫」として多くの山の人びとに知られたことであろう。人柄としてはたいへん人なつっこく、率直であり、偏見を持たず、心の広い人であった。

亡くなられる二、三年前は、文章を書かれることも少なくなり、古書目録の発行もとどこおりがちになったが、やはり身体が弱っておられたのであろう。入院されてから、坂戸氏の著書を発行することになったが、その発行を見ることなく、昭和五十八年五月二十一日逝去された。七十七歳であった。

遺稿集となった本は『山のかおり』として、ぼくと上田茂春氏の編集で、同年の十一月に日本山書の会から発行された。坂戸氏の生きておられるうちに発行できなかったのが心残りであった。

（水野　勉）

二木信次氏（一九〇一～一九八三）

二木さんと最初にお会いしたのがいつだったのか、今のところはっきりした記憶はありませんが、大阪の好日山荘が協和銀行の三階にあって、西岡一雄老が独りで頑張っていた頃ではなかったかと思います。若年者だった私は、身なりもキチッとした紳士が西岡さんと話していたりすると、隅の方に小さくなっていたりして、西岡さんが話の途中で「君、何の用事や？」と声をかけてくれると、そそくさと買物をして退出するという有様でしたが、二木さんはそんな紳士の一人だったと思います。

私が関西支部の手伝いをさせてもらったのが昭和三十三年からですが、私の記録の中で二木さんが関西支部の委員会に出席されたのは昭和三十四年三月が最初になっています。それ以前は申訳ないことに記録が不十分で、二木さんがいつから関西支部で委員をされたのか明確ではありません。ご職業がら監事をお引受になったのが昭和三十六、七年頃のようですから、それ以来ずっと二十二、三年間監事を続けていただいたことになります。支部の監事ですから面倒なことはないのですが、最近十年くらいは必ず委員会に出席されて若い連中の話を聞くのがお楽しみのようでした。委員会が終って一杯飲みに流れていくときも顔を出されて、仕事に関係のない馬鹿話に「今日は本当に愉快だった」といっておられたことも何回かありました。

二木さんの登山の始まりがよくわからず、故人となられた水野祥太郎さんにお聞きしたことがありましたが、住友銀行の神戸支店にお勤めの頃、神戸では「毎朝登山」が盛んで、元町三丁目の元三山岳会で登りはじめたのが最初ではないかということでした。その後アメリカ支店に転勤された機会に、レーニア山へ氷河を渡って登ら

れたのですが、当時は日本で氷河の経験者も少なく、日本人としてレーニア山の登頂者では二番目か三番目くらいの貴重な経験をされています。以来近くの山は歩いておられたようですが、晩年になってネパールへトレッキングに出られ、その素晴らしさに魅せられて「何回でも行きたい」と目を輝かせておられました。

まことに温厚なお人柄から、老若男女を問わずおつきあいがあり、特に年次晩さん会とウェストン祭には欠かさずご出席されたようでした。そうかと思うと「昨年は○○の映画をみてきた」と最近封切の最新作までたんねんに観られて、若者向けの映画の話なども飛出してきたり、結構気の若いところも見せられたことがあります。

関西支部では新年会と呼ぶ晩さん会を何十年か続けていますが、初期の頃、二木さんのお世話で土佐堀の住友クラブを長く使わせていただき、クラブが建替えで使えなくなってからは、やはり二木さんのご紹介で梅田の大東洋に移り、今もそこを引続き使っております。この新年会は平素あまりお目にかかれない方々が多数お出になる支部唯一の機会でもあり、二木さんのお人柄の余映に感謝しながら、今後も長く続けたいと思っている行事です。

二木さんは山の本も多く集められておられ、おなくなりになった後、ご子息から関西支部へのご寄贈がありました。図書委員の努力で図書目録も発行することができ、「二木文庫」と銘うって関西支部で保管しております。図書は報告書・ガイドブック等一二八冊、単行本三五七冊、洋書四一冊、合計五二六冊にのぼり、洋書の中にはマーチン・コンウェイやウィンパーのもの、スキーのアーノルド・ランのもの数冊など、価値の高い本も含まれております。

まことに地味に山を愛し、関西支部に尽された二木さんのほのぼのとした暖かさを、いつまでも忘れることなく、支部に伝えていきたいと思う次第です。

略歴

明治三十四年富山で生まれ、大正七年富山商業卒業、住友銀行神戸支店に入社、以来ロサンゼルス、ニューヨーク、京都支店、秩父丸出張所、福岡支店勤務後、本店外事・営業副長、庶務課長、秘書役、西宮支店長を歴任。趣味は登山、スキー、野球、ゴルフ、園芸。一九二五年四月、日本山岳会入会、会員番号九一〇。永年会員、関西支部委員、監事を務められ一九八三年九月六日逝去、享年八十三歳。

（阿部和行）

岡田喜一氏（一九〇二～一九八四）

本会永年会員の岡田喜一先生は、一九八四年十一月六日夕刻、長崎市の長崎北病院で逝去されました。行年八十二歳。御自宅でのちょっとした階段の踏みはずしがもとで、頭を強く打たれたのが原因だと聞いたが残念でならない。ここに慎んで先生の御冥福をお祈りするとともに、私の知っていることの一文を草して先生の御生涯をお偲びしたい。

先生は明治三十五年（一九〇二）東京で誕生され、大正十五年（一九二六）青山学院本科を卒業された。先生の会員番号は三桁の九三五番であり、おそらく学生時代の大正十四年に入会されたもの

と思う。昭和二年（一九二七）、農林省水産講習所（現在東京水産大学）に勤められる。昭和二十二年（一九四七）、鹿児島水産専門学校教授となり、学校改革により鹿児島大学助教授を経て、昭和二十九年（一九五四）長崎大学水産学部教授として、昭和四十三年（一九六八）停年退官されるまで活躍された。

私が先生に初めてお目にかかったのは、私が長崎大学に赴任した昭和四十二年のことである。当時の先生は長崎大学山岳部顧問をしておられたが、大学を去られる時、先生に請われて私がその後を引き継ぐことになった。また長崎県自然保護関係の会議などでお会いすることがあった。このような関係で、少しばかり先生のことを存じ上げている。

先生は中学生の十三歳の時富士山に登り、その頃から東京近郊の登山や動植物に親しんでおられた。特に昭和初期には千島列島の島島にたびたび行かれ、登山と探検、同時に動植物の調査をされた。農林省の船で、一度行けば一～二カ月間にわたって、それぞれの島に上陸して活動され、これを数回なされた。その足跡は千島の大部分の島におよび、北は阿頼度岳（二三三九㍍）の日本人による第三登から、千島の高い山はほとんど登られた。なかには、日本人による初登頂、チャチャヌプリ岳が同じく第二登、択捉島（エトロフ）では初登頂の山が二つなど多くの登山歴を残している（私自身が千島列島の登山史を調査していないので、それぞれの島や山名を明らかにすることができないのが残念である）。千島列島では、水産講習所の関係もあって、動植物の調査研究が主目的で、その間、ライチョウ、マス、キツネなどの観察、さらにはマリモの新発見があって二種の学名を付けられた。

その頃千島の山に限らず、北海道の山々をはじめ樺太にも足跡を印している。北海道の山も随分登られたらしく、有名な山はほとんどすべて登られた。

一方、東京にあっては、近郊の山はもちろん、北アルプス、南アルプスなどにもしばしば行かれた。南アルプスでは赤石岳から仙丈までの縦走も含まれる。その頃の同行者として、本会発起人の武田久吉先生や、ヒマラヤに三度も行かれた長谷川伝二郎先生などがおられた。研究対象が動植物という関係もあって、武田先生とは特に親しくしておられた。そのほか、九州は屋久島の山々から、昭和十八年には北朝鮮北部の山々に登っておられる。

ちなみに、北海道（千島を含めて）の最高峰は阿頼度岳、九州では屋久島の宮之浦岳（一九三五㍍）で、どちらも最高峰は本島になく離島にある。先生はこの両峰に登られたことになり、これは現情況下では全く不可能なことである。

先生は足しげく千島に行かれたこともあって、南極探検の白瀬矗中尉と親しくしておられ、白瀬さんの家にも何度も遊びに行き、お話を直接聞いておられた。白瀬さんからの先生宛の年賀状も大切に保存しておられた。先生は御自身で極地探検に夢をもっておられ、訪日した極地探検家には必ず会い、またそのサインなどを大切にしておられた。私が第十六次隊で南極越冬の際も、ことのほか喜ばれ、いろいろ励ましのお言葉をいただいたことを昨日のように思い出す。

先生は亡くなられるまで、環境保全などで活躍しておられた。す

なわち、九州環境保全鳥獣連絡協議会名誉会長、日本鳥獣学会名誉会員、長崎市文化財専門委員、長崎あじさいの会会長、長崎さつきの会会長などの要職を兼ね、自然に関しての活躍を続けておられた。このように惜しい方を失って、あらゆる面で惜しまれてならない。

先生の研究に対しては、昭和二十五年（一九五〇）、東京大学より理学博士の学位を受け、また昭和四十八年（一九七三）、勲三等瑞宝章を受け、亡くなられたあと正四位がおくられている。

（松本徳夫）

＊

岡田喜一君は私同様江戸ッ子の端くれで、その生年月日をみると、私より一年年上になっているが、東京の駿河台にあった明治中学へ入ったのは大正五年と私と同じである。私はこの中学に二年いたあと、家の都合で大倉商業に転校したので彼との昔のつき合いはたった二年間、従ってその存在はお互いに忘れてしまっていたかもしれない。

しかし私は今では友人関係で五明会のメンバーに加えてもらっているので、最少限忘年会には殆ど毎年顔を出し、生き残りの人達の元気な姿を見るのを楽しみにしている。

敗戦後彼は九州へ行ってしまっていたので、毎年会うという訳にもいかなかったが、箱根とか湯河原での会合の時には彼も無理したのか出て来ていたので、いろいろ山の話や彼の専門の話に耳を傾けていたものである。

日本山岳会は彼が九三五番で私が九三〇番となっている。二人とも一九二五年の入会で、彼は多分武田久吉博士の紹介だったと思う。岡田君は武田博士の弟子であった。

彼は古い貴重な資料をたくさん持っていた。特に南極探検の白瀬さんに関するものなどは貴重だと思った。

とにかく一見きたない小もの大もの、黄色くなった古新聞の切抜きなど、そういったもののホンの一部を見せ説明してくれたりもしたが、彼も私同様ガラクタの収集癖があったらしい。

日本山岳会の「山岳」21年1号（昭和二年三月発行）や、同25年3号（昭和五年十一月発行）その他をみると、彼はもう大正の末期頃から礼文島やチャチャヌプリ、アライドなどに興味をもって登山や探検などを行なっている。千島列島に関しては彼はパイオニアの一人であることに疑いない。

昭和二、三年といえば私も大朝日岳を野川方面から登ったり、信州の岩菅山へスキーでの初登頂をやったり、針ノ木峠、平の小屋、一ノ越ごえをスキー（三月と五月）で往復を二度もやっていた時代である。私が内地でウロウロしている間に、岡田君はもう極寒の地での探検、調査、登山を実行していたのであるから大したものである。

彼は最後の栄誉としてあるものを得ようと望んでいた節があるが、この彼の切なる希望は結局いれられることなく終ってしまった。気の毒なことをしたと思う。

略歴

医学博士岡田病院長故栄吉の長男として明治三十五年（一九〇二）七月十五日、東京都下谷茅町に生まる。

大正五年、明治中学入学、十年卒業。大正十五年、青山学院大学高等部師範本科卒業。
昭和二年、農林省水産講習所入所（助手）。昭和十八年、東京国立科学博物館嘱託。
昭和二十二年、鹿児島水産専門学校教授。昭和二十五年、理学博士（淡水産藻類の研究につき東大提出）。
昭和二十五年、鹿児島大学教授。同二十八年、宮崎大学講師兼任。同二十九年、長崎大学教授。同三十六年、九州大学講師兼任。同四十三年、長崎大学停年退官。
昭和四十六年、長崎玉木女子短大教授。
昭和四十八年、勲三等瑞宝章叙勲、賜謁。同四十九年、長崎市立博物館学芸員嘱託。同五十五年、長崎市立歴史民族資料館嘱託。
昭和五十九年十一月六日、長崎市にて死去。
追って同氏は当日、自宅前の石段にて転倒、後頭部を強打したため脳挫傷を起こし、市内の病院にて死去、行年八十二歳。
戒名、松寿院喜翁一道居士、上野谷中霊園の墓地に眠る。
遺族、和子さん、晴江さんは既にそれぞれ嫁し、澄江さん在宅。妻あき子さんは昭和四十八年病歿
主著『原色海藻図譜』（三省堂）、『原色海藻図鑑』（風間書房）、『陶磁大系第一六巻薩摩』（平凡社）、『日本のやきもの第一六巻薩摩』（講談社）、『薩摩烏賊餌木考』（内田老鶴圃新社）
関係していた社会団体名　九州環境保全鳥獣連絡協議会（名誉会長）、長崎県環境保全審議会鳥獣部会（会長）、長崎市文化財専門委員、長崎椿愛好会（会長）、長崎あじさい会（会長）、長崎県美術協会（副会長）、日本陶磁器協会長崎支部（副支部長）、日本民芸協会長崎支部（副支部長）、日本鳥学会（名誉会員）、日本山岳会（永年会員）、全国日本鶏保存会（顧問）

以上の各項目は全部喜一氏の実弟岡田次郎氏の編さんになるものであるが、これが提供者は明治中学五明会の片岡竜夫氏である。

（吉澤一郎）

水野政博氏（一九一四～一九八三）

私と水野氏との出会いは、昭和八年関西学院の剣岳真砂沢に於ける夏山合宿からであるから、もう五十年にもなる。

当時水野氏は予科生で、霜降りの学生服で紅顔可憐の美少年という感じであった。学生時代は山岳部の行事の外に二人でよく剣周辺、後立山、槍穂高と歩き廻り、岩登りにもよく出かけた。彼は特に剣岳の西面が好きで、積雪期の早月尾根、池ノ谷、小窓尾根と精力的に登り続け、私の知っている限りでも年に五、六回、剣に入って居った。

卒業後二人とも軍隊に入り、中国各地を転戦し終戦の翌年復員、或る日、当時大阪駅前にあった闇市で偶然にも再会したのがきっかけで、鉄道局の資材置場で永々と卒業以来のことを話し合ったのがつい最近のような気がする。

そのような時にでも彼は「山へ行きたいなー」としきりにいって居った。

家は戦災で焼け出され、丸裸でいま知人の家に居ると言って居ったので、私は翌日、疎開してあった山の荷物の中から毛のセーター

を一着彼に届けると、彼は三拝九拝して「有難う、これで今年の冬も越せる」と喜んでくれたのを覚えている。このことは後年になっても、仲間の前で再々話をして感謝されたものである。

彼は誠実で責任感の強い男であった。これは学生時代マネジャーをやって居った時代からであったが、山岳会仲間だけではなく彼を囲む他の幾つかのグループの連中での評判でも変りない。彼は堂島セントラルビルの社長という激務の中、山岳会はもちろんのこと同窓会、戦友会、OB会とよく仲間の世話をし、つくしてくれた。

関西支部に於ても故津田周二、故水野祥太郎、現今西寿雄支部長のもとで委員を十数年勤め、本部の評議員も数年勤め、本部の方々とも親交があった。

彼は血液癌で入院後約一ヵ月半で他界したが、私は毎日のように病院に見舞いに行き、最後まで見送れたのは悲しい中にも心置きなく感じるが、現在のような高齢社会の時代に、六十八歳ではあまりにも早過ぎるような気がして残念でならない。

彼の霊は、彼の愛した山々の上を飛び廻っていることでしょう。

私は私の人生の中で彼のような友人を持つことが出来たのを、彼に感謝すると共に誇りとも感ずる次第である。

略歴

大正三年五月十八日生まれ、大阪府立高津中学校卒業、関西学院大学商経学部卒業、昭和五十八年十一月二十日歿。会員番号四二七二

（陸田峠郎）

水野祥太郎氏（一九〇七～一九八四）

水野祥太郎君がなくなって一年になる。彼と私は学生だった頃から、神戸の裏山六甲の谷や尾根を共に歩き、やがて岩登りをはじめてRCCに入会し、藤木九三さん西岡一雄さんなどから教えを受け信州の山などに行くようになった。それ以来六十年、――六十年ともなれば山の友とよぶだけでなくもっと広い意味での生涯の友人として過した年月である。

水野君の父上は眼科医で、彼の家は神戸駅と三宮駅の中間の国鉄線路（高架になってない頃）に沿った所で、木造二階建の横板張のペンキ塗り、今でいえば異人館風の医院であった。夏休みの中頃、剣八ツ峰の壁など登ろうと打合せにこの洋館を訪れると、彼の帰宅が予定より少しおくれて不在、そこで出て来られたのが父上で、少し待ちなさいと話しかけられた。

祥太郎はよく山登りに出かけるが君も山の友達なら危いところには行かないように注意してやって下さい――こわいおじさんから一本釘を打たれて、いたくもくすぐったくもある感じだった。

彼が大学を了え第一外科に入局した頃、私は勤めていた設計事務所が大学病院の川向いのビルにあった関係で、夕方から顔を合せることも多く、空になったコーヒーカップを前にしてシュナイダーの『スキーの驚異』やバウワーの二回にわたるカンチェンジュンガ北東稜の本などを話題にして時の経つのを忘れる次第であった。彼は

RCCの最初の『岩登り術』を内容を増して新しく書き直し、続いて『山野スキー術教本』を書いた。この頃の彼はまことに活動的で京大または大阪神戸の学校山岳部と広く交わり、関西学生山岳連盟の結成にも中心的な動力となり、設立後もよく面倒をみていた。

こうして結構いそがしく動きながらよく山には出かけたもので、彼と共にいつも登っていた同級生の自称悪友の語るところによると、何度か一緒に追試験を受けることがあったという。

水野、津田両君と私はRCCの運営を先輩から託され、津田君の宅を事務所にしてたびたび会って話し合い、ガリ版や封筒書きなどを共にし、休日にはいつもザイルをかついでトレーニングに出かけた。芦屋ロックガーデン、堡塁岩、道場不動岩等によいルートを見つけ、練習場として開拓したが、それらは今も一般に広く知られている。冬にはよくスキーをかついで出かけたが、津田君が鉢伏山で弟節三君を雪崩によって失ういたましい事故が起った。水野君は鉢伏、氷の山、扇の山などを中心とする国境一帯の冬の山と峠をよく歩いた。今とちがって自動車道など全くなく、谷の一番奥の集落など雪に埋って全く孤立していた。そんな所で区長さんに頼みこんで泊めてもらい、翌日また峠を越えてゆく旅は、いま思い出してもなつかしいものがある。

その頃大阪鉄道局の旅客課でスキーツアと称して参加者を募集してクロスカントリーの山行を計画し、私等も世話をやいた。そしてスキー地図をつくることを考え、五万分の一の地図を少し縮少し、雪崩や雪庇の危険箇所に赤でマークを印刷したものをつくった。国鉄の無料サービスだったし、実用からも山スキー党には好評であった。

関西支部が設立されて五十年になる。支部がはじめて出来るについては、当時としてはいろいろ経緯があったことは支部報その他にも何度か書かれているからここに重ねて語ることはしないが、水野君は津田君とも随分考え、議論し合った記憶が残っている。

山靴については初期のものはアルプスで使われたスイス製品をサンプルに作られたものが多く、水野君は自分達の足を考えて作ることをよく口にしていた。そして私と彼は話し合った結果を好日山荘で西岡さんが作らせていた日の丸靴店のオヤジさんに直接説明して作らせることになり、底幅の広くない、見た目には細い小さいと思われる程度の岩登り用鋲靴を工場につきっきりで作らせた。これは足と靴と鋲がピッタリ一体となった感じで、剣八ツ峰の壁や、また穂高涸沢、滝谷、ジャンダルム飛騨尾根等、二人で調子が合ってひどく軽い気分で歩いたことを思い出す。

戦後私の俘虜生活が終って帰国した時、彼は大阪市立医大の整形外科教授で、せまい彼の教授室で私の北千島やヴォルガ河畔の雪の中の生活や、彼の砲兵工廠被爆の傷兵の手当のひどさなど話し合った。その後、彼は医学上の仕事でヨーロッパ諸国に行ったりアフガニスタンや印度に行ったり、たびたび外地に出ているが、随分広く専門外の知識をも取込んできて、驚くような話を聞かせてくれた。また一九七〇年にP29遠征隊長として、一九七三年にはRCCⅡのエベレスト遠征隊長としてカトマンズに行っている。

今この原稿の向う側に『ヒトの足この謎にみちたもの』が置かれている。これは彼の著書で、昨年度毎日出版文化賞に選ばれたもの

だが、彼の亡くなった当日に発行され告別式の時私もいただいたものだ。随分前から「人間は二本足で立つ」ことを話題にすることがたびたびあったが、これが彼の遺著となっていま目の前にあることに彼そのものを見る心地である。徒然草に「よき友三つあり、物くるる友、二つには医師（くすし）、三つには智恵ある友」とある。彼はくすしであった。私はもちろん家族もたびたび世話になった。この遺著も、物くる友の贈り物であり、また彼は智恵ある友――と呼ぶのは充分でない智恵あふるる友であり、さらにその智恵をいつも次々に積上げてゆきつつある友であった。

略歴

一九〇七年（明治四十）神戸に生まれる
一九三〇年 府立大阪医科大学（大阪大学医学部の前身）卒業、第一外科入局
一九三一年『山野スキー術』上梓
一九四八年 大阪市大教授
一九三〇年 日本山岳会入会 会員番号一二五九
一九五八年 大阪市民文化賞受賞
一九五九～六〇年 日本整形外科学会会長
一九六二～六八年 日本山岳会関西支部長
一九七〇年 大阪大学名誉教授 川崎医科大学教授
一九七二年 川崎医科大学学長 八〇年辞任
一九七九年 日本山岳会名誉会員
一九八四年 五月十日歿

（中村勝郎）

植村直己氏（一九四一～一九八四）

彼の略歴をまとめて、その凄さ、濃縮さにいまさらのように驚くと共に、まことに惜しい人材を失ったものだと痛恨の極みである。

一見平凡で、まことに目立たぬ一青年が上京し、大学山岳部の門をたたくことによって、その資質は俄然目覚め、しゅん動し始めた。その四年間の山岳部生活を通じ、五百余日の厳しい登山活動、部生活、仲間との交流など、ドングリ植村は、アニマル植村と呼ばれるようになり、そして冒険家・植村直己へと成長していく。

限られた紙数で、とても述べる訳にもいかないし、仮に紙数を与えられたとしても私個人ではとても捕捉出来ぬほど大きい、多くの顔を彼は持っている。

彼の素顔の特徴は何といっても、謙虚なやさしい心、素直な性格、ということでしょう。

彼に接した数多くの人達（世界二五カ国を歩いている）は、言葉も十分に通じないのに、彼のえも言われぬ、不思議な吸引力にとりつかれ、ファンとなり、よき協力者になっています。こんな、生まれたままの姿と心を生涯を通じて保ちつづけ、なおかつ、濃縮されたあの偉業の数々を行なった不思議な天賦のものは、彼の出生にあると私は見ています。

兵庫県の但馬盆地。日本海に面し四囲を山々に囲まれた円山川の上流城の小さな町城崎郡日高町上郷に生まれた。

父、藤次郎、母、梅との間に七人兄弟（兄四人、姉二人）の末子である。農業の傍ら畳製造を営む。

勤勉、正直、ねばり強さは、両親の血をそのまま受けついでいる。但馬の風土と気質にすくすくと育った、まことに平凡な、目立たぬイタヅラ小僧は、豊岡高校を卒業し、一浪して上京、明治大学に入学し、山岳部に入部する。

やはり、運命というか、そういうものを感ずるのは、もし彼が、大学受験に合格していた関西大学に入っていたら、どうなっていただろうか、また十カ月職についた新日本運輸の会社で、そのまま社会人となっていたらどうなっていっただろうかと。

しかし、私は断言する。彼は、どんな社会へ入っていっても、必ずひとかどの仕事をやり遂げる人物であることは間違いない。あの、バイタリティ。あの、独創性。天性の人柄。山へのめり込まなかったらきっと今頃は日本のトラック便、宅配便の大将になっていたに違いない。

田舎からポッと出た植村は、球技や競技では大学でやっていけないことを十分に承知していて、山ならば、自然の中でやることであるからと、何となく山岳部へ入部する。

三十余名の新入部員と共に、白馬岳の新人合宿に参加し、生まれて初めて、激しい肉体的、精神的な苦痛を味わい、そのシゴキに耐えかねて、入山初日からブッ倒れてしまう。トレーニングを積んでいない生な身体では当然のことだろう。この合宿山行で味わった屈辱感とコンプレックスは、彼に猛然と自己トレーニングを目覚めさせる。

遂に、同期の部員は五人に減ってしまった。

しかし、彼は、二度とバテなかったし、音をあげず、ねばり抜いて、遂に副将として、最終学年を迎える。彼の尋常でないところが、山岳部の物凄い切磋琢磨の中で目芽え、開花していく。

将来、彼が南極への夢実現に際して、一つずつステップを踏んで、自らの手で確かめ、体験し、自分の手に負える範囲を視野にとらえつつ、計画を一つ一つこなして行ったことと併せ考えてみると、山岳部の四年間の生活と体験は、非常に大きな意味と、基礎になっていると思われる。

僅か二十年の活動だったが、内容は実に壮大である。二十三歳で大学を卒業し、マッキンリーで消える四十三歳まで、ため息の出るようなたくましさ、ほんぽうな伸びやかさである。

彼の二十年の足跡をよく辿ってみると、三つの節目があるのに気がつく。植村独特の行動パターンが一貫して流れているのだ。独創的で、行動力にあふれた、そして地道に一つ一つこなして行くやり方である。

第一の節目

海外での修業時代と呼ぶべき時期である。つまり、一九六四年から一九六八年十月までの四年五カ月。この間のことは、『青春を山に賭けて』に詳しいのではぶくが、この本は、彼の傑作であると共に、彼を知る上で本当に興味深い一冊であることを付記しておく。

将来、南極を目指して行く彼が、どんなに人に好かれたか、人に好かれるにはどうしたか。なんで単独行に走ったのか、偏屈なのか、ひとりで淋しくないのか、怖くはないのか。

この修業時代は実に一刻一刻が貴重な体験の積み重ねといってよいものです。

ジャン・ヴュアルネ氏とのめぐりあいは、神のお引き合せといってもいい位の幸運を感じさせる。また明大のヒマラヤ、ゴジュンバカン登山隊に参加出来たのも、高橋隊長や、仲間の友情であったし、登頂チャンスもめぐりあいだった。

強烈な彼の個性を物語るエピソードがある。下山、帰京の段となって、登頂者なんだから一緒に日本へ帰ろうとすすめられたが、彼は断固として拒んだ。カトマンズに下山して、日本の新聞報道を見ると植村は意気消沈してしまった。それは、登頂者として、植村直己の大きな活字と、顔写真をそこに発見したからだ。自分は飛入りで、分担金も出さないし、長い辛い準備も手伝っていない。みんなは、仕事を休み、家族を放ってやって来たのに、こんなに報道されたのではみんなに顔向け出来ない、と彼は理解しているのだ。

そんなに固苦しく考えなくてもいいじゃないか、仲間なんだから、それぞれ力いっぱいやって来たんだから、といってどんなに説得しても、彼は意志を曲げなかった。金はあるのか、と隊長に聞かれ、懐中淋しいのに、十分あります、といって、徒歩、汽車、船と乗りついで、やっとフランスに帰りつくが、黄疸でブッ倒れてしまう。

以降も、こういう自説を曲げない彼のガン固さにはしばしば出会った。一万二〇〇〇㍍の犬ゾリ走行の時も、仲間が喜んで励ます会をやり帽子を廻したら、飛行機代ぐらい集まった。

しかし彼は、どうしてもそれを受取らなかった。とうとう、最後まで炉辺会あずかりとなり、今は遠征基金の一部になっている。受取る筋じゃない、といって、現金封筒が何度も彼との間を往復したなどの例もしばしばであった。

すべての仲間は、植村に押し切られた。金銭にかこつけた協力は、たとえ仲間の他意のないものから出たとしても、決して彼は受けとらなかった。自分が好きで、道楽でやっているのだから、自分の働いた分でやっていく、他人さまには迷惑をかけない、というのが、彼の哲学、頑固な美学であった。

奥さんは、実によく見ている。

〝だけどねー、一〇〇円は受取らないけど、一〇〇〇万は受取るのよ、これどういうことですかねー〟と笑いこけた。

また、団体、グループで登る山は、悦び、満足感が少ないことも痛烈に感じていた。やはり、ひとりで準備し、働いた金でやった山行は、一〇〇%自分のもの、すべて満足、ということを体験して知っていた。

南米に渡って、その最高峯のアコンカグア単独登頂に至るまでのいきさつ。警察でのゼスチャー入りの説得、実に彼の面目躍如たるものがあります。そして、アマゾン河六〇〇〇㍍のいかだでの河下り。僅か四〇〇㍍の飛行機賃の節約が引き金になったとはいえ、その発想は常人の及ぶところではない。

ここで彼の四人の同期の仲間を忘れることは出来ない。小林、広江、中出水、原田。特にゴキブリこと小林正尚は常にフレンドリーライバルとして、植村の目の上にあった。就職口のないこともあったが、小林が一足先きにアラスカ見物をやり、氷河やマッキンリー

や外国の話しなどを吹きまくることに対抗して、おれもなんとか外国へ行き、アルプスを登りたい、氷河を見たい、というのが発端だった。そんなことから始まった四年五ヵ月の旅を終えて、彼が知ったのは、交通事故による小林の死亡であった。彼は大きなショックを受けた。

第二の節目

一九六八年から一九七九年までの一〇年間。二十八歳～三十七歳まで。内容も充実。エベレストの山頂から、北極点到達、グリーンランド縦断。そして結婚。まさに彼の黄金時代といえよう。

この時期の特徴は、エベレストの登頂を終え、前後四回のエベレストを通じ、はっきりと次の新しい目標、南極を目指して、いわば垂直から水平への転換であった。

それともう一つ。単独行がより徹底していき、ジャーナリズムの注目を浴びていくことである。そうした植村がエベレストのメンバーに選ばれたのもまた一つのめぐりあいの運であろう。

もし、彼が一九六八年十月帰国しなかったら、小林が事故死しなかったら、ネパールのヒマラヤ登山禁止の解除が少しずれたら、などいろいろあるが、いずれにしても彼の海外修業のキャリアは文句なしに第一人者であった。

エベレストは、ディレンファースの国際隊を含め、通算四度経験し、日本では初登頂者となって、脚光を浴びるようになり、彼をとまどわせる。同行の隊員たちからは、アニマル植村のニックネームを賜る。物凄いバイタリティ、そこからくる余裕、それに彼の性格がプラスして他人への気配りと、面倒見のよさ。本当に仲間として、これほど安心感、頼りになる奴はいない。もちろん誰からも愛され、好かれた。

しかし、彼は、日本隊の登頂者となっても、それほど満足感を得られなかった。ましてや、国際隊のむき出しの人間のエゴ、空中分解していく人間の集団、そんなものを体験して、自分の新しい目標へと具体的に踏み出す。

南極犬橇横断、このため犬橇と極地生活の体験。こういう一連の段階を経たトレーニングを考え、こなしていくには、必然的に単独行となっていった。志向も、行動パターンも、植村と同行出来る者はいなかった。彼のほうも、仲間や同行の士を求めなかった。何者かに追われるように、息つく間もなく、という感じで次から次へと計画を推し進めていった。

極地でひとりで活動出来る年齢の限界もそれなりに考えていたのだろうが、〝もう少し、息抜き、手抜きが出来たらな……〟とは、奥さんの、結婚一〇年、正味五年の、伴侶としての偽らない心情だろう。

特にTV、新聞の報道により、冒険家植村直己は、登山家を超え、世界の植村となっていく。特に北極圏一万二〇〇〇㌔の犬橇成功は、北欧諸国に高い評価を得る。

『極北に駆ける』『北極圏一万二千キロ』の二冊の著書、彼の撮影による8㍉のTV番組は、いままでにない、彼の個性を描き出した傑作である。

新人の白馬合宿山行で、体力の極限の中でブッ倒れた彼は、一〇年後、最も過酷な自然の極限状況の中に身を置きながら、新しいも

のを追い求めつづけた。その姿に強く感銘した草野心平氏は歴程賞を彼に授ける。彼の行為に壮大なロマンと詩情を、人々に勇気と希望を与えるものとして。

これまでの彼は、印税や、TVのカメラ取材料などで経費はまかなうことが出来、手づくりの、自分の手に負える範囲の計画として、自身、十分に犬橇旅行やエスキモーとの交流を楽しんでいた。しかし、南極への壁は、高く、厚く、米国の許可をとりつけることも出来ない。

北極圏一万二〇〇〇㌔の走破は、その経験、距離からして南極大陸横断三〇〇〇㌔を十分カバー出来るものと思われるが、それ以上に、植村直己の自己PRを米国の南極関係者に知らしめる隠れた意図もあった。

これでもまだなら、もう一度その前に北極点をやろう。返す刃でグリーンランドも北から横断する、と。

海氷上の北極点は、補給なしの往路九〇〇㌔だ。どうしても空輸のサポートを受けなければだめだ。単独犬橇の弱点をカバーすべく、安全性を高めると、空からのサポートと、無線連絡を強化しなければならない。いままでにこんな強固な支援態勢と組織を作ったことはなかった。宇宙からは人工衛星ニンバスが電波をキャッチ、それをNASAからBCへ。ナショナル・ジェオグラフィック社も後援してくれた。

これまではエスキモーの部落から部落をつなぐのは陸軍だったが、今度は海軍だぞ、と言った西堀さんのアドバイスは当を得ていた。億を超す巨額の経費は、広告代理店が一手に引き受けてくれた。植村にとって、有難いことであったが、暗く、心を悩ませる事態でもあった。全国のファンから寄せられた一〇〇〇円募金ほど、彼の心をしめつけ、焦燥に追い立てたものはなかった。

出発寸前の発狂状態に近い彼を見ると、こういう騒ぎは彼に向かないことがよくわかった。そして彼自身、以降の南極の計画の進め方、とくにスポンサーについて貴重な体験をする。

第三の節目

一九七九年から一九八四年まで。不運の時代ともいうべきもので、失敗、断念の連続であった。

イギリス（スポーツ勇敢賞、バーラー・イン・スポーツ）、アメリカ（アメリカン・アカデミー・オブ・アチーブメント）からそれぞれ表賞された。もちろん一連の犬橇走破の計画からだ。しかし、これでも南極の許可は、とくにアメリカは、よく分るが、科学的な意味が一つもないといって、掌る科学庁は受け入れてくれない。植村は、ケネディ上院議員、マンスフィールド駐日大使などあらゆる関係者を訪ね、その協力を求め、みんな快く動いてくれたが、それでも南極は遠かったのだ。

一九七九年、折りしも母校明治大学創立百周年記念を二年後に迎え、炉辺会はエベレスト登山計画の最終段階に入っていた。植村は、何人も試みたことのない最も厳しい冬のシーズンに登山する計画をたてた。

植村の'81冬から、引きつづいて明大春の西稜という、実にダイナミックな計画である。ここでも植村らしい進め方が見受けられる。日本の夏（'80〈七～八〉月）にアコンカグアで（厳冬期）トレーニ

ング登山をアルゼンチンの陸軍を捲き込んでやっている。次の南極基地協力の下工作でもあった。すべてがこんな具合である。しかし、冬のエベレストは彼に微笑んでくれなかった。厳しい寒気と烈風は遂に八〇〇〇㍍で断念、その上、竹中隊員の遭難死亡という掛替えのない代償を負ってしまった。

植村の受けたショックは想像を越えたものがあった。初めて隊長として、五度目のエベレスト、気力、体力十分であったが、全く猛威の天候には勝てなかった。常に、山で死んではならない、冒険とは生きて帰ることであると公言した彼にとって、痛恨の一事であった。

前年、ポーランド隊が冬の初登頂に成功しているのを見ると、彼はツイていない、不運だったとしかいえない。

長年の南極の夢が実現の段階に近づいた。アルゼンチン軍の協力を得てサンマルチン基地に入り、空軍の支援を受けて、大陸横断の犬橇走破と、最高峰のビンソン・マシフ峰（五一四〇㍍）の登頂の手はずが整った。'82年二月から一年間、基地での越冬生活と、犬橇の訓練をしながら、満を持していたところ、あのフォークランド紛争が起った。軍にとっては南極どころではなかった。空軍の支援は得られなくなり、彼は計画を断念せざるを得なかった。

基地から一歩も出ぬうちに断念とは、彼の無念や推して知るべしである。TVにアップに映された彼の顔、目を閉じ、口を一文字に固く結んでいる無念の表情は忘れることが出来ない。

一体、植村にとって南極とは何なのであろうか。北極圏一万二〇〇〇㌔を走破し、北極点、グリーンランドを完了した現在においても、なお南極の厳しい自然、極限状況に挑むものがあったのであろうか。彼には、それなりの成算があったと思われるが、紛争のぼっ発までは計算になかったのだ。まことに不運といわざるを得ない。

私は、フォークランド紛争による計画の断念は、天の啓示だという見方をしていた。ここでもう一度、原点に戻り、じっくりやり直すいいチャンスだと思っていたが、彼と突込んだ話をすることも出来ず、悔まれるところである。

帰国後のパーティの席上、あいさつに立った彼は、〝貴重な体験を生かし、再起を計りたい……〟と言っていた。お世話になった方方を前にして、これ以上、何という挨拶の仕方があるだろうか。パーティの隅でこれを聞いて、〝ああ、何という切ないことであろうか〟と彼の心情を思いやったことが忘れられない。

ミネソタの野外学校と冬のマッキンリーについては、どちらが主体だか、はっきり私にはわからない。

夏、インドのIMFに招かれたとき、冬のマッキンリーを登りたいというような話をしていたということを奥さんから聞いたが、それが真意とすれば、ミネソタはそのトレーニングともいえるが、はっきりはしない。また彼の十勝山麓での青少年向けの野外学校の構想についても、よき理解者である帯広市長との話の段階であったとしても、次の段階で手がける彼の仕事としては、またとないふさわしいものだと思われる。それも、これも含めてミネソタのアウト・ウオードバンド・スクールに参加ということは当を得たものといえよう。彼のいままでの行動パターンからすれば、すべて事前の訓

練、準備という意味があるものと思える。

マッキンリーは、以前夏に一度、単独で七日間で登っているので、安易な気持があったのでは、という批判もあるようだ。バニーブーツ（耐寒用の空気入りゴム靴）のアイゼンが外れて、それが原因となって、バットレスをスリップしたのではとか、事件当初、いろいろな憶測が報道されたが、どれも当を得たものとは思えない。日本人の中で、彼ほど極地の厳しい体験を永く積んだ者は他にいないし、冬のマッキンリーの凄さは、十分予測していたと思う。

彼の準備した莫大な装具類、食糧としてのカリブーの生肉、雪洞の利用など、そこには慎重さが滲み出ている。

私たち、明大山岳部炉辺会は全力をあげて、彼の足跡を捜索したが、残念ながら、彼を発見することが出来なかった。

そこには、ただただ驚嘆すべき忍耐力と、ファイトの足跡が、氷河に、雪洞に、そして絶頂に残されていた。

残された四つの物的証拠は、

一、四二〇〇㍍カヒルトナ氷河上の雪洞に日記他。この日記は読みとり方が重要なポイントである。

二、五二〇〇㍍のA・Cの雪洞に残された多くの装具類。

三、頂上に残された杭にしっかり結ばれた日の丸と星条旗。

四、二月十三日、十一時頃、TV朝日の取材機と交信されたテープに残された記録の内容と声。

これらから綜合判断して、彼は、自分の山行を行なっているということが一目瞭然です。デナリ・パスから頂上まで、少し時間がかかり過ぎている点はあるが、全く手に負えない山頂を目指して、一か八か突込んだ、というものではない。登頂後どうなるかは十分に計算した上で、慎重に行動したに違いない。

現地を調査し、頂上まで彼の足跡を検分した上で、上記の証拠から推して、彼の行方不明は、突然の天候異変、人力の遥かに及ばない大きな力が襲いかかったものと思われる。

地元のタルキートナでは、二月十四、十五日の両日、物凄い風が吹きまくり、マッキンリー山頂も烈風の雲の中にあったという。交信テープから聞こえる彼の声は、しっかりしていて、いつもの調子で、チットもへこたれているようには聴きとれなかった。

「……きのう午後七時一〇分前、登頂いたしました。……エエ…ビバークしまして…今朝一〇時出発して……現在地点は、二万フィート、二万フィート……」

彼の暖いやさしい笑顔と共に、あの声はいまでも私達の中に生きつづけている。

略年譜

一九四一年二月十二日、兵庫県城崎郡日高町上郷生まれ。父は藤次郎、母は梅、七人兄弟（兄四人、姉二人）の末子。

一九五九年三月、県立豊岡高校卒業。

一九六一年四月、明治大学農学部農産製造科入学、体育会山岳部入部。一九六四年同校卒業。同年五月、アルゼンチナ丸にて渡米、同年十二月からフランス、モルジーヌのスキー場（ジャン・ヴュアルネ氏経営）に三年間滞在。

一九六五年五月（二十四歳）、ゴジュンバカン明大遠征隊に参加、初登頂。同年七月、モン・ブラン単独登頂。同七月、マッターホルン、同十月、キリマンジャロ、ケニアに登頂。十二月、南米に向かう。

一九六八年一月、アンデス・エルプラタ峰（六五〇三㍍）、同二月アコンカグア（六九六〇㍍）、無名峰（五七〇〇㍍）に単独登頂、四月、アマゾン河六〇〇〇㌔単独いかだ下降、同九月、アラスカ・サンフォード峰（四九五二㍍）単独登頂。同十月帰国。

一九六九年四月、日本山岳会エベレスト第一次偵察隊、同八月第二次偵察隊、八〇〇〇㍍まで試登。十一月～翌七〇年二月、山麓にて越冬、トレーニングと準備。

一九七〇年（二十九歳）五月、エベレスト日本人初登頂、八月、マッキンリー単独初登頂。この登頂により五大陸の最高峰を登り終える。

一九七一年一月、グランド・ジョラス北壁を山岳同志会と登る。エベレスト南西壁へのトレーニング。二月、国際登山隊に参加、エベレスト南西壁を八二〇〇㍍まで登る。同年九月、徒歩による日本縦断三〇〇〇㌔、52日間（南極大陸計画と同じ距離）。

一九七二年一～二月、南極大陸調査（フィシニナー棚氷アルゼンチン基地）。同年九月から翌年六月、グリーンランド北西チューレ地区シオテバルク、エスキモー部落滞在。犬ゾリを中心に三〇〇〇㌔走橇の訓練。一九七三年七月帰国。

一九七四年（三十三歳）二～五月、ダウラギリ五峰偵察明大登山隊。同年五月、野崎公子と結婚。十二月、北極圏一万二〇〇〇㌔踏破計画に出発。

一九七五年六～十一月、カナダ・ケンブリッジ・ベイで越夏。同十二月出発。

一九七五年七月、第13回歴程賞受賞。足かけ三年、実走行三一三日の単独犬橇行を完了。

一九七六年七月、エルブルーズ（五六三三㍍）登頂。

一九七七年四月、北極点行のため偵察と準備、カナダ領リゾリュート。

一九七八年一月～八月、コロンビア岬から犬橇による単独北極点到達。引きつづいてグリーンランド初縦断。同年九月、母、梅死去（享年七十八歳）。同年十一月、第26回菊池寛賞受賞。

一九七八年二月、イギリスのバラー・イン・スポーツ賞受賞。同年十二月、冬のエベレスト登山のため気象偵察。

一九八〇年（三十九歳）七～八月、アコンカグア厳冬期登山、エベレスト冬期登山の訓練。同年十月～翌年一月、エベレスト冬期登山隊隊長として挑戦するも八〇〇〇㍍で断念。竹中隊員遭難死亡。

一九八四年（四十三歳）二月、マッキンリー厳冬期単独登頂。成功の交信を最後に下山中消息を絶つ。同年四月、国民栄誉賞受賞、明治大学名誉博士受賞。

著書『青春を山に賭けて』『極北に駆ける』『北極圏一万二千キロ』『北極点グリーンランド単独行』『エベレストを越えて』

（大塚博美）

片山全平氏（一九二五～一九八四）

片山全平さんが五十九年十一月三日、冠状動脈硬化症のため急逝された。まだ五十八歳の若さだ。そのとき私は海外にいて、夢にも知らなかった。数日後帰国してそのことを知り、強いショックをうけた。長く親しいつき合いで、尊敬する先輩であり、兄貴分だったからだ。

全平さん（親しい仲間はみんなこう呼んだ）とはじめて出会ったのは終戦の翌二十一年の春だった。私が関西学院大学予科に入学

し、山岳部に入部したとき、一年先輩の部員であった。当時の上級生の部員のほとんどが学徒動員からもどった復員軍人で、恐ろしく軍隊調できびしく、後輩がなぐられるのは日常茶飯事だった。そんななかで、色白で温厚な全平さんはいつも私の味方であり、仏様のような存在に思えた。

個人的に登山技術の指導もしてくれた。部の合宿以外に二人だけで入山したことも何度かあった。一月の大山（鳥取県）の北壁登はんのときは、頂上稜線直下の雪面をトラバース中に表層雪崩を誘発し、二人とも流されそうになった。「ピッケルを打ちこめ」と叫ぶ全平さんの声で、運よく停止することができた。全平さんはすぐに撤退をきめ、夏道にう回して下山し、元谷に出ると、雪崩のデブリがうず高く押し出していた。表層雪崩が下では底雪崩をひき起しているのを知って、ゾッとしたものだ。その夜テントの中で反省しあったとき、彼の次兄が北大山岳部に在籍中、ペテガリ岳で雪崩のため遭難死したこと、長兄は戦死し、弟さんは六歳で病死したことを知った。

二十四年三月、関学山岳会が後立山連峰極地法登山を実施したとき、私は天狗コルの雪洞から全平さんとN先輩の二人のアタックメンバーを送り出した。悪天候つづきで予定が大幅に遅れたため、アタック隊はビバーク態勢で不帰の峰、五竜岳を越えて鹿島槍をラッシュで往復する計画だった。天狗コルの雪洞には三人が待機していた。いまのようにトランシーバーを持っていなかったから、二人の行動がさっぱり不明だ。一週間たっても十日を過ぎても帰って来ない。私たちは極度に節食して食い延ばしをはじめた。遭難したのではないかと思いながらも、無事の帰着を待った。とうとう二週間が過ぎ、こちらも限界に近かったので、久しぶりの晴天をつかんで梅池へと脱出した。そこで知ったのだが、N先輩がビバーク中に手足を凍傷にやられ、やむなく二人は鹿島村に下山していたのだった。全平さんが「すまん、ゆるしてくれ」と頭を下げたのが、印象深い思い出となった。

全平さんは内に秘めた闘志とねばり強さ、くらいついたら離さない強い根性の持ち主でありながら、その反面人なつこくて素朴なところがあり、周囲から人気があった。

全平さんは二十五年、大学英文科を卒業して、郷里の岡山県津山市で中学の英語教師をしていた。同じ英文科に進んだ私は、夏休みに卒論のことで津山へ相談に出かけた。私の顔を見るなり、「これを引き継いでやってくれ。私も手伝うから」と、数多くの文献を手渡された。彼が卒論のテーマに決めておきながら、教授の指導で別のテーマに変更したためだ。私は喜んでそのテーマを引き継ぎ、全平さんの家に泊りこんで書きはじめた。彼は付きっきりで親切に指導してくれた。英文で書くのが苦手だったので、まったく大助かりだった。おかげで私の卒論は優秀な成績となり、無事卒業できたのだから、全平さんには心から感謝している。二十六年、私はひと足先に朝日新聞社に入社した。

休暇をとって全平さんの家を訪ねたとき、彼が新聞記者になりたいという強い念願を抱いていることを知った。家業の飼料問屋を母親と妹さんとともに営みながら、中学教師をしていたのだ。しかし長兄の子息が大学に進み、やがて家も仕事もその甥が後継ぎをする

ことになっているので、全平さんは家を出る決心をしたのだという。私はさっそく父九三に進言した。幸い、西部本社の運動部に欠員があったため、父の推薦で二十七年春、朝日新聞に入社し、西部本社の運動部記者となった。私は卒論の恩返しができたと思った。

三十年、朝日新聞東京本社内に南極学術探検事務局が設置され、父が顧問として大阪から東京に移ると、全平さんを引っぱって事務局員にした。この頃から私の両親は全平さんを息子のようにかわいがり、私がうらやましく思うほどであった。南極事務局が解散すると、そのまま東京本社運動部員になった。

全平さんのその後の活躍は朝日新聞紙上の記事、山岳関係の雑誌などの数多い文章などで周知の通りだ。

四十四年、全平さんは一人でエベレスト山行を計画し、三月に出かけた。期せずして日本山岳会の第一次偵察隊と合流し、その幅広い取材が紙面を飾った。全平さんはその翌年もエベレストに向かい、日本山岳会のエベレスト登頂だけでなく、ネパールの山と人についてもユニークな報道をした。これらのことに次兄の遭難（十五年一月）、大山での仲間の遭難死（二十七年冬）などの話を書き加えて、『ヒマラヤ取材記』（五十三年七月、スキージャーナル社刊）を出版した。全平さんのような文筆家の著書が、この一冊だけとは誰もが信じられないことだろう。

彼は勉強家であり、読書家だから、書く文章も明快で理解しやすい。新聞記者という立場から山岳関係の情報にくわしく、そのうえ英語に強いから、日本山岳会の会報「山」にも「海外の山」を長期間にわたって連載してきた。適任者を失った日本山岳会にとっても痛手にちがいない。

全平さんは山以外にも、テニス記者として名をなしていた。これらスポーツを通じて著名な人との親交関係も広く、また若い後輩たちの面倒見の良いことでも定評があった。ただ一つ惜しまれるのは、大好きな酒に体をむしばまれたことだ。若くして惜しい命を散らしたものだ。御冥福を祈ります。

（藤木高嶺）

＊

全平さんを知る者のひとりとして、その散りぎわが実にドラマチックであったことに並々ならぬ感動を覚えるのである。全平さんは永くスポーツ記者として朝日新聞に籍を置き、やがて停年を迎えられた。その後も、望まれて嘱託として残り、深い知識と筆力で紙面を飾る数年があった。その期限も五十九歳の誕生日には切れる。その前の日、朝日新聞本社に挨拶に出かけ、ひとり別れの盃を傾け、社のソファに眠り、まるで生命の糸が切れるようにこと果てたときく。いかにも酒のお好きな全平さんらしい。男冥利に尽きる死に方ではなかったかと一面羨ましい気にさえさせられた。全平さんは山の記者として、大きな存在だった。テニスにも健筆をふるわれた。「瓢々としていて野武士のようだった」と評した人がいる。どちらかというと本流から離れ、骨太に、しかも、しつこく登山を見つめる記者としての全平さんの姿であったかと思う。ペンを持った全平さんは、瓢々としている半面で、研ぎすまされた感性の剣をキラリと光らせ、不思議な光彩を放っていた。

朝日新聞という枠を離れて、六九年と七〇年にたて続けにネパー

ルに乗りこんだことがあった。エベレスト・レンジでさまざまなビッグ・クライムが展開された時期であった。記者としての登山観を集大成させる、最も生命の灯を燃焼させたときだったと私は思う。それは自らの精神世界に遊ぶ、自由な旅でもあった。

その後半、全平さんを知る仲間全員が最も危惧していたアル中を再発し、カトマンズで人事不省に陥ったと聞く。しかし驚いたことに、帰国間もなく『ヒマラヤ取材記』というかなりのボリウムの本が上梓された。山と人と片山さん自身を語る中味の濃い作品に接して「さすが！」と目を丸くしたものである。

記者・片山さんと早稲田のつきあいは三十年に及ぶ。私たち早稲田の仲間は「ゼンペイさん」と気やすく呼んでいた。十歳も年齢のちがう私も、である。何時のころからか、ゼンペイが「センペイ」に変化していった。それは酔って呼ぶのに呼びやすく、いかにも片山さんにふさわしい響きがあった。出身大学とは関係なく、全平さんは私たちの心の仲間であった。山登りを支援してくれた。

全平さんは美作、津山出身、三男坊だった。津山盆地を縁どる那岐山を見ながら育った。私も冬の伯耆大山に登るときに寄ったことがあるが、津山城の石垣がまるで龍宮城のように浮んで見える素朴な美しい街である。早く逝った長兄卓一さんが片山家に登山をもたらした。次の兄の純吉さんは昭和十五年の北大ペテガリ岳雪崩遭難の犠牲者の一人である。同級生にその時の生き残り橋本誠二さん（ヤンチョ）がいらっしゃる。純吉兄の大きな影響を受けて、全平さんは関西学院に進み、山岳部に入る。後輩に藤木高嶺さんがいた。その頃の心境（二人の兄を失くし、また弟と父を失くし、男は自分一人きりになっていた）を全平さんは「自然の偉大さが自分と隣合わせにいる死を打ち消してくれそうな気がした」と記している。

卒業後、戦後の混乱期に母校、津山高校で英語の教鞭をとったこともあったが、昭和二十七年、朝日新聞の記者になった。藤木九三さんに推されたと聞く。面倒みがよく、ズク（根気）があり、どんな会合にも進んで出席された。人と酒をこよなく愛した。愛さずにはおかないという生き方を貫いた人であった。大自然を畏敬する心と交錯して人情に触れていたいという淋しがり屋の一面が覗いていたようにも思う。

何年か前、永く北海道でトンネルを掘っていた私の同僚が帰ってきたことがあった。その男は全平さんと同郷ということもあり、全平さんに電話をかけると一も二もなく酒宴の日どりが決ったものだ。横浜の関内で待ち合せたら、すでに全平さんは来ていて、しょんぼりと私たちを迎えてくれた。なにか淋しそうで、手持ちぶさたの感じが、私らを待つ姿にあった。声をかけると、表情が笑った。とてもうれしそうにみえた。

私たちは老酒を飲ったが、全平さんはジャスミンティで中華料理を啄んだ。申訳けないとは思うのだが、全平さんは飲りはじめたら歯止めがきかなくなることを本人も私たちもよく知っているのだ。さりとて私たちが飲らなければ座が白けてしまう。気遣いながらもいつもと変りないペースで酒宴は進んでいった。その夜の全平さんは飲らないだけに話はまともで、能弁だった。専らヒマラヤの話だった。全平さんの表情はまるで酒を少し入れたように紅潮し、目は

光っていた。それは少年の目であった。ローツェ・シャール、エベレスト、K2と話は尽きず、今後の高峰登山のあり方、タクティックス、自己管理、新しい登法などが話題になった。

兄純吉さんの遭難死が生涯ずっと尾を引くようにつきまとっていたのだろうか。山での死の謎解きは全平さんの最大の関心事であったようだ。ローツェ・シャールで十中八九死んでいた私に関心を寄せる気持がよくわかるようであった。

「肉体は着がえのきく着物にすぎない」というシェルパの死生観について話合ったことがあった。これはラマ教（チベット仏教）の極楽浄土への帰巣、生死の輪廻を裏づける思想に他ならない。山にこだわりつづけた全平さんのことだ。霊魂は、どこかに瓢々と漂いつづけ、ある時忽然と現われてくるように思えてならない。

（村井　葵）

略歴

大正十四年十一月四日、岡山県津山市生まれ。県立津山中学校卒、関西学院大学理工専門部入学。途中新制大学に編入し、昭和二十五年三月、関西学院大学英文科卒。在学中は山岳部に所属、主に後立山連峰に取組み、鹿島槍北壁中央ルンゼの登攀がある。

昭和二十五年四月、津山南中学で英語教師となる。同二十七年四月、朝日新聞社入社、西部本社運動部、社会部、出版編集課などに在籍。

昭和二十九年結婚。仗恵夫人（大阪女学院で英語の教師をしていた徳おばの教え子）との間に一男二女がある。

昭和三十年十月、南極学術探検事務局員。同三十三年から朝日新聞東京本社運動部記者。

昭和五十九年十一月四日歿。

昭和五十年より日本山岳会会報編集委員。

日本山岳会入会、昭和四十一年十二月、会員番号三九九七。

山崎安治氏（一九一九～一九八五）

山崎安治君を悼む

山崎安治君が早稲田大学山岳部の計画に初めて顔を出すのは、昭和十五年春の明神岳東稜から前穂高を経て奥穂高岳を往復する計画である。そのころ部員は五十名近くもいたが、彼は学院を代表するような形で、若くして逝った佐野和男君と組んで、第二登攀隊に抜擢されている。

普段のトレーニングにおいても、ルートの選択の確実さ、バランスのよさの上に、退却することを知らぬ闘志の持主であった。次の大きな計画は第二次冠帽峰であるが、この計画は実は北海道のペテガリ岳に向かうのを、ある配慮から中止し、急に転向したものだけに、ただ寒い長い尾根を歩くだけで目新しい収穫もなく、山崎君には多少の不満も残ったようだ。彼自身がリーダーシップを発揮したのは、昭和十七年春に行なわれた横尾尾根から奥穂高までの計画であった。計画から行動まですべての中心的な存在であった。その後はもう山登りが自由に行なえる情勢ではなかった。早大山岳部もまだ解決しなければならない多くの問題を残して活動を停止した。

戦争は多くのものを失い、人間を傷つけた。復員したとき、山崎

君は相当体を害していたようだった。創立間もない日刊スポーツ社に入る。銀座の焼跡ビルにあった。私の焼け残ったアパートによく集まっては、あやしい酒を飲んだ。やはり胸を侵されていたのである。横浜戸塚の国立病院で手術を受け療養生活に入った。

この長かった療養生活が、後の登山史家山崎安治君を生むのである。彼の第一著作である『穂高星夜』のあとがきに「折にふれ新聞や山の雑誌に発表したものをまとめて上梓した。大部分は筆者が病気静養中にメモしておいたノートに基いている。早いもので横浜の国立病院に入院したのはもう足かけ六年も前のことになったが、その一年半にわたる病院生活は筆者に『山』というものを再び心の中に甦らせてくれるまたとないチャンスを与えてくれた。そしてそれは筆者が念願とする日本における近代登山史の研究に再び火をともす結果ともなった。」

自分自身ではもう山登りらしい山登りをすることができなくなった彼にとって、文献による頭脳の登山が始まったのである。『穂高星夜』から十年後の昭和四十二年に出版された『山の序曲』のあとがきを読むと、次第に目標を鮮明にした日本登山史へのアプローチがうかがえる。

「日本人の登山はいまや世界的なレヴェルに達したといえるのだが、ひるがえって自分たちの足もとを見つめると、そう喜んでばかりはいられない。日本山岳会が生れて僅か六十年余りにすぎない登山の歴史についてすら不明な点が実に多い。こうした不鮮明な部分を一つ一つ明かにすることは、実に大変な仕事であると最近やっと遅まきながらも気付いたのだが、しかし曲がりなりにもこれを明らかにできる時点は、いまきりないのだということも身にしみて感じている」

日本登山史をつくる時点はいまきりない、時機を逸すれば資料は失われる。やるのはいまだ、やるのは俺だという気慨が読みとれる。資料集めが始まった。毎週神田の古書展には、彼の姿が常に見られた。実に丹念に部報、会報の類を漁っていた。戦後すぐ建った団地のアパートでは本の上に寝るしかないのだろうと仲間は語り合ったものである。

登山史というからには、その中にある史観がなければならないと思う。日本には江戸時代から富士山、白山、相模大山などに信仰を対象にした登山があり、日本アルプスの槍ヶ岳にしても文政時代の登山記録が残っているという。後の登山そのものを目的とする山とどう結び付けるのか、ただ年代的に、或いは地域ごとに記された内容を羅列するだけでは登山史としては骨格が弱いような気がする。特に日本の場合は、最高峰富士山についてどう取扱ったらよいかの問題が残る。

ヨーロッパ・アルプスのマッターホーン或いはエヴェレストに比するような劇的な登山の歴史がない富士山である。相当昔から登られていたに相違ない。富士山の歴史に関する本はあるが、その登山史は甚だ不透明である。富士山を欠く日本登山史は初めから臍のない登山史になりかねない。

もう一つの私の危惧は、登山は大体他人の見ていない地点で行なわれる場合が多い。その行動を当事者が記すわけである。ゲームのあるスポーツの場合は、記録は公認された記録員が行なう。登山の

場合、大学山岳部の部報、各種山岳団体の発行する会報の類は夥しい数にのぼる。この内容をそのまま信用できるものか。

例えば嘗ての日本登山史の中で、極めて劇的に取扱われた槍ヶ岳北鎌尾根の初登攀の物語り、早稲田と学習院の二つの隊の競争ということになっていた。学習院は名ガイド喜作を伴い、それに対し早稲田はガイドなしの隊であった。早稲田の部報には次のような文章が残っている。「案内者により導かれ来る一行にこの山稜の栄誉を断然明け渡さないことを誓い合った」と大変勇ましいが、実はこの山稜がそれよりずっと前に既に登られていたことを、山崎君は見出すのである。『穂高星夜』に詳しく述べられており、彼自身日本登山史を正確に書き直す責任を感じた一つの原点でもあった。

記述の正確さということに関しては、私にはショッキングな印象が残っている。毎年初夏に行なわれている日本山岳会の関談会、まだ六義園で行なわれていた時である。会の創立者の最後の生存者、武田久吉氏がまだ健在であった。酒の勢いも手伝って恰も先生の独演会の趣があった。創立者の一人、小島烏水氏に言及されて、「小島君は登りもしない山を登ったように書くから……」誠に驚愕に値する内輪話になった。

武田さんの話を信ずるとしても、文学者として令名の高かった烏水氏が、一つの文学を完成させるための表現であったかもしれない。

山崎君の何番目かの著書である『登山史の発掘』の出版記念会の折、登山界にも他のスポーツ団体にある記録を公認する機関が必要なのではないか、山崎君こそそういう機関のメンバーになって貰えないものかという内容を私は喋った。

山崎君は集めた部報、会報をただ本棚に並べておくだけではなく、実に入念に読んでいた。彼があれほどの記憶力の持主であることは恥しいがずっと後になって気づいたのである。

準備は努力と時間とをかけて調ってきた。ライフ・ワークと定めた『日本登山史』の執筆にとりかかったわけだ。永く勤めた日刊スポーツ社も完全に退職し、執筆三昧の生活に入った。今年六十年の年賀状には「痛風で遠出ができず失礼している」と書かれているだけで、三カ月の後にこの世を去っていく気配など、どこにも感じられなかった。

残った原稿は二百字詰で二千枚を越しているという。それでも昭和十年までの日本登山史で、完成までにはあとまだ何百枚かの原稿が必要だった。

山崎君の仕事の最も深い理解者であり、長い間激励してこられた島田巽氏は『登山史の周辺』の付録で「山崎君のライフ・ワークである完璧な日本登山史の新版の成る日を待望している」と結んでおられる。多くの登山に関心をもつ人々も同じ気持でいただろう。

養生を旨とするような男ではなかった。最後は痛風に悩んだが、満身創痍の体であった。八〇%はやりたいことはやったとは思うが、まだ完成までの余力はあることは信じていた。最後の灯火は多くの友人の願いを裏切って、あっさり消え去った。

（関根吉郎）

＊

山崎安治さんの仕事

この冬は雪折れが目立った。夜半にきこえてくるその響きは、実

に不気味で、哀しいおもいをおこさせる。

昨年の大雪とちがって、多量の湿気をふくんだそれは、陽がさせばすぐ消えてしまうようなものだったが、ときとして一夜のドカ雪は樹木に重くのしかかってしまう。楢も松も桃もその重さに耐えきれず、多くの枝が折られた。ことに二月二十日の朝、雨戸をあけてみると、青々とした竹林の太い竹までが弧を描いて倒れていた。「雪折れ竹に本来の面目を悟る」（近松）という言葉があるが、この自然のかたちにあらためて眼をみはるおもいがしたのである。

山崎さんの闘病生活は、このような冬のさなかであった。北里研究所付属病院に入院した直後、河村栄二先生は電話で簡単に病状をつたえてくださったが、それはお別れにいらっしゃいということだった。山崎さんは新版『日本登山史』の原稿一〇六一枚、正確にいうと二百字詰用紙で二一二枚、第六章「アルピニズムの勃興」の「厳冬期の登山」までを書き上げ、中断したまま入院したのだが、河村先生によると、昭和五十三年夏の入院のときとちがって本も資料ももたずに来られたという。自身の病状を知って覚悟をきめておられたのだろうか。寝ても醒めても登山史一筋であった山崎さんにしては、いともあっさりとそれを抛棄してしまったかたちである。前回は山本良三君の懇切なはからいで一命をとりとめたが、今度ばかりは様子がちがっていた。

私が最後にお目にかかったのは三月一日のこと、夕刻の一時間ほど病室にいたが、登山史の仕事、日本山岳会の将来のこと、そして仲間たちのことなどについて、冷静に話しておられた。こと登山史の話になると、平常とかわらぬ記憶力がよみがえってきて、あれこれと話題がひろがり、そのあげくはこちらが励まされるというぐあいであった。見舞いに行った友人たちの話を綜合すると、それは遺言とうけとれるものばかりである。おのれの死を予感しつつ、それとなく別れを告げるつもりだったのであろうか。しかし、もう何もする気がない、書こうとする気力がなくなったよと言われたのは、痛々しかった。半身をおこして水呑みの吸い口に口をつけるが、すぐはなしてしまう。これ、咽喉にとおらないんだ。奈落の底におちてゆくようだ。そう言って身を横たえるのであった。病魔は山崎さんをそこまで追いつめていたのである。

三月十一日（月曜日）の朝、勝沼発八時七分の電車で東京へ出るため、私は七時五十分に山を下った。前々日、甲府で山村正光氏の出版記念会がひらかれ、その夜は、節田重節、近藤辰郎、大森久雄、古谷聖司、松沢節夫、泉久恵の六君がわが家に泊まったのだが、会の発起人のひとりであった山崎さんの病状が心配で、しばしばその話が出た。十一日は私の誕生日だが、家を出てからもなんとなく気がかりで、立川駅での乗換えのあいまにまだ山小屋に残っている泉さんと家人に電話をしてみると、ちょうど私が山を下った七時五十分に、山崎さんは息をひきとったという。河村先生から、つづいて山本良三君から連絡がはいったというのだ。いつかはこの日に立ち会わねばならぬと覚悟はしていたものの、こんなにも早く遭遇しようとはおもわなかった。入院なさってから一カ月のあいだ、山崎さんが御自分の仕事をつねに念頭におきつつ、沈着に迫りくる死と闘っていたことを考えると、あの「雪折れ竹」に感じたのとおなじ哀惜の念に駆られるのであった。

桐ヶ谷葬祭場でおこなわれた葬儀（三月十三日）のとき、関根吉郎先生は弔辞のなかで、早大山岳部時代の山崎さんのリーダーシップぶりを語りながら、戦場におもむいた仲間たち、還らなかった仲間たちのことを述べておられた。そして「山崎君も私も片輪の身になって生きながらえた」という言葉を耳にしたとき、たいへん胸にせまるものがあった。その日、司式進行の役をつとめていた私は、関根先生の切々たるお声をきいて、山崎さんが昭和の激動期にあってひたすら山に精進されてきたことを、あらためて知らされたのである。

中学時代、金坂一郎氏と同期だった山崎さんが早稲田にすすんだのは、その山岳部にはいりたかったからだとよく語っておられた。藤田信道氏の『積雪期登山』（昭和八年）に刺戟をうけて、冬山に「無限の未知へのあこがれ」を感じ、その「未知の世界を追求している山男たち」の仲間入りをしようとしたことは、「青春の山」（『登山史の周辺』所収）という文章に書かれている。

早稲田大学第二高等学院から法学部へとすすんだ六年間に、山崎さんは北アルプスを中心に大きな足跡をのこしている。昭和十四年春の穂高白出沢合宿ではジャンダルム北壁登攀を飛騨尾根からサポート、西穂高西北壁の初登をおこなっている。翌十五年三月の明神岳東稜、十五年暮から十六年一月にかけての第二次冠帽峰遠征への参加、十六年三月の西穂高から奥穂高への極地法登山、その他、多くの登山があった。この時期の山岳部活動については、後年、「早稲田の山」（『穂高星夜』所収）の「第六期」の章に極地法研究の時代として位置づけているが、山崎さんはその主役のひとりだった。そのなかでもことに忘れられぬのは、昭和十七年三月の横尾尾根からの槍・奥穂高への極地法登山であろう。このときの記録は「山岳」第四十四年第二号に「南岳を越えて」として掲載され、「リュックサック」にも発表された。太平洋戦下にあって、このような大計画を打ち出したのは特筆すべきことである。二十二名の全部員を投入した「この計画は、もちろん私たちの一つの『野心』の現われでもあった。計画がすすむにしたがって、各種の悪条件が重なって予定通りにはいかなかったにせよ、根本のことはやりとげたものと信ずる」と山崎さんは書いている。リーダーのひとりとして、積雪期の山にあって組織力をつよめ登攀技術をふかめていったことは、のちの日本隊のヒマラヤ遠征の礎石をつくったともいえる。「青春の山」のなかに「早稲田の山岳部で過した山登りは実に恵まれていた。たくさんの優秀な先輩や仲間と知り合い、共に山に登ることができたのは何よりの幸福だった」とあるのは、内心の素直な表白と読める。

昭和十年代の日本の激動期にあって、時代の先鋭として活躍した山崎さんが、日本登山史の研究という未知の領域に足をふみいれたのは、戦後、大患にみまわれてからである。それは大きな転機だった。横浜の国立病院で一年半の療養生活をおくったが、その加療中に「山岳」をはじめ各大学の部報類を閲読してノートをとっている。「〝山〟というものを再び心の中に甦らせてくれるまたとない貴重なチャンス」だったという。山崎さんはもともと学者肌、研究室むきの人だった。本好きで資料探索の方法を早くから心得た方であっただけに、遅かれ早かれこの方面の仕事をはじめたにちがいない

が、大患をきっかけに自分の方向を見定められたようにおもう。それは地味で、労力のかかる、孤独な作業だった。もちろんそのような文章を書いて生計のたつわけがなく、日刊スポーツ新聞社に勤めながら孜々営々と登山史という領域をきりひらいていった。その意気ごみをよみとった朋文堂社主新島章男氏は、山崎さんに「山岳」の揃いを贈ったほどである。

その第一著作が昭和三十三年六月、朋文堂刊行の『穂高星夜』だった。表題は山岳部の先輩、書上喜太郎のエッセイにあやかっている。ここではヨーロッパの登山史の概観、ヒマラヤ黄金時代の到来、英国山岳会の歴史と伝統などを祖述しながら、日本における近代登山の生成、ことに穂高連峰の早期登山者に焦点をあてている。そして前記「早稲田の山」と御自身の紀行・記録（「春の白出谷」「三月の前穂高北尾根」「冬の冠帽峰」など）をくわえたところに著者の思い入れがあった。主として戦後、ことに昭和三十年前後の執筆文を加筆訂正してまとめたものだが、硬派の文体も、記録をみおとすまいとする注意力も、資料の集約・叙述も、みな山崎安治その人の人柄をよくあらわしている。処女作がその人の仕事を決定するとよくいわれるが、その発展として『剱の窓』があり『山の序曲』があり、『日本登山史』があった。近代登山史の主たる対象としては、アルピニズムの発生地、昂揚の場としての槍・穂高、剱であり、日本山岳会の初期会員たちのかずかずの足跡であり、それを大正期から継承した大学山岳部の動きであった。もちろん日本人の山との深く長いかかわりを忘れていたわけではない。『穂高星夜』のうちの「日本人の登山」「古文献にあらわれた穂高」「穂高岳の山名」には、その萌芽がみえる。

ひとつひとつ正確な事実の蓄積をおこなってきた山崎さんが『日本登山史』を白水社から刊行したのは、昭和四十四年六月のことである。この月には奇しくも安川茂雄氏の『日本近代登山史』（あかね書房）も刊行された。まことに不思議なめぐりあわせというべきだ。その本人からきいたところによると、安川氏が登山史を出すというので自分も急いで原稿をまとめた、ということである。それだけに多々不備の点のあることを認めていた。幸いなことに私たちは同時に二つの登山史を読むことができたのだが、二人の内面的葛藤はなみなみならぬものがあったと想像する。山崎さんは安川氏に先を越されまいとし、安川氏の方では山崎さんに負けまいとする。おなじ土俵で、おなじ技を競おうというのだから、実に熾烈な戦いがあったと考えられる。二人をよく知っていた私は、それぞれの口吻からいつもそれを感じとってきたのである。

登山史構築の意図に、古代・中世・近世をふくむかふくまぬかのちがいはあったにせよ、主たるねらいである近代・現代については、資料の出どころはほとんどおなじである。その博捜ぶり、取捨選択の尺度には共通するところがあった。ともに多年の資料蒐集の上になった苦心の作であることは言うまでもない。しかし異なるのは二人の歴史にたいする態度と叙述であった。鴎外流に言うならば、山崎さんが「歴史其儘」の説を守ったものとすると、安川氏のほうは「歴史離れ」に堕したきらいがある。事実第一主義をとる山崎さんは自分の叙述、地の文のなかに登山記録文そのままをとりこんでしまうほどだったし、安川氏は資料を多用しながら、ときとし

て事実を基に物語的想像力を生かして読者におもしろく訴えかける。明治期以来の山岳人の証言、記録、回想、研究に眼をむけて、そこから登山史の曠野にはいっていったのは、まことに戦後の偉観であった。その経過と成果をみていると、それぞれの方法、個性、人柄がよくわかって興味ぶかい。

山崎、安川両氏は昭和二十年代の後半から雁行して登山史を考えてきた。山崎さんは新聞社にあって、安川氏は出版社にあって、ともに山の世界にふかくかかわってきた。人好きで、処生において器用に立ちまわっていたかのような安川氏にくらべると、山崎さんは寄りつきがたく、おのれに忠実、率直で、むしろ不器用といえたかもしれない。ジャーナリスティックな動きをみせる安川氏の企画に山崎さんが参画したこともあった。おなじ基盤の上の仕事は多々あったとおもわれる。安川氏はつぎつぎに著作や編纂ものを刊行し（なかには内容未消化のまま出したものもあった）、晩年には出版社をおこして自分の著作を刊行したが、山崎さんはぽつりぽつりと本を出すくらいで、そこに採らなかった文章も多い。ただただ登山史ノート一筋であった。後世に遺す仕事をしようとしていたところに、山崎さんの矜持をよみとりたいのである。私は昭和三十年代から二人のあいだにかわされた火花と、さまざまな情景をおもいうかべるのだが、今となっては歴史のなかに埋没していきそうである。

昭和五十年代にはいって、山崎さんは二つの登山史ノートを刊行した。そのひとつ、『登山史の発掘』（五十四年九月刊）にはつぎのように書かれている。

「日本の登山の歴史には、まだ空白の部分がかなり多い。未知の分野を多分に秘めているだけに、その空白を埋めることは、やり甲斐のある仕事であるし、新しい事実を探り当てたときの喜びはたとえようもない。しかし、これにはタイム・リミットといったようなものがあり、できる限り早い機会にやらないと手がかりが失われる。……

拙著『日本登山史』は、近い将来さらに充実したものにしたいと考えているが、本書はそれに対する一つの礎石となるものである。それと同時に、今後ともさらに手をつくして、たんねんに埋もれた登山記録を探りたいと念願している。」

また『登山史の周辺』（五十九年七月刊）には、

「登山史上、埋もれている記録や、不正確に伝えられている記録はまだまだ多い。その発掘に焦点を絞って、今回も一冊にまとめたのだが、登山の歴史からみて、重要な新しい事実の発見は、このうえもない喜びであり、その追求は将来も続けなければならないと考えている。……

私はこの数年間、日本アルプスと富士山を中心とする『日本登山記録大成』全二十巻の編集に没頭し、昨年暮ようやく完成に漕ぎつけたが、まことによい勉強になった。これらをもとに、いよいよ本格的な、密度の高い『日本登山史』の筆をとるときとなった。」

埋もれた登山記録を探るといい、新しい事実の発見のよろこびといい、そこからは山崎さんの息づかいがつたわってくるようだ。本が出るたびに私たちの仲間は、出版記念の会をひらいた。この二冊におさめられた多くのエッセイは、『日本登山史』刊行以後十四、五年間に書かれたものから精選されたものだが、近世を語るにして

も近代に眼をむけるにしても、山崎さんはつねに登山史の視点から物事をみつめていた。私は取材に同行したこともあったし、仕事でいっしょになったことも多い。そのたびに山崎さんの記録中心主義に圧倒されるばかりであった。登山の歴史をとらえるのには、時代と人間と文化と、さらにこまかくいえば、生活、民俗、宗教、交通、科学、自然地理、文学、芸術などさまざまな要因がはいってくるはずだが、山崎さんは自分の登山史の方法を確立し、ふたたび執筆しはじめて、自分の時代、すなわち昭和十年代にさしかかったところで病魔に斃れたのだ。ほんとうに残念でならない。

同朋舎出版の『日本登山記録大成』全二十巻（昭和五十八年）は、山崎さんの遺した最大の編纂物である。北アルプスに十五冊、南アルプスに四冊、富士山と中央アルプスに一冊をあてて、明治二十年代から現代までの登山記録・紀行をあつめ、山崎さんは各巻に解説を書いた。

「自分の手のうちを明かすようで、ちょっと困るんだ」

とよく言われていたが、この仕事を丹念にみてゆくと、山崎さん自身の登山の実践をとおして正確な集約と批評がなされているようにおもう。その言葉どおり山崎近代登山史の原資料であった。

私は三十年ちかく山崎さんをみてきた。そして酒のつきあいもしてきた。『剱の窓』を出されたころであったか、有吉佐和子・神彰氏の結婚式（東急ホテル）に招かれたとき、山崎さんもいっしょだった。そんなときは新聞社の文化部長の役目としてもちょっと場ちがいな様子だった。精悍で、いつもきりっとしていた山崎さんには、なにかとりつきがたい印象もあったが、親しく声をかけて下さるようになったのは、私がふとしたきっかけで「アルプ」に小島烏水伝を書きはじめてからである。葉書でなにやら激励して下さったことをおぼえている。連載二、三回目に明治期の烏水の執筆文一覧を出すと、初出年月をみて、君も資料で苦労するね、机のまわりがわかると言う。ところがなぜ「アルプ」なんかに書くんだ、山の雑誌で注文のこないのは「アルプ」だけだとも言った。酒席での放談だからさほど気にしなかったが、山の文学性を無視する山崎さんは、この雑誌をあまり眼中においていなかったようである。それでも月々、なにが出るかと注意をはらっていたところは、いかにも山崎さんらしい。

深田久弥、小林義正両氏のあとをついで、山崎さんは昭和五十年から図書委員長をつとめられた。日本山岳会の会務としては、総務、会報、山岳、指導その他多くの仕事にたずさわられたが、この図書委員会がなによりも楽しかったようである。会議をおえてからは飲めば飲むほどに談論風発、たのしい雰囲気がかもしだされてきて、時のたつのを忘れるほどであった。こと山の話にかんするかぎり、精密機械のような記憶装置が冴えわたって、登山史上の事柄がぽんぽんととびだし、批評精神はますます旺盛になった。私はそのたびに多くものを教えられた。

図書委員会の年中行事のほか、小島烏水、木暮理太郎、岡野金次郎の生誕百年を記念してひらいた「近代登山の先駆者たち」展（丸善）、日本山岳会絵画展（同）、七十周年記念の『覆刻 日本の山岳名著』『新選 覆刻 日本の山岳名著』の編集刊行などをとおして足しげくつきあってきたが、もっとも愉しい記憶としてのこっている

のは、二回にわたった霞沢の溯行である。第一回目は昭和四十九年の夏、二人でダイレクトに頂上に登りつめた。第二回目は翌五十年、節田重節、中出水勲、高橋登美夫の三君がくわわって、右俣をたどり徳本峠と霞沢岳の鞍部を越えた。山崎さんにとってもたいへん印象にのこった山行らしく『登山史の発掘』のなかに書きこんでいる。それは登山史研究のなかでのひとつの実地踏査であった。第一回目のとき、頂上で山崎さんの顔色が急にわるくなり、もう歩けぬと言い出した。やむを得ず予定を変更して八右衛門沢をゆっくりと下ったが、途中で残雪を溶かして飲ませてあげたところ、恢復したので私はほっとした。上高地におりてから缶ビールを買い、だれもいないウェストン碑のまえで霞沢岳を見上げながら乾杯したとき、山崎さんはようやく蘇生のおもいを味わった様子であった。

山崎さんについては語るべきことが多い。いずれは著作目録、執筆文目録を作成しておきたいとおもう。

なによりもまず山崎さんは日本山岳会を愛していた。孤軍奮闘のすえに『日本登山史』という大きな里程標を打ち立てた。その点、日本山岳会の至宝というべき存在であった。後学の私は、真直ぐで、凛凛しく、青竹のような山崎さんの遺された仕事をふかくかみしめている。

略年譜

大正八年十一月十三日、山崎介三、文の次男として神奈川県小田原市酒匂に生まる。青木小学校、県立第二中学校（現・翠嵐高校）をへて、昭和十三年、早稲田大学第二高等学院に入学、法学部にすすむ。在学中、山岳部にあって積雪期の北アルプスにおいてかずかずの記録的登山をおこなう。昭和十五年暮から翌年一月にかけての北朝鮮の冠帽峰遠征（第二次）に参加した。昭和十七年、早稲田大学卒業後、第一師団第三歩兵聯隊に入隊、軍務を帯びて中国に赴く。復員後、昭和二十一年、日刊スポーツ新聞社に入社、文化部長、整理部長、編集委員等を歴任。四十九年十一月、定年退社。以後五十八年十一月まで、同社常勤嘱託として記者活動に従事した。昭和二十二年、阿部房子と結婚、温之、直子の二児をもうく。

日本山岳会には学生時代の昭和十五年に入会。会員番号一八三五番。終身会員。昭和三十一年以後、常務理事、常任評議員、図書委員会委員長のほか各委員会の委員長、委員として会務にたずさわり、後任の指導にあたった。さらに日本山岳協会にあっては常務理事等をつとめた。その間、日本登山史の研究に志して、昭和三十三年六月、第一著作『穂高星夜』を上梓、以後『剱の窓』（三十七年）、『山の序曲』、（四十二年）、『日本登山史』（四十四年）、『登山史の発掘』（五十四年）、『登山史の周辺』（五十九年）など登山史に関する著作を刊行した。訳書に『はるかなるエヴェレスト』（マーリ）、『エヴェレストへの闘い』（ノートン）、『アンナプルナ南壁』（ボニントン）その他、編著に『現代登山全集』（全十巻）、『日本登山記録大成』（全二十巻）などがある。

昭和六十年三月十一日午前七時五十分、北里研究所付属病院にて逝去。享年六十五。四月二十九日、千葉県・笠森霊園に納骨。墓碑には、関根吉郎の撰文、鈴木正俊の書になるつぎの碑文が刻まれている。

山を愛し
日本登山史の発掘に
心血を注いだ
山崎安治　ここに眠る。

（近藤信行）

伊藤洋平氏（一九二三～一九八五）

伊藤君とのつきあいは長かったが、大きくわけると二つの時期があったと思う。

最初は戦後の混乱のなかで、京大山岳部の創設を中心とした時期である（旅行部とは一旦きれたことになっている）。

マッキンレー遠征計画、梅棹忠夫さんと百万遍の進々堂での四時間に及ぶ大論戦、そしてヒマラヤ遠征の実現化に進み、マナスル問題を経てアンナプルナ遠征となった。いわばシュトルム・ウント・ドランクの時代だった。その中で仲間の山登りは続けられ、そば粉を主食とした冬の剱や、十一月の滝谷の尾根を兵隊靴で登ったり、今では信じられぬような山行であったが、私達は熱気に溢れ、アンビシャスであった。

あの混乱期の中でヒマラヤ遠征を考え実現の端緒を開いたのは伊藤君であった。考えている人はたくさんいただろうが、実際にアクションを起し、手掛りをつかみ、京大グループを結集させるキッカケを作ったのである。これは彼の華麗な登山歴にもまして特筆大書されるべきであろう。

『アンナプルナ日記』の中で、今西寿雄さんが伊藤君を紹介し「戦後沈滞していたＡＡＣＫにあって、今西博士を訪ねてヒマラヤ計画を懲憑し、今度の計画の遠因をなした男である」と書いている通りである。

アンナプルナ遠征は、そうした私達の情熱とアンビションを結晶した最大のイベントであった。

マナスル踏査隊、マナスル本隊の乏しいヒマラヤの体験と知識を吸収するには、あまりにも日数が限られていた。大繁忙のうちに荷物を積みだし日本を旅だったときには、すべてが終ったような錯覚にさえとらわれたものである。

先発隊と後発隊にわかれ、全くのジュニアばかりでネパールを横断、アンナプルナⅡ峰南面にとりつき、ベース・ハウスで始めて二隊が一緒になったと思うと、またナムン・バンジャン越えの本隊とマルシャンディ廻りの補給隊にわかれてのアンナⅣ峰北面への転進となる。

本隊はサブジェ・コーラからⅣ峰北面に取りついたが、ジェット・ストリームの接近を懸念し、休むまもなく全力をあげて突進する。Ｃ３ヘルート工作中、漸く補給隊がＢＣに到着、ギリギリのタイミングであった。

十一月二日最終キャンプ設営、三日烈風のため停滞。深夜テントが裂けて飛ぶ。四日朝撤退開始、ジェット・ストリームの荒れ狂うなか死力を尽しての下降であった。

今西さんも私も生きて帰れぬと肚を決めた瞬間があった。

全員が身心ともに疲れはててＣ１へ集結できたとき、心の底から暖かいお互いへの信頼感が泉のように、とめどもなく湧いてきた。

そして奇妙なことに誰もが頂上に登れなかったのを格別残念がっていなかった。

『アンナプルナ日記』の一節を拾ってみると、

「思い残すことはないといった心境」藤平
「不成功だったとはいえ、実に後あぢのいい遠征」今西
となっている。

伊藤君と山については書けば際限がないが省かしていただこう。

第二期はそれ以降、今日までのことである。ぽつりぽつりとしたつきあいしかなかったが、生死をともにした仲間の気持は常につながっていたようである。

京都の町中で、ほんの一間の診療所を開き、その後シアトルに移住、診療所を開きながらワシントン大学微生物研究所に学ぶなど、大変苦しい時代があったようだが、彼は弱音は一言もはかなかった。

目的をきめたら全力をあげて実現する強引とも思える実行力と抜群の渉外力、これは学生時代から今日にいたるまで終始変らず、彼の今日をあらしめたものと思う。

今年の一月初め、昨年暮手術をしたことを聞いた。林一彦君から絶望の旨電話あり、一月三十日AACK近藤会長、林君の三人で退院帰宅していた彼を自宅に見舞った。意外に元気で、よくしゃべり菓子をくったりして、お蔭で助かったと喜んでいた。見舞の品を出しそびれそうになったが、冗談めかして、

「せっかく持ってきたんだから受けとっておけよ」

と置いてきた。帰り際に入院時、枕もとに飾っていたアンナⅣ峰の写真を不要になったからと、とまどっている私に押しつけるようにして渡してくれた。

三月二十二日京都でAACKの会合にでたら、彼は挨拶だけに顔をだし、私の前で一月の見舞の礼を軽く言って帰ったが、物言いたげで、すがるような眼の色であった。日頃の彼からは考えられないものだった。

彼は知っているのだと直感した。自分の病気について、ほかならぬ専門家の彼がわからぬはずはなかったのだ。

ただこうしたプライベートなことには、異常なまでに抑制のきく強い克己心が彼の身上なのである。

亡くなる四、五日前、ふと彼のことが気がかりになり会いたくなった。雑事にとりまぎれていると、七月二十六日朝、林一彦君から死去の連絡が入った。覚悟していたこととはいえ、脇坂君に次ぐアンナプルナの仲間の死は大きなショックであった。

そもそも私達にとってアンナプルナは一体何だったのだろうか。少なくとも私にとっては、あれほど純粋に一つの目的に傾注し全力をあげたことはなかった。社会にでて数十年、還暦をすぎた今でもである。

アンナプルナは青春の単なる一こまではない。時間の長短ではなく比重において、最も大切で凝縮した人生の大部分かもしれない。

アンナプルナを取りさった巨大な空洞の周囲に残るものは、色あせて較べるべくもない。

こうして伊藤君を憶いだしていると、Ⅳ峰C3直下の氷壁をアタックしていたときの彼の力強い確保の感触が、まざまざと実感をもってよみがえってくる。

アンナⅣ峰の写真は彼がそれとなく別れを告げたものと、私は確信している。

略年譜

大正十二年　三重県鈴鹿市に生まれる。
昭和十八年　八高卒・山岳部員として穂高を中心とする山行多し。同年京大医学部入学。
昭和十九年十月　大野嶺夫とともに屏風岩正面岩壁初登。昭和二十一年八月、石岡繁雄、松田武雄、豊田耕雄とともに屏風岩正面第二登。初冬の滝谷第五尾根、奥穂ダイレクト・ルンゼ登攀。冬の白馬岳。
昭和二十二年三月、剱岳池ノ谷右俣、猫又岳。同年五月「岳人」創刊、同三十五年まで編集人をつとめた。昭和二十三年三月、大津秀夫とともに屏風岩正面岩壁積雪期初登。昭和二十七年十二月～翌年一月、知床半島冬期初縦走。
昭和三十一年、南極観測隊参加。昭和三十三年、奈良学芸大学助教授。同三十四年、ワシントン大学微生物学教室に留学（三十六年帰国）。
昭和三十七年　奈良学芸大学教授。同三十八年、野口英世記念医学賞。同三十九年、愛知県がんセンター研究所ウイルス部長。
昭和四十五年、日本山岳会東海支部長としてマカルー遠征隊隊長。
昭和四十八年、米国がん特別計画功労賞、国際比較白血病学会会長（五十年八月まで）中日文化賞、京都大学教授。昭和五十五年ニューヨーク科学アカデミー会員（六十年七月まで）、同五十六年、京都大学医学部長。
昭和六十年七月二十六日　死去。
日本山岳会入会　昭和二十年六月、会員番号二三三四。
著書『岩登り』『回想のヒマラヤ』『山と雪の青春』

（藤平正夫）



会務報告

昭和五十九年（一九八四）六月～昭和六十年（一九八五）五月

一九八四年度役員・評議員・支部長

会　長　佐々保雄

副会長　田口二郎、山田二郎

常務理事　田村俊介、神崎忠男、大倉昌身、西村政晃

理　事　赤松功也、河村憲二、松家　晋、水野　勉、鈴木雄二、平野隆司、長谷川良典、平井吉夫、絹川祥夫、村木富士、梅野淑子、高遠　宏、代行岡沢祐吉

監　事　松田雄一、竹田寛次

常任評議員　飯野　亨、宮下秀樹、鴫原啓佑、山口節子、中村純二

評議員　小原勝郎、松丸秀夫、辰沼広吉、柴田均二、岸田権二、西沢健一、蒲生明登、細川沙多子、片岡　博、渡辺兵力、村山雅美、小西政継、吉田　宏、伊藤紀克

支部長　佐藤敏彦（岩手）、岡田光行（秋田）、村上勝太郎（山形）、伊達篤郎（宮城）、中島正夫（福島）、佐藤一栄（越後）、奥原教永（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静岡）、尾上　昇（東海）、松井辰弥（岐阜）、若林啓之助（富山）、増江俊三（石川）、今西寿雄（関西）、港　叶（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、西沢健一（熊本）、橋本誠二（北海道）

理事会は会長、副会長、理事、常任評議員、監事によって構成される。

◇**六月理事会**　六月十一日（月）ルーム

出席者　十七名

▽審議事項

一、委員会活動について

二、八十周年記念事業について

▽報告事項

一、カンチェンジュンガ登山隊経過報告

二、会務報告

会報「山」四七〇号参照

◇**七月理事会**　七月九日（月）ルーム

出席者　二十名

▽審議事項

一、八十周年記念事業について

▽報告事項

一、カンチェンジュンガ登山隊関係

二、ＵＩＡＡの会合について

三、中国より史占春氏一行来日について

四、植村直己君に別れを告げる会について

五、北海道支部長に橋本誠二氏就任

六、財務状況報告

七、委員会報告他

会報「山」四七一号参照

◇**八月理事会**――休会

◇**九月理事会**　九月三日（月）ルーム

出席者　十六名

▽審議事項　なし

▽報告事項

一、外務省よりヨーロッパ・アルプスについての登山指導の通達について

二、自然保護全国集会について
三、八十周年記念事業について
四、委員会報告他
会報「山」四七三号参照

◇**十月理事会**　十月一日（月）ルーム
出席者　十六名
▽審議事項
一、第二十一回秩父宮記念学術賞受賞候補者推薦について
▽報告事項
一、八十周年記念事業について
二、年次晩餐会について
三、委員会報告他
会報「山」四七四号参照

◇**十一月理事会**　十一月五日（月）ルーム
出席者　十九名
▽審議事項
一、福島県の過疎地の民家借用について
二、成瀬氏蔵書購入について
▽報告事項
一、上半期収支報告について
二、八十周年記念事業について
三、委員会報告他
会報「山」四七五号参照

◇**評議員会**　十一月六日（火）ルーム
出席者　小原勝郎、松丸秀夫、辰沼広吉、渡辺兵力、村山雅美、中村純二、鳴原啓佑（議長）、宮下秀樹、佐々保雄、田口二郎、山田二郎
▽審議事項
一、名誉会員推薦の件
▽報告事項
一、八十周年記念事業について

◇**支部長会議**　十二月一日（土）ルーム
▽報告事項
一、会務報告
二、創立八十周年記念事業について
三、各支部の概況及び活動報告

◇**十二月理事会**　十二月三日（月）ルーム
出席者　二十一名
▽審議事項　なし
▽報告事項
一、年次晩餐会について
二、支部長会議報告
三、八十周年記念事業について
四、委員会報告他
会報「山」四七五号参照

◇**一月（一九八五年）理事会**　一月十一日（金）ルーム
出席者　二十名
▽審議事項
一、日本大学ヒマルチュリ登山隊推薦について
二、八十周年記念事業について
▽報告事項
一、片山全平氏遺族より寄付の件
二、予算編成の件

三、秩父宮記念学術賞が沼田真氏に決定
四、新入会員オリエンテーションについて
五、委員会報告他
会報「山」四七六号参照

◇二月理事会 二月十二日（火）ルーム
出席者 十九名
▽審議事項
一、山日記について
二、昭和六十年度事業計画案、予算案について
三、「山岳」「会報」の編集について
▽報告事項
一、八十周年記念事業について
二、委員会報告他
会報「山」四七七号参照

◇三月理事会 三月八日（金）ルーム
出席者 十九名
▽審議事項
一、昭和六十年度事業計画案について
二、昭和六十年度収支予算案について
三、八十周年記念事業について
▽報告事項
一、山日記について
二、山岳編集者交代について
三、その他委員会報告
会報「山」四七八号参照

◇評議員会 三月十八日（月）ルーム
出席者 蒲生明登、渡辺兵力、伊藤紀克、細川沙多子、岸田権二、西沢健一、中村純二、小原勝郎、村山雅美、吉田 宏、鴫原啓佑（議長）、田口二郎、山田二郎
▽審議事項
一、昭和六十年度事業計画と予算案について
二、八十周年記念事業について

◇四月理事会 四月十五日（月）ルーム
出席者 二十三名
▽審議事項
一、日本・スペイン合同マナスル・スキー登山隊一九八五後援の件
二、科学博ネパール館に対する協力の件
三、昭和五十九年度事業報告承認の件
四、昭和五十九年度収支決算報告承認の件
五、役員改選の件
▽報告事項
一、八十周年記念事業について
二、会務報告
三、委員会報告他
会報「山」四八〇号参照

◇評議員会 四月十九日（金）ルーム
出席者 山口節子、吉田 宏、中村純二、松丸秀夫、片岡 博、渡辺兵力、宮下秀樹、辰沼広吉、岸田権二、小西政継、村山雅美、鴫原啓佑（議長）、佐々保雄、田口二郎、山田二郎
▽審議事項
一、昭和五十九年度事業報告、収支決算
二、昭和六十年度総会付議案について

◇**五月理事会**　五月七日（火）ルーム
出席者　十七名
▽審議事項
一、八十周年記念事業について
二、総会について
三、支部長会議について
▽報告事項
一、要望書「祖母、傾山系における原生林の保護と伐採施業計画の早急な見直しについてのお願い」を林野庁他へ提出
二、委員会報告他
会報「山」四八一号参照

◇**支部長会議**　五月二十四日（金）ルーム
出席者　二十名
▽報告事項
一、各支部報告
二、創立八十周年記念事業について
三、その他

◇**昭和六十年度通常総会**　五月二十四日（金）於　千代田区九段北四―二―二五私学会館
出席者　佐々保雄会長以下一六〇六名（委任者を含む）
▽総会次第　司会　神崎忠男
一、会長挨拶　佐々保雄
二、八十周年記念事業中間報告　山田二郎
三、会務報告　神崎忠男
四、昭和五十九年度事業報告及び承認の件　大倉昌身
五、昭和五十九年度収支決算・財産目録報告及び承認の件　西村政晃
六、監査報告　松田雄一
七、昭和六十年度事業計画（案）　大倉昌身
八、昭和六十年度収支予算（案）　西村政晃
（右報告及び計画、予算案、原案通り承認）
九、役員改選について、昭和六十年、六十一年度新役員は次の通り決定
会　長　今西寿雄（新任）
副会長　山田二郎（再任）、大塚博美（新任）
理　事　高遠　宏、梅野淑子、長谷川良典、村木冨士、平井吉夫、絹川祥夫（以上再任）、太田晃介、鴫原啓佑、鈴木郭之、大橋　晋、松永敏郎、橋本　清、浜口欣一、大森久雄、岡沢祐吉、新井陽一郎、関塚貞亨（以上新任）
監　事　竹田寛次（再任）、金坂一郎（新任）
評議員　伊藤紀克、村山雅美、渡辺兵力、山口節子、中村純二、宮下秀樹、小西政継、吉田　宏（以上再任）、田口二郎、望月達夫、織内信彦、越智英夫、松田雄一、近藤信行、宗実慶子、大森薫雄、中世古隆司、田中弘美、安間　荘、佐々木豊喜（以上新任）
十、昭和六十年度除籍対象者の件
十一、総会議事録署名人選任の件
総会終了後、新会長挨拶と新役員の紹介があり、引続き懇親会が行われた。
会報「山」四八一号参照

◇**主なる行事と集会**
▽昭和五十九年六月一日（金）ルーム
講演会「ザイルとの三十年を振り返る」　講師　石岡繁雄
▽昭和五十九年六月三日（日）上高地

第三十八回ウェストン祭
▽昭和五十九年六月九日（土）～十日（日）会津周辺
懇親山行
▽昭和五十九年六月十四日（木）ルーム
講演会「シルクロードの話」　講師　金子民雄
▽昭和五十九年六月二十三日（土）駿河台日大講堂
第四回日本登山医学シンポジウム
▽昭和五十九年六月二十九日（金）～七月一日（日）小川山
岩登り講習会
▽昭和五十九年七月三十日（月）自治労会館ホール
カンチェンジュンガ登山隊登頂報告会
▽昭和五十九年八月十一日（土）～十四日（火）小川山
フリークライミング山行
▽昭和五十九年九月十五日（土）～十六日（日）焼岳山荘
スケッチ山行　講師　清野　恒
▽昭和五十九年九月二十日（木）ルーム
フィルム映写会「ドキュメンタリー・エベレスト一九七〇年」
▽昭和五十九年九月二十七日（木）ルーム
講演会「コルディエラ・ブランカの話」　講師　児玉　茂
▽昭和五十九年十月六日（土）～八日（月）鳥海山
懇親山行
▽昭和五十九年十月十日（水）山形摩耶山
秋山山行
▽昭和五十九年十月十三日（土）大阪第一ホテル
本会創立八十周年記念関西地区記念晩餐会
▽昭和五十九年十月十五日（月）ルーム
講演会「ラダック巡拝の旅」　講師　山口一孝
▽昭和五十九年十月十三日（土）～十四日（日）皿伏山
尾瀬自然観察山行
▽昭和五十九年十月二十日（土）～二十一日（日）志津倉山
秋山探索山行
▽昭和五十九年十月二十日（土）～二十一日（日）伊豆　城ヶ崎
フリークライミング講習会　講師　池田　功
▽昭和五十九年十月二十七日（土）ルーム
図書交換会
▽昭和五十九年十月二十七日（土）渋谷勤労福祉会館
シンポジウム「ヒマラヤのエコロジー」パネリスト　川喜田二郎、小野有五、中島暢太郎、春田俊郎、高遠　宏、滝口正三、渡辺兵力
▽昭和五十九年十月二十七日（土）～二十八日（日）丹沢
丹沢研究会
▽昭和五十九年十一月一日（木）ルーム
講演会「カタカナの山名、地名、山岳用語」　講師　宮下啓三
▽昭和五十九年十一月八日（木）ルーム
山の気象講座　講師　大井正一
▽昭和五十九年十一月十日（土）～十一日（日）山梨　上徳間
高ドッキョ紅葉探索山行　講師　近田文弘
▽昭和五十九年十一月十日（土）～十一日（日）浜石岳
第二十七回紅葉会
▽昭和五十九年十一月十一日（日）皇居周辺
第二十一回学生部マラソン大会
▽昭和五十九年十一月十五日（木）ルーム
講演会「伯耆大山からエベレストまで、ラトックⅠ峰の記録」

講師　重広恒夫

▽昭和五十九年十一月十七日（土）名古屋郵便貯金会館
本会創立八十周年中部地区記念晩餐会

▽昭和五十九年十一月二十九日（木）ルーム
最新スキー用具説明会

▽昭和五十九年十二月一日（土）主婦会館
自然保護全国集会、講演「森林破壊と自然保護」　講師　三島昭男

▽昭和五十九年十二月一日（土）ホテルニューオータニ
昭和五十九年度年次晩餐会

▽昭和五十九年十二月二日（日）丹沢大山
懇親山行

▽昭和五十九年十二月二日（日）目黒自然教育園
自然観察会　講師　矢野　亮

▽昭和五十九年十二月六日（木）ルーム
山の気象講座Ⅱ　講師　大井正一

▽昭和六十年一月十日（木）ルーム
山の気象講座Ⅲ　講師　大井正一

▽昭和六十年一月十二日（土）～十五日（火）白馬栂池
スキー山行

▽昭和六十年一月二十五日（金）ルーム
映写会「K7初登頂と氷河調査」他

▽昭和六十年二月二日（土）ルーム
第十六回山岳図書を語る夕べ　講師　小谷隆一

▽昭和六十年二月二日（土）ルーム
第二十二回この一本展

▽昭和六十年二月七日（木）ルーム
講演会「アメリカの山と自然」　講師　岡島成行

▽昭和六十年二月九日（土）～十一日（月）松木沢
アイスクライミング

▽昭和六十年二月八日（金）ルーム
セミナー「やさしい気象」　講師　前野十行

▽昭和六十年二月十四日（木）ルーム
山の気象講座Ⅳ　講師　大井正一

▽昭和六十年二月二十一日（木）ルーム
セミナー「やさしい気象」　講師　前野十行

▽昭和六十年三月三日（日）福岡西鉄グランドホテル
本会創立八十周年九州地区記念晩餐会

▽昭和六十年三月七日（木）ルーム
講演会「私の山登り、植村君のこと等」　講師　吉田　宏

▽昭和六十年三月十四日（木）ルーム
山の気象講座Ⅴ　講師　大井正一

▽昭和六十年三月十五日（金）ルーム
第十一回新入会員のためのオリエンテーション

▽昭和六十年三月十六日（土）ルーム
第十三回山岳史懇談会「私の山登りとその頃」　講師　初見一雄

▽昭和六十年三月二十九日（金）ルーム
セミナー「やさしい気象」　講師　前野十行

▽昭和六十年四月四日（木）ルーム
講演会「ニュージーランドあれこれ」　講師　佐藤テル

▽昭和六十年四月十二日（金）～十四日（日）巻機山
山岳スキー技術講習会　講師　小林政志

▽昭和六十年四月十三日（土）ルーム

映画と講演「冬のロータン峠」　講師　三田幸夫

▽昭和六十年四月十四日（日）箱根
箱根の桜と鎌倉古道を歩く

▽昭和六十年四月十六日（火）ルーム
アメリカ山岳会アイスクライミング交流登山報告会　講師　松本正城、鈴木昇己、山崎祐和、中山茂樹

▽昭和六十年五月十一日（土）ホテル仙台プラザ
本会創立八十周年東北地区記念晩餐会

▽昭和六十年五月十四日（火）ルーム
山菜勉強会　講師　片岡　博、松本英一、諏訪　武

▽昭和六十年五月十八日（土）～十九日（日）武甲山
秩父の自然観察山行「武甲山の自然破壊を視る」

▽昭和六十年五月二十四日（金）～二十六日（日）会津猫魔ヶ岳
若葉会山行

◇**海外登山界との交流**

▽昭和五十九年六月四日（月）ルーム
翁俟章先生を囲む会

▽昭和五十九年七月十九日（木）ルーム
中国登山協会史占春副主席一行歓迎会

▽昭和五十九年八月八日（水）国際文化会館
邸在弘先生を囲む会

▽昭和五十九年八月二十五日（土）～三十日（木）ルーム他
ドイツ山岳会歓迎行事

▽昭和五十九年十月十日（水）国際文化会館
スイス山岳会ミルス会長夫妻歓迎会

▽昭和五十九年十月十九日（金）トレビの泉
ドイツ山岳会メルツ会長夫妻歓迎会





SANGAKU

The Journal of the Japaneses Alpine Club

Vol. 80 **Issued in December 1985**

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis)

Kanchenjunga Traverse ……Tsuneo Shigehiro……19 (48)
The Bogda 1984 : The Expedition of the JAC Student Section
……Norikazu Ohno……22 (62)
The First Ascent of Mamostong Kangri……Yoshio Ogata……24 (69)
First Mountain Climbing in Bhutan……Junko Tabei……26 (78)
The First Ascent of K 7……Junji Nakamura……28 (89)

*

The Practical Use of Natural Energy in the Mountain Area……47

In Japanese

<Special Articles of the 80 th Anniversary>
History of the Club-Room; Toranomon……Tatsumi Shimada…… (7)
; Ochanomizu……Nobuhiko Oriuchi…… (16)
A Memorandm of the History of the Japanese Alpine Club
……Tatsuo Mochizuki (28)
The Commemorative Address and Other Greetings of the 80th Anniversary
…… (42)

*

Annapurna South Face ……Kuniaki Yagihara…… (81)
Expedition of the University Students. The First Ascent of Mt. Lahamo,
Zaskar Mts., India……Aoi Murai…… (96)
A Thought of an Accident in 35 years Ago……Kinji Imanishi…… (104)
Book Review…… (108)
Talk of the College Life in the 1920's
……Kinji Imanishi and Eizaburo Nishibori…… (127)
A Supplemental Notes on the Translation of the Mountains of Tibet and
Tibet/China border (Frant Boothman) ……Tsutomu Mizuno…… (140)
Reports from the Local Sections …… (144)
In Memorial…… (156)
Club Notes : June 1984–May 1985…… (193)
From the Editor…… (252)

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sun-View Heights, 5–4 Yonban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo

Office Bearers and Committee
1985 (May 1985–April 1986)

President : Toshio Imanishi
Vice-president : Jiro Yamada, Hiroyoshi Ohtsuka
Honorary Secretary : Keisuke Shigihara
Honorary Editor : Hisao Ohmori
Honorary Librarian : Susumu Ohhashi
Honorary Treasurer : Kiyoshi Hashimoto
Auditors : Kanji Takeda, Ichiro Kanesaka

Committee

Keisuke Shigihara	Ryoten Hasegawa	Yōichiro Arai
Kiyoshi Hashimoto	Yoshio Hirai	Hiroyuki Suzuki
Susumu Ohhashi	Sachio Kinugawa	Hisao Ohmori
Toshiro Matsunaga	Takashi Muraki	Khosuke Ohta
Toshiko Umeno	Sukeyoshi Okazawa	Sadaaki Sekizuka
Kin'ichi Hamaguchi	Hiroshi Takatō	

Council

Hideki Miyashita	Koh Yoshida	Soh Anma
Junji Nakamura	Norikatsu Itō	Takashi Nakaseko
Setsuko Yamaguchi	Tatsuo Mochizuki	Toyoki Sasaki
Yuichi Matsuda	Nobuhiko Oriuchi	Hiromi Tanaka
Hyoriki Watanabe	Jiro Taguchi	Nobuyuki Kondo
Masayoshi Murayama	Hideo Ochi	Shigeo Ohmori
Masatsugu Konishi	Keiko Munezane	

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : Seiji Hashimoto
Iwate : Toshihiko Satoh
Akita : Mitsuyuki Okada
Yamagata : Katsutaro Murakami
Miyagi : Komao Shohji
Fukushima : Masao Nakajima
Echigo : Ichiei Satoh
Shinano : Akito Gamoh
Yamanashi : Isaburo Ohsawa
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Tokai : Noboru Onoe
Gifu : Tatsuya Matsui
Toyama : Keinosuke Wakabayashi
Ishikawa : Shunzo Matsue
Kansai : Toshio Imanishi
San'in : Kanoh Minato
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu : Akito Noguchi
Kumamoto : Ken'ichi Nishizawa
Miyazaki : Sadayoshi Uomoto

Kanchenjunga Traverse

Tsuneo Shigehiro

We obtained permission to climb the South Peak, Central Peak, Main Peak and West Peak of Kanchenjunga without difficulty. The South Peak and Central Peak had previously been climbed by a Polish and a Spanish expedition, respectively, but since they were both unauthorized climbs, both peaks were officially classed as unclimbed peaks. Our expedition was a joint Japanese-Nepalese expedition, with three members selected from the Nepal Mountaineering Association.

Our objectives were a complete traverse of all four peaks plus a hang glider descent from an elevation of more than 8,000 meters. We obtained the backing of a newspaper and a television station, and our expedition was authorized as an official event commemorating the 80th anniversary of the founding of the Japanese Alpine Club. It was a large expedition, with 30 members, not counting media representatives, headed by General Leader Ryutarō Hashimoto and Leader Katsuhiko Kano.

April 14 we started putting the route up toward the South Peak, Central Peak and Main Peak. The route up to the South Peak followed up toward the south on the large snowfield on the north-south running Great Shelf, zigzagging up the 1,000 m-high West Face of the South Peak, connecting the snowfields on the Face. Thus we followed almost exactly the same route as the Polish expedition which first climbed the peak in 1978. The South Face party, of which the principal members were Shigehiro, Wada, Mitani and Nima Temba, continued extending the route on successive days until April 18, until they put the fixed rope up to the planned site of Camp S 4 at 7,800 m, then returned to Base Camp to rest.

Meanwhile, the Central Peak party started putting the route up the gully between the Central Peak and Main Peak on April 15. The principal members of this party were Gashu, Sasaki, Kataoka, N. Ohtani and Nawang Yonden. They continued putting the route up until April 18, when they reached the planned site of Camp C 4 at 7,810 m.

The route up the Main Peak lagged somewhat behind the routes up the South and Central Peaks. Work was started on the route April 20. The route follows up a snow field called the Gangway above the face called the Sickle, which extends up toward the col between the Main Peak and the West Peak. This was the route followed by the British in their first ascent in 1955. The planned site for Camp M 4 was at 7,800 m, just below the handle of the Sickle, but there appeared to be serious difficulties no matter where one tried to take the route to

this point from the Great Shelf. At first, to save on fixed rope, the route up to the Central Peak was followed up to 7,700 m, and then a route which traversed from there to the left was attempted. However, on this traverse there was a great deal of falling rock, making it dangerous to use as a route for portering supplies, so we changed to a route straight up from the Great Shelf to the handle of the Sickle. The Main Peak party consisted of Matsuzawa, Teramoto, Hirano, Isono, Ryō Ohtani, Kitamura, Yamamoto and Ang Tsering. They worked on the route whenever possible between periods of bad weather after April 20, arriving at the planned site of Camp M 4 by April 25.

In the second half of April the weather finally settled down to the clear-cut cyclical pattern characteristic of spring.

April 29, Camp S 4 was set up at 7,800 m. This was the technically most difficult route; it was expected that it would take considerable time to put the route up to the summit. Yamamoto and Dawa Norbu were added to the South Peak party as principal supporting members. Work on the route upward from S 4 was started April 30. By May 7 the route was successfully put through the most difficult stretch, the vertical cliffs around 8,200 m, to the upper snow field. This secured the route up to the site of Camp S 5, and presented us with an excellent chance of success on the South Peak.

Camp C 4 was set up on May 1, two days after S 4. The route was steadily pushed up toward the Central Peak, with the support of Pasang, Tsering and Indre, arriving at a point just below the col between the Central Peak and Main Peak, where Camp C 5 was planned, on May 4.

Camp M 4 was set up even later than Camp C 4, on May 5. The high altitude porters who were the mainstay of the support for the Main Peak were also used as support for the hang glider and were busy carrying equipment for the hang glider flight, so this route was delayed. However, the route work progressed without serious difficulty, and on May 7 Matsuzawa, Isono and R. Ohtani put the fixed rope up to 8,200 m at a point just below the col between the Main Peak and West Peak, at the planned site of Camp M 5.

The weather, which had stabilized in late April, started to turn bad on May 8. Then, on May 9, a surface avalanche struck Camp C 2, where 4 climbers and porters were staying, burying the tents. All 4 people got out safely, but it was decided to use C 2 only as a relay point for depositing loads after that. Porters stayed at C 3, climbed down to C 2 empty and returned to C 3 with their loads.

The weather finally cleared up on May 11. Tadano, who was to fly the hang glider, with the support of Teramoto, Kitamura, Ang Tsering and Nakamura, entered Camp M 4. The original plan was to fly from a point above 8,000 m,

but considering the need to carry the glider up and assemble it, and considering the conditions at the start position, the number of days remaining and the weather, it was decided that M 4 was the highest point from which a flight could be attempted.

The morning of May 12, under clear calm conditions rarely seen on such a high mountain, Tadano got off to a skiing start from a point just below camp M 4 at 7,800 m, and after a 19-minute flight landed safely at 5,100 m on the Yalung Glacier below Base Camp, setting a new world altitude record for hang glider flights.

With the hang glider flight completed, the expedition could concentrate all of its effort on the traverse. It was almost 2 months since we had started climbing, and our members were starting to become tired. The coming of the monsoon was imminent. Cloud filling the valleys below climbed higher every day. Wada, Mitani and Shigehiro had already been announced as the climbers who would carry out the traverse; Nima Temba was added with the intention that he would climb only the South Peak.

All members of the traverse party including the Sherpas carried loads up to the site of Camp S 5. They returned to S 4 in the alpenglow and entered the 2 tents there. Meanwhile, on May 17 there climbers started up from Camp C 5 toward the Central Peak with the objectives of securing a descent route from the Central Peak for the traverse party, doing a detailed reconnaissance of the route from the South Peak to the Main Peak from the Central Peak side, and finding a climbing route up to the col between the Central Peak and the Main Peak. They fixed a rope for 8 pitches above C 5, and by 3 : 45 p.m. arrived at the summit of the Central Peak.

The same day, Shigehiro, Wada, Mitani and Nima Temba, supported by 3 other Sherpas, set Camp S 5 up at 8,300 m on the upper field of the South Peak. They received a detailed report by radio from Isono, who was standing atop the Central Peak, on the ridge line up to the Main Summit.

Shigehiro and Mitani, in that order, left Camp S 5 at 6 : 30 on May 18. Past the end of the fixed rope they climbed up a slab and then up a snow-covered ridge. They could not see the 2 climbers who had gone ahead. Finally, after they crossed a snowy hump headed toward the south, they caught sight of Wada and Nima Temba bathed in the early morning sunlight. The latter two appeared to already be on the South Peak. After a short ceremony on the summit, Nima Temba descended the route they had just climbed, leaving the other three to continue on the traverse. At 9 : 00 they roped up in the order Wada, Mitani, Shigehiro and started the traverse. Soon thereafter Shigehiro's oxygen ran out. He suddenly started to feel cold.

At 11 : 00 a.m. the three climbers reached the col between the South Peak and the Central Peak, where they stopped to eat. From that point the route to the Central Peak slopes up at a 70° angle. Shigehiro removed his oxygen mask for this climb. The Central Peak was reached at 4 : 30 p.m. The route down from the Central Peak was marked by red flags placed the day before by Isono, R. Ohtani and Nawang Yonden.

That same day, the Main Peak party set Camp M 5 up at 8,250 m, and extended the route up to 8,400 m. The traverse party descended to C 5 where they were met by Teramoto and Kitamura. The next day, after Shigehiro conferred with leader Kano by radio, it was decided that Teramoto would replace Shigehiro on the traverse.

May 19, since the route to the Main Peak was difficult, the traverse party headed toward Camp M 5 rather than straight toward the summit. The route went from C 5 down to C 4, followed by a traverse from C 4 to M 4 and then a climb back up to M 5. That same day Ozaki and Ang Tsering were waiting for the traverse party on top of the Main Peak.

May 20, Teramoto, who was not feeling well, descended to Camp M 4. Wada and Mitani climbed the Main Peak.

By that time the expedition members were exhausted, and there were no replacements available ; in addition, the route to the West Peak could not be easily done in a day, supplies were running low and there were not sufficient personnel to carry replacement supplies up, so Camps M 5 and M 4 were taken down and the expedition's climbing activity was brought to a conclusion.

Traverse of Bogdo Ola Mountains

Norikazu Ohno

The student section of the Japanese Alpine Club had sent an expedition party to Bogdo Ola Range in China for the last three years. And in 1984 the Tokai branch of the club chiefly sponsored the fourth expedition to that area. In 1981 we climbed the main peak, 5,445 m, via the northeast ridge, and also reconnoitered the second highest peak. In 1982 we succeeded in climbing the second highest peak of the region, 5,362 m. In 1983 the Kansai branch party attempted the main peak from the Sud Glacier side, only in vain. In 1984 we were to climb the West Peak, the Central Peak, and the 5,180 m Peak on the backbone of the range. Reports of previous expeditions warned us of bad weather on the Chigo Glacier on the south side. And we would need many days to reach the glacier. So we took a route on

the Sud Glacier.

On August 7 we were in Camp 1. The night before a strong wind had broken a beam of our tent. And we had heard ominous booming sound of avalanches. Snow slid from the Central Peak down the Sud. Three of our members and Hu, Chinese liason officer, reconnoitered the long rock ridge which leads to the middle of the main ridge between the Central Peak and the 5,180 m peak. The rock there was very brittle and the face was too steep. So we judged it impossible to climb down safely even if we could climb up. The next day we headed for the col of the West Peak. Traverse of the glacier required great care. One party approached the col straight, and the other climbed the snow face near it. We met again at the col and went further to the side ridge through a gully, fixing ropes. We went round a small rock peak to the next snow gully. We could proceed smoothly but took care to secure a belay point. Then advancing another 50 m, we stood on the main ridge.

On August 9, we decided to trace the ridge with a ten-member party. We started from Camp 1 with a six-man tent, two bivies, and provisions for four days. We stayed at the col mentioned above that night. On August 10, Nakanuma, Okitsu and Kitagawa led ahead to smooth the route. The other members over took them at the highest point we had reached the day before. We traced the narrow ridge in good speed. The snow face we climbed increased its tilt as we proceeded, finally forming an ice filled crack. At the end of the crack we could make a belay point and traversed from there along an insecure rock and ice mix for 20 m. There we found a string abandoned by a previous party. And at 10 : 48 we reached the summit of the West Peak.

Then we went further to the junction between the Central Peak and the 5,180 m Peak. Here we put down our unnecessary gear and headed for the Central Peak. We reached the virgin Central Peak at 17 : 55. That day we climbed down to the Junction and bivouacked there.

It cleared on August 12, but one of the members at the first step trod on a hole in the snow, only saved by a rope. So we took time avoiding crevasses. We fixed ropes on the snow face for the 5,180 m Peak because of the frozen surface. At 22 : 40 we reached the 5,180 m Peak with not so much satisfaction. We hurried down the ridge in a nightfall. Severe cold weakened the light of our head lamps, which only dimly lighted up our foot holds. Two days before the Japanese Sendai Party had climbed the peak. We looked for their trace in vain. We used our fixed ropes to climb down, reached the 4,750 m point after midnight and spent the last bivouac night.

First Ascent of Mamostong Kangri

Yoshio Ogata

The Himalayan Association of Japan (HAJ) became interested in this appealing group of mountains, and started making approaches to concerned Indian organizations such as the Indian Mountaineering Federation (IMF) as far back as 1973. Over 10 years passed without a satisfactory response, but in 1984 our persistent efforts finally bore fruit, and we received permission to enter this land of dream.

HAJ first applied for permission to climb Saser Kangri, and long negotiations ensued, but by the time permission to enter the area became a possibility we had changed our objective to the unclimbed Mamostong Kangri (7,516 m), the highest peak in the eastern Karakoram.

When we finally received permission, in January 1984, the plan was for a joint expedition with the IMF, but even so the situation remained touch-and-go for some time.

In 1984 India was beset by a Sikh rebellion in Punjab, the hijacking of a domestic airliner after takeoff from Srinagar, the collapse of the anti-Gandhi government of Kashmir and a clash between Indian and Pakistani troops on the Shiachen Glacier, so we were not optimistic about the chances of our actually being permitted to enter the area. We sat on pins and needles worrying about what would happen until we received final permission on July 4, only 10 days before the departure of our advance party.

July 19 the main party landed in the scorching heat of Delhi. The next day we joined our cheerful Indian companions. Most of the Indian expedition members were mountaineering school instructors, in other words, professional climbers.

August 1, we loaded our supplies onto trucks and saw them off on their journey to the mountains. The next day, August 2, we flew to Srinagar. August 3 we flew from Srinagar to Leh, the capital of the mountain region. By chance we arrived in time for that ancient city's summer festival. The streets were swarming with foreign tourists. We were forced to stay there a full week to arrange for porters and ponies, but thanks to the summer festival we thoroughly enjoyed our stay.

August 10, we left Leh headed for the Nubra Valley. A military road provided convenient access to Base Camp. It took us three days to reach Base Camp, via Sasoma, following up the Trompti Nara. From Skyampoche we climbed a road leading to Saser Pass, passed the snout of the Mamostong Glacier, crossed the Trompti Nara further upstream and climbed the moraine on the other side to the

site of our Base Camp. Base Camp was on a moraine where the Mamostong Glacier meets the Trompti Nara at an elevation of 4,600 m.

August 18 our last supplies arrived in Base Camp.

Climbing Activity

An advance party selected a site for Advance Base Camp on August 16. Carrying of supplies up to ABC started on August 17.

The route to ABC led up a side moraine up the left side of Mamostong Glacier from Base Camp, on a moraine where the first side glacier on the left side enters the main glacier. Nearby was a beautiful shining cobalt blue lake. The elevation was 4,900 m.

On August 19, 8 climbers who arrived at ABC carrying loads continued up the Mamostong Glacier on a reconnaisance to find a suitable site for Camp 1. They reached an elevation of 5,300 m. At that point the South Face of Mamostong Kangri, which until then had been hidden by lower mountains, came into full view for the first time. It was a huge granite face, and judging from that view there was no feasible route up via the Tanman (Kichik Kumudan) Glacier.

Camp 1 was set up in the middle of a moraine at the top of the Mamostong Glacier, at 5,600 m. It was only a 15 minute walk from there to the base of the South Face.

A rocky ridge extending down from the South Face toward the southeast separated the Mamostong Glacier on the south side of the mountain from the Tanman Glacier on the east side. We crossed a col (5,885 m, named the Col of Good Hope) below this ridge to the Tanman Glacier. On the other side of the col we descended a hanging glacier without the difficulty we had expected, and reached the Tanman Glacier, to which we stretched a fixed rope, in four pitches.

From the head of the Tanman Glacier we continued along the Tanman Glacier, which became a gradual snowfield without even danger of crevasses. The route continued like that for perhaps 2 to 3 kilometers. Then we pushed the route up the extreme right side of an icefall which cascaded down from the northeast ridge. We stretched 3 pitches of fixed rope across several crevasses and ice walls, and extended the route 1 more pitch up an ice plateau, where we pitched Camp 2.

The route from Camp 3 was up a snow slope with large crevasses. It took a great deal of time to find a suitable route that wound its way between the crevasses.

We came out on the north ridge on a col at 6,700 m. From there the northeast ridge of Mamostong becomes very steep, presenting a spectacular skyline. Below one looks down a steep slope at the Chong Kumdan Glacier. Across it is Mamostong Kangri II (Chong Kumdan Peak, 7,071 m). Beyond Mamostong Kangri II there is a view of Karakoram Pass and the arid brown Depsang Plateau with its surrounding

mountains.

August 28, we set Camp 3 up at the col we had reached the previous day.

August 30, we succeeded in reaching a point on the northeast ridge where there are jumbled ice blocks, at 7,100 m. We strung 13 pitches of fixed rope up the steep northeast ridge.

This completed the necessary preparations for a summit assault, so the next day all climbers descended to ABC for their last rest before the assault. However, after the first of September the weather suddenly turned bad, and we kept postponing our assault.

September 11 the barometer needle rose, signaling the coming of the good weather that we had been waiting for. Determined to take maximum advantage of the good weather, 5 climbers left ABC and climbed to Camp 2 in one day. Even though it is a long climb, they managed to do it in 5 hours.

The next day, September 12, we were forced to struggle through deep fresh snow which completely obliterated our previous track, digging our fixed rope out as we climbed, to reach Camp 3.

September 13, Yamada, Yoshida, Rajiv, Das and Chohan left Camp 3 at 4 a.m. Shortly after 8 they reached the end of the fixed rope. They added another 5 pitches of fixed rope for safety on the descent. After they reached the shoulder at 7,200 m, the slope of the northeast ridge became more gradual as it sloped up to the pyramidal summit. Toward the summit the ridge steepened again and gradually became narrower. The Chong Kumdan side of the ridge fell away in a nearly vertical drop to the glacier 2,000 m below. Careful crampon technique was required to climb the steep icy ridge. A snowy summit was reached but it turned out to be a false summit, with the true summit at the end of another long ridge. Avoiding the sheer precipice on the Chong Kumdan side, the climbers climbed along the Mamostong Glacier side of the summit ridge to the third summit, which was the true summit. It was 10 : 20 a.m. when the first men stood on the summit of Mamostong Kangri.

First Mountain Climbing in Bhutan

Junko Tabei

Our permission to climb in Bhutan was received in a rather unusual and unexpected way. After we climbed Mt. Everest in 1975, our club began looking for our next challenge. Many members called for an expedition to a little-known region such as Bhutan or Sikkim. Interested members soon formed a Bhutan

Association. We sent letters to Bhutan and Sikkim starting in 1976 requesting permission to climb. At that time both were closed to climbing, and we did not receive any response.

In 1980 China opened Tibet to climbing, and we received permission to climb Shisha Pangma in 1981, so the Bhutan Association temporarily shifted its attention to Shisha Pangma.

In October, 1982, the 50th UIAA Conference was held in Kathmandu. I was invited as a special guest, along with Yasuo Katō and Reinhold Messner. Among the representatives of many nations were 3 men dressed in the national costume of Bhutan. I approached one of them and asked him privately what had been happening to the letters we had been sending every year, and whether there was a chance that Bhutan would be opened to climbing. I asked for a response, even if only to indicate what prospects might be in the future. I was told, "many people have expressed interest in the mountains of Bhutan; let's meet again tomorrow to talk about it".

That same day I bought a map at a book store in Kathmandu, then went to a friend's house to borrow a typewriter to type a letter requesting permission to climb…just in case. Our meeting with the representative of Bhutan was finally held two days later, and it was attended by climbers from several nations interested in climbing in Bhutan. It was announced at that meeting that Bhutan would be open to climbing starting in 1983, every other year, with up to three expeditions permitted on each mountain. Climbing on Chomolhari Lari would not be permitted. The first peak to be opened would be one of the three in the Chomolhari group, Juchidrake (about 7,000 m).

I changed the name on my prepared letter from Chomolhari to Jichu Drake and handed it in. Permission to climb Jichu Drake in 1973 was granted on the spot. The rapidity with which he replied was actually a cause for worry. Without stopping to think I carelessly asked, "are you in a position to grant us permission right here ?" I learned then that I was speaking to Sigmi Churter, Director of the Bhutan Tourist Agency. At that meeting he also gave permits for other adventures which had not been permitted previously, including trekking to Tashgan and entering the newly opened region of Lvnana from Buitan.

Thus we received permission for the coveted first major mountain climb in Bhutan. We had little in the way of photographs or other information. The Bhutan authorities were also at somewhat of a loss as to what to do with their first climbing expedition, so we started our preparations with both sides groping.

From February 1983, Doruk Air started twice-weekly flights from Calcutta to Paro. We flew while our supplies went from Calcutta to Paro overland. We

decided to approach the summit from the gradual East Ridge which we could see sloping down gradually to the right. On Mr. Sigmi's advice we put our Base Camp in Jangothan (4,100 m).

Since the last stretch up to the summit is very steep, we took 1,000 m of fixed rope, but before we could climb that stretch we had to find our way up to it. At first we did not even know where the base of the ridge was. Was Jangothan even a suitable Base Camp after all? How would we get our supplies to Base Camp? How would we make contact with anybody if we needed to? There were so many elementary things that we didn't know.

In this pioneering spirit, our 12-woman expedition headed for the mountains of Bhutan in April 1983. In January, stunned by how expensive the climbing fee was, we managed to bargain it down by promising to bring all our own food during the climbing period. Our expedition was young, the average age of the members being 28.

April 28 we passed through Jangothan Rinshi and set our Base Camp up at 4,200 m. May 10 we set our Camp 3 up on the No. 3 Spire. We did not have enough fixed rope for portering supplies beyond that point, and we did not have much time left, so we decided to abandon the climb of Jichu Drake. From then until May 20 we obtained permission for a new attempt on another mountain and did some hiking nearby. On May 21 and 22 we climbed a lower mountain called Sepchu Kang.

First Ascent of K 7, 1984

Junji Nakamura

Tokyo University Ski and Alpine Club and its Alumni Club sent an expedition party to K 7, 6,934 m in 1984. The objectives were to climb up to K 7 and to research glaciers and high altitude deterioration.

On lst June 1984, 4 members and on 8 th June 4 members left Japan. On 10 th June we left Rawalpindi with about 2.0 ton of equipment. From Skardu they traveled in one jeep and two tractors and reached Machulu in the Hushe Valley on 14 th June. There we employed 78 porters, with liaison officer; Captain Changes, mail runner; Mr. Ibarasha and a cook, Mr. Mekbansha.

On 19 th June our Base Camp was constructed beside Charaksa Glacier at an altitude of 4,400 m. We hired no high portors.

K 7 had been attacked by 6 parties before via routes from the northern ravine, southern ravine, central ravine and left glen. However, all parties had failed

to ascend K 7.

We chose the south-west ridge which seemed to take much time but to be safe. We prepared 6,500 m of fixed rope, 450 of pitons, bolts, friends, nuts, ice pitons and our hand-made large pipe chocks of length and diameter 30 cm and 8 cm respectively.

At first we chose the center glen of about 10 m width and inclination about 45 degrees. In front of this center glen, we established Advanced Base Camp at an altitude of 4,650 m. Two members climbed up the glen conquering several ice falls and constructed Camp 1 and Camp 2 at altitudes of 5,350 m and 5,780 m respectively. On 15 th July, Camp 3 was estalibshed on the south-west ridge at an altitude of 6,090 m.

Above Camp 3 there was a big vertical wall named a castle having overhanging chimney and cracks. After spending several days at Base Camp because of bad weather, they attacked this castle wall, and on 24 th July they reached the first step that is the top of castle wall. From here to Camp 4 at an altitude of 6,310 m, a traverse route was chosen because of steep pinnacles and cornices. It was very hard to traverse with double axes and heavy load. Above Camp 4 snow face guided us to Camp 5 at an altitude of 6,550 m.

We were very lucky to have fine calm weather hold for almost two weeks. In front of us stood our last difficulty of which inclination was about 70 degrees and height was about 150 m. Three members attacked this mixed wall and climbed up to a snow slope with several pinnacles. E. Mitani, A. Kamizawa and M. Takenaka climbed up a snow or ice slope, detouring around these pinnacles. And at 15 : 45 LT on 8 th August, they reached the summit of K 7 at an altitude of 6,934 m, the first ascent of this peak. The second was made by T. Nagata, A. Chiba and M. Matsuda the following day. From K 7 summit we viewed K 2, Gasherbrum, Chogoliza, Sia- and Baltrogroups, Saltoro Kangri, Link Sar, K 6, Masherbrum and Muztagh Tower.

Glacier research also succeeded in clarifying the difference between Karakoram and Nepal glaciers. The detailed results will be published as "Reports of Tokyo University Karakoram Research Expedition, 1984".

Summary of Statistics

Area : Kondus Group, Pakistan.

Ascent : Ascent of K 7, 6,934 m for the first time and the second time from south-west ridge. The summit reached on 8 th August, 1984 by Mitani, Kamizawa and Takenaka, and on 9 th August by Nagata, Chiba and Matsuda.

Personnel : Prof. Emeritus Junji Nakamura, General Leader, Toichiro Nagata,

Leader, Eizō Mitani, Atsurō Chiba, Akira Kamizawa, Makoto Takenaka, Dr. Michiyuki Matsuda, doctor and Aya Nakamura, surveyor.

山岳地帯における自然エネルギー利用の実用化へ向けて

The Practical Use of Natural Energy in the Mountain Area

鳥居　亮
森　武昭
富田英雄
重村　清
池田　実
今田英雄
神　憲明

1. まえがき

登山者にとって，山小屋は，単なる宿泊施設ではなく，安全を確保する上で欠くことのできない施設であることは言うまでもない。しかるに，山小屋で，電源が十分確保されることは，単に明るい電灯が得られるだけでなく，気象情報の確実な入手，無線電話回線の確保など，登山者の安全にとって飛躍的に貢献できる可能性を含んでいる。

電力会社の商用配電線の全く届かない山小屋の灯としては，1950 年代までアルコールランプに頼っていた。その後，1960 年代の登山ブームを期に，発動発電機を導入する山小屋が数多く出現し，今日に至っている。

アルコールランプは，必要最低限の灯を確保できるが，十分な明るさが得られない上に，前述のような情報入手は難しい。一方，発動発電機は，電灯，情報入手のための電源として非常に大きな威力を発揮しているが，燃料の重油または軽油は，平地より割高となるし（ヘリコプターで荷揚げする例が多い），騒音などの問題が指摘されているのは周知の通りである。また，発動発電機の保守は容易でなく，担当者の苦労は並大抵でない。例えば，部品交換といっても平地のようなわけにいかないし，ましてや専門技術者の派遣となるといろいろな難しい問題が生じてくる。

そこで，著者らは，以前から自然エネルギー利用による電源確保に興味をいだいていた。すなわち，穂高岳山荘では，1961 年，先代の今田重太郎によって，風力発電を試みている[1),2)]。そして，1977 年に再度風力発電を手がけ，1982 年から幾徳工大との協同研究を開始し，プロペラの性能向上などで成果を収めた。一方，太陽光発電も 1984 年から実用化試験を実施し，僅か 2 年間で多大の成果をあげ，同山荘では実用化に成功した。

本報告では，これらの自然エネルギー利用の発電に関する意義，実験内容と成果，今後の課題と見通しについて述べる。

2. 自然エネルギー利用の実用化の意義[3)~7)]

自然エネルギーを利用したものとしては，風力，太陽光，水力及びこれらの複合方式などがある[8),9)]。これらの自然エネルギー利用の最大の特長としては，

（1） クリーンなエネルギー源である

（2） 燃料が不要で，エネルギー源は無尽蔵である

の2点をあげることができる。山岳地帯における自然エネルギー利用の実用化は，なんといっても自然との調和に立脚したクリーンエネルギーという点で大きな意義をもっている．すなわち，発動発電機のような騒音と油煙から解放されるメリットは，自然を求めて入山してきた登山者にとってかけがえのないものと思われる。また，燃料を必要としないメリットも山小屋の関係者にとっては大きな魅力である。

風力・太陽光などによる発生電力は，バッテリーに充電し，必要に応じて負荷に電力を供給するシステムで構成される。従って，実際に使用する側の立場からすると，次のような長所をあげることができる。

（1） 保守をほとんど必要としない。

（2） 使用したい時に，いつでもスイッチ1つで使用することが可能である。

（3） 電源の確保により，無線電話，ファクシミリ，テレビなどを必要に応じて使用できるので，気象情報はもとより，必要な情報を受けることも送ることも可能である。穂高岳山荘では，気象情報用ファクシミリを設置し，登山者に気象情報（高層気象を含む）を提供している。

例えば，日の出前の早朝，山小屋の従業員が暗い中を発電機を始動させにいく苦労も解消するし，登山者も騒音に睡眠を妨害されることもなくなるわけである。

以上述べたように，自然エネルギー利用の実用化は，自然との調和を前提としている上に，山小屋の従業員にとっても登山者にとっても多くの長所をもっている点で意義深いものと言える。

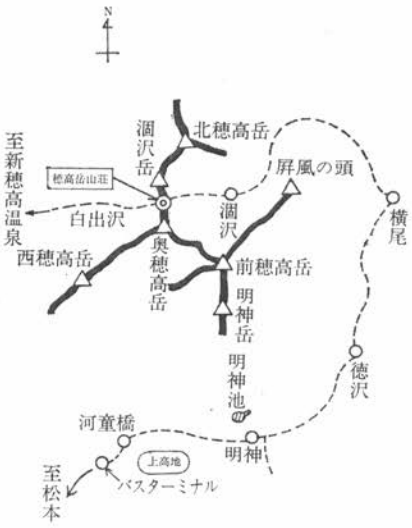
このような多くの利点を有する自然エネルギー利用の実用化へ向けて，著者らが北アルプス穂高岳山荘でおこなってきた実験内容と成果を次章以降で述べる。

3. 実験場所と周囲の状況

現地実験をおこなった穂高岳山荘は，図—1 に示すように，北アルプス穂高連峰の白出のコル（標高 2,996 m）に位置し，収容人員 350 名の比較的大規模の山小屋である。南には，本邦第3の高峰奥穂高岳（3,190 m），北には涸沢岳（3,103 m）がある。山荘は，東西の風の通路になっており，飛騨の白出側から信州の涸沢側に吹く西風が 90% を占めている。風車を設置している山荘の西面は，V字形の白出沢が眼下に展開し，約 30 度の傾斜面に沿って上昇する風は，次第に絞られて強い西風となる。風向がほぼ一定しているため，風力発電にとっては理想的な場所と言える。

一方，前述したように南北に高峰をひかえているが，山荘自体が約 1,000 m² と広いため，屋根に太陽電池を設置すると，日差しをさえぎる物は，何も存在しない。

図—2 (a) は，奥穂高岳側から見たもので，手前に風車があり (図—2 (b) 参照)，屋根の上に太陽電池が設置されている (図—2 (c) 参照)。発生電力は，手前 (南側) の部屋にある制御及びバッテリーなどの装置を介して，電灯などの各負荷に接続されている。同山荘の電気設備としては，照明の他に，無線電話，テレビ，気象情報用ファクシミリ，掃除器，洗濯機，ボイラー操作電源，ステレオなどがあり，最大負荷は約 5 kW であり，山小屋としてはかなり大きな電力を必要としている。この最大負荷電力をすべて自然エネルギーで賄うことは，現段階では困難であるが，登山者の多い 7 月下旬～8 月中旬を除いた期間は，ほとんど発電機に依存することなく，自然エネルギーだけで賄っている。なお，自然エネルギーによって得られる電気は直流であるため，負荷はなるべく直流で使用できる機器を使用している。これは，一般に家庭で使用されている交流機器を用いると，直流から交流に変換する際に約 30% が損失となるためである。また，同山荘は冬期 (11 月中旬～4 月中旬) は閉鎖している。この期間は，気象条件も厳しいので，プロペラ，太陽電池ともに撤去し，屋内に収納するようにしている。

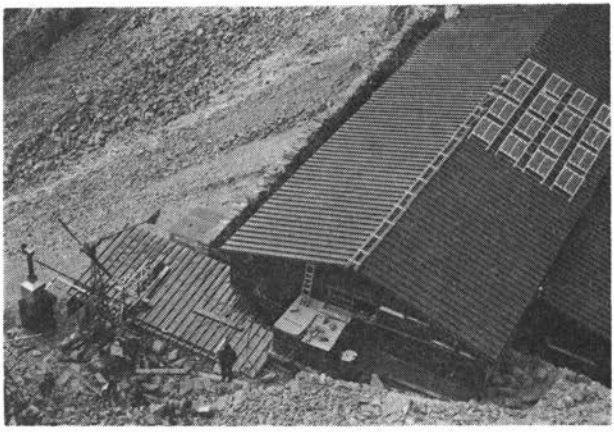


図—1 実験場所：穂高岳山荘
Fig. 1 Location of Hotakadake-Sanso Hut carrying out our experiments

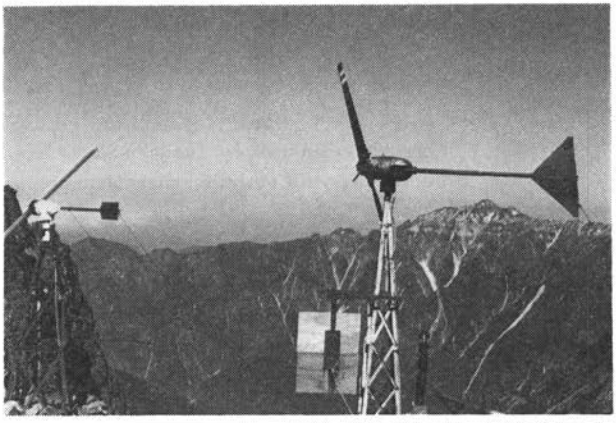
4. 風力発電[10)~14)]

幾徳工大では，1977 年に研究用として，スイスから輸入した風力発電装置のオリジナルのプロペラの性能が，空気力学上不十分であったので，試作のプロペラについて風洞実験を重ね，かなりの成果を収めていた。1980 年 12 月，ヒマラヤのバルンツェ峰 (7,220 m) に初登頂した北大登山隊は，ベースキャンプ (約 5,000 m) において初めて風力発電に成功したが[15)]，そのプロペラは，著者らが 1979 年に試作研究したプロペラ (直径 3 m の 2 枚翼，断面形状 Clark Y，ねじりあり) に基づいて製作されたものであった。

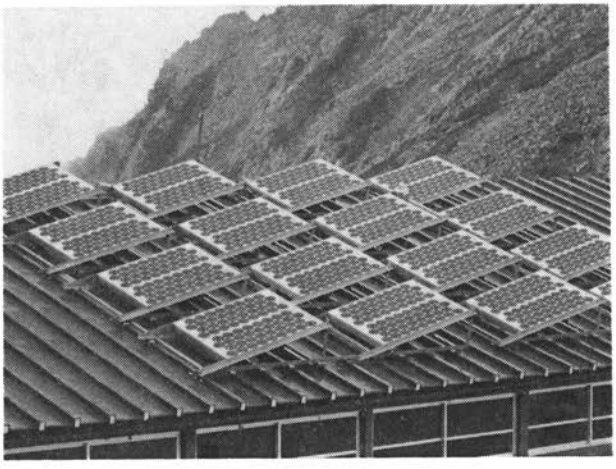
一方穂高岳山荘では，1961 年，双六，笠ヶ岳，南岳の各小屋と風力発電を試みたことは前述の通りであるが，1977 年に本格的に風力発電を手がけ，数年にわたり種々のア



図—2 (a)
穂高岳山荘
Fig. 2 (a)
Hotakadake-Sanso Hut



(b) 風車
(b) Windmill



(c) 太陽電池
(c) Solar cells

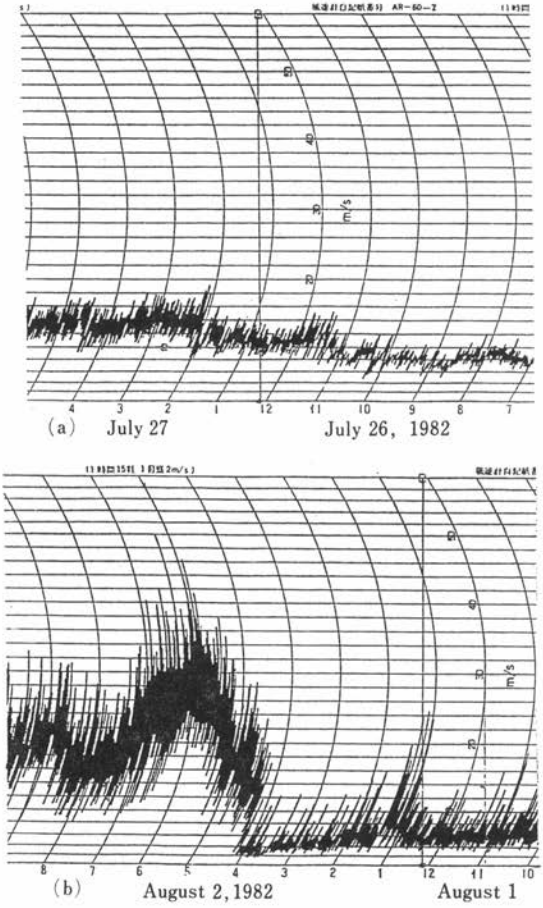
イデアと試行錯誤を繰り返した。風が制限速度を超えると，プロペラは過回転して発電機は焼損するので，レールの上に風車を積んだ台車をのせ，風が強ければ台車は後退して強風を避ける方法もとられたが，レスポンスが遅いこと，台車がレールから外れることがあるなどのため，実用には至らなかった。結局，風向がほとんど一定しているため，12～13 m/s 以上の強風時には 80 cm 平方程度の風圧板の作動により，プロペラは風の方向からそれて強風を避ける原始的な方法により，実用化に成功したのである。

偶然にも幾徳工大，穂高岳山荘とも同種の風力発電装置（出力 1,200 W）を使用していたのであるが，本会元副会長故折井健一氏の紹介により[5]，1982 年より穂高岳山荘において両者の協同研究として，性能向上に関する研究実験を開始した。

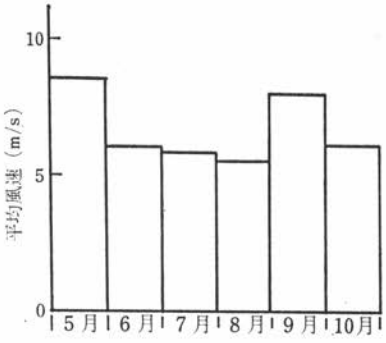
4.1 7月，8月によく廻るプロペラ

風力発電装置の脇に設置した自記風速計の記録を図—3 (a)，(b) に示す。図—3 (a) は良い風が得られる平常の状態である。台風時には東風が強く吹くが，山荘の上を通って風車にはほとんど当らない。台風の後には西風の強い吹き返しがあって，風速は激しく変化し，図—3 (b) のように 1982 年 8 月 2 日には瞬間風速 50 m/s に達している。**図—4** は同山荘の営業期間内の 5～10 月における 3 年間の月間平均風速を示す。

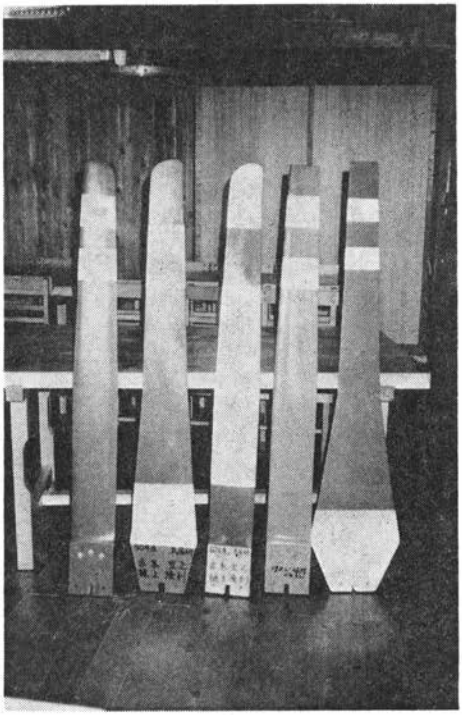
登山者の多い 7 月下旬～8 月中旬は風は 1 年中でいちばん弱いが，電気は最も必要な時期であるので，弱い風にもよく廻るプロペラを設計の重点項目とし，プロペラの断面形を選択し，適切なねじり角を計算し



図—3 自記風速計の記録 (a) 平常の状態 (b) 嵐の状態
Fig. 3 Record of anemograph (a) in calm (b) in storm



図—4　月間平均風速（1982～1984）
Fig. 4　Mean velocity for each month (1982～1984)



図—5　プロペラ
Fig. 5　Propellers

た。プロペラは木製で直径 3 m の2枚翼とし，設計目標値は風速 8 m/s の時，回転数 375 rpm，出力 400 W とした。各断面における弦長の最適値をも計算し，最大弦長は 150, 225, 300 mm の3種類とした。木製プロペラには FRP（硝子繊維入り強化プラスチック）の被膜が巻いてあるが，それでも 30～40 m/s の突風には弱く折損することもあるので，(株)エコーの協力により全 FRP のプロペラも試作した。実験に使用した一部のプロペラを図—5 に示す。

4.2　現地における実験

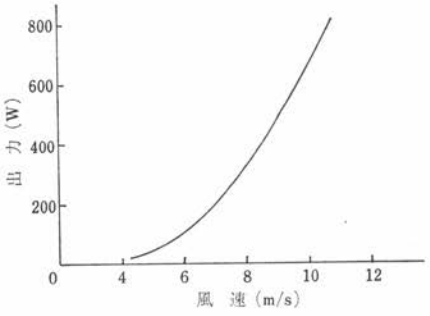
実験は毎年 7～9 月におこない，断面形状 NACA 23012 を採用したプロペラ（ねじりあり）はオリジナルのプロペラ（ねじりなし）を使用した場合に比べて，初年度（1982年）には2倍の出力を得た。これはプロペラ断面形の空力性能に差のあること，及び断面のねじり角の有無によるものと思われる。次年度（1983 年）には2倍半の出力を得た。これはプロペラの設計計算の基本条件である回転数の推定が正しかったことを示している。

最大弦長 225, 300 mm のプロペラは低風速で始動する特性を示した。全 FRP のプロペラは木製のものより軽くて性能もすぐれ，強風時の使用にも十分耐えることが確認された。

この他，7，8 月以外の電気の需要の少ない期間においては，直径 2.5 m のプロペラの使用により，強風対策が可能であることも実証された。

風速と出力の関係を図—6 に示す。出力が目標値に達しなかったのは，平地に比べて空気密度の低いこと，風速がたえず変化していること，山岳の斜面に沿って上昇する風はプロペラの回転面に直角に当たらないことなどのためと思われる。

以上の実験より，風の弱い場合に有効なプロペラの開発に成果が得られるとともに，強風時の対策にも一応の見通しを得ることができた。

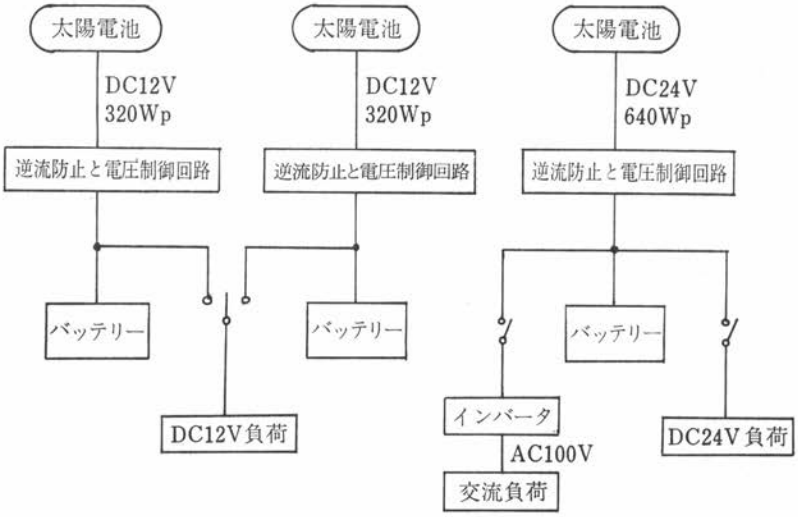


図—6 風速と出力の関係
Fig. 6 Output power vs. wind velocity

5. 太陽光発電[6)]

登山者が最も多い7月下旬～8月中旬は，気候が安定しているため，無風状態の日が多く，前述のようなプロペラの改良をおこなっても多くを期待できない。そこで，1984年から，風力発電を若干でも補充するために，太陽光発電の実用化試験をおこなった。

太陽電池モジュールは，シリコン単結晶で定格 16.3 V，80 W（最大）のものを，1984 年は 4 セット，1985 年は 16 セット（図—2 (c) 参照）を屋根の上に設置した。据え付けにあたっては，台風のような強風が予想されるため，ステンレスワイヤの張線を組み合わせて強度をもたせるとともに，冬期に取りはずすのを容易にするためターン



図—7 太陽光発電のシステムダイアグラム
Fig. 7 System diagram of solar cell generation

バックルを用いるなどの配慮が施されている。太陽光発電システムの概要は，**図—7** の通りである。なお，直流負荷は，24 V 系のものと 12 V 系のものと２通りある。また，12 V 系は電流が大きくなり，バッテリーへの急激な充電を避けるため２つの系統に分けている。さらに，同山荘では，従業員が朝夕バッテリーの液の比重及び充電電圧を測定して充電状態をチェックしているため，エネルギーの有効利用を考えて，電圧制御部分を除去したシステム構成にも切り換えられるようにしている。山小屋では，平地と違って，なるべくシステム構成を簡単にして，従業員が理解しやすいように留意することが重要である。

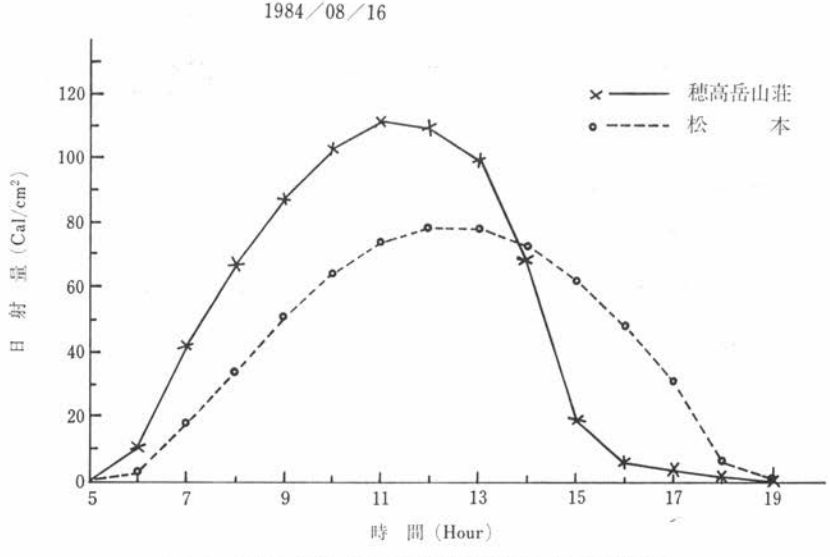
著者らは，1984 年から，日射量と太陽電池出力を測定しているが，以下にその結果を述べる。

（1） 穂高岳山荘と松本での日射量の比較

山岳地帯での日射量を測定したデータはほとんど見当たらない。そこで，著者らは，穂高岳山荘において日射量を測定し，気象庁から公表されている松本（標高 600 m）のデータと比較

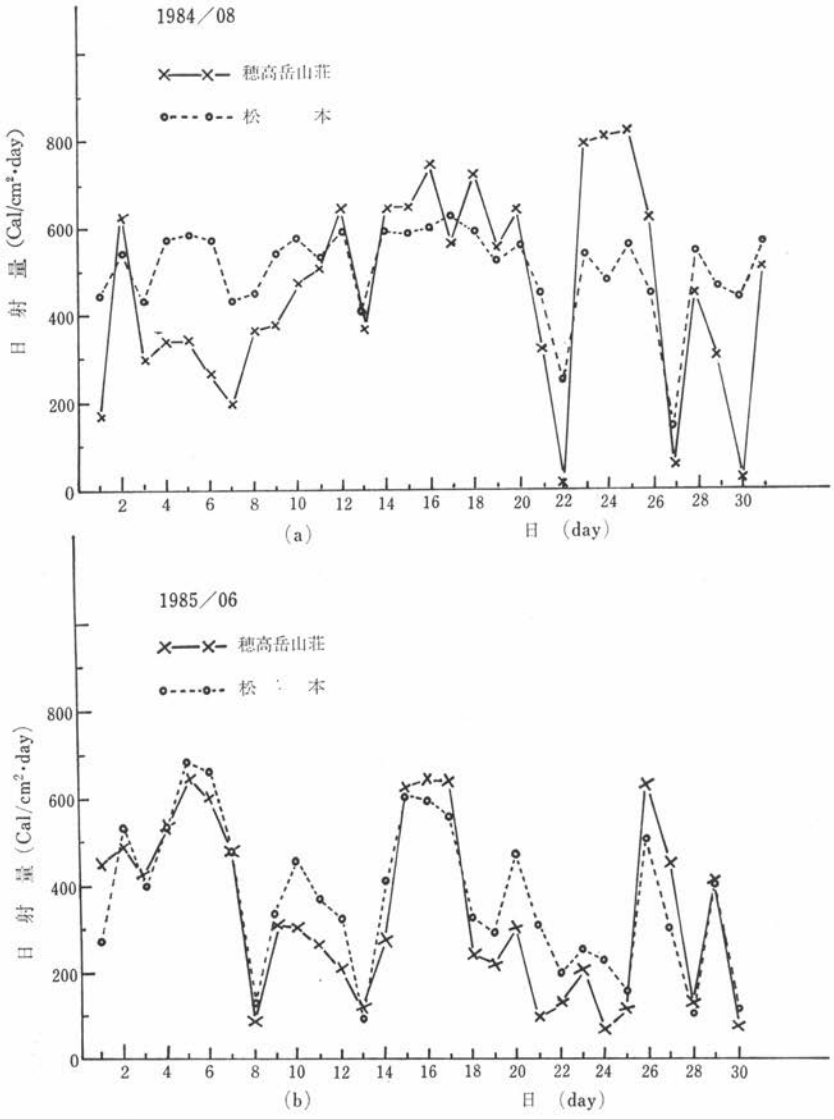
表—1 穂高岳山荘と松本の日射量の１カ月平均の比較
Table 1. Comparison between mean radiations per month at Hotakadake-Sanso and Matsumoto

年 月	１日の累計の月平均 穂高／松本	１日の最大値の月平均 穂高／松本
1984 年 8 月	0.97	1.23
1984 年 9 月	0.94	1.05
1985 年 6 月	0.89	0.90



図—8 穂高岳山荘と松本の日射量の比較（１日の時間変化）
Fig. 8 Comparison between the radiations at Hotakadake-Sanso and Matsumoto (radiation vs. time)

した。1日の特性の代表例が図—8 であり，1日の累計について図示すると図—9 の通りである。また，月平均で1日の累計及び最大値を松本を基準として求めると表—1 の



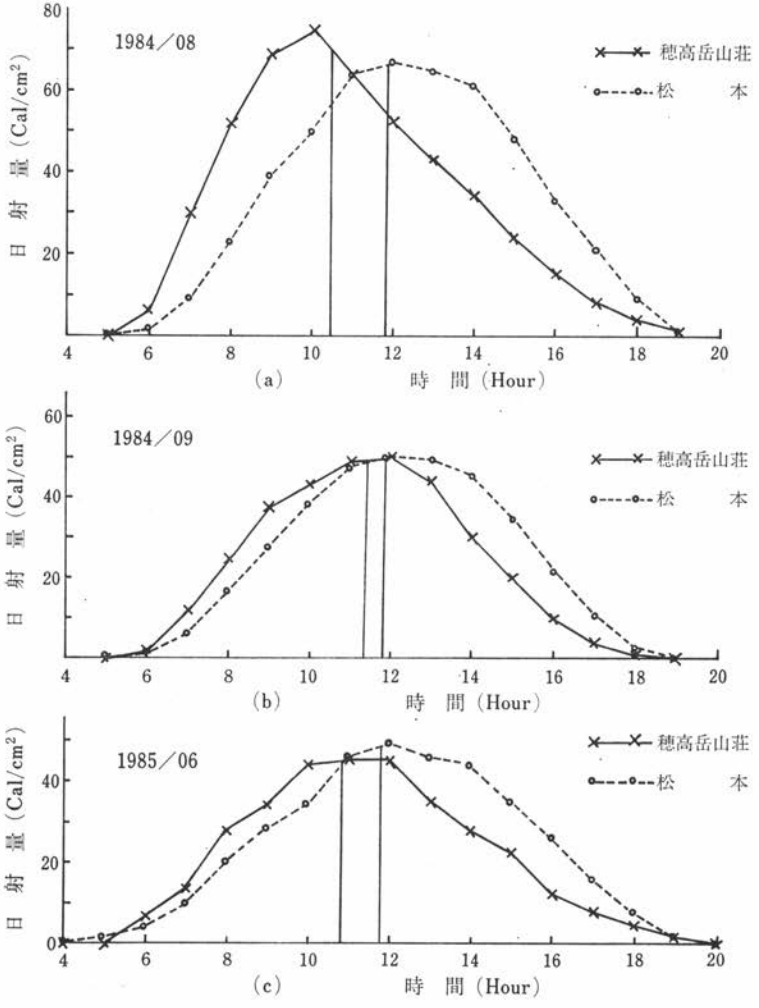
図—9 穂高岳山荘と松本の日射量の比較（1日の累計の変化）

Fig. 9 Comparison between the radiations at Hotakadake-Sanso and Matsumoto (total radiation vs. day)

ようになる。これらの結果より，次のような点が明らかとなっている。

① 1日の日射量の1時間当りの最大値で比較すると，6月を除くと全体として若干穂高の方が大きい。これは，山岳地帯の方が空気が澄んでいて，太陽エネルギーの伝達損失が少ないためと思われる。特に，8月には，約 23% 穂高の方が大きい点が注目される。

② 1日の日射量の累計で比較すると，バラツキは大きいものの，月全体で見るとほと



図—10 日射量の時間変化の月平均

Fig. 10 Mean radiation per month for each one hour

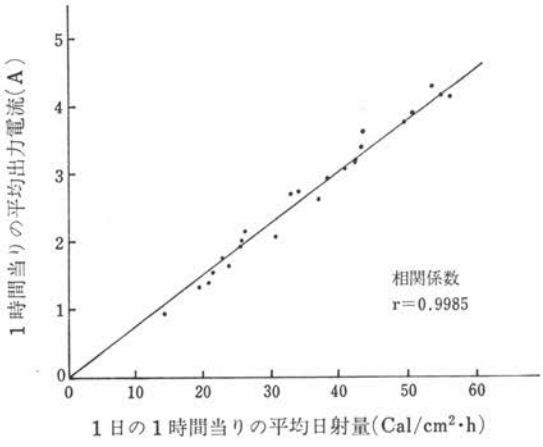
んど等しい結果になっている。この理由は，日射時間はローカルな気象条件に大きく影響され，山岳地帯では厳しい条件になる。従って，①で述べた日射量の強さでは，山岳地帯の方が有利なため，1日の日射量の累計としては，ほぼ等しくなっているものと思われる。

（2） 日射量の時間変化

図—8 でも判るように，松本の日射量のデータは，ほぼ 12 時を中心に左右対称になっている。これに対して，穂高のデータは午後になると急激に低下している。これは，山岳地帯では午後になると気象条件が不安定になることを裏付けている。そこで，各1時間単位の日射量の月間平均を求めたものが **図—10** である。穂高のデータで左右の面積が等しくなる時刻は，1984 年8月は 10 時 30 分，9月は 11 時 20 分，1985 年6月は 10 時 47 分になっている。これに対して，松本では，いずれも 11 時 50 分になっている。これは，前述した理由が，真夏時の8月により顕著に現われるためで，一般的通念と一致している。

（3） 日射量と太陽電池出力

実験場所は，標高 3,000 mで，最高気温は約18℃なので，太陽電池としては安定した特性が得られる。すなわち，1日当りの平均日射量と太陽電池出力の関係を示すと**図—11**となり，ほぼ直線関係が成り立っている（相関係数 $r=0.9985$）。1日の1時間当りの平均日射量は，20～35 Cal/cm²·h なので（図—8～10 参照），太陽電池1セットの1時間当りの平均出力電流は，1.5～2.7 A となる。従って，1時間当りの平均出力は約 25～45 W となる。すなわち，最大出力の 30～55% の平均出力が得られることになる。これより，負荷の電力量に対して必要な太陽電池のモジュール数の概略を把握することが可能である。

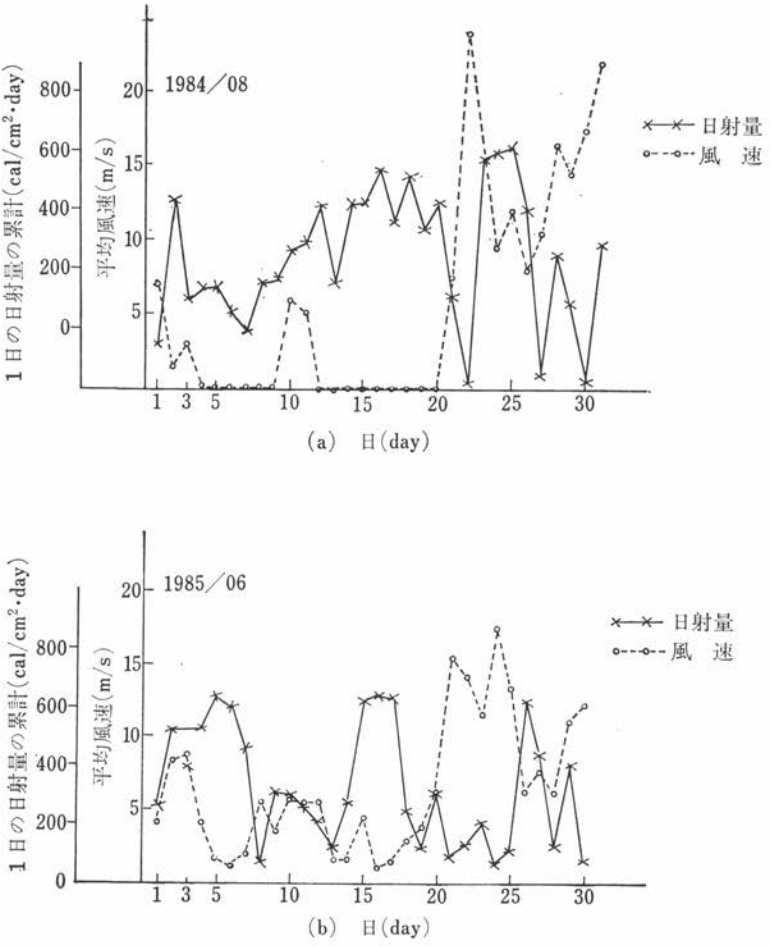


図—11 日射量と太陽電池出力の関係

Fig. 11 Output current per hour per module vs. mean radiation per hour

*

以上の結果より，山岳地帯で太陽電池を設置する場合には，午前中により多くの発電を可能とするような配慮が必要であり（特に登山者の多い夏期），その他は，ほぼ一般的なシステム設計と同じでよいものと思われる。これらの点に関しては，今後とも多くのデータを蓄積して，システムの最適設計に努めていきたいと考えている。



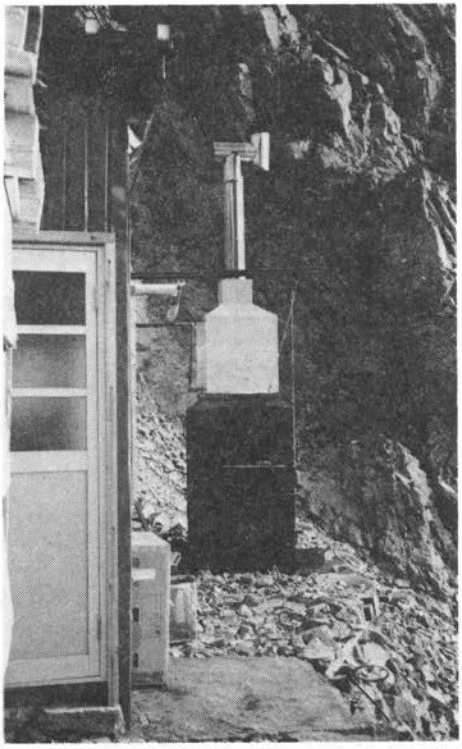
図—12　穂高岳山荘における日射量と風速の関係

Fig. 12　Relation between radiation and wind velocity at Hotakadake-Sanso

6. 風力・太陽光の複合利用[6]

風力と太陽光の複合利用に関する検討は，平地においては報告されているが[8]，山岳地帯については皆無と思われる。山岳地帯においては，「天気が良ければ風は余り吹かず，天気が悪ければ風が吹く」という傾向がより顕著なものと考えられ，風力と太陽光はお互いに補完関係にあり，合理的なシステム設計をおこなうことが可能と思われる。図—12 は，穂高岳山荘における1日当りの日射量の累計と平均風速の測定結果を示している。1984 年8月をみると，上・中旬は天候が安定し，太陽光発電にとって有利であるが，下旬になると，風力もかなり得られている。一方，1985 年6月をみると，風速の強い日には日射量が少なく，風速の弱い日には日射量が多いという傾向が顕著に現われている。まだ短期間の測定ではあるが，風力と太陽光には，かなりの補完関係が示されており，両者の複合利用システムは，有効な方法になり得るものと思われる。

配電線が届かない山岳地帯では，独立電源となるため，風力・太陽光を複合利用した場合に，お互いの補完関係が顕著でないと，合理的なシステム設計をおこなうことができない。そこで，著者らは，図—12 のように，穂高岳山荘における実験結果から，風力・太陽光の複合利用について，かなりの見通しを得ているが，今後とも日射量・風速，お互いの発生電力を長期にわたって測定し，定量化していきたいと考えている。



図—13 焼却炉
Fig. 13 Combustion furnace to burn trash

7. その他の自然エネルギー利用

7.1 水力発電

北アルプスでは冬期多量の積雪があり，夏期には雪解け水になるので，超ミニ水車（1,000 W 程度）による発電の適地はかなり多いものと思われる。

風力発電は，発電に適する風（風向一定で風速 8～12 m/s）が常に得られるわけではないし，太陽電池も昼間のみ有効でかつ日射時間は天候に左右される。これに対して，水力発電は水量さえ確保できれば，24時間一定の電力が得られることが最大の特長である。著者らの試算によれば，同じ出力の風力と水力とを比較すると，水力は風力の約 10 倍の電力量を得ることができる。

（1） 白出小屋

標高 1,500 m の白出小屋においては，1981 年，今田英雄手作りの水車（ペルトン形式）により 200 W 発電し照明に使用した。1983 年，渦巻ポンプの逆回転により 120 W 発電したが，その後無人となり，いずれも撤去した。

（2） 槍平小屋

標高 2,000 m の槍平小屋においては，1981 年，ペルトン水車により 200 W 発電し，現在使用中である。1982 年，同形の ペルトン水車により 1,200 W 発電した実績があるが，現在使用されていない。

7.2 焼却炉

穂高岳山荘においては，**図—13** に示すように，登山者の残したゴミを風を利用した焼却炉の開発によって完全燃焼させ，発生した蒸気を熱交換して，従業員用の風呂を沸かすことに成功している。

8. その他の山小屋における実験

8.1 双六小屋

標高 2,600 m の双六小屋においては，1985 年 7 月から 8 月にかけて，**図—14** に示すように太陽電池 4 セット 320 W と風力発電装置 200 W を設置し，データ計測中である。発生した電気はバッテリーに充電され，無線電話，照明，常夜灯，営業無線などに利用されて，成果をあげている。さらに雪渓の雪解け水による超ミニ水力発電を計画



図—14 双六小屋の風車と太陽電池

Fig. 14 Windmill and solar cells in Sugoroku-Goya Hut

している。

8.2 笠ヶ岳山荘

標高 2,800 m の笠ヶ岳山荘においては，1985 年 7 月太陽電池 2 セット 160 W を設置し，照明に使用している。近く風力発電装置 200 W を設置する予定である。

9. 今後の動向と課題

山小屋での電力源の確保として，本報告で述べた風力・太陽光を中心とした自然エネルギー利用は，なんといっても自然との調和の上に立ったクリーンエネルギーという点で大きな意義をもっている。その上，第 2 章でも述べたように，山小屋の従業員にとっても登山者にとっても多くの利点が考えられる。それ故，今後多くの山小屋で採用されていくものと期待され，平地よりも一足先に山岳地帯でのエネルギー革命が起こることも決して夢ではない。そこで，自然エネルギー利用の実用化へ向けて，今後さらに検討すべき課題をあげれば，次の通りである。

① 山の上では，修理などが簡単におこなえないので，できる限り装置を省略して簡単なシステム体系にすること。例えば，定電圧装置を挿入しないで，寿命をある程度犠牲にしても電圧変動の吸収をバッテリーに負担させる。

② 台風時のような気象条件の厳しさにも損傷をきたさないような耐候性への特段の配慮。

③ 負荷をなるべく直流とし，やむを得ないもののみ小型インバータを設置して交流利用するような負荷システムとする。これは，インバータを用いると効率が低下する上に，故障時の対応が難しいためである。直流で使用できる負荷としては，照明，無線電話，テレビなどがある。

一方，各発電方式の採用にあたっては，次の点を十分考慮する必要がある。

④ 風力発電は，風向が一定で比較的安定した風速（10 m/s 前後）が得られること。風力発電のいちばん難しい点は，強風時の過回転をいかに防ぎ，回転数を安定させるかである。

⑤ 太陽光発電は，山など周囲の物体に妨害されることなく日照が確保できること。太陽光発電システムは，保守をほとんど必要としないが，初期投資額が大きいので，実用化にあたっては最適設計などについて十分な検討が必要である。

⑥ 複合利用にあたっては，お互いの補完関係が十分でないと余り意味をなさないので，実用化に際しては特に留意する必要がある。

従って，山岳地帯で自然エネルギーを利用した発電システムを実用化する場合には，上述した特徴と立地条件を十分考慮して，複合利用を含めた合理的なシステム設計を検討することが重要である。特に太陽光発電は保守などが容易であるため，今後多くの山小屋で実用化されるものと思われる。

10. あとがき

著者らが，ここ数年取組んできた自然エネルギー利用の実用化研究は，多くの制約条

件や厳しい気象条件の中で，確実に成果を収め，実用化への見通しを得るに至った。そして，新聞などで報道されたこともあって，大きな反響を呼んでいる。著者らは，第2章で述べたように自然エネルギー利用の実用化の意義は大きく，特に山岳を愛する人間として，多くの山小屋に普及していくことを望むものである。そのためにも，第9章で述べた今後の課題に取組んでいきたいと考えている。

終りに，本研究を進めるにあたってご支援いただいた幾徳工業大学，穂高岳山荘などの関係各位に深く感謝の意を表します。

＜参　考　文　献＞

1) 今田重太郎：「穂高に生きる」，読売新聞社　p. 112　(1973-8)
2) 神憲明：「穂高は生きている」，じやこめてい出版　p. 83　(1985-5)
3) 「自然エネルギーの活用で山小屋の省エネ進行中」，山渓情報版 '84 Summer No. 2, p. 2　(1984-7)
4) 「標高 3,000 m のクリーンエネルギー」，岳人 '84-12 (450 号)　p. 97 (1984-12)
5) 鳥居亮：「自然エネルギーの利用について」，山（日本山岳会会報）　478 号　p. 1 (1985-4)
6) 鳥居・池田・森・富田・重村・今田・神：「山岳地帯における自然エネルギー利用(風力・太陽光ハイブリッド)」，太陽エネルギー（日本太陽エネルギー学会誌）　11 巻4号 p. 35　(1985-7)
7) 「山小屋の電源に心強い味方　ソーラーシステム」，山と渓谷 '85-10 (596 号)　p. 239 (1985-10)
8) 金子譲：「太陽光・風力補完発電システム」，太陽エネルギー　8巻1号　p. 26　(1983-11)
9) 小特集「自然エネルギー利用技術の開発動向」　電気学会雑誌　105 巻3号　p. 203 (1985-3)
10) 鳥居・榊原・根本・大矢：「風力エネルギーに関する研究（第1報　水平軸風車)」，幾徳工業大学研究報告　B-7 巻　p. 129　(1983-3)
11) 「穂高岳山荘の風力発電」　岳人 '83-10　p. 34　(1983-10)
12) 鳥居・榊原：「穂高岳山荘における水平軸風車プロペラの実験的研究（第1報)」，風力エネルギー（日本風力エネルギー協会誌）　7巻2号　p. 23　(1983-12)
13) 鳥居・榊原・今田・神：「風力エネルギーに関する研究（第2報　水平軸風車の穂高岳山荘における実用実験及び風車プロペラの設計)」，幾徳工業大学研究報告　B-8 巻 p. 93　(1984-3)
14) 鳥居・榊原・池田・今田・神：「穂高岳山荘における水平軸風車プロペラの実験的研究（第2報)」，風力エネルギー　9巻1号　p. 23　(1985-6)
15) 北大山岳部・北大山の会：「バルンツェ厳冬期登頂報告 1980/81」，北大山の会 p. 99, 122　(1982-3)

The Practical Use of Natural Energy in the Mountain Area

Akira TORII, Takeaki MORI, Hideo TOMITA,
Kiyoshi SHIGEMURA, Minoru IKEDA,
Hideo IMADA and Noriaki JIN

Once many mountain huts used only alcohol lamps for lighting since electricity was not available; however, with the mountaineering boom around 1965, many huts introduced an engine-generator system. Though it is possible to get the minimum lightness from alcohol lamp, the lightness of the lamp is not satisfactory. In addition, it is impossible to use for various purposes. In this sense, an engine-generator system makes it possible to be used for many ways including the use of lighting, radio-telephone, etc., and the system enables to offer important information such as weather forecast. However, the use of fuel oil is expensive because it must be transported to the high mountains. Moreover, as it has been pointed out, the noisy sound is an annoying problem. Also maintenance of the system is not easy.

Over the few past years, the authors have researched the practical use of new generating system using natural energy of the wind and the solar. From our research, we have obtained many successful results; at the same time, we have confirmed that there is a perspective to put the system into practical use. The most significant point of the system is to use clean energy based on harmony with nature. It means that hikers from towns, who seek tranquility, are free from the noisy sound and smoke on the engine. Our system has another merit; it does not need fuel at all, and the source of energy is unlimited. The generated power by the wind and solar cell is charged to storage batteries, and is supplied to load when it is necessary. Therefore, the system has the following merits:

1. free from maintenance.
2. when necessary, always available by only using a handy switch.
3. by having a electric power source, it is always possible to send and receive the needed information by using radio-telephone, facsimile, TV..

Our experiments have been carried out at the Hotakadake-Sanso Hut (2,996 m) on the col of Mt. Oku-Hotaka in the Japan Alps. As shown in Fig. 2 (a), the wind power generation system (output power : 1,200 W and 600 W) was set

on the south side facing the west since 90% of the wind comes from this direction. Sixteen solar cells (maximum output power : 80 W×16=1,280 W) were placed on the roof of the hut. From our experiments, we obtained the following results :

1. in case of the weak wind, by developing of the effective propeller 2.5 times of output power was obtained as compared with the original propeller.
2. by using the FRP (Fiberglass Reinforced Plastics), the damage of the propeller was not caused even in the strong wind.
3. in the mountain area, the design of solar system must be planned to obtain much power during the morning because in the afternoon radiation has a tendency to reduce, as our date indicate.
4. radiation is rather strong in the mountain area ; however, in relation to the fact mentioned above (3), the total amount of radiation per day shows almost the same as Matsumoto City which lies on the flat-land (600 m).
5. average output of solar cells is almost 30~50% of maximum power.
6. wind energy and radiation show a clear compensatory relation ; therefore, the hybrid system of them is expected to develop a fairly reasonable system.
7. heat obtained by burning trash in the combustion furnace was effectively used for the bath for workers of the hut.

As mentioned above, the authors have a clear prospect of practical use of natural energy. We hope that in the future, many mountain huts adopt this energy system. The following points should be notified :

1. the system should be simple as much as possible.
2. weather durability must be particularly taken into consideration.
3. the d.c. (direct current) load should be used as possible.
4. the windmill must be set where the direction and velocity of the wind are stable.
5. solar cell generation must be fully investigated as regards cost and optimum design.
6. as for the hybrid system, it is advisable to research the compensatory relation between wind energy and solar power.

In the practical use of natural energy in the mountain area, it is important to examine the reasonable system plan considering the characteristics and the location of the system.

MIZUNO
THE WORLD OF SPORTS

背中にも、S・M・L。

あらゆる体型に対応する
調節システム完備の
〈ベルグ〉アタックザック、新登場。

100人いれば100人とも違う体つき。背中のサイズだって、長短いろいろ。それに対応できるアタックザックの登場です。かつぎやすさを決定するディスタンスを、背負う人の背中に合わせてワンタッチで調節できるシステムを搭載。加えて、負バンド連結テープと雨ブタ調節ストラップが重心位置を背中側に移動し、理想的なかつぎやすさを実現します。このザックなら、背負ったその日から「体の一部」です。

●雨ブタ調節ストラップ
雨ブタ内の荷物の量に応じて調節、雨ブタを正常な位置にキープします。

●負バンド連結テープ
ディスタンス調節に応じて、このテープでザックを背中側に引きつけ体感重量を軽減します。

●ディスタンス調節システム
身長や体型に応じてディスタンスの長さをワンタッチで選択できます。これで、あらゆる人の背中にジャストフィット。

●背面パッド
パッドをソフトなナイロン生地で包みました。これで背当たりは最高。



19RA-5051 ¥19,000 口幅70×高さ70cm 65ℓ
19RA-5135 ¥15,000 口幅52×高さ62cm 45ℓ

山と旅の本

山のパンセ 串田孫一
●A5変型判／1500円

若き日の山 串田孫一
●A5変型判／1500円

心の歌う山 串田孫一
●A5変型判／1800円

山と別れる峠 串田孫一
●A5変型判／1600円

日記 1943年↓1946年 串田孫一
●四六判／2300円

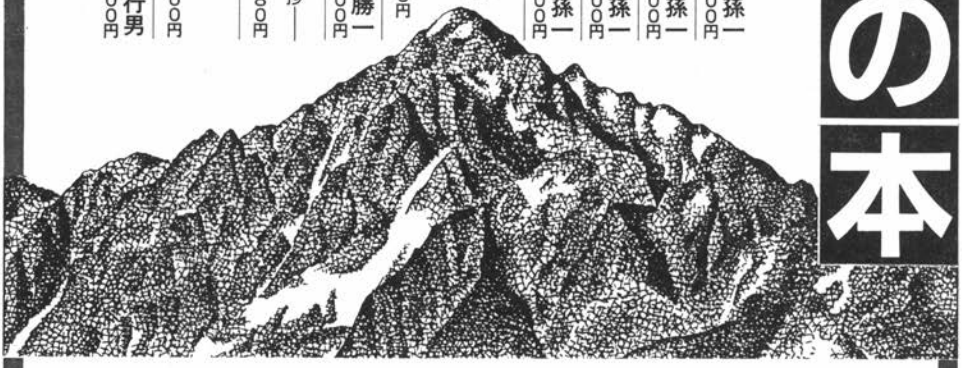
きたぐにの動物たち 本多勝一
●A5変型判／1200円

山を考える 本多勝一
●四六判／1500円

常念の見える町 ——安曇野抄—— 蜂谷 緑
●四六判／1380円

アルプス青春記 朝比奈菊雄
●A5変型判／1600円

黄色いテント 田淵行男
●A5変型判／3800円



御嶽の見える村 木曽開田高原日記 澤頭修自
●四六判／1500円

車窓の山旅・中央線から見える山 山村正光
●A5変型判／1900円

関東百山 一〇〇の山へのガイド・エッセイ 浅野孝一・打田鉄一・楠目高明・横山厚夫
●A5変型判／1800円

山の博物誌 西丸震哉
●A5変型判／1500円

東京付近の山 ブルーガイド編
●A5変型判／1800円

東京付近の散歩道 田中 仲／毛利好彰
●A5変型判／1600円

ブルーガイド海外版⑯ **ヨーロッパ・アルプス** ●1200円

ブルーガイド海外版㉔ **ヒマラヤ・トレッキング** ネパール・パキスタン
●1380円

ブルーガイド海外版㉜ **アラスカ** ●880円

ブルーガイド海外版㉝ **ニュージーランド** ●930円

東京 銀座1-3 **実業之日本社** 振替東京1-326

M·KATAGIRI
SINCE 1914
TOKYO JAPAN

山と山スキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
門田ピッケル
〃 アイゼン

片桐

東京都文京区湯島3－38－9
〒113　片桐盛之助
電話　東京（831）{1794番 / 6680番

信頼されて50年

山とスキー用品専門店

TAKAHASHI

山友社 たかはし

四谷本店　〒160四谷1－20相田ビル　TEL（351）7432・1912
八重洲口店　〒103中央区八重洲1－5－11　TEL（271）1560・8575
新宿店　〒160マイシティ5番街　TEL（352）6564



トレッキングから
エクスペディションまで

世界の山旅

アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、ＵＳＡ、アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地帯への主催ツアーやインフォメーションを用意しております。トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業490号・日本旅行業協会正会員・ロイヤルネパール航空代理店

アルパインツアーサービス株式会社

東　京／〒105 東京都港区新橋2-2-2(川志満ビル7階)　☎ 03(503)1911(代表)
大　阪／〒541 大阪市東区備後町5-15(東洋ビル4階)　☎ 06(227)5194(代表)
名古屋／〒450 名古屋市中村区名駅3-23-2(第3千福ビル3階)　☎052(581)3211(代表)
福　岡／〒810 福岡市中央区大名2-9-25(わこうビル3階)　☎092(715)1557(代表)

大修館書店

小島烏水全集

全14巻
別巻 1

編集委員＝島田　巽・串田孫一・山崎安治・近藤信行

〈第13回配本〉 61年春刊行予定

14 江戸末期の浮世繪ほか

悠々たる雅境に遊んだ一世の文化人・烏水の昭和期の浮世絵研究を集大成

江戸末期の浮世繪(総説　葛飾北斎の富嶽三十六景　初代広重の風景画に於ける写生と日記　二代歌川豊国　菊川英仙　溪斎英泉伝校註　三代豊国と黙阿弥と五代目菊五郎　豊原国周伝 他)三世歌川豊国大首役者繪集 (三世豊国大首絵解説　歌川芳虎大首似顔絵 他)小島烏水翁浮世繪蒐集目録　広重と日本アルプス　広重の研究資料について　曲亭馬琴と歌川広重の関係 他　【内容見本呈】

全巻の内容構成

1 初期文集 8,800円
2「文庫」時代(一) 8,800円
3「文庫」時代(二) 9,800円
4 山水無盡蔵 不二山ほか 8,800円
5 日本山水論 山水美論ほか 8,800円
6 雲表　日本アルプス(第一巻) 6,800円
7 日本アルプス(第二巻・第三巻) 7,200円
8 日本アルプス(第四巻)ほか 8,800円
9 氷河と萬年雪の山ほか 8,800円
10 書斎の岳人　アルピニストの手記ほか 8,800円
11 偃松の匂ひほか 8,800円
12 山の風流使者ほか 〈続刊〉
13 浮世絵と風景画ほか 9,200円
別巻 小島烏水研究 〈続刊〉

図説百科 山岳の世界

N.ディーレンファース
T.ヒーベラー他著
日本語版監修 西堀栄三郎
宮下啓三

本書は、600枚におよぶ美術的にたのしめ、かつ科学的に貴重な写真・図版類をもとに、地球上の山岳の全体像を多角的にわかりやすくまとめたスタンダードワーク(基本図書)である。　B4変型判・上製函入・310頁　18,000円

遥かなり エヴェレスト
——マロリー追想——

島田　巽著

半世紀余り前、エヴェレスト初挑戦の英国隊の一員に選ばれ、その第三次遠征時に頂上を目指したまま還らぬ人となった若きアルピニストG・L・マロリーの素顔を、多様な人々との出会いや英国の社会背景を通して描いた追想記。　四六判・292頁　1,500円

●日本の近代アルピニズム史上に燦然と輝く不朽の山岳名著

覆刻日本の山岳名著

全18点22冊　付・解題書 1
特別資料 日本山岳会「會報」第1号—第100号

企画・編集＝日本山岳会　■現金価格190,000円(分売はいたしません)——内容見本呈

●近代登山の黎明を告げる先蹤者たちの限りない"山への讃歌"

新選覆刻日本の山岳名著

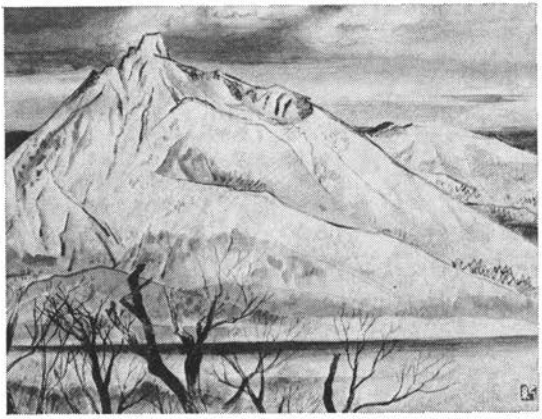
全20点29冊　付・解題書 1
特別資料 2 点

企画・編集＝日本山岳会　■現金価格175,000円(分売はいたしません)——内容見本呈

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)294・2221〈大代表〉

山とスキーを愛する人たちに贈る感動のエッセイ

猪谷六合雄選集



全5巻

A5判/各巻上製クロス装

全5巻セット
定価60,000円

●分冊売りはいたしません。

限定500セット
(番号入り)

珠玉の名著「雪に生きる」「雪に生きた80年」を中心に
未発表原稿と写真集からなる全5巻セット愛蔵版

■第1巻 「雪に生きる」より——赤城山時代/スキー揺籃時代/北海道へ渡る
■第2巻 「雪に生きる」より——再び赤城山時代/闇夜の山下り/千春入学
■第3巻 「雪に生きた八十年」より——番所から青森へ/三度目の赤城山時代
■第4巻 未発表原稿ほか——老いと人生/人間の生甲斐とは/イタリー行き
■別　冊 写真集

推薦のことば
伴　素彦(日本スキー連盟会長)

この選集には、新しいものに次々と挑んでこられた猪谷さんの若々しい息吹きが溢れています。スキー関係者のみならず、生き甲斐を求める人々の共感を呼ぶ名著だと思います。

★スポーツ・エッセイ・シリーズ

もうひとつの山岳史

山に生きて

小島六郎著

ベテランアルピニストとして、また山岳記者としても山に関するさまざまな評論や随筆を発表してきた筆者の集大成。大正末期から昭和57年頃までの山にまつわるいろいろな話題やテーマが網羅され、中には登山界に対する苦言などもあり「もうひとつの山岳史」といえる興味深い内容です。

●A5判上製箱入
定価3,500円

BASEBALL MAGAZINE SHA
株式会社ベースボール・マガジン社　〒101東京都千代田区三崎町3-10-10☎03(238)0181

豊かな
生活環境を築きあげる……

（建　材）	（機　器）	（電　機）
●カーテンウォール	●工業用フィルター	●電気洗濯機
●サッシドア	●水処理装置	●衣類乾燥機
●取替サッシ	●熱交換器	●ウォータークーラ
●省エネルギーサッシ	●フィンチューブ	●冷凍・冷蔵ショーケース
●用途別サッシドア	●真空凍結乾燥装置	●各種ショーケース
●アルミ発色ＮＫカラー	●各種精密金型	●アイスクリームストッカー

日本建鐵株式会社

取締役相談役　早川種三

東京都千代田区大手町２－６－２　〒100

TEL 東京（03）270－6511（大代表）

飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部品の販売・関連機器の斡旋取扱

株式会社橘エンジニアリング

名古屋市中区橘一丁目27番８号

〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)

事典を加えて10冊。セットでお揃えください。

岳人事典

登山家待望の〝山の総合事典〟

編集委員 徳久球雄 塚本珪一 湯浅道男 雁部貞夫

山を愛する人なら、誰もが実感する、山と人との一体感。その山と人との深い関わりに重点を置きながら、山の全体像を解明した画期的な事典。——いま、引く事典から、読んで楽しむ事典へ！山岳愛好家必備の〝山の大百科〟。

【主な内容】
日本人名編＝国内の名クライマー五〇〇人を網羅。
外国人名編＝若手を含め世界の名クライマーを紹介。
概論編＝現代山岳界最高の執筆陣による多彩な構成。
一般用語・用具・技術編＝六〇〇項目にわたり解説。
資料＝内外山名一覧・登山史年表ほか

体裁＝A5判・上製本
箱入り・464頁
定価5000円〒350
好評発売中!!



新岳人講座 全九巻

全巻完結

登山の知識と技術をシリーズで徹底網羅。

監修 徳久球雄 塚本珪一 湯浅道男 雁部貞夫

第一巻 アルピニズムI
第二巻 アルピニズムII
第三巻 技術と用具I
第四巻 技術と用具II
第五巻 日本の山
第六巻 世界の山I
第七巻 世界の山II
第八巻 山と文学
第九巻 山の科学

体裁＝A5判・上製箱入り
各巻定価3000円〒各300円 箱入りセット定価27000円



〈大好評 東京新聞の山岳書〉

関東ぶらり山歩き 岳人編集部編 定価800円
迷わず選べる、関東の山60コース

関西ぶらり山歩き 岳人編集部編 定価800円
だれでも登れる関西の山60コース

山の雑学ノート 岳人編集部編 定価680円
山の楽しさ、山の知識がいっぱい！

登山ミニ百科 兵人編集部編 定価680円
登山に関するノウハウを徹底網羅。

実戦現代山スキー 佐伯邦夫・著 定価1600円
勇壮な雪山を楽しむ山スキーの本。

〝実戦〟山岳写真 川口邦雄著 定価2400円
山岳写真のすべてを体験的に解説。

実戦 山の天気を知る法 飯田睦治郎著 定価1300円
山歴40年、体験的観天望気の決定版。

岩場ルート図集 小森康行・監修 定価2300円
日本六大岩場ルートを重点的に取材。

日本の岩場 小森康行著 定価3200円
日本の代表的岩場をルート図で解説。

ヨーロッパの岩場 小森康行著 定価3800円
本場アルプスの岩場を克明に紹介。

登山の医学 J・A・ウィルカーソン・編 東大スキー山岳部医学部OB・訳 定価2000円
野外スポーツに必携の「救急解説書」。

40歳からの山歩き 岳人編集部・編 定価800円
熟年世代の入門コース精選60関東編

東京新聞出版局（中日新聞／東京本社）〒108 東京都港区港南2—3—13 ☎(03)471-2211(代)振替／東京5-5497
書店で発売中 東京新聞・中日新聞販売店でも取りつぎます。

ニッチの

登山・ハイキング シリーズ

定評ある著者陣容！
全56巻
定価各500円

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

① 奥武蔵　武甲・雲取
② 奥多摩　大菩薩
③ 奥秩父
④ 陣馬・高尾　秋川渓谷
⑤ 丹沢山塊
⑥ 富士・五湖　三ッ峠
⑦ 箱根　熱海・湯河原
⑧ 奥日光　奥鬼怒
⑨ 尾瀬　銀山湖
⑩ 軽井沢　妙義山
⑪ 伊豆半島　大島
⑫ 三浦半島　鎌倉
⑬ 美ヶ原　霧ヶ峰
⑭ 谷川岳
⑮ 八ヶ岳　蓼科山
⑯ 那須・塩原　鬼怒川
⑰ 磐梯・吾妻　安達太良
⑱ 志賀高原　草津白根
⑲ 上高地　乗鞍岳
⑳ 黒部・白馬　鹿島槍
㉑ 房総半島
㉒ 浅間・菅平
㉓ 蔵王連峰
㉔ 八幡平　岩手山・駒ヶ岳
㉕ 霧ヶ峰　白樺湖・蓼科山
㉖ 雲ノ平
㉗ 妙高・戸隠　野尻湖・黒姫
㉘ 南アルプス北部
㉙ 中央アルプス
㉚ 南アルプス南部
㉛ 北アルプス
㉜ 加賀白山　白川郷
㉝ 飯豊・朝日
㉞ 大雪山　層雲峡・然別湖
㉟ 槍・穂高　アルプス銀座
㊱ 立山・剣　黒部渓谷
㊲ 東海自然歩道Ⅰ
㊳ 東海自然歩道Ⅱ
㊴ 東海自然歩道Ⅲ
㊵ 入笠山　守屋山・高遠
㊶ 苗場・鳥甲　清津峡
㊷ 越後三山　奥只見・巻機山
㊸ 御岳　木曽路
㊹ 金剛山　葛城・岩湧山
㊺ 六甲・摩耶
㊻ 比良連山
㊼ 大峰・吉野
㊽ 大台ヶ原　大杉谷
㊾ 赤目・青山　室生寺
㊿ 鈴鹿連峰　御在所・伊吹
(51) 大山・蒜山
(52) 三瓶山　帝釈峡
(53) 秋吉台　三段峡
(54) 九重山　久住高原
(55) 英彦山　耶馬渓
(56) 阿蘇山



※保存用には
日本登山地図集
改訂版進行中！
お待ちください。

地図の 日地出版
本社　東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (261)5126
支店　大阪市南区南船場 2－11－23
大阪 06 (252)7421

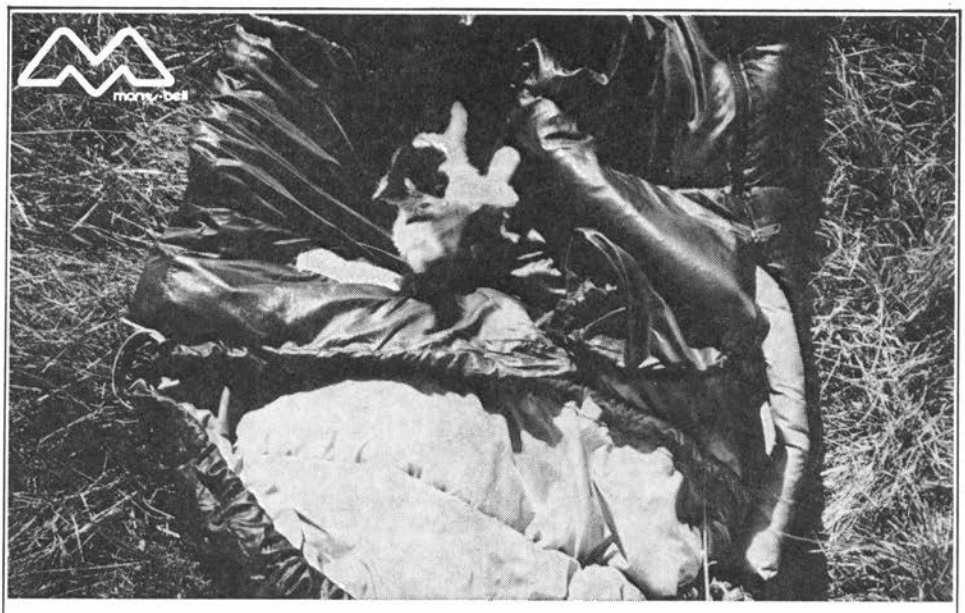
よりよきテントの最高峰をめざす吉田テント！

1978年　植村直己北極点単独旅行
1978年　日本大学北極点遠征隊
1980年　植村直己アコンカグア登山隊
1981年　北海道大学バルンツェ登山隊
1981年　植村直己冬期エベレスト登山隊
1981年　明治大学エベレスト登山隊
1981年　早稲田大学K2登山隊
1984年　第26次南極観測隊
1985年　和泉雅子北極点遠征隊
1985年　第27次南極観測隊

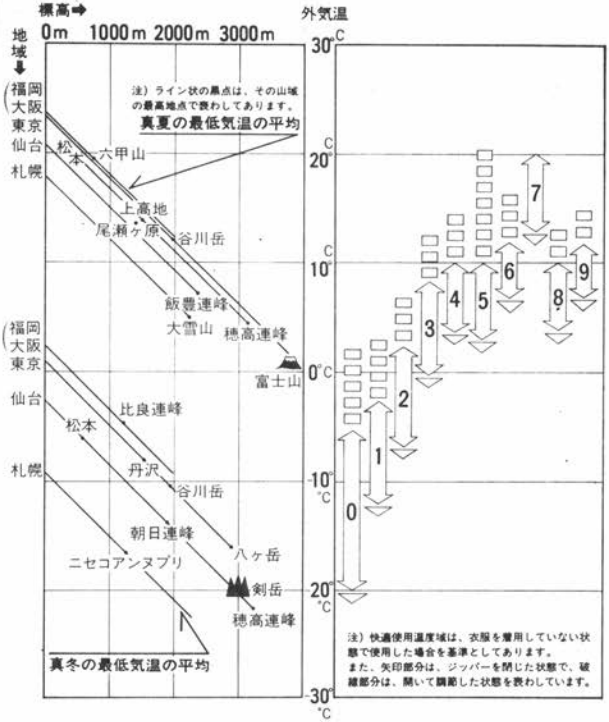


夏山用テント
冬山用テント
テントの専門メーカー

小さな店の大きな自信！ 吉田テント
〒167 東京都杉並区桃井1-3-3
☎03(399)2548・FAX03(395)4655



TOUGHBAG THERMAL CHART

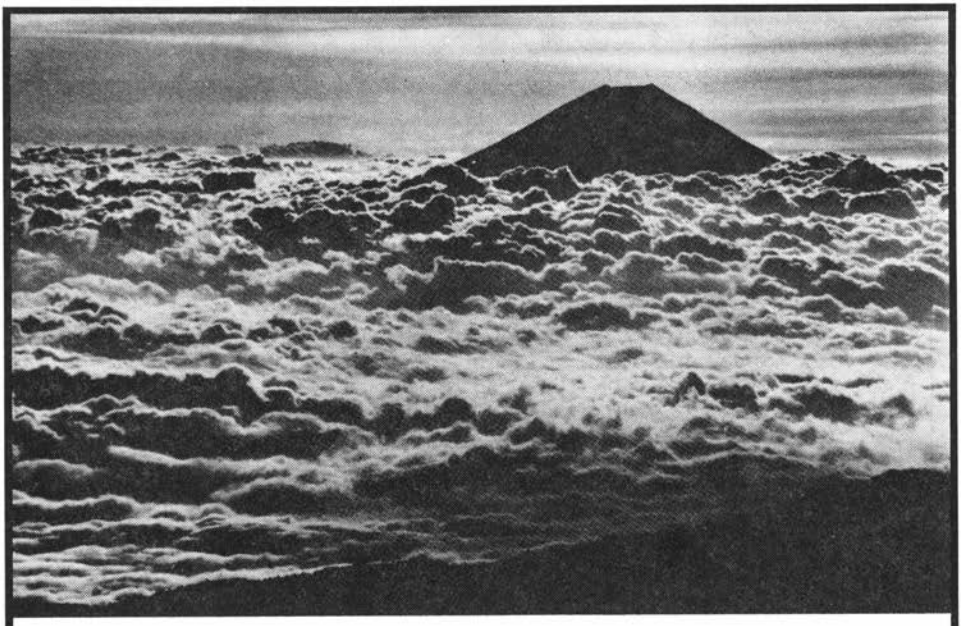


適温、快適。

「なぜなら」新しいタフバッグシリーズは、「快適な睡眠」とはなにかと研究し、保温性を科学したクロー（CLO）値を使用することにより、日本で初めて快適使用温度域を表示することになりました。つまり、これまで熟睡云々と感覚的な面でとらえ、経験的に決定してきたスリーピングバッグの保温性を、クロー値により段階別にシリーズ化しました。グラフに見られるように、国内の夏と冬における最低気温を調べ、標高による気温の変化に対応するのが左側です。そして、その気候に合わせて選べるタフバッグが右側に表示してあります。つまり、スリーピングバッグは遠征隊に使用されたから暖かいのではなく、科学と実験、そしてエクスペリエンスから生まれたタフバッグが、ベストチョイスです。

モンベル 本　　社●大阪市西区新町1丁目34-5 ☎(06)531-4761㈹／〒550
東京営業所●港区芝大門1-15-8布萬スカイビル ☎(03)437-9391㈹／〒105

mont-bell TOUGHBAG



八十数年に及ぶ日本の山岳写真史は、
また同時に日本の近代登山史でもある——。
著者の二十年に及ぶ取材の成果を世に問う。

山の写真家たち

もうひとつの日本登山史

杉本 誠

元『岳人』編集長

定価四、八〇〇円

●主な写真家たち　幻灯会のガラス写真／河野齢蔵／志村烏嶺／ウォルター・ウェストン／石崎光瑤／武田久吉／長谷川伝次郎／穂苅三寿雄／船越好文／内田耕作／三浦敬三／田淵行男／依田孝喜／山田圭一／白川義員／横田祐介／安久一成／白簱史朗／山下喜一郎／三宅修／小森康行／内田良平／川口邦雄／山本和雄／水越武／新妻喜永…ほか。

講談社

電話で届くヤマケイの本！

テレフォン・オーダー・システム☎03(436)4021

土・日・祝日を除く(AM9：30～PM5：30)。ご希望の書名と書店名をテレフォン・オーダー係宛ご指示下さい。

山と渓谷社

〒105 東京都港区芝大門1-1-33

☎03(436)4021 振替・東京8-60249

❖メスナー・シリーズ❖

冒険への出発 五大陸の山々で

ラインホルト・メスナー著　横川文雄訳

五歳の初登山からマカルー南壁まで青少年期の山行を綴る26編。チベッタ北西壁、アニェール北東壁、アイガー北側稜、ナンガのルパール壁など主な初登攀のほか、アフリカ、南米、ニューギニア遠征も。

B6判／定価一五〇〇円〒250

死の地帯

ラインホルト・メスナー著　尾崎鑒治訳

死の直前に人はどんな体験をするのか。古今の山岳文献を渉猟して死と生の境界地帯における幻視的体験を収集し、登山で得られる実存的経験や涅槃の感覚について実証的に述べた大胆かつ異色の作品。

B6判／定価一八〇〇円〒250

エヴェレスト 極点への遠征

ラインホルト・メスナー著　横川文雄訳

世界最高峰をフェアな手段で！　登山界最大のテーマを掲げたメスナーは一九七八年ハーベラーとナイルッ隊に参加、初のエヴェレスト完全無酸素登頂に成功し、人間の能力が極点に耐えることを実証した。

B6判／定価一五〇〇円〒250

ナンガ・パルバート単独行

ラインホルト・メスナー著　横川文雄訳

愛妻ウシーに去られた「黒い孤独」を克服し、メスナーは七八年単身ディアミール壁の「白い孤独」に踏み入る。地震に退路を断たれ、二回のビバークの後ついに初の八千メートル峰単独登攀を完成する。

B6判／定価一七〇〇円〒250

K2 七人の闘い

ラインホルト・メスナー／アレッサンドロ・ゴーニャ共著　尾崎鑒治訳

国も世代も異なる有能な登山家から成る小遠征隊は「マジックライン」を捨ててアブルッツィ稜に向かい、無酸素で世界第二の高峰に登頂した。七人の男達の勝利と敗北を赤裸に綴る一九七九年の記録。

B6判／定価一六〇〇円〒250

大岩壁 その歴史・ルート・体験

ラインホルト・メスナー著　横川文雄訳

アルプスの三大岩壁、世界の三大岩壁はいずれも限界ぎりぎりの状況のもとに初登攀された。各壁に刻まれた歴史とそのすべてを登った体験を大型画面のカラー写真多数を用いて描く登攀グラフィック。

A4変型／定価五八〇〇円〒不要

チョモランマ単独行

ラインホルト・メスナー著　横川文雄訳

世界最高峰を単独行でという登山者最大の夢が一九八〇年ついに実現された。モンスーンの嵐のわずかな休止期間を衝いて単身前進BCを出発したメスナーは北東稜に二回のビバークを重ね見事登頂に成功する。

B6判／定価一二〇〇円〒250

挑戦 二人で八〇〇〇メートル峰へ

ラインホルト・メスナー著　横川文雄訳

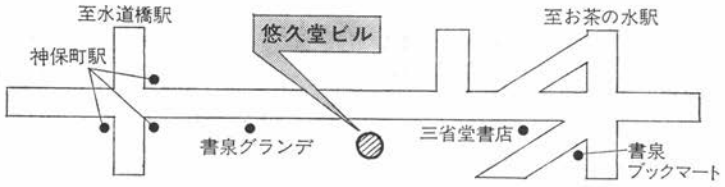
一九七五年、ローツェ南壁に失敗するや一転してハーベラーと共にヒドン・ピーク北西壁に挑む。妻ウシーとの愛の懊悩を超えて初のアルパインスタイルによる八〇〇〇メートル峰無酸素登頂成功をつかむ。

B6判／定価一六〇〇円〒250

山の本

動物・植物書

美術書、料理書、辞書



東京・神田

〒101 東京都千代田区神田神保町1-3
TEL. 03-291-0773

悠久堂書店

8000メートル峰全座登頂目前！

▲「超人」メスナーの初の伝記

高みをめざして

ラインホルト・メスナーの素顔

R・フォークス／新島義昭訳

エヴェレスト初の無酸素登頂。中国側からのエヴェレスト単独登頂をはじめとして、8000m14座中12座を手中にした現代の「超人」、不可能を可能にする男ラインホルト・メスナー初の伝記。

四六判　写真一〇頁　二八八頁　定価一九〇〇円

ハード・フリーから沢登りまで

本邦初のバリエーション・ルート・ガイドの集大成！

日本登山大系

全10巻

柏瀬祐之
岩崎元郎　編
小泉　弘

A5判　二五〇〇円～三九〇〇円

ヒマラヤ文献目録

薬師義美　編

B5判　七五九頁
定価一九〇〇〇円

大岩壁の五十年

リカルド・カシン著
水野勉訳

四六判二七八頁
定価一九〇〇円

101 東京都千代田区神田小川町三―二四
振替東京九―三三六／電話二九一―七八二一

白水社

山の本

茗渓堂

〒一〇一 東京都千代田区神田駿河台二―一
電話〇三―二九一―九四四二
振替東京八―二四七二三

山稜の読書家
島田　巽　3,900円

山・人・本
島田　巽　2,400円

山なみ帖
小谷隆一　3,200円

わが登高行　上巻　3,800円
三田幸夫　下巻　4,500円

静かなる山　正篇　1,700円
川崎精雄ほか　続篇　1,800円

登山史の周辺
山崎安治　3,800円

登山史の発掘
山崎安治　2,500円

快晴の山
織内信彦　2,500円

森林・草原・氷河
加藤泰安　2,500円

山に忘れたパイプ
藤島敏男　3,200円

折々の山
望月達夫　1,900円

山を見る日
川崎精雄　2,900円

山は満員
渡辺公平　2,200円

すこし昔の話
初見一雄　1,200円

我がスキーシュプール
麻生武治　3,400円

小さな頂
一原有徳　2,900円

北の山　続編
伊藤秀五郎　2,700円

詩集 山の風物詩
伊藤秀五郎　1,400円

わたしの草と木の絵本
坂本直行　1,200円

山旅の足音
渡辺兵力　1,400円

原野から見た山　画文集
坂本直行　4,200円

山・原野・牧場
坂本直行　1,500円

雪原の足あと　画文集
坂本直行　3,800円

坂本直行　淡彩画絵はがき
1集、2集、3集　各300円
4集　400円

ランタン紀行
エーデルワイス・クラブ　1,500円

エーデルワイスの詩
坂倉登喜子　3,800円

ナンダ・デヴィ縦走1976
ナンダデヴィ登山隊　3,900円

マナスル1974
日本女性マナスル隊　3,400円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋　進　900円

遙かなる未踏の尾根
日本山岳会東海支部　4,800円

グリンデルヴァルトの山案内人
ブラーヴァン　3,800円

続ブータン感傷旅行
小方全弘　1,500円

山岳　日本山岳会
62年、64年、65年各2,000円
63年2,200円、66年2,300円
67年、69年各2,500円、68年
70年、71・72年合併号、73年
74年、75年、76年各3,000円
77年、78年、79年各3,500円

山岳総索引　1,000円
（第26年第1号から第60年まで）

低山高蹤
神谷恭遺稿と追悼　2,900円

山ひとすじ
中村謙遺稿と追悼　3,400円

日本の山も，世界の山も，
［コンサイス］で踏破！

コンサイス
日本山名辞典

徳久球雄・三省堂編修所編／2，800円
山国日本―登山の山・文学の山・国を分ける峠など、日本のあらゆる山・峠を収録。山の伝承、山名の由来、歴史・文学のエピソードを興味深く記述。項目数1万3千。



コンサイス
外国山名辞典

吉沢一郎監修／三省堂編修所編／3，600円
十年の歳月と多数のアルピニストの協力を得て完成した、わが国初の外国山名辞典。世界の重要な山・峠をこの一冊に網羅し、最新データで解説。項目数8千。

〒101／千代田区三崎町2-22-14 三省堂 ☎03(230)9411(編集)・9412(販売)

編集後記

＊本年三月に亡くなった山崎安治氏から、遺言のような形で「山岳」担当をいわれ、水野勉氏のあとをつぐことになりました。八十年の歴史を有する会の機関誌だけに責任の重さを痛感していますが、「山岳」とはどういう性格のものなのか、前任の水野氏同様、難問に頭をいためながらも、とりあえずは会の表情がよくわかるような編集をしてゆきたいと考えています。会員各位のご協力をお願い致します。

＊本号は八十周年記念号です。八十周年記念行事委員会から、八十周年企画の一環として、やがてくる百周年には、日本山岳会百年史を編めるよう準備を始めたい、過去の資料を少しでも多く整理・収集しておいて欲しいという要望があり、本号の企画はスタートしました。クラブ・ルームは会の核ですが、ルームの成り立ちやその後の経過など、創立年月日設定の経緯とともにまとめてみました。二つのクラブ・ルームを知らない会員が多くなった現在、資料的意味は大きいと思います。御茶の水については、当初、小原勝郎氏に依頼しましたが、同氏から織内信彦氏にバトンタッチされたものです。企画については、島田巽名誉会員の示唆を受けました。

＊八十周年記念の海外遠征は、カンチェンジュンガ縦走、ボゴダ峰、ガウリサンカールの三つでしたが、ガウリサンカールは原稿が到着せず、残念ながら掲載できませんでした。来年度に期したいと思います。

＊今西錦司氏の「取立山の遭難」は、特に「山岳」にということで

寄稿されたものです。梅雨のさ中の原稿が、年報の性格上、年末の掲載と時期が狂ってしまいましたが、各位のご理解をお願いします。

＊海外遠征は数が多く、そのどれを収録するか、難問中の難問ですが、今回は、宮下秀樹、伊丹紹泰両氏のご教示を得ました。口絵・本文の構成・整理と校正は児玉茂氏にお願いしました。

＊図書紹介は「山岳」の主要な柱の一つですが、掲載図書の選択には書評委員会の協力を得ました。その他、総務関係で高遠宏、追悼その他、本文写真関係で松家晋氏の協力を得ました。

＊英文梗概は、ハロルド・ソロモン氏に翻訳をお願いしました。急な依頼にもかかわらず快よく引き受けていただきましたが、これも時間の制約上、意図した全部を消化できませんでした。なお、ボゴダ峰は森幸順氏、「K7」と「自然エネルギー利用」の二篇はともに日本文寄稿者からです。八十周年関係の記事も、諸外国山岳会へ本会の歴史と背景を説明できる好材料なので、英文梗概を収録したかったのですが、残念なことに諸般の事情から実現することができませんでした。

＊昨年収録されていた「日本人による遠征・登攀ノート」は、担当者にかかる負担が大きすぎ、すでに前年度から息ぎれしていたようで、継続を検討しましたが、結局断念せざるを得ませんでした。

＊初めての「山岳」編集で勝手がわからず、またスタートが総会後と遅れたこともあって、収録できなかった寄稿など、迷惑をかけた面があるかもしれません。来年度は、高所登山委員会その他、各委員会主催の意欲的な討論や報告など、新鮮で若々しい記事を収録したいと考えています。

（大森）

山岳　第八十年（通巻一三八号）
一九八五年十二月二十日発行

価三五〇〇円

発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京二六一局四四三三番
振替口座　東京三―四八二九番

発行人　今西寿雄
編集人　大森久雄

印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　東京二九一局九四四二番
振替口座　東京八―二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

絶賛の高機能。



ゴアテントの防水性がアップ！
フライシートなしでOK。

6人用 ゴアテックス(登山四季用)
OTG-5650 ¥112,000

- 重量/約3.9kg(ポールを含む)
- 素材/ゴアテックス(本体、ベンチレーター)、ナイロンオックス(グランドシート)
- カラー/オレンジ(本体) ●ペグ/8本付

6人用 冬用外張(OTG-5650対応)
OTM-3601S ¥33,000

- 重量/約1.7kg ●素材/ナイロンタフタ

DUNLOP

株式会社日本ダンロップ 〒662 西宮市浜脇町1番29号 ☎0798(35)8447

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. 80

1985